Ⅰ. 戦前・沖縄県立水産試験場の漁業調査

本章では、昭和戦前・沖縄県政期における尖閣諸島の漁業調査を概観する。

昭和戦前期において沖縄県立水産試験場、並びに他機関による漁業調査が為されているが、沖縄県立水産試験場の漁業調査について述べる。

本県唯一の水産調査機関である沖縄県立水産試験場は、大正 10 年（1921 年）4 月に誕生した。創設時には独自の庁舎はなく、県庁舎内に本場事務所を置いていた。

大正 12 年 10 月に那覇市の県立水産学校に移転、同 14 年 5 月には沖縄県漁業協同組合連合会の建物の一部を借受けて入居していた。漁業指導船は、大正 10 年に建造した「琉球丸」(木造 30 ﾄﾝ、50HP)を保有、琉球近海で主として鰹漁業試験を行っていた。

大正末期の本県は、つづく甘庶の不作と漁業不振のため経済恐慌下にあった。

政府は、昭和元年度予算に沖縄県産業助成費 50 万円を計上、水産業の振興を図るためうち 28 万円の助成を決定、中でも水産試験場施設の庁舎建築並びに漁業指導船の建造は重要課題となっていた。

昭和 2 年、那覇市垣花町に、国庫助成費及び県費をあてて建物坪数約 300 坪の庁舎建築に着手、翌 3 年には沖縄県立試験水産試験場は庁舎は完成した。

漁業指導船については、遠洋における調査試験が必要であるとして、より大型の指導船「図南丸」（鋼船 100 ﾄﾝ、200HP）(通称初代図南丸)を建造することになった。

設計並びに工事契約は農林省水産局に依頼し、兵庫県播磨造船所（神戸製鋼株式会社）で建造され、昭和 2 年 8 月に進水、11 月には那覇港へ回航された。

それまでの試験船「琉球丸」は県立水産学校の実習船として移管された。

（『試験研究』崎山憲一 「沖縄県農林水産行政史第 8,9 巻　水産業編」1990）参考。

沖縄県立水産試験場　（那覇市垣花町）

漁業調査船・初代図南丸　（鋼船 100ﾄﾝ）

（「沖縄水産試験場事業報告(1926－1928)」 沖縄水産試験場編,1929」 より）

これまでの琉球丸（30 ﾄﾝ、50HP）による鰹、鮪の試験操業海域は、鹿児島～奄美諸島～沖縄本島～宮古島近海にとどまっていた。(昭和元、2 年度)

新漁業指導船図南丸(鋼船 100 ﾄﾝ、200HP)になると、鹿児島～奄美諸島～沖縄本島～尖閣諸島～宮古・八重山～台湾迄に至り試験操業海域は拡大している。

昭和 3 年～9 年には赤尾嶼付近での試験操業も行われ、尖閣諸島における鰹・鮪延縄漁業試験操業が実施されていることが分かる。

ところが、昭和 9,10 年になると、南方に転じ、試験船図南丸は南シナ海での鮪延縄漁場調査に出向いている。昭和 11,12 年には沖縄本島近海での試験操業に止まっている。

昭和 12 年度事業報告書が最終となっているが、同報告の緒言から戦争がたけなわになる時代の様子がうかがわれる。

昭和 17 年、指導船図南丸は軍に警備船として徴用され、施設は軍に使用する所となり、職員は次々と召集され、水産試験場の機能は終息した。昭和 19 年 10 月の那覇空襲によって、建物設備のすべてと貴重な文献資料のすべてが灰燼に帰してしまった。

沖縄戦によって沖縄県立水産試験場は名実ともに消滅してしまったのである。

主な漁業調査

調査地域　鹿児島～奄美諸島～沖縄本島～尖閣諸島～宮古・八重山～台湾

調査項目　鰹漁業試験、鮪漁業試験

調査期間　昭和 3 年～昭和 9 年

調査船　初代図南丸 （100 ﾄﾝ、200HP）

調査員　記載なし

A. 鰹漁業試験

水産試験場が沖縄の基幹漁業である鰹漁業試験を、創設当初から重点試験課題に取り上げていることは当然のことである。同試験の趣旨について昭和4年度事業報告書では、次のように述べている。

> 大型船ヲ以テ漁場ノ開拓拡張ヲ計リ、無線電信ニ依リ迅速ニ漁況ノ送受ヲナシ、大型漁船経営ノ範ヲ垂ルルト共ニ、大型漁船経営ヘノ誘導ヲ試ミントシテ、前年度ヨリ引続キ施行セリ。

これは当業船が全体に小型船であり、経営の不安定な日帰り操業形態であるため、その脱却を図るため、大型化誘導と沖合新漁場の開拓を意図した指導船による企業化実証試験であった。降って昭和 11 年の同試験の趣旨は、次のように、当業船に対する漁場位置、海況等漁況通報を主たる目的としている。

前年度ヨリ継続シ、漁場ノ開拓拡張ヲ計ルト、漁時ニ全国連絡協定ニヨリ、海況ニ依ル魚群推移、漁獲ノ盛衰ヲ合理的に詳カニシ、尚無線其ノ他ノ漁況ヲ受授シ、此ヲ通報公表シ、本県小型船漁場動静推察ノ資トシ、斯業経営ノ諮問機関タラントセリ。

図南丸、琉球丸の運行実績は、年間航海数9～18回に及び、年間運行日数は68～205日で、150 日以上の年は 4 回を数え、当業船レベルの精力的運行であったといえる。期間は年により若干異なるが、通例 3～9 月で、秋漁試験のため 11 月まで実施する年もあった。

餌料は大部分鹿児島産の背黒いわしを使用し、地元産は名護湾のガツンを夏期数回試験している。また昭和 3 年と 5 年に台湾産いわしも使用している。試験施行方法について昭和 6 年の事業報告に次のように述べている。「使用船　図南丸（鋼船百屯、二百馬力）。漁具漁法　釣竿（角釣及ビ餌釣）。乗組員　船長以下 40 名、釣夫 30 名、餌投 2 名、餌運ビ 4 名。期間　3 月至 9 月中。漁場　鹿児島至台湾間。餌料　大部分鹿児島産（8 月中 1 航海県産ガツン）。」各年とも施行方法は大差なく、期間に若干変動があった。

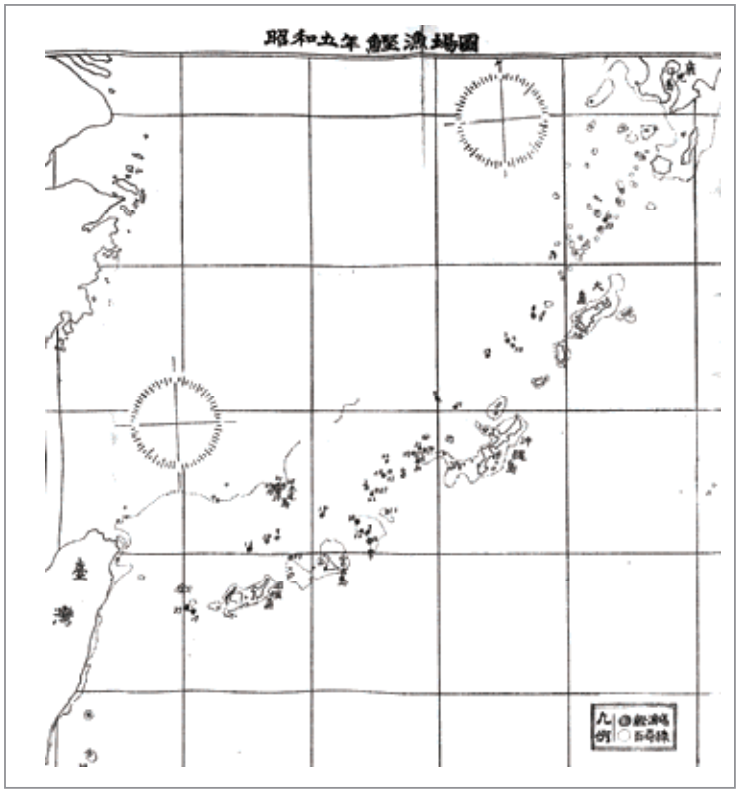
図南丸による年間かつお漁獲尾数は 8 千尾から 2 万 5 千尾、売上高 8 千円から 2 万円となっている。燃料費、餌料費等所要経費の記載がなく実収益は不明であるが、図南丸建造費が 10 万円余であることからも漁獲能力の優れた指導船であったといえる。当業船の大型化誘導についての試験結果は、昭和 3 年度事業報告に、次のように、その有利性を強調している。

現時鰹ノ豊漁期ハ、鹿児島県近海ニ於テハ、3,4,5 ノ 3 月、沖縄本島近海ニ於テハ 5,6,7 ノ 3 月、台北州及先閣列島附近ニ於テハ 7,8,9 ノ 3 月ナルガ、之ハ主トシテ地理的関係ト潮流及水温等ノ関係ニ依ルモノノ如シ。従来鰹小型漁船ニアリテハ、餌料其他ノ関係上操業区域ヲ一局部ニ制限セラレ、従ツテ小型船ニ依ル本県漁業界ニアリテハ其漁業豊凶定カナラズ、徒ラニ沈淪シツツアル状態ナリ。故ニ図南丸ハ斯業ノ伸展ヲ期スル目的ヲ以テ、北ハ鹿児島近海ヨリ南ハ台湾ニ至ル広漠ナル漁場ヲ縦横ニ馳駆シ、初期入渠機関修理等ノタメ、出漁日数比較的少キニ拘ラズ、良ク 6 千余円ノ水揚ヲナシ、又後期ニアリテハ四十余白ニシテ、1 万余円ノ売上ヲナシ、将来本県ノ鰹業ハ大型漁船ニ依ル有利ナル事ヲ一般ニ範示セリ。

図南丸による試験操業海域は、七島海域や硫黄鳥島、伊平屋ソネ等の沖縄北西域も含まれているが、久米島西及び慶良間南西から西大九ソネに至る海域が主たる操業海域となっている。新規に開拓した漁場は宮古島南東漁場が知られている。

更に赤尾嶼から魚釣島にかけた尖閣漁場も確認している。その当時から宮崎、鹿児島の県外船も、春期及び秋期に沖縄近海に出漁しており、もちろん漁況情報の交換はあったと思われる。また与那国から尖閣列島にかけての漁場調査は、台湾の基隆を根拠地として昭和 3 年(1928 年)と 5 年に実施している。（『漁労技術』「沖縄県農林水産行政史」第 8,9 巻・水産業編　P424）

昭和 5 年鰹漁場図



(「沖縄県立水産試験場　昭和 5 年度　事業報告書」より)

台湾基隆を根拠にした鰹漁業試験の概要　昭和 3 年 7 月～9 月

第 1 次	
7 月 18 日	基隆根拠ニテ鰹漁業試験施工ノタメ基隆へ向ケ石垣投錨
19 日	基隆港着、碇泊
21 日	基隆八尺門ニテかたくち 28 籠ヲ積ミ赤尾島へ向フ
22 日	赤尾島近海魚群アルモ餌ナシ、平久保曾根へ向フ
23 日	平久保曾根近海ニテ小判漁アリ、与那国島附近へ向フ
24 日	与那国島近海、漁事閑散、附近ニ漂流
25 日	盲曾根、蘇澳曾根附近魚群アルモ餌付ナシ、餌尽キ基隆入港
26 日	漁獲物ヲ売却ス、売上 262 円 12 銭
第 2 次	
7 月 27 日	八尺門ニテかたくち 15 籠ヲ積ミ出漁、鼻頭角東沖合ニテ操業附近ニ漂流
28 日	前日ノ漁場附近ニテ操業餌付良好ナルモ餌了ヘ基隆帰港
	魚揚ヲナス売上 850 円 62 銭

第 3 次	
7 月 29 日	八尺門ニテかたくち 15 籠ヲ積ミ出漁、前日ヨリ稍東沖ニテ漁事アリ
30 日	同所附近ニテ餌付良好ノ魚群会フモ餌尽キ基隆帰港魚揚後
	直チニ八尺門ニテかたくち五籠ヲ辛ジテ得出港、売上 1,420 円 94 銭
第 4 次	
7 月 30 日	前日ヨリ更ニ東沖ニテ索餌盛ナル魚群ニ会ヘド餌尽キ基隆帰港魚揚ヲ了シ
8 月 1 日	直チニ八尺門ニテかたくち 7 籠ヲ得テ出港、売上 796 円 66 銭
	前回漁場附近一帯魚影ヲ認メズ、増餌ノタメ基隆帰港、売上 2 円 97 銭
第 5 次	
8 月 3 日	八尺門ニテ増餌かたくち 12 籠ヲ積ミ出漁
4 日	魚釣島ヨリ赤尾島ニ至ルモ魚群ナク、赤尾島附近ニ漂泊
5 日	赤尾島近海魚群ヲ認メズ同島附近ニテ漂泊
6 日	黄尾島北ニテ相当漁事アリ附近ニテ漂泊
7日	前日ノ場所近海ニテ小漁アリ餌了ヘ帰港
8日	基隆入港魚揚ヲナス、売上 795 円 04 銭
第 6 次	
8 月 9 日	八尺門ニテかたくち 16 籠ヲ積ミ鼻頭角東近海ヲ見テ魚釣島方面ヘ向フ
10 日	魚釣島近海ニテ漁事アリ赤尾島ニ至リ附近ニ漂泊
11 日	赤尾島北ニテ好漁アリ天候険悪トナリ餌モ少ケレバ那覇ニ向フ
13 日	那覇入港魚揚ヲナス売上 902 円 40 銭
第7次	
8 月 17 日	那覇出帆基隆ヘ向フ
19 日	基隆着、機関小破シ修理ニ着手
22 日	八尺門ニテかたくち 18 籠ヲ積ミ出帆
23 日	魚釣島北近海ニテ小判漁アリ赤尾島方向ヘ向フ
24 日	赤尾島北ニテ好漁事アリ餌了ヘ基隆ヘ向フ
25 日	基隆入港、売上 1,977 円 47 銭
第8次	
8 月 26 日	魚揚ヲ了エ直チニ八尺門ニテかたくち 22 籠ヲ積ミ出漁
27 日	魚釣島東近海ニテ操業、餌了基隆ヘ向フ
28 日	基隆帰港、漁獲物陸揚ヲナス売上 1,876 円 54 銭
第 9 次	八尺門ニテかたくち 22 籠ヲ得、魚釣島方面ヘ出漁
8 月 29 日	魚釣島東近海ニテ漁事アリ、餌尽キ帰港
30 日	基隆入港、魚売却売上 2,199 円 12 銭

第 10 次	
9 月 1 日	八尺門ニテかたくち 10 籠ヲ得出港鼻頭角東近海ヲ見テ魚釣島へ向ケ探査ヲツヅク
2 日	魚釣島ヨリ赤尾島方面、魚群皆無
3 日	黄尾島へ引返シ更ニ南下セントシ同島南近海ニ大判漁アリ附近ニ漂流
4 日	前日ノ個所ニテ残餌ニテ小漁アリ、基隆帰港
5 日	魚揚ヲナス売上 1,101 円 38 銭
9 日	八尺門ニテかたくち五籠ヲ積ミ台湾ヲ引揚可ク那覇ニ向フ
10 日	天候不良ニト操業デキズ
11 日	那覇港帰着
	本年度鰹漁業試験中止トス　　売上総計 17,701 円 75 銭 基隆操業 11,388 円 60 銭

(「沖縄県立水産試験場　昭和3年度　事業報告書」から一部抜粋)

B. 鮪漁業試験

水産試験場ではこの漁業の有望性に鑑み、沖縄近海における重要漁業としてとらえ、試験操業を大正 15 年度報告書に次のように述べている。

> 本県ニ於テハ、鮪延縄漁業ハ最近ノ操業ニ属シ、未ダ不振ノ状況ニアルモ、沖合ハ鮪、旗魚、鱶等の漁場トシテ極メテ有望ナリト認ムルヲ以テ、本試験ヲ行ヒ当業者ヲ指導誘掖セントス。

漁業試験は、大正 15 年度は琉球丸 30 トンで、昭和 2 年以降は図南丸 100 トンで行っている。昭和 2 年と 3 年は、北は奄美諸島東方海域から、南は宮古、八重山及び台湾まで、東は大東島に至る沖縄全域にわたって試験操業を実施し、漁場開拓に努めている。昭和 4 年から 11 年までは、久米島の西及び南西、赤尾嶼を重点的に試験操業に当たっている。

試験内容は漁具、漁法の改良、餌料比較等である。あわせて大型かつお船を漁閑期におけるまぐろ漁業へ誘導することも目的とした。

昭和 9 年、10 年は南支那海の漁場調査を実施している。

このことについて昭和 9 年度報告書に「本年度に於ては、前年度より継続せる本県近海鮪延縄漁業試験の他に、仝期間中漁場拡張と併せて、鰹漁船漁閑期利用の途を展かんとして、表南洋漁場に出漁試験せり」と述べている。同調査の根拠地は台湾高雄である。

昭和 12 年、13 年、14 年は、支那事変のため南支那海の試験操業は中止し、かわって宮崎県油津を根拠地として九州東方海域におけるくろまぐろの漁場調査に従事している。

参考までに、昭和 5 年度における鮪漁業試験の趣旨、施工方法、経過は次の通りである。

1. 趣旨

本漁業ハ創業日浅ク実態不詳ナル為専ラ漁場漁期ノ調査並本県産餌料ノ適否或ハ他府県餌料トノ比較研究ト同時ニ漁法ノ指導ヲナシ進デハ鰹漁船冬期其ノ他ノ漁閑期利用ノ途ヲ展カントス尚本年度ニ於テハ特ニ前年度ノ調査ノ結果ニ照シ漁場価値調査ニ重キヲ置ケリ。

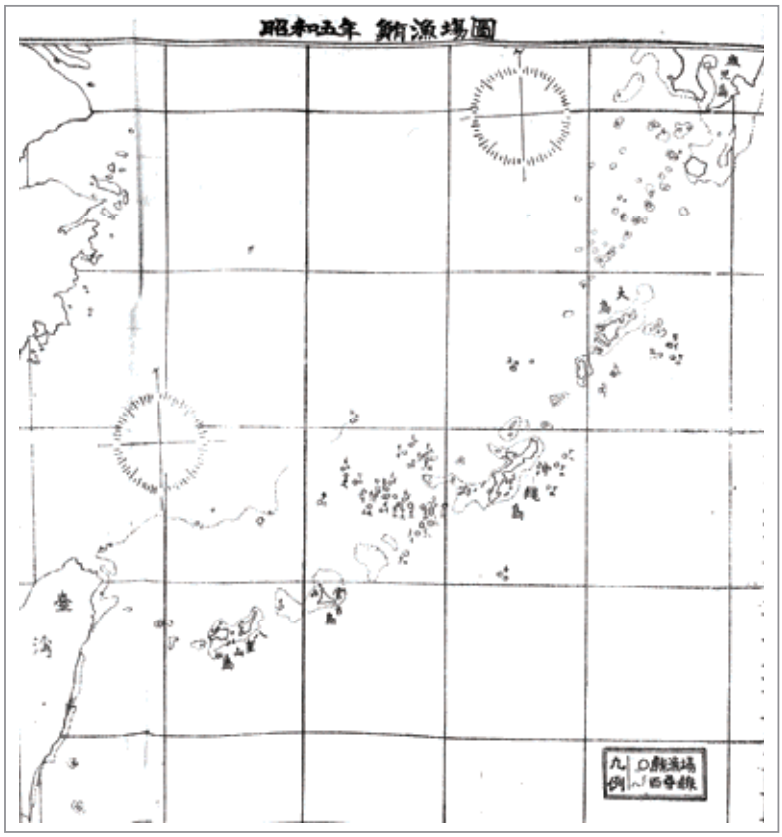
2. 施工方法

図南丸(鋼製 100 噸 200 馬力乗組 30 名)ヲ以テ前年度使用ノコールター塗布マニラ大縄(浮 15 尋長枝 15 尋)ヲ使用シ 10 月ヨリ 2 月ニ至ル間漁場ハ殆ド久米島近海ヲ中心トシ大島、赤尾島、宮古ノ間ニシテ餌料ハ県外冷蔵イカヲ主トシテ本県産もろ、みづん並ニ大島産もろ等ヲ使用シ其ノ適否供給状況ヲモ調査セリ。

3. 経過

航海数 9 回漁獲物目鉢 34 尾黄肌鮪 38 尾とんぼ鮪 17 尾小鮪 1 尾梶木 21 尾鱶其他 108 尾売上 2,388 円 61 銭ニシテ漁場ハ大部分久米島以西 100 尋線間ニシテ前年度ヨリノ結果ニ照シテモ仝漁場ハ産業的ニ相当価値アルモノト認メラレタリ更ニ継続調査シ海洋調査ト相俟ッテ漁期魚道ノ推移ヲ明ニスルヲ得バ本漁場ノ活用上得ル所多キモノト信ズ。

昭和 5 年鮪漁場図



(「沖縄県立水産試験場　昭和 5 年度　事業報告書」より)

C. 海洋観測

海洋観測は全国的協定事項に基づき実施するものであるとして、那覇の北西方向に観測定点を設定し、水温、比重測定を行うとともに、海流調査の一環として海流瓶放流を実施している。本事項は、海洋横断観測として昭和3年度から昭和16年度の沖縄水産試験場事業報告に報告されている。本事項の趣旨、施行状況等については昭和 3 年度の報告は次の通りである。

海洋横断観測

1. 趣旨

海潮流ノ移動水温比重ノ変化、浮遊生物ノ消長等ハ重要魚類ノ回遊ト密接ナル関係ヲ有スルガ故ニ全国的協定事項ニ基キ漁労調査ト併行シテ本調査ヲ施行シ海洋実態ヲ明カニシ漁業ノ合理的発達ヲ図ラントス。

2. 施行状況

昭和 2 年 3 月同 9 月同 11 月 3 年 6 月ノ 4 回ハ、那覇港他慶伊島北東 2 浬ヲ起点トシ久米島鳥島ヲ見通ス線百浬ノ間ヲ 10 浬毎ニ 10 点ニ於テ、昭和 3 年 7 月同 10 月 4 年同 2 月ノ 3 回ハ、沖縄本島南端喜屋武崎南 5 浬ヲ起点トシ赤尾嶼南 5 浬ニ至ル 170 浬ノ間 17 浬毎ニ 11 点ニ於テ、各々表面ハ 25 米、50 米、100 米、150 米、200 米、250 米、300 米ノ各層ニ就キ採水観測セリ。

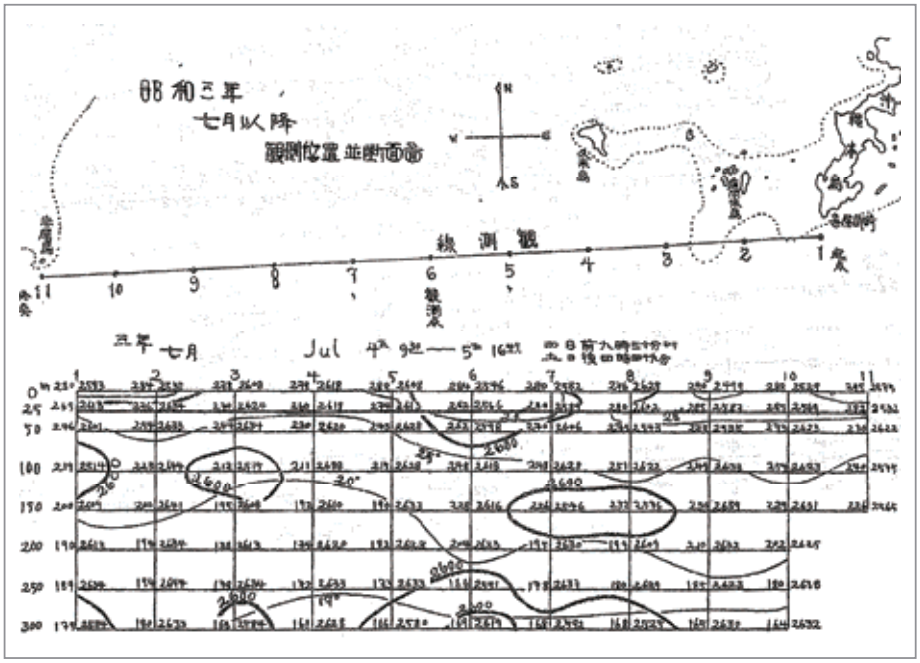
3. 結果

本調査ノ結果ニ就テハ更ニ回数ヲ重ヌルヲ要シ今俄ニ結論シ難ヲ以テ今後機会アル毎ニ此種調査ヲ行ヒ之等ノ結果ヲ綜合シテ結論セント欲ス。但シ水温及比重ノ分布状況状態ハ別図ノ如シ。

海流瓶放流,

海流及潮流ノ移動速度等ヲ窺知セントシ海洋横断観測ノ都度自慶伊島(チービシ)至久米島鳥島観測線上ニ於テハ第 3 点ヲ起点トシ 1 点置キニ 5 点各点海流瓶 100 本宛計 1000 本放流スルヲ原則トシ今日迄ニ施行回数 2 回総計 5、230 本ノ海流瓶ヲ放流セシガ、毎回とも拾得瓶数ハ放流瓶数ノ 1 割ニシテ総計 520 本ヲ拾得セリ。(但シ昭和 4 年 2 月分ハ目下引継取纏中ナリ)。

海洋横断観測位置並断面図・深度毎の比重水温分布



(「沖縄県立水産試験場　昭和 3 年度　事業報告書」より)

□. 主な刊行物資料

○、『沖縄県立水産試験場　昭和 3 年度　事業報告書』

①、鰹漁業試験　(昭和 3 年 3 月～9 月)

②、鮪延縄漁業試験　(昭和 3 年 10 月～昭和 4 年 2 月)

③、海洋横断観測、海流瓶放流、鰹標識放流

＊　①、②は赤尾島、魚釣島近海で試験操業、

＊　③の海洋横断観測は、沖縄本島喜屋武岬南 5 浬～赤尾島の 170 浬間の定点採水、鰹標識放流は、稚鰹 8 尾を魚釣島近海で放流

○、『沖縄県立水産試験場　昭和 4 年度　事業報告書』

①、鰹漁業試験　(昭和 4 年.3 月～9 月)

②、鮪延縄漁業試験　(昭和4年 10 月～昭和 5 年 2 月)

③、海洋横断観測

＊　①、②は赤尾島近海で試験操業、③は喜屋武岬～赤尾島間定点採水。

○、『沖縄県立水産試験場　昭和 5 年度　事業報告書』

①、鰹漁業試験　(昭和 5 年.3 月～9 月)　第1～14 航海

②、鮪延縄漁業試験　(昭和 5 年 11 月～昭和 6 年 2 月)　第1～9 航海

③、海洋横断観測

＊　①、②は赤尾島近海で試験操業、③は喜屋武岬～赤尾島間定点採水。

○、『沖縄県立水産試験場　昭和 6 年度　事業報告書』

①、鰹漁業試験　(昭和 6 年.3 月～9 月)　第1～9 航海、

②、鮪延縄漁業試験　(昭和 6 年 11 月～昭和 7 年 2 月)　第1～7 航海

＊　①、②は赤尾島近海で試験操業。

○、『沖縄県立水産試験場　昭和 8 年度　事業報告書』

①、鰹漁業試験　(昭和 8 年.3 月～10 月)　第1～13 航海

＊　久場島近海で試験操業。

○、『沖縄県立水産試験場　昭和 9 年度　事業報告書』

①、鰹漁業試験　(昭和 9 年.3 月～11 月)　第1～15 航海

＊　赤尾島近海で試験操業。

○、『.沖縄縣の水産業を視察して』 農林省水産課長三宅發士郎　(「水産」第 14 巻第 6 号　大正 15 年 6 月　㈱水産社刊　)

○、『沖縄県水産要覧』(昭和 10 年 10 月　沖縄県水産会　)

○、『試験研究　崎山憲一』、(「沖縄県農林水産行政史」第 8,9 巻（水産業編）平成2年）　p413～416　＊沖縄県立水産試験場の設立経緯ついて記述。

○、『漁労技術　友利昭之助』、(「沖縄県農林水産行政史」第 8,9 巻（水産業編）平成2年　p413～416　＊沖縄県立水産試験場の鰹、鮪延縄漁業試験について記述。

Ⅱ. 戦後・琉球水産研究所等の漁業調査

Ⅱ―1. 琉球水産研究所の漁業調査

1945 年 6 月 23 日、沖縄戦は終結し、日本の施政権から切り離され米軍施政下となった。鉄の暴風で焦土化した沖縄は、漁船も被害をうけゼロからの出発だった。

生産増強策の一環として漁業も再建の途についた。ガリオア資金による建造漁船65隻を配船し、くり船の動力化も進んで、漸く元の活気を取り戻しつつあった。

戦前の県水産試験場庁舎は空襲で破壊され、試験機材や設備もろとも灰燼に帰していた。漁業の再建と振興のため水産調査試験機関設置は急がれた。

戦後の再出発から泊庁舎に至るまで

戦後の行政組織の移り変わりもまた目まぐるしいものであった。水産行政機構の変遷に研究機関等の状況を対比させてみると次のようになる。

まず最初に昭和 20 年(1945 年)8 月 29 日に沖縄諮詢会が設置され、戦後の行政が始まったのであるが、その中に水産部が置かれた。翌 21 年 4 月 24 日に、沖縄諮詢会は沖縄民政府へと衣替えをした。また水産部はそのまま沖縄民政府水産部となった。

この年 9 月に開洋高等学校が本部村で開校した。22 年 3 月にはそれまで支庁と称してきた宮古と八重山も民政府と称することとなり、支庁長を知事と改めている。23 年 4 月、沖縄民政府水産部は経済部水産課となった。この年 7 月 31 日に沖縄民政府は沖縄水産試験場を設置した。これによって戦後の水産試験研究が再び日の目を見ることになったのである。25 年 4 月 1 日には、これまで群島別にあった民政府がそれぞれに持っていた農林水産行政の部門を統合して琉球農林省が設立され、その下に水産局を置き、沖縄水産試験場は琉球水産研究所と改名して琉球農林省の管轄するところとなった。同年 10 月には大島にあった水産試験場を吸収し、琉球水産研究所大島支所とした。各民政府は知事公選を経て 25 年 10 月 4 日にそれぞれ群島政府と改称し、その 2 年後の 27 年 4 月 1 日に設立された琉球政府に統合されていった。また農林省水産局は琉球政府資源局水産課へと引継がれた。

水産試験場は、戦後の再出発の後も独自の庁舎を有することは難しく、27 年にようやく佐敷村馬天に庁舎を新築し移転した。そして更に 32 年5月に、各種公共機関が那覇市に集中したことに歩調を合わせ、那覇市泊に新庁舎を建てて移転した。

戦後の水産試験研究については、琉球水産研究所が昭和 37 年(1962 年)に編集した『沿革誌』に記されている文章を一部転載する。

「此の苦難の中に於て、事業面は 1948 年、軍政府から試験船として 46 屯と 56 屯の 2 隻の貸与があつたが、両船共設備なく、試験船としては不向であった。然し中 1 隻は琉鵬丸と命名し、1950 年船体の改造と機関取換に依つて其の任務に従事しつつあったが、1952 年 2 月に返還を命じられたのである。其の后、漁労部に於いては傭船に依つて試験研究を継続し、養殖部に於い

ては久米島具志川村に（1948 年）養殖池を設置すると共に、同地区に海綿、海人草の養殖試験を行って来た。1952 年 8 月に、大里村仲程に新に養魚場を設置し、鯉苗養成配付を行い、大島支所では牡蛎の採苗と之が移植試験を継続して来たのである。

1952 年、琉球政府創立と共に、経済局の廨庁として発足することになり、陸上施設の充実と試験船の建造に努力したが実現せず、僅かに傭船によって各種漁業試験を実施して来たのである。1953 年 12 月に奄美群島が日本復帰となるに及び、大島支所も鹿児島水産試験場に移管され、愈々事業も縮小し定員も 14 名になった。然し乍ら漁業面に於ては、1954 年東支那海の鯖漁場が日本でも注目される様になったので、当研究所に於いても水産課の協力で、広島県から鯖跳ね釣講師浜田浅太郎氏を招聘し、傭船宮島丸（30 屯）に依って、初めて鯖漁場の調査と漁業試験を実施することができた。

其の后、長崎県水産試験場の試験船鶴丸（120 屯）と 2 回に亘り共同調査を行い、漁場も略々確立したので、業界に於いても操業を開始する者が出たが、船が小型で、その上冬季操業であつたため思わしくなかつたが、琉球水産株式会社が 1956 年以来ようやく軌道に乗り、年と共に隆盛となり、1957 年 4 月からは棒受網に依る鯖漁業が成功したのである。

鯖漁業が軌道に乗ったので、専属試験船の建造が急務であるところから、毎年建造方を要請したが実現するに至らず、庁舎移転が先決問題であるとし、1957 度に於て庁舎設費 219 万B円（18､025 弗）を得て、泊北岸埋立地に 530 坪を借用し、此処に建坪 125 坪のブロック二階建を建造することが出来たのである。1957 年 5 月新庁舎に移転し、年々悠々陸上施設の充実と試験船の建造に拍車をかけることになったのである。」

泊庁舎　琉球水産研究所　(豊見山恵盛.1963)

泊庁舎時代

泊庁舎の時代（昭和 33 年～49 年）に特記すべき事項として、調査船図南丸の誕生があげられる。昭和 32 年（1957 年）に泊庁舎に引越した後は、庁舎の整備充実にも時間と経費が必要であった。そのため独自の調査船の建造には至らず、水産庁南海区水産研究所の俊鷹丸（183.63 ﾄﾝ）や長崎県水産試験場の鶴丸（120 ﾄﾝ）等との共同調査でもって、近海まぐろ漁場調査やさば漁場調査及び深海一本釣調査等を行っていた。

1960 年度予算に 16 万ドルの調査船建造費が計上され、大分県臼杵鉄鋼所において 159.31 ﾄﾝ、400 馬力の鋼船「図南丸」を建造した。 昭和 35 年 3 月 16 日進水、5 月 9 日に竣工し、5 月 13 日に泊港に廻航された。翌 14 日には「図南丸進水並びに就航祝賀会」を行い、翌々日から宮古・八重山へ廻港し、一般の参観に供した。同じく 5 月 29 日には南方まぐろ漁場調査及ひ漁業試

験に出発し、6月29日までの処女航海に従事している。本船が竣工した当時は東支那海のさば資源が発見されその開発が行われ、また大型まぐろ船の導入によるまぐろ漁業の始動期でもあったことから、調査もこれらの資源を中心に行われた。調査海域は遠くはセレベス海、バンダ海をはじめ、オーストラリア沖近辺にまで及び、近くは本県各島嶼沿岸に至るまでの広い範囲にわたって活躍した。

漁業調査船図南丸要目表

船体 全長 33. 465 米　幅 6. 200 米
速力 9.5 節 ﾃﾞｨｾﾞﾙ機関 400HP
冷凍装置フレオン 12 直膨式 2 基
揚錨機 11 馬力 1基 操舵器 1 基
レーダーMD806 ローラン JNA
魚群探知機、方向探知機、電動深儀
漁労装置 鯖はね釣、棒受網等装備
(豊見山恵盛.1963)

昭和 41 年(1966 年)は水産試験場にとって大きな飛躍の年であった。この年 8 月に小型の調査船「くろしお」(木造、21.44 ﾄﾝ、100 馬力)が糸満造船所で竣工した。

また、これまで漁労・製造・増殖の 3 部門であった研究室に、資源部門が加わって 4 つの研究室となり、10 月には石垣市字川平に八重山水産模範養殖場が日本政府の援助によって新設竣工した。琉球水産研究所事業報告書が刊行されたのは 1956 年度以降である。そのため同年度以前の調査試験課題は明らかでない。漁労部門の試験課題を 1971 年度での事業報告書から課題ごとに整理し、漁場調査試験の対象漁種の変遷をみると左表のとおりになる

(1956～71年度)

	まぐろ	かつお	かつお餌料	まち類	さば	さんま	さんご	あいざめ	えび類	とびいか	むろあじ	漁具漁法	海洋観測	魚礁調査
1956	○				○	○					○	○		
'57			○		○	○								
'58	○	○	○		○	○						○		
'59	○			○	○	○					○			
'60	○		○	○	○	○						○		
'61	○▲		○		○						○	○		
'62	○▲			○▲	○							○		
'63	○▲		○	○	○	○						○		
'64	○▲	○	○	○	○		○							
'65			○	○▲			○						○	
'66	○▲	○	○	○			▲						○	
'67	○▲	○	○	○▲				○	○				○	○
'68	○▲	○	○					○	○				○	○
'69	○▲	○	○	○				○	○		○		○	
'70	○	○	○▲	○				○		○			○	
'71	○	○	○	○					○	○			○	○

注：○＝沿近海，▲＝遠洋

これから重点課題は、まぐろ、まち類(深海一本釣)かつお、かつお餌科の 4 課題であることがわかる。この外、業界の動向に対応して取り上げられた対象種は、さば、さんま、さんご、くじらである。なお 1956～1959 年度は東シナ海のさば漁場調査を重点的に実施している。1960 年度以降は試験船の建造に伴い、長期航海が可能となった。遠洋漁場調査は、セレベス、

ミンダナオ、ミクロネシア海域のまぐろ漁場調査と、南シナ海深海一本釣漁業試験及びミッドウェー海域のさんご調査である。このことは戦後、琉球漁船の外延的漁場拡大に対応していると見ることができる。近海漁場調査は、琉球海域のまぐろ、かつお及びまち類の漁場調査が継続実施されている。沿岸域ではかつお餌科調査が 1957 年度以降継続され、その他 1960 年度以前のさんま調査や、新規に導入された三重ナイロン刺網性能試験、改良立縄試験が実施されている。

1966 年度以降は底魚の新魚種開発調査として、あいざめ漁場調査、小型底曳、えび篭によるえび類調査があげられる。また海洋観測は 1965 年度以降継続している。行政委託による人工漁礁調査も 1967 年度以降の報告書に見られる。(『試験研究』崎山憲一「沖縄県農林水産行政史第 8,9 巻　水産業編　1990」から抜粋)。

漁場調査

尖閣諸島周辺海域における　琉球水産研究所の漁場調査は、鯖漁場調査と深海一本釣り漁業試験併せて調査海域の海洋観測を実施している。

また、昭和 20 年代の後半に、久米島北西の陸棚縁辺域でサンマ及びスルメイカの調査を行っている。

鯖漁場調査については、1953 年頃漁場が発見され、1954 年から、鯖跳ね釣り漁場が着業したが、漁場の範囲、適水温、回遊経路、漁法等今後の調査研究にまつことが多いとして、継続的に調査を行ってきた。

1956 年～1959 年は用船を使用し、1960 年～1963 年は調査船図南丸で実施している。

漁法は跳釣りで、主な漁場は魚釣島西方を中心に東シナ海大陸棚海域で、操業試験を行つてきた結果、同海域では、11 月～12 月と2～3 月に好漁場が形成されることを報告している。併せて餌科節減対策、鮮度保持試験も行っている。

しかしながら、琉球の鯖漁業は最盛期には水揚量 1100トン余り(着業船 7 隻)を記録するも 1955 年～1960 年の短期間で終息している。

また同海域は九州、本土の棒受網船、巾着網船が多数操業する入会漁場であることも一因であると思われる。

深海一本釣り漁業試験は、1950 年代から毎年実施している重要課題であった。

本試験は琉球近海のソネ漁場と、八重山、与那国海域も含めて赤尾嶼から魚釣島にかけての大陸棚縁辺域を調査海域としている。なお 1960 年の図南丸就航後は、漁業試験とあわせて広域海洋観測を行っている。

1950 年代～1960 年代の調査結果を統括して、尖閣諸島周辺海域も含めた琉球近海における水深に対する魚種別、棲息水深をまとめている。即ち、フエフキダイ類は 100mを最深にして、それ以浅にみられ、50mを境に多棲すること。マチ類のうち赤マチは 100m以深に棲息し 250mを境に多棲すること。また尖閣列島周辺海域の水深 100m前後では、マーマチを主体にマダイ、レンコダイ等が混獲されることを記録している。

琉球水産研究所における深海一本釣漁業試験の目的は、尖閣諸島周辺海域を含む東シナ海

大陸棚斜面 100 尋線における漁場開発にあった。即ちアカマチ（ハマダイ）等マチ類が棲息する新たな曽根の探索発見に努めることとし、継続実施してきた。

1960 年 2 月は民間漁船を八祥丸（32 屯）を用船して実施し、魚釣島西方 4 浬の 100～140 尋においてアカマチ等の新曽根を発見している。

また、1960 年 4 月に漁業調査船図南丸（159.31トン、400 HP）の竣工に伴い航海計器、漁労装備等の充実が図られ、調査航海能力が格段に向上した。

尖閣諸島近海での深海一本釣り漁獲試験

甲板いっぱいに釣り上げたマチ類

調査船図南丸による漁場調査光景 （ 豊見山恵盛.1964 年)

図南丸により発見された新漁場は尖閣諸島周辺の 100 尋線では南小島の東 8 浬 25°—48‘N、123°—42‘E、水深 230m～265mの小さな隆起瀬と赤尾嶼南の 25°—48‘N、124°—31 E、水深 230m～290mの新曽根である。

与那国と台湾の中間 24°—17.8‘N122°—31.7 E の新曽根は周囲水深 500m～700m 最浅部は水深 175mであり、大型のアカマチの好漁を見ている。

なお尖閣諸島周辺の 100 尋以浅の大陸棚上海域において、マダイ、レンコダイの釣獲を見ており、漁具漁法の導入改良等により、これらの漁場開発の可能性を報告している。

魚群探知機調査によると同海域は凹凸が複雑な海底地形で、E—ESEの強い潮流と冬季季節風のため操業困難であることを報告している。

他方、尖閣諸島や同海域は、戦後早い時期から学術的関心を引きつけていた。

黒潮回廊に位置し、海流研究の重要なポイントでもあった。琉球気象台、長崎海洋気象台による黒潮協同調査、琉球大学や九州大学・長崎大学による学術調査がなされている。

他機関による事例調査として、これらの一部を併せて紹介する。

主な漁業調査

(1). 琉球政府前半期 (1951 年～1960 年 10 月) 漁業調査

A. サバ漁場調査

あらまし

尖閣諸島周辺を含む東シナ海中南部海域において、1954 年長崎県水産試験場の試験船鶴丸に琉球水産研究所から調査員が乗船し、試験操業による漁況調査及び海況について、鯖漁場共同調査を実施したのが始まりである。

なお長崎県水産試験場・琉球水産研究所の共同調査は 1959 年も実施された。

琉球水産研究所による鯖漁場調査は、1956 年～1959 年は用船を使用し、1960 年～1963 年は調査船図南丸で実施している。漁法は跳釣りで、主な漁場は魚釣島西方を中心に東シナ海大陸棚海域で、操業試験を行つてきた結果、同海域では、11 月～12 月と2～3 月に好漁場が形成されることを報告している。併せて餌科節減対策、鮮度保持試験も行っている。

しかしながら、琉球の鯖漁業は最盛期には水揚量 1100 ﾄﾝ余り（着業船 7 隻）を記録するも、1955 年～1960 年の短期間で終息している。

1. 1954 年度琉球水産研究所と長崎県水産試験場との琉球近海鯖漁場共同調査

尖閣諸島を含む東シナ海の中南部海域は、底魚のほかサバ、カジキ等の回遊性魚の漁場として知られているが海況・漁況調査が充分行われていない。そのため東シナ海中南部海域の高度利用を図り、長崎および琉球の水産業の発展を期するため、海況およびサバの漁場調査を共同で行う。

なお、本共同調査の背景に、戦後マッカサー・ラインの設定につづき、1952 年韓国が李承晩ラインを設定したため、済州島海域のサバ漁場が操業制限海域となった。そのため東シナ海中南部海域に新たにサバ漁場を開発することが当時のサバ跳ね釣業界にとって喫緊の課題であったことがうかがわれる。

調査海域　次頁の通り

調査項目　海況調査、鯖漁場調査

調査期間　1954 年 7 月 6 日～7 月 27 日

調査船　長崎県水産試験場場調査船　鶴丸（123ﾄﾝ、400HP）

調査員　琉球水産研究所　当眞嗣誠、琉球政府経済局水産課　城間清健

長崎県水産試験場　星野、森、重野、鶴丸船長沖永外 13 名

「・・・支那海は底魚の外、カジキ、サバなど洄遊漁の宝庫であり、この豊富な資源を求めて、多数の日本漁船が出漁している。しかしこの恵まれた漁場もまだ調査が不十分なために海況、漁況は解明されていない。これが究明は長崎県の漁民にとってもまた琉球水産業の発展にも急を要する問題であり、今回の共同調査は意義深いものである」と長崎県知事西岡武次郎は、琉球政府行

政主席比嘉秀平あてのメッセージで述べている。

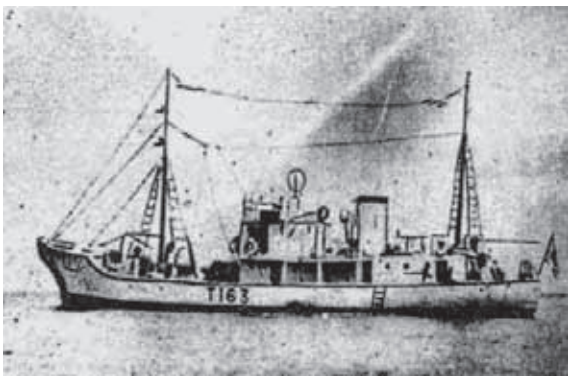
報告書は、調査海域が東シナ海の広域に及び、調査項目も海況、漁況、ブランクトン調査等多岐にわたり詳細に報告されている。

琉球近海鯖漁場共同調査線・調査地点図 (1954)

鯖漁場と海況との関係 （1954）

『琉球近海鯖漁場調査』(長崎水産試験場、1955)から、尖閣諸島海域に係わる報告部分を抜粋して紹介する。

「・・・沖縄島以南では純粋な暖流系表層水で占められ、北上するに従い中層水との混合が行われ・・・。特に大陸棚上及び魚釣島周辺では、地形による下層水の上昇により暖流系中層水の水深は暖流主軸部に比較すると非常に浅くなっている。・・(p22)」。



1950 年代に鯖漁場調査に従事した「鶴丸」
（長崎県水産試験場提供)

流況について 50 米層における現場密度の走向から大勢をみると、「魚釣島周辺水域には左旋、右旋の環流が見られ・・・この水域の発散、収斂、渦動の存在は魚釣島周辺の鯖漁場構成に重要な意義を有するものと思われる。」(p23)

東海の海況を綜合して「・・黒潮暖流は琉球列島の西側沿いに北上しており、更に潜流して底層

附近を大陸棚上に向うものが見られる。対馬暖流は九州西岸の地形に沿い北上し男女群島南部水域を経て五島西岸に向っている。黄海冷水は済州島西部より南下し、その前線は北緯 31 度附近に達している。大陸沿岸水は揚子江より流出した低鹹水で男女群島南西 100 浬附近に分布している。」(p26)

琉球近海鯖漁場については「・・漁場は大体 200 米以浅の大陸棚上に分布しており、・・Lat 28°—10'NLong124°—56'E及びLat 27°—30'NLong125°—10'E周辺漁場は東海における春季秋季の鯖漁場として・・重要な水域と思考される・・更に魚釣島周辺水域が冬期の鯖漁場として重要であることは周知のとおりである。」

「・・・琉球近海の鯖漁場形成の海洋条件として暖流系水と大陸系沿岸水の接触並びに地形による下層水の湧昇をあげることが出来よう」と考察している。(p27)

2. 1956 年度鯖漁場調査並びに漁業試験

本調査並びに漁業試験の目的は、『1955 年度琉水研事業報告』に「・・琉球における鯖漁場は 1953 年に発見され、1954 年から鯖跳釣漁業として採用された漁業であるが、未だに軌道に乗らない現状にあたるためめ、漁場の範囲、適水温、回遊経路、漁法等今後の研究に俟つことが多いので、1954 年以来調査研究を継続実施している。・・」

調査海域　久米島北西漁場及び東シナ海大陸棚

調査項目　漁獲試験

調査期間　第 1 次～第 6 次試験　1955 年 11 月～1956 年 5 月

調査船　第 1 次～第 2 次　宮島丸(30 ﾄﾝ、65HP)

第 3 次～第 6 次　漁集丸(30 ﾄﾝ、65HP)

調査員　調査員 2～3 名　乗員及臨時漁夫　14～16 名

使用漁具　跳釣漁具一式、使用竿数 14～16 本、

調査海域は、久米島北西 120 浬の北緯 27 度 39 分東経 125 度 08 分を中心として約 2.576 平方浬の範囲にあり、水深 80m～100m。航海日数は各次 6～7 日間、1 日～2 日の夜間操業。昨年と今年度の試験結果に依れば、久米島北西漁場は、9～12 月、3～6 月が盛漁期の様である。1～2 月は点々と散遊している小群で、大群は極めて少ない。

また、月別水温と漁獲回数の関係をみると、17℃～27℃台の範囲にあり、20℃台、19℃に漁獲回数が多い傾向にある。

日本近海のサバは温帯性で、マサバとゴマサバが分布している。魚釣島西漁場を含む東シナ海南部海域の系統群はゴマサバが大部分であるとされている。

3. 1957 年度、鯖跳釣漁業調査

前年度より継続事業で、北緯 28 度東経 124 度 30 分を中心に実施

調査海域　久米島北西漁場及び東シナ海大陸棚

調査項目　漁獲試験
調査期間　第 1 次～第 7 次試験　1956 年 10 月～1957 年 5 月
調査船　漁集丸（30 ﾄﾝ、65HP）
調査員　調査員 2～3 名　乗員及臨時漁夫　14～16 名

本年度は餌料の節減方法として酵素鋸屑飼料を用いてはね釣試験を行った。結果はほぼ良好としているが、時化や電気故障のため操業は 2 回に止まっている。

4. 1958 年度、第 1 次、第 2 次鯖漁場調査

前年度からの継続事業である。
調査海域　久米島北西漁場及び東シナ海大陸棚
調査期間　第 1 次調査　1957 年 11 月 30 日～12 月 8 日
　　第 2 次調査　1957 年 12 月 13 日～12 月 19 日
調査項目　漁獲試験
調査船　漁集丸（30 ﾄﾝ、65HP）
調査員　調査員 2～3 名　乗員及臨時漁夫　14～16 名

漁場は例年と比べて殆んど変動がない様に考えられた。が、発電機故障のため漁獲試験を実施することが出来なかった。また、第 2 次試験は強力な季節風にあい船尾の三角帆用マスト折損し操業不能となり何れも調査不充分で所期の目的を果たすことが出来なかった。

5. 1959 年度、第1次、第2次鯖跳釣漁業試験

前年度からの継続事業、餌料節減試験を行う。
調査海域　久米島北西漁場及び東シナ海大陸棚
調査項目　漁獲試験、餌料節減試験
調査期間　第1次調査　1958 年 12 月 12 日～12 月 17 日
　　第2次調査　1959 年 2 月 17 日～2 月 25 日
調査船　漁集丸（30 ﾄﾝ、65HP）
調査員

今回漁獲のあった北緯 27 度 57 分、東経 124 度 24 分(農林 515 区)(すなわち赤尾島北方海域)は、例年より東海の中心漁場として活況を呈していたが、今年も日本漁船が
20～30 隻操業している状況で安定した漁場だと推量される。餌料節減試験で、酵素鋸屑及び籾殻飼料が鯖漁業の撒餌として利用できる可能性を確認した。

6. 1959 年度琉球水産研究所と長崎県水産試験場との琉球近海鯖漁場協同調査

「・・特に鶴丸は過去 2 回に亘って当地を訪れたこともある優秀船で・・、・・東支那海の鯖漁場と尖閣諸島寄りの百尋線に添って大陸棚に於ける底魚の漁場調査が主体で、東支那海の海況による鯖の移動状況を明らかにし、底魚漁場を探知することによって琉球の水産業の進展に寄与せしめようという目的で実施した・・。」と琉球水産研究所長大嶺盛亮は述べている。

調査海域　東シナ海南部

調査項目　海況調査・鯖魚群並びに漁獲試験

調査期間　1959 年 2 月 21 日～3 月 1 日

調査船　長崎県水産試験場調査船　鶴丸(123 ﾄﾝ、400HP)

調査員　琉球水産研究所　城田得位、当眞嗣誠、奥平盛光、久高喜八郎

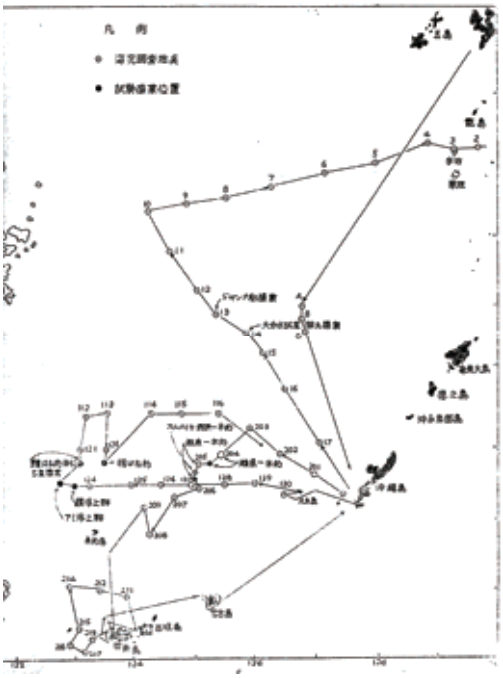
長崎県水産試験場　浜島謙太郎、森勇、藤川政文、船長沖永亀作外 13 名

海況については水温及び塩素量の水平分布図（0m、25m層、50m層、75m層、100m層）、鉛直断面図（0m～300m層）から「・・黒潮暖流は台湾東方から東支那海に流入し、琉球列島沿い東北東に延び、・・久米島北東で北々東に転じ・・」と流向を推定している。

また「黒潮暖流と大陸棚上に分布する水塊との接触混合は、魚釣島の北部海域では水深 140m、久米島西海域では水深 120m前後の海域と思われる」と報告している。

調査時の浮魚漁場について、魚群探知機による「鯖魚群の発見位置は水温 18°～21℃を示す水温傾度高い海域で、T-S diagram による水塊分析によると、中間水塊（黒潮、黄海冷水の混合水塊）より、やや黒潮暖流寄りとなっている。」

なお、魚釣島近海の鰺の旋網漁場の開発について、琉球は立地的に有利な立場にあることに言及している。稚魚、魚卵調査について、カタクチ、マアジ、オキエソ、イバラハダカ、ハダカイワシ科、レプトの稚魚が出現したと報告している。



調査地点並びに航跡図　（1959.2～3,長崎水試）

同報告書では、琉球に於ける最近年の水産物生産高の推移（1955 年～1957 年）、東海産ゴマサバ（漁況変動、体長組成分布の変動）、他について報告されている。

「東シナ海中南部海域の鯖漁場は、100m等深線と 200m等深線の間にあり、26°～29° 30′ N、121° 30′～126° 30′ Eの海域で黒潮暖流と黄海冷水の潮境であって、潮境よりも暖流域に形

成される。表面水温は 15°～26°、適水温は 19°～22°である。漁獲中心漁場の推移をみると、中心漁場は 11 月以降しだいに南西方へ移動し、4 月の漁場を南限として 5 月以降北東方へ移動して終漁となる。」(「支那東海漁場開発」森勇、西本福男 1958 年、長崎水試資料第 140 号)

B. 一本釣試験調査(マチ、タイ類)

あらまし

深海一本釣の漁業は、深所の底棲性のマチ類を対象に沖合のソネおよび離島周辺で操業するものである。琉球水産研究所は、1950 年代後半、漁場開発を目的に水産庁漁業調査船俊鷹丸と長崎水産試験場調査船鶴丸により、主に尖閣諸島周辺の 200m等深線内外の海底地形調査および試験操業の共同調査を実施している。

また琉球水産研究所は、当業船を用船し、尖閣諸島周辺の 100 尋線内外の海域および先島海域において、1959 年 4 月、1960 年 1 月～3 月に漁場調査を実施している。

1. 1958 年 3 月、水産庁・琉球水産研究所による底魚一本釣共同試験調査

本調査の実施に至る経緯について「琉球水産研究所の悩みは優秀な調査船の建造でありますが、政府財政の関係で早急に建造することができず、止むを得ず 1958 年度に日本政府水産庁の御援助に依って同庁所属の俊鷹丸(180 トン鋼船)を派遣して頂き、琉球近海の鮪漁場と底漁一本釣漁場の調査を共同で実施することができました。」と琉球水産研究所長大嶺盛亮は述べている。

調査海域　下図に示す

調査項目　海洋観測、底魚一本釣試験

調査期間　1958 年 3 月 19 日～3 月 23 日

調査船　水産庁漁業調査船　俊鷹丸(180 トン、鋼船)

調査員　水産庁研究第一課　大鶴典正

琉球水産研究所　城田得位、当眞嗣誠、知念正男

琉球政府経済局水産課　金城武雄

魚群探知機による海底地形調査では「水深 200m前後の大陸棚周辺の海底はかなり凹凸のはげしい部分があり、底魚釣漁業にとって適していると考えられる場所が多い」と報告している。

調査海域は尖閣諸島周辺から久米島西方の大陸棚縁辺域である。

海洋調査の結果を合せて「今回の調査に依って、琉球近海の海洋構造とくに黒潮の状態と黄海中央冷水塊による大陸棚縁辺部のCascadingの存在を明らかにし底魚に関して漁場になりうる好適な水域を大陸棚の周辺に発見し、琉球近海のまぐろ類の生態の一部を明らかにした」とまとめている。

一方、前述の大嶺盛亮所長は「短期間の調査であったが、優秀な調査船だけあって調査技術の指導並びに新漁場発見に大きな貢献をして戴いた。」と述べている。なお、まぐろ延縄試験は1958年3月11日～3月15日に沖縄南東海域で実施している。

水産庁調査俊鷹丸　第2次航海航跡図　(1958.3)

2. 1959年度琉球水産研究所と長崎県水産試験場による琉球近海瀬魚漁場協同調査

本試験の目的は「本漁業は従来は主として曾根を頼って操業しているが、今年は尖閣諸島周辺海域の 100 尋線附近に重点をおいて調査し、漁場の拡大と漁業生産の向上を期さんがために実施した」

調査海域　前掲のとおり

調査項目　海況調査、瀬魚一本釣試験、鯨調査

調査期間　1959年3月5日～3月15日

調査船　長崎県水産試験場場調査船　鶴丸（123トン、400HP）

調査員　琉球水産研究所　城田得位、当眞嗣誠、奥平盛光、久高喜八郎

長崎県水産試験場　浜島謙太郎、森勇、藤川政文、船長沖永亀作外13名

瀬魚漁場調査については、尖閣諸島周辺の大陸棚縁辺の200m等深線内外に沿って、魚群探知機ロランにより海底地形調査を行い、琉球水産研究所設計の一本釣漁具を使用して漁獲試験を行っている。調査期間中、強勢な季節風に遭遇したが、大陸棚斜面及び石垣島、宮古島周辺の漁場地形を調査した。

3. 1959年4月、深海一本釣漁業試験

本漁業は従来は主として曽根を頼っているが、今年は尖閣諸島周辺海域の 100 尋線附近に重点をおいて調査し、漁場の拡大と漁業生産向上を期さんがために実施する。

調査海域　与那国～八重山～宮古～魚釣島・黄尾嶼海域
調査項目　海底地形、漁獲試験、撒餌改良試験
調査船　漁集丸（30トン、120HP）
調査員　記載なし

調査海域は西表、与那国、仲ノ神島周辺を1959年3月に、池間島西北西を同年4月に調査し、尖閣諸島海域は同年4月に魚釣島西方及び東方、黄尾嶼海域を集中的に調査している。漁場の選定は魚群探知機に依り、海底地形を観察し投縄を行っている。併せて撒餌の改良として、カブシ入袋に山石を縛って沈め標識ブイを設置する一括撒餌を試験している。操業水域はほぼ 80 尋～100 尋である。

報告書には操業回次毎の投縄、揚網時間、操業人数、水深、水温、餌料、漁獲物について記録されている。魚種別の釣獲率をみると、マーマチ、青マチが 9 割りを占め、マダイ、ブリも若干釣れている。マダイについては特に 90 尋内外の大陸棚上に好漁場を推量している。また、漁獲物から見た「マチ」類の垂直分布を整理している。

一括餌撒については、終日効果があったとしている。漁場では魚釣島西方がやや好漁であったと報告している。（1959 年度琉水研時事報、p13～22）

4. 1960 年 1 月～3 月魚釣島及び赤尾嶼近海における釣獲試験

前年度に引き続き、尖閣諸島周辺海域の 100 尋線附近に重点をおいて調査し、漁場の拡大を図る。

調査海域　魚釣島近海～宮古八重山近海
調査項目　海底地形、漁獲試験
調査期間　第 1 次～第 4 次試験 1960 年 1 月 17 日～3 月 31 日
調査船　八祥丸（32トン、150 HP、ディーゼルエンジン）
調査員　当眞嗣誠、奥平盛光、船長外 8 人、臨時漁夫 5 人
使用漁具　一本釣漁具、一回当操業人数　3 人～11 人

第 1 次試験 1960 年 1 月 17 日～1 月 26 日

魚釣島南々東方の漁場においては、海深85尋～150尋の範囲で延操業回数9回、そのうち技縄失敗1回漁獲皆無3回で、総漁獲尾数32尾、魚種組成はヒメタイ（マーマチ）27尾青タイ3尾、ブリ（ウチムル）2尾であった。ヒメタイ（マ―マチ）の漁獲水深は90～115尋にあり、120～150尋の深所では漁獲皆無となっている。表面水温は23.8℃～24.2℃。

魚釣島西方漁場においては、2 日間の延 24 回操業で総漁獲尾数 100 尾（鯖を除く）でヒメタイ39尾、青タイ33尾、マダイ15尾、他であり水揚は低調である。鯖の釣獲があったのは魚釣島の沿岸 2 浬内外のところであった。

第 2 次試験 1960 年 2 月 6 日～2 月 17 日

宮古島東方の水深 92～108 尋において 3 日間で延 30 回操業し、総漁獲尾数 160 尾ヒメタイ、メバル、青タイ他であり、凶漁であった。

台湾曽根の水深 100～127 尋においては釣獲率は極めて低調であった。

波照間西方及び仲ノ神島西漁場の水深 65～143 尋においては魚体は小型（若年魚）が多くヒメタイが主体で、釣獲率は低調で漁場の荒廃が認められた。

第 3 次試験 1960 年 2 月 24 日～3 月 7 日

調査海域は赤尾嶼及び魚釣島近海である。

赤尾嶼西方 100 尋線曲においては、延 34 回の操業で総魚獲尾数 318 尾の好漁であり、ヒメタイ（マーマチ）主体にマダイ、キハダ（シビ）、他が漁獲された。

魚釣島西方 2.5 浬の水深 100～140 尋においては、延 40 回操業し総魚獲尾数 35 尾で青タイ、ヒメタイ、マダイが漁獲されたが漁獲不振であり、時期的に早かった感じを受けた。

魚釣島西方 4 浬の水深 100～140 尋においては、海底の起伏状態が極端に変化があり、ハマダイ（赤マチ）、キントキダイ（赤目）、メバル等、曽根付魚類が揚がっており新曽根と思われた。しかしながら当漁場は操業回数 27 回のうち漁獲皆無が 13 回もあった。これは急潮流のため漁具が海底に到達しなかったためである。総漁獲尾数は 102 尾うちマダイ 29 尾、ハマダイ 22 尾他に瀬付鯖 51 尾であった。

用船八祥丸(32 トン) 慶良間渡嘉敷村の鰹漁船
（「琉球政府文書「船舶登録に関する書類」より)

第4次試験 1960 年 3 月 17 日～3 月 31 日

2 月に実施した魚釣島西方 4 浬の新曽根で調査した結果、延操業回数 26 回総漁獲尾数 130 尾で青タイ、ハマダイ、マーマチ、マダイ、瀬付サバ他が漁獲された。同曽根は、小規模で水深 105～130 尋で起伏が甚だしく、瀬掛りによる漁具の切損が度々見られた。

（1960 年度琉水研時事報、p22～37）

C. するめいか漁場調査

あらまし

久米島北西の東シナ海において春期のするめいか回遊状況を把握するため、1955 年～1957 年の春期に用船により、調査を実施し、カジキ吻、鯨骨を材料に擬餌鈎を試作し、釣獲試験を行っている。

1. 1956 年度 するめいか漁場調査

久米島北西 75 浬でするめいかの釣獲試験を実施、好成績を収めた。沖縄で取れたことのないいかで、之が本格的に取れるものならば南は魚釣島より赤尾嶼を経て久米島沖より九州に至る 100 尋線に沿うて漁場は広範囲であり、本調査の目的も之にある。

調査海域　下図に示す

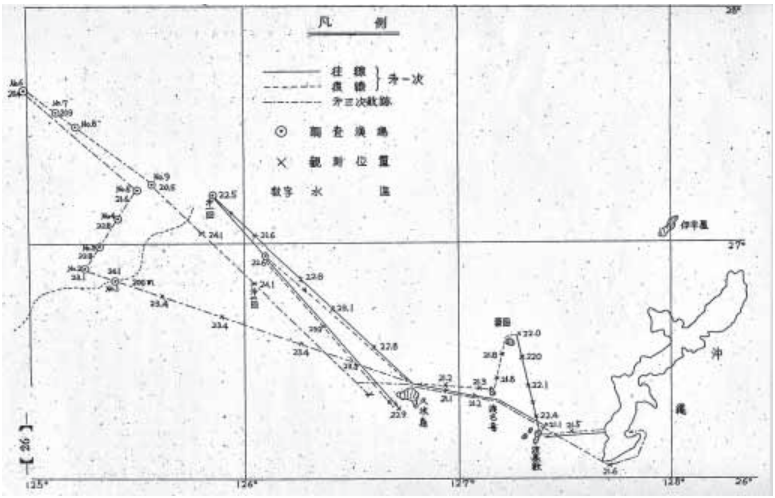
調査期間　第 1 次～第 3 次試験　1956 年 3 月～1956 年 5 月

調査項目　集魚状況調査、擬餌鈎喰付調査

調査船　漁集丸（30 トン、65HP）

調査員　記録なし

1956 年 3 月 9 日、久米島北西 75 哩において、集魚灯による集魚状況調査及び擬餌鈎（かじきの鼻及び鯨の骨格）喰付調査を実施した。結果は集魚灯下に少数のイカの集魚が見られ、かじき擬餌が赤糸積捲より喰付は良い傾向であった。



するめいか漁場調査　航海航跡並びに調査漁場図(1956)

2. 1957 年度するめいか漁場調査

前年からの継続調査である

調査海域　久米島北西漁場及び東シナ海大陸棚縁辺部

調査項目　集魚状況調査、擬餌鈎喰付調査

調査期間　1957 年 4 月

調査船　漁集丸（30 トン、65HP）

調査員　記録なし

1957 年 4 月、久米島北西の 100 尋線の大陸棚上の海域において当所試作のカジキ鼻、鯨

の骨を材料とした疑似餌を用いて釣獲試験を行った。結果はするめいかの集魚状態は悪く、悪天候による時化も加わって初期の目的を達成することが出来なかった。

□. 主な刊行物資料

○、『試験研究』崎山憲一（沖縄県農林水産行政史第 8,9 巻　水産業編　1990）

○、『漁労技術』友利昭之助　（　同上　）

○、『琉球水産研究所沿革史』（琉球水産研究所　1962）

○、『琉球近海鯖漁場調査』森勇他　1955 年、長崎水試資料第 80 号

＊琉球水研・長崎水試による琉球近海～尖閣諸島近海鯖漁場協同調査

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1956 年度』

①　琉球近海鯖漁場の調査及び漁業試験

②、鯖跳釣漁業一般漁漁況

③、するめいか漁場調査(56 年 3 月～4 月)

＊①、②、③は久米島北西漁場及び東シナ海大陸棚

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1957 年度』

①、鯖跳釣漁業調査

②、するめいか漁場調査

＊①、②は久米島北西漁場及び東シナ海大陸棚

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1958 年度』

①、第1次、第2次鯖漁場調査報告書

＊久米島北西漁場及び東シナ海大陸棚

②、琉球近海共同調査概報　(57 年.3 月)

＊水産庁調査船俊鷹丸による琉球水研・水産庁との鮪及び一本釣漁場共同調査　＊久米島北西漁場～東シナ海大陸棚～赤尾嶼～魚釣島近海

○、『支那東海漁場開発』 森勇、西本福男　（1958 年、長崎水試資料第 140 号）

○、『琉球近海漁場協同調査報告』（琉球水産研究所・長崎県水産試験場　1959 年）

＊鯖漁場は東シナ海大陸棚南部、一本釣試験は尖閣諸島近海

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1959 年度』

①、鯖跳釣漁業試験

＊久米島北西漁場及び東シナ海大陸棚

②、深海一本釣漁業試験

＊第 2,3 次試験は黄尾嶼、魚釣島近海

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1960 年度』

①、深海一本釣漁業試験　第1次～第 4 次試験

＊魚釣島近海～宮古・八重山近海

□. 主な新聞記事

1948.07/31・沖縄タイムス・「海の宝庫、新漁法で開拓、近く水試験場が手繰り船試験」

1948.11/04・八重山タイムス・「富を海に開く、沖縄初の手繰船」 ＊「沖縄水産試験場に於ては軍政府の援助で 40 トンのディゼルエンヂン船 2 隻を整備して手繰船に改造」

1952.04/04・自由民報・コラム欄「尖閣列島へ調査団、日本漁船は既に基地化、調査から施策へスピード要す」

1952.04/25・沖縄タイムス・「確乎たる方針が無い水産研究所。伊藤顧問が意見書」

1952.04/25・沖縄タイムス・「琉水研所、きのう賑やかな開所式。移転 8 度目に落着く」

1952.07/04・沖縄タイムス・「対馬海流の調査、沖縄沿岸の漁獲増産か」 ＊水産庁と鹿児島、長崎等の各県水産試験場調査船 12 隻参加、台湾沖～沖縄～対馬～日本海の黒潮海流、魚の回遊状態、産卵等の調査を 3 年計画。サバ、イワシ、サンマ、ブリ、アジの漁獲増産が期待される。

1953.08/19・沖縄タイムス・「尖閣列島の資源調査。悩みの種は試験船」 ＊琉球政府水産課、尖閣諸島の資源調査及び同近海サバ漁業奨励にそれぞれ 20、34 万円を予算計上

1953.08/31・琉球新報・「水産の実質復帰。日琉一体化、研究調査依頼」 ＊琉球政府、駐日代表に尖閣諸島付近のサバ、ヤマトミズン（イワシ）生態調査を要請。

1953.12/01・八重山毎日・「来るぞ続々日ぽん漁船琉球近海へリー・ライン閉出されて南方進しゅつねらわれている魚つり島付近、新漁場開拓に血眼」。
＊長崎の調査船（鶴丸 123 トン）が尖閣列島近海を調査。福岡・鹿児島も調査準備中。

1954.02/13・八重山毎日新聞・「尖角列島漁場調査に。長崎から大挙くり込む、サバつり漁場として特に注目」 ＊長崎県から調査団が大挙して繰り出すと打電。

1954.07/27・八重山毎日新聞・「サバ漁群、尖閣列島近くに多い、鶴丸調査船の調査成果、今後も引続き続行」

1955.01/15・琉球新報・「海の宝庫へ科学のメス。日琉合同で国際漁場開拓へ」
＊琉球水研と長崎水試の魚釣島近海はサバの漁場調査は昨年の基礎調査に続き実施。

1955.02/01・琉球新報・「サバ漁場、魚釣島付近が有望。鶴丸調査を終えきのう長崎へ」
＊魚釣島付近が有望、サバ業者には同島近海への出漁を勧める。

1955.02/01・琉球新報・「長崎県知事へ礼状、比嘉主席が鶴丸に託す」

1955.09/15・八重山毎日新聞・「鰹、南方ならつれる。水産課の宮島丸入港。近海の水温も調査」
＊集魚灯利用の棒受網等の講習終了後、試験船『宮島丸』は尖閣諸島まで横断海洋観測・水温調査を予定。

1955.09/20・八重山毎日新聞・「八重山近海は優秀漁場、魚族も多く大量いる。城田氏（宮島丸）の語る八重山漁業。30 年も遅れている漁法、業者よしっかり」

1955.12/08・宮古毎日新聞・「宮古近海の漁場調査、市が試験船の派遣陳情」 ＊『政府及び水

産研究所に対し、現況水産業は鰹漁一辺倒からさば釣漁業への転換期にあり、宮古沿岸及び沖合の実情―鰹及びさばの棲息帯の調査も調査船を派遣・実施を要請』と報じる。
1956.03/04・琉球新報・「水産研究所の移転、沖漁連が政府に陳情」 ＊琉球政府はサバはね釣り漁業振興に重点をおいているので那覇近郊が望ましい。
1956.04/04・沖縄新聞・「スルメイカ、有望な漁場がある、問題は浮上技術の習得」
1956.04/23・琉球新報「漁業試験基地提供は困難、長崎の申入れに政府回答」 ＊長崎県からアジ鯖のまき網による試験操業の根拠地として久米島、平良港、船浮港を使わしてくれの申入れに対し、民政府布令を検討して困難と回答。
1956.05/19・八重山毎日新聞・「八重山近海、漁場共同調査したい。長崎水産商工部が、琉缶に申入れ、永続的操業可能かどうか。是非提携したい、業界の協力を」 ＊長崎県へのサバ缶製造で原料入手の技術導入協力、長崎県から漁場共同調査の申入れあり。
1957.02/27・八重山毎日新聞・「食卓に高級魚を（記者のメモ）」 ＊先日鹿児島大学水産学部の実習船『敬天丸』が宮古に寄港、帰路は尖閣列島付近～東支那海に出て帰港。
1957.03/10・八重山毎日新聞・「沖縄近海にサンマ回遊、糸満船の水揚げで判明」 ＊『糸満付近にサンマが回遊、漁場は尖閣列島付近でないかと見、琉球水産研究所で調査中』旨。
1958.02/05・八重山毎日新聞・「深海一本釣り等、水産庁が沖縄近海漁場調査」 ＊水産庁に対し、底魚漁場・マグロ延縄・海底海洋調査を依頼、試験船『俊鷹丸』が派遣される。
1959.02/26・八重山毎日新聞・「鯨の資源調査など、近く長崎県試験船鶴丸が」
1960.05/08・八重山毎日新聞・「政府の水産調査船、処女航海」
1960.05/26・八重山毎日新聞・「水研の図南丸、近く石垣に入港」
1960.06/02・八重山毎日新聞・「図南丸の活躍に期待（社説）」
1960.06/02・八重山毎日新聞・「セレベスへ処女航海、図南丸、マグロ漁業調査」
1960.09/21・八重山毎日新聞・「図南丸きょうから資源調査、水産界に大きな希望。鰹餌の集魚試験と指導」

(2). 琉球政府後半期 (1960.11～1972.5) 漁業調査

A. サバ漁場調査

あらまし

昭和 35 年5月、琉球水研所属の調査船図南丸が就航し、1960 年 8 月から 1964 年までサバはね釣及び棒受網により、漁場調査を実施している。

一方、サバ漁業の専業船は減少し、1960 年をもつて終業している。衰退の要因として、漁場の不安定性、冬季の強勢な季節風、飼料コスト高、価格低迷があげられる。

1. 1960 年度、鯖漁場調査

琉球の鯖はね釣漁業は一時旺盛であったが漁況不振のため、着業船は減少し、琉球水産KK数隻が操業していたが本年は 1 隻の操業に止まっている。しかしながら、琉球の水産業振興を図る上で鯖漁業は重要であるため、漁場調査を 1960 年の 11 月と 12 月に実施した。

調査海域　東シナ海南部海域

調査項目　はね釣、棒受網による漁獲試験、魚群探知機による魚群調査

調査期間　第 1 次～第 2 調査 1960 年 11 月 23 日～12 月 16 日

調査船　調査船船図南丸（159.31トン、400 HP）

調査員　城田得位、当眞嗣誠

第 1 次調査 1960 年 11 月 23 日～11 月 29 日

調査海域は東シナ海南部へ農林海区 534、505, 495、他で、魚釣島北方 100 浬～150 浬にあたる。魚探反応により魚群を確認し試験操業を行ったところ 524 海区では小群で餌付不良であった。また 534 海区他では、ゴマサバを約 200kg漁獲し、魚体は 460g～664g、餌付良好であった。付近には日本漁船 3 隻が操業中であった。

第 2 次調査 1960 年 12 月 8 日～12 月 16 日

試験操業は 12 月 10 日に 534 海区（28°—8‘N、123°—27‘E）で棒受網で実施した結果、3300kgの漁獲であり、跳釣りでは 700kg釣獲した。

魚探による探知層は 60m~75m、20m～25m層等であった。ゴマサバの魚体は 26 ㎝～30 ㎝、340g～565gであり、生殖腺は未熟であった。

表面水温は 20℃～21℃とほぼ平年並みであった。なお 11 月は例年より 2℃高めで暖水の勢力が優勢であった。（1961 年度琉水研事報、p67～72）

2. 1961 年度、鯖漁場調査

前年度に引き続き、漁場調査を実施した。

調査海域　東シナ海南部海域

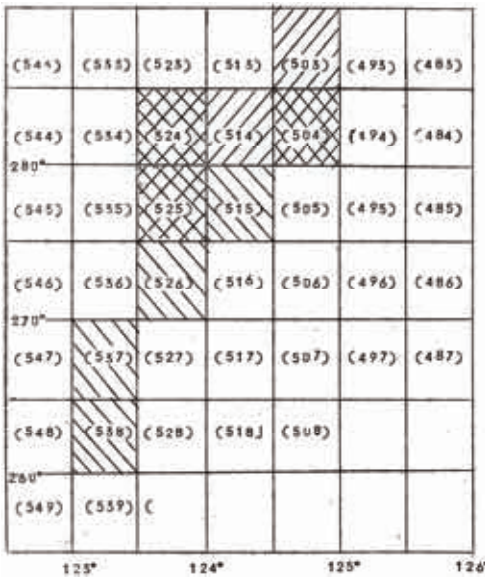
調査期間　第1次試験 1961 年 11 月 29 日～12 月 5 日、

第 2 次試験 1961 年 12 月 12 日～12 月 22 日

使用船舶　図南丸（159.31 トン 400 HP）

調査員　当眞嗣誠

調査海域は東シナ海の 26°—29° N、123°—125° E の範囲内である。魚群探知機による魚群反応はかなり見受けられ、農林海区の 503、504、514、525、526 区では濃密群の映像が現れ、好漁が予想された。しかしながら、餌付不良や浮上率が悪かったこと、漁労中イルカの群に追散されたり、526 区では灯下に落つき始めたサバ群もカジキの出現で、一挙に沈下逃逸する等、悪条件が続いた。そのため 503 区、505 区、526 区で漁獲量は計約 1400 kg程度であった。



鯖漁場調査農林海区　(1961.12)

鯖漁場調査図　(1961.12)

なお、鹿児島入港船の情報では 534 区で好漁が見られた模様で良漁場の範囲は狭少であったと推察された。当時の表面水温は 20.5℃～2.1.6℃を示した。

3. 1962 年度　サバ及びタイ漁場調査

琉球のサバ釣船は既に廃業しているが、東シナ海サバ漁場は那覇から 200 浬内外の近距離にあり、漁場条件としては有利な位置にあるので、同漁場のサバ資源量及び回遊量の増加によっては琉球のサバ漁業の復興につながるところから毎年同漁場の漁況海況を継続調査してその実態を把握し、以て該漁業の再興に寄与せんとするものである。

調査海域　魚釣島近海から東シナ海南部海域

調査項目　漁獲試験、海洋観測

調査期間　1962 年 12 月 17 日～12 月 26 日

調査員　上地清吉、新垣盛敬

調査船　図南丸（159.31トン、400 HP）、中村船長外 23 名

イ、サバ漁場調査結果

調査海域は魚釣島近海から東シナ海南部域で北緯 26 度～北緯 28 度 30 分、東経 123 度～東経 126 度の範囲である。

魚群探知機による魚群記録では農林海区 515 区（27°—30‘N、123° E）において濃群の記録が 4 回あり、集魚につとめたが、集魚灯下にまとまった魚群の浮上が見られなかった。表面水温 19.4～21℃であった。525 海区の 27°—34‘N、123°—35‘E においては、1 回目はふぐ群が浮上し 2 回目は点灯撒餌後 2～3 分で魚群の浮上が見られたので、はね釣により操業したが約 400 kgの漁獲に止まった。

しかしながら魚群は小さく、集散して落ちつかず、喰い付きも不良で、魚体も 265～325gの小型であった。

また鹿児島県串木野港船籍の漁船情報と調査結果から推察すると、サバ漁場は 暖水帯突入部と冷水帯との接触付近の水温 21℃位の所で形成されていると思われた。

ロ、海洋観測結果

サバ漁場の表面水温 21.2℃、50m層は 20.5℃を示した。魚釣島周辺のタイ漁場では表面水温 23.2℃、50m層 23.1℃であり、赤尾嶼付近は表面水温 25.0℃、50m層 24.10℃と高目を示した。

またプランクトンの出現種は植物プランクトンより動物プランクトンが多く見られた。サバ漁場でS agitta の大型動物プランクトンが大部分で、植物プランクトンは全く見られなかった。魚釣島周辺及び赤尾嶼ではCopepoda、diatom が多く出現した。（1963 年度琉水研事報、p35～52）

4. 1964 年度、サバ漁場調査及び海洋調査

琉球のサバ漁業は既に廃業になったが、漁場の実態を調査し今後の見通し策を得るために、さらに継続実施している。

調査海域　魚釣島周辺～東シナ海大陸棚～久米島北西漁場

調査項目　漁獲試験、海洋観測

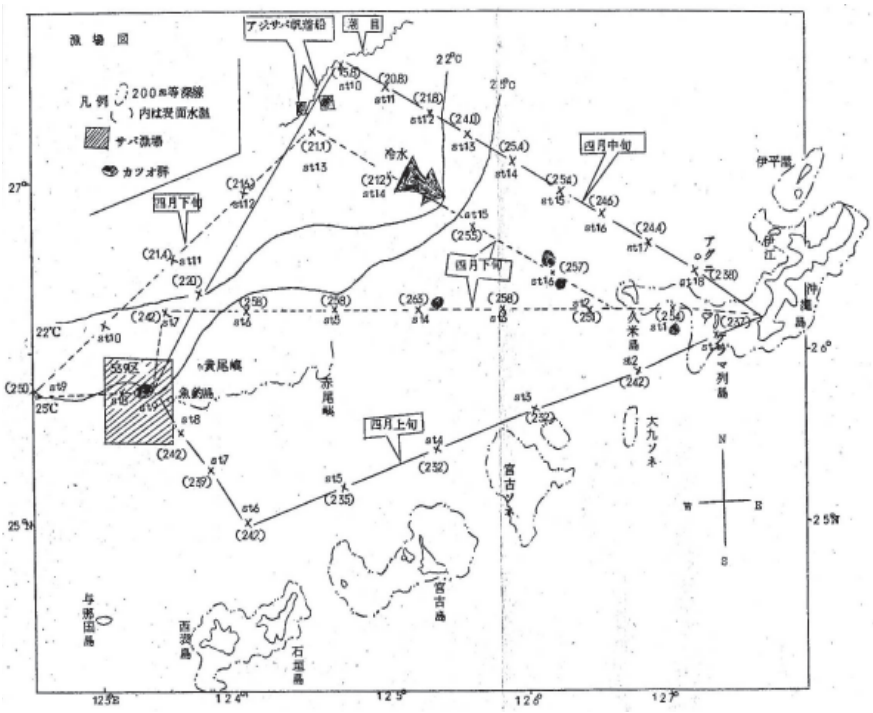
調査期間　1964 年 4 月 7 日～16 日、同年 4 月 24 日～5 月 1 日

調査船　図南丸（159.31トン、400 HP）、仲村船長以下 21 名

担当者　城田得位、当眞嗣誠、新垣盛敬

魚釣島西方では東乃至北東に流れの速い海域であった。サバ魚群は狭い漁場範囲に見られ、4月中旬は跳ね釣により小サバ、中サバ混棲群の好漁があった。4 月下旬は朔望期と悪天候により凶漁であった。また、当漁場には本土の跳ね釣り、棒受け網船が一晩に 10 隻余が操業中であった。魚群探知機調査で、サバ魚群の遊泳層は水深 5m～95mに反応があり、水深 20m～39m層

に多く見られた。



サバ漁場図調査　航跡並びに漁場図 (1964.4)

海洋観測は、気象・海象と水温、塩素量については0m～300mの各層を観測し、大陸棚上では0m～100m層までとした。またサバの漁場形成の見られた海域で潮目の存在を視認している。サバ漁業の今後について、魚価安定策が必要であること。高騰する餌料費の節減等を課題としながら、漁場範囲が狭小であること等から当面静観すべきであるとしている。

(1964 年度・1965 年度琉水研事報)

図南丸での試験操業光景 →
乗組員が少ないため片舷(右舷)
(「同琉水研事報」より)

B. 一本釣試験調査（マチ、タイ類）

あらまし

1960 年調査船図南丸の就航に伴い、1950 年代に用船した民間漁船は比して、調査、航海能力が格段に向上した。調査試験の目的は、1950 年代から引続き、1960 年代も尖閣諸島を含む大陸棚縁辺域及び宮古、八重山海域、南シナ海における新漁場の開発とマチ類等の生態分布等資源特性を明らかにすることであった。

その成果としてマチ類の棲息、水深帯を明らかにし、魚釣島近辺、与那国西海等で新しい曽根漁場を確認している。

1. 1962 年度、第1次近海一本釣漁業試験

底魚の新漁場開発のため 1960 年度に引続き実施した。

調査海域　魚釣島～赤尾嶼近海

調査項目　漁獲試験

調査期間　1962 年 2 月 21 日～3 月 2 日（10 間）

調査船　図南丸（159.31 ﾄﾝ、400 HP）

調査員　城田得位、上地清吉、奥平盛光

　　中村勉船長外 15 名、水産高実習生 6 名、実習生 I 名

使用漁具　一本釣漁具　1 回当操業人数 7～12 名、操業日数 6 日

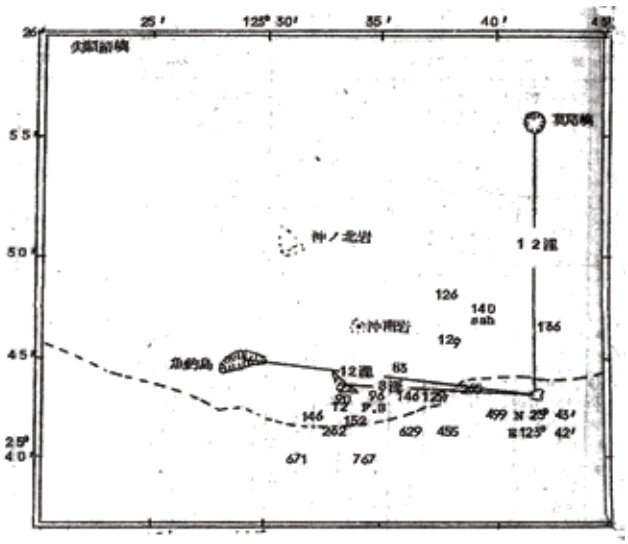
漁場別及び魚種別の漁獲状況は次のとおりである。

赤尾嶼付近漁場においては水深 165m～210mの範囲を 5 回操業し 20 尾を釣獲したがタイクチャーマチ、マーマチ等であり、漁場は価値は極めて低いと思われる。

魚釣島東方 18 浬水深 240m で 12 回操業を行い 152 尾釣獲した。

水深 240m～265mでハマダイ（大中小）が 51 尾のまとまった漁があった。

同漁場で釣獲された魚種はその他ヒメダイ、ウチムル、タレクチマチ等である。



近海一本釣漁業試験新漁場図 (1962.2)

南小島東方8浬（25°—43‘N、123°—427‘E）を中心とした漁場は水深 230m～265mであり、

海図上の 200m線より 1 浬程離れて存在する海図上の 200m線より小さな隆起瀬で、今回の調査から優秀な新漁場であると思われる。

本漁場では 4 日間で 52 回操業し内 1 回釣獲皆無の外は毎回良好な漁獲を揚げ、総水揚尾数 1085 尾であった。うちハマダイ（67%）ヒラマチ（24%）他にタイ、アオダイ、ヒメダイ、ウチムル、メバル他の魚種組成であった。（1962 年度琉水研事報、p91～98）

2. 1962 年度　第 2 次近海一本釣漁業試験

深海一本釣漁業は近海においては、漁場範囲が限られ、将来伸び悩むおそれがあるので、其の打開策として、新漁場を開拓し、該漁業の発展を図らんとするものである。

調査海域　魚釣島近海

調査項目　海底地形、漁獲試験

調査期間　1962 年 5 月 7 日～5 月 9 日

調査船　図南丸（159.31 ﾄﾝ、400 HP）

調査員　城田得位、上地清吉

南小島の東方及び北東方等 95m～230mの水深で操業したが潮流悪く、漁獲は低調であった。流向はSW－w。赤尾嶼の南西 5～6 浬、水深 220m～290mの海底地形調査を行ったところ、起伏に富んでおり、魚族の棲息に適していると思料されたので、漁獲試験、操業を行った。5 月 8 日は操業 4 回、ハマダイ、ドンコ等 98 尾を釣獲。5 月 9 日は 25°—49′ N、124°—32′ Eの海域に標識浮標を設置し、操業した結果、大形のハマダイ、ドンコを主体に約 400 尾を釣獲があり、優秀漁場であった。潮流はNE—Eであり、表面水温 25.2°～25.8℃であった。

月日	操業順	投縄時 揚縄時	所要時間	操業人員	水深 m	水温 ℃	餌料	漁獲物
5. 8	1	07—33 08—15	42	12	220	25.8	サンマ	ドンゴ1
〃	2	08—55 09—25	30〃	14〃	95	〃	〃	ヒメダイ（中） 4
〃	3	09—36 10—10	34〃	13〃	110	〃	〃	ヒメダイ4
〃	4	12—06 12—40	34〃	15〃	260	25.6	〃	な　し
〃	5	16—48 17—21	33〃	13〃	250—240	〃	〃	ハマダイ25，ドンコ10
〃	6	17—30 18—10	40〃	15〃	〃	〃	〃	ハマダイ3，ドンコ2
〃	7	18—17 18—50	33〃	15〃	270	〃	〃	ハマダイ47，ドンコ1
〃	8	18—55 19—30	35〃	15〃	〃	〃	〃	フカ1，キンメダイ1

南小島及び赤尾嶼附近漁場　漁獲試験　1962 年 5 月8日

なお、本試験は南シナ海のマックレス　フィールドバンク等で実施された 1962 年第 2 次遠洋一本釣漁場調査（1962 年.4 月 15 日～5 月.10 日）の期間中に実地されたものである。

3. 1962 年度　サバ及びタイ漁場調査

タイ漁場については、尖閣列島付近大陸棚前面沿いに漁況海況の調査を実施し、新漁場を開発して生産を高め、以て深海一本釣漁業の健全な運営に役立てんとするものである

調査海域　尖閣列島付近大陸棚前面沿い

調査期間　1962 年 12 月 17 日～26 日

調査項目　漁獲試験、海況調査

調査船　図南丸（159.31 ﾄﾝ、400 HP）、中村船長外 23 名

調査員　上地清吉、新垣盛敬

調査海域は尖閣列島周辺及び大陸棚前面沿い水深 200m線附近である。

魚釣島及び南小島周辺漁場では水深 105m～210mで 18 回操業し、ハマダイ主体にカンパチ等が水深 200m～300mで釣獲され 100m台では、レンコダイ、イシモチ等であった。
釣獲率は 9.7％である。

南小島東漁場では水深 230m～370mで 9 回採業し、ハマダイ主体であった。

赤尾嶼南西漁場では水深 60m～300mで 11 回採業し浅所ではマダイが見られ、深所ではハマダイが多く、釣獲率 14.2％と好漁であった。

4. 1963 年度、深海一本釣漁場調査

琉球近海のタイ漁場については従来の漁場が長年の操業によって荒廃しタイ漁業は衰微しつつあるので、尖閣列島附大陸棚前面沿いに漁況海況の調査を実施し、新漁場を開発して生産を高め、以て該漁業の健全な運営に役立てんとするものである。

調査海域　与那国島近海及び魚釣島赤尾嶼近海

調査項目　漁獲試験

調査期間　1963 年 6 月 3 日～6 月 25 日

調査船　図南丸（159.31 ﾄﾝ、400 HP）中村船長他 16 人、研修生 1 名　実習生（山口県水高専攻科生）3 人

調査員　当眞嗣誠

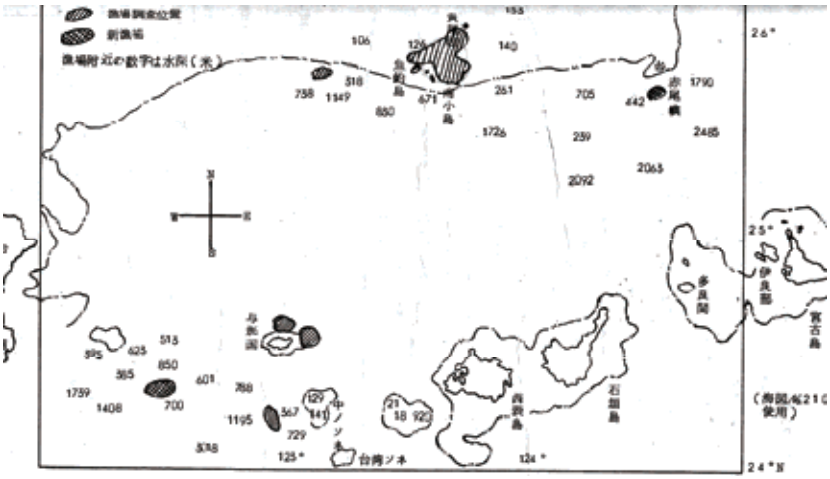
魚釣島近海においては 2 日間の操業で、同島の西方及び北側沿岸の水深 100m～130mの漁場と魚釣島北東及南小島東方沿岸の水深 100m～300mの漁場で調査を実施している。

表面水温は 26.2℃～27.3℃、流向流速は北東～東、2～3 節であった。漁獲物は 1～3 ㎏程度のオオヒメが主なものであり、サバを除くと 1 回当平均 4 尾（15 回操業）の漁獲で、漁況は至って低調であり一本釣漁場としては随分其の価値が低下している。

なお、サバは同島沿岸近くまで棲息している模様で度々混獲される。

赤尾嶼近海の 25°　—38‘N、124°　—31‘E の地点は新漁場である。14 回の操業で 1 回当 25 尾の漁獲があり、其の 90％以上がハマダイで占められかなり好魚を見た。その他は青ダイ、ビタロ

ー、メバチである。



調査漁場並びに新漁場図 (1963.6)

操業人数は9～12人、水深は230m～290m、表面水温27.0℃～27.6℃、流向流速NNE～NE、0.8～1.5節であった。与那国島の北側と南側の漁場においては、15回操業し1回当り2.8尾の低調振りで漁場の荒廃がうかがわれる。

今回の調査で与那国と台湾の中間海域にあたる 24° —17.2‘N、122° —31.7‘E（ロラン位置）に新漁場を発見することができた。この曽根の周囲は水深 500m～700mあって礁上の最浅部は水深175mを記録され底質は岩礁、サンゴ礁からなり、漁具の瀬掛りが多かったが、5日間で50回操業し、大型の赤マチ（ハマダイ）を主体に、1 回当り 20 尾の好魚であった。表面水温は平均27.2℃、潮流はN～Eでは～NNEの流向が最も多く流速1～2節程度であった。（1963年度琉水研事報、p35～52、p53～67）

5. 1964年8月　深海一本釣漁場調査

底魚の新漁場開発のため前年度に引き続き実施した。

調査海域　久米島西方100尋附近、赤尾嶼、与那国近海

調査項目　漁獲試験、海況調査

調査期間　1964年7月30日～8月18日

調査船　図南丸（159.31トン、400 HP）中村船長他14名、

実習生　山口県立水高専攻科3名（沖縄水高出身）沖縄、宮古水高12名

調査員　新垣盛敬

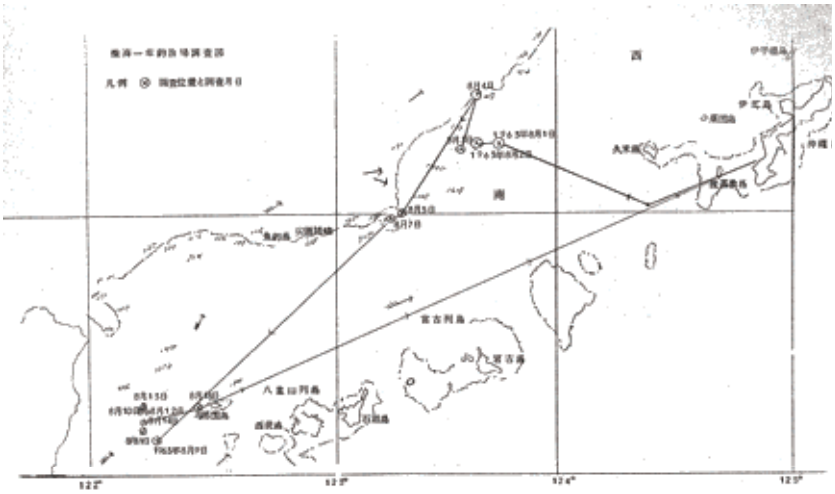
本報告では各漁場別に操業日毎の水深、時間、人員、漁獲物等が記録されている。

漁場別の釣獲率をみると、与那国近海12.24%、久米島西方沖7.25%、、赤尾嶼5.06%で、い

ずれの海域も操業水深が 200m～300m台にあり、ハマダイが多く漁獲されている。

赤尾嶼近海は潮流が逆流の状態にあり、一本釣錘りが海底につかず、調査困難であったと記載されており、同海域ではハマダイの他レンコダイが漁獲されている。

また赤尾嶼、久米島西方沖の漁場調査は大潮時にあたり潮が悪く、満足な調査が出来なかった。しかし与那国近海は小潮時になっており、良き成績を得たが、一本釣漁業の漁不漁は大潮時と小潮時は判然としており、潮流を勘案して操業することが肝要であるとしている。



深海一般釣漁場調査 航跡図 (1964.8)

6. 1964 年 12 月 深海一本釣漁場調査

漁況海況を調査し瀬魚資源量の推移資料を得ると共に新漁場開発を目的として実施した。

調査海域 八重山近海及び尖閣諸島近海

調査項目 漁獲試験、漁場観測

調査期間 1964 年 12 月 5 日～12 月 24 日

調査船 図南丸（159.31 トン、400 HP）中村船長他 19 名

調査員 上地清吉

漁具 一組の仕様：幹糸テトロン 60 号 500m、釣鈎鋼鉄 8.5 ㎝ 10 ケ、
沈子自然石 1.2～1.8 ㎏。

漁況は全般に悪く与那国西南方漁場では、調査回数 38 回、釣獲率 8％であり、操業水深 380m～120m、ハマダイが大部分を占め、アオダイ、ヒラマチ他が捕獲された。

また強い潮流のため漁具の瀬掛けよりが多く、反復潮上りして操業している。

漁場観測によると表面の水温・塩素量は 22.8℃～23.0℃、19.14～19.24‰。200mは 17.3℃～18.3℃、19.29‰であった。

漁場別魚種組成及釣獲率

漁場		与那国西方漁場	西表島西側漁場	魚釣島西方漁場	南小島東方漁場	赤尾嶼南西側漁場
水深		380m～120m	300 ～ 150	300 ～ 130	380 ～ 220	280 ～ 240
操業年月日		1965.12.8～9～11～13～14	12.16～19	12.20	12.20～21	12.23
操業回数		38回	8回	11回	20回	13回
所要時間		22h ～ 21m	4h ～ 49m	6h ～ 15m	13h ～ 46m	7h ～ 22m
使用漁具数		454組	100組	134組	258組	161組
使用釣鉤数		4,540本	1,000本	1,340本	2,580本	1,610本
魚種組成及釣獲尾数	ハマダイ	165	13	55	167	176
	ヒメダイ	16	8			
	ヒラマチ	7	1	11	28	
	アオダイ	68		1		6
	ハチビキ	46		1	1	2
	カンパチ	4		2	1	
	アオチビキ		1			
	コモンハダ	1		3	11	2
	アラ			2		1
	サバ	33		19		1
	ウメイロ			7		1
	ソフエダイ	20		6	17	17
	ダンバラー				1	
	チダイ			1		
	キンメダイ	1		1	4	
	ムロアジ	2				
	ハガツオ			1		
	シマハタ		1			
	アカハタ				1	
	フカ		(小) 2			2
	合計	363尾	26尾	110尾	231尾	208尾
釣獲率		8.0%	2.6%	8.2%	9.0%	12.9%

（漁獲試験　1962 年12月8日～23日）

赤尾嶼漁場で釣獲されたハマダイの体長測定によると、60 ㎝以上の大型魚 0%、50 ㎝台中型魚 15％、40 ㎝台小型魚 62%、30 ㎝台以下小幼魚 23%であった。

また与那国西方、赤尾嶼、魚釣島周辺の各漁場の 1962～1965 年の釣獲率の経年変化が低下傾向にあること、魚体の小型化が見られることから、資源量の減少傾向を推定している。

まとめとして、本調査で漁況が低調であったのは、時期的（冬期）のためか、あるいは沖縄、日本、台湾籍の漁船が入り乱れての過当操業による濫獲で、漁場が荒廃し生産性が低下したものかと考察している。(1964 年度・1965 年度琉球水研事報)

7. 1966 年度、海洋観測並びに一本釣漁場調査

新漁場開発を目的として前年度に引続き実施した。

調査海域　魚釣島近海、八重山海域

調査項目　漁獲試験、海洋観測

調査期間　1966 年 6 月 16 日～6 月 30 日

調査船　図南丸（159.31 ﾄﾝ、400 HP）赤嶺船長外 17 名、非常勤職員 3 名

調査員　当眞嗣誠

海洋観測は、黒潮を横断した観測を実施した。表面水温は、先島海域 28.3℃～28.6℃、久米島西方 26.0℃～26.5℃である。魚釣島北方には 25.℃台の顕著な冷水帯の突込みがあり黒潮流域に激しく接触しているものと推察された。

一本釣漁場調査は、魚釣島近海、石垣島北方、同島東方西表島西方の 4 海域で実施した。魚釣島近海では、同島西方の大陸棚上で操業したが大潮時とかちあった為、北々東～東よりに流れる約 2.5～3.5 ノットの強力な潮流にわざわいされ、意の如く操業できなかった。即ち漁具が海底まで届かず、漁具の縺れも多かったことなど漁具の操作や操船が困難であったため調査を継続することができなかった。

8. 1967 年度、深海一本釣漁場調査

漁況海況を調査し瀬魚資源量の推移資料を得ると共に新漁場開発を目的として実施した。

調査海域　赤尾嶼、魚釣島及び久米島、慶良間方面

調査項目　漁獲試験

調査期間　1967 年 1 月 24 日～2 月 2 日

調査船　図南丸（159.31 トン、400 HP）、赤嶺正弘船長外乗組員、

調査員　城田得位、久貝一成

一本釣漁具1組の構成：幹縄クレモナ 60 合 500m、釣針マチ針 2 寸 8 分 8～10 本、
おもり鉄筋 2 kg。

魚釣島東方と北方及び赤尾嶼漁場の水深 92m～235m において投縄人員は 1 回当 7～11 人、延操業回数は 31 回で、釣獲率は 3.4～6.6％であった。漁獲物はオオヒメ、アオダイ、ヒメダイが多獲され、メイチダイ、マダイ、その他が混獲されている。また、慶良間近海の水深 250m～270m でハマダイの好漁が見られた。

体長測定によると、魚釣島近海のオオヒメは 30 ㎝～40 ㎝の小型魚が大部分であった。マダイは赤尾嶼の水深 160m～170m で漁獲され、46 ㎝（2.5 ㎏台）が 3 割を占めた。

今航海は冬季の季節風が強勢で、操業困難であったと記している。

(1967 年度琉球水研事報)

9. 1968・69 年度、一本釣漁場調査

一本釣漁業の生産の増大を図るためには新漁場の開発、漁具の改良開発と併せて漁場実態把握による能率的操業が必要である。そのため漁場環境、対象資源及びその分布状況、既存漁場深縁部へ継続する未開発漁場の開発を行ない、最終的には漁場図を作成し、もって能率的操業と資源の高度利用に供するため調査を実施した。

調査海域　大九ソネ、西大九ソネ、宮古ソネ、尖閣諸島海域水深 200m 線内外

調査項目　漁獲試験

調査期間　第 1 次～第 2 次調査　1968 年 11 月 8 日～1969 年 5 月 1 日

調査船　図南丸（159.31 トン、400 HP）赤嶺正弘船長外乗組員、

調査員　当眞嗣誠

第 1 次調査　1968 年 11 月 8 日～12 月 7 日

この調査では、一本釣漁具（長 500m、8～10 本鈎付）を使用し、手動式巻揚機による投揚縄を行ない、魚種、漁獲率を調査し、魚群状況、海底状況については、魚群探知機で記録調査を行った。大九ソネ、西大九ソネ、宮古ソネ及び縁辺漁場では、ハマダイ、アオダイ、ハチジョウアカムツ、ハタ類、その他の魚種組成で釣獲率 1%～15%であった。

尖閣諸島漁場では、タルミ、レンコダイ、アオダイ、オオヒメ、ハマダイ等漁種組成で釣獲率 2%～17%であった。

尖閣諸島の赤尾嶼付近、魚釣島東方（約 15 浬）では、ハマダイ、アオダイ主体の釣獲率 10%～17%の好漁場があり、魚群探知機にも魚群の影像が顕著に記録された。

第 2 次調査　1969 年 4 月 17 日～5 月1日

この調査では、石垣島、西表島周辺の200m線以浅海域において実施し、フエフキダイ類のうち主要なものを種苗生産研究用の採卵のため活魚として八重山支所に提供した。

水深に対する魚種別棲息分布：フエフキダイ類は 100mを最深にしてそれ以浅にみられ、50mを境に多棲している。マチ類のうちハマダイは 100m以深に棲息し、250mを境に多棲している。(1969 年度琉球水研事報)

10. 1971 年 4 月、魚釣島近海の海洋観測及び一本釣漁場調査

琉球大学が尖閣列島一帯の総合的な学術調査研究を行うことになり、沖縄水産試験場はその周辺の海洋観測及び漁場調査を分担した。

調査海域、魚釣島近海

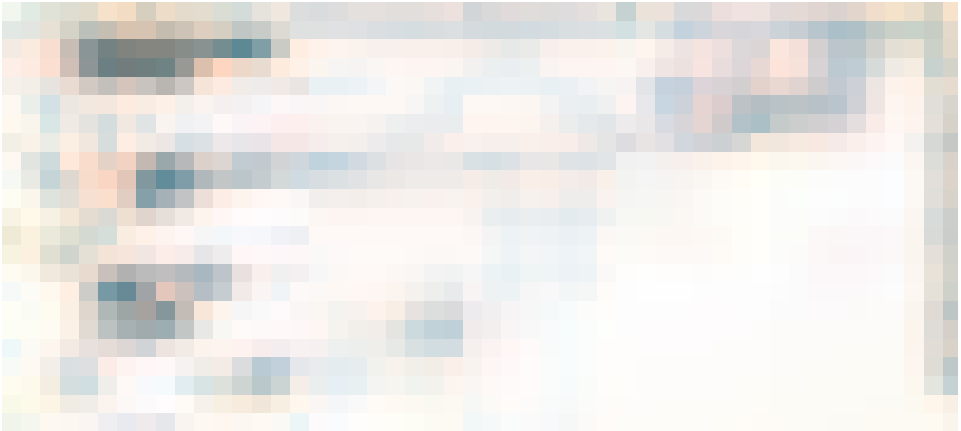
調査項目　海洋観測、一本釣漁場調査

調査期間　1971 年 3 月 29 日～4 月 10 日

調査船　図南丸（159.31トン、400 HP）赤嶺正弘船長他 19 名

調査員　兼浜安信、金城武光

海洋観測：魚釣島南西に観測点を 6 点設けて観測を実施した。表面の水温の範囲は 14.9℃～25.1℃で、塩素量の範囲は 17.6‰～19.5‰であった。ST3は大陸棚の奥部にあたり、大陸沿岸水の影響がかなり強く、黒潮流の影響の強い大陸棚の縁とは水温が約 10℃の差があり、塩素量は 1.81‰～2.0‰の差がみられた。一本釣漁場調査：魚釣島陸棚を中心に東側で、魚探を用いて魚群探索をして釣獲試験を行った。漁獲魚種はオオヒメ（47 尾、平均尾叉長 33.5 ㎝）、ゴマサバ（4 尾、平均尾叉長 41.2 ㎝）、キンメダイ他で釣獲率は小さかった。しかし、ゴマサバが魚探にかなり映っており、又一本釣でも有望な資源とみられる。ゴマサバ、マアジが豊富であるので旋網漁場としての漁場価値を究明する必要がある。(昭和 46 年度沖縄水試事報、p104～107)



尖閣列島総合学術合同調査図南丸航跡図 （1971.3.29～4.10）

C. カツオ、マグロ漁場、その他調査

1. 1963 年度近海マグロ漁業調査

時期的に来遊するクロマグロ資源及び回遊状況調査し、本漁業の進展を図る。

調査海域　宮古島南方海域

調査項目　マグロ延縄試験

調査期間　1963 年 5 月 15 日～5 月 28 日

調査船　図南丸（159.31 ﾄﾝ、400 HP）赤嶺船長外 16 名、沖水高専生 3 名　研修生 1 名

調査員　当眞嗣誠

「今回は琉球大学の高良教授外 3 名の学術調査団が乗船し、尖閣列島にも棲息していたという国際的保護鳥とされている阿呆鳥の有無調査を実施した為 3 日間の日数を要し、その後調査団は石垣港に下船した。その後宮古島南方およそ 60 浬の海域でクレモナマグロ延縄 250 鉢（5 本付）により漁業試験を実施したがラインホーラーの故障もあって操業は 2 回でクロマグロ7尾を釣獲し他にキハダマグロ　クロカワカジキ、バレン、サメを含めると釣獲率 1.12％であった。漁獲されたクロマグロは体長 170 ㎝以上、体重 120 ㎏以上、性別雌で7尾とも放卵しているので、操業海域で 5 月下旬に産卵しているものと考えられる。」

（1963 年度琉水研事報、p27～34）

2. 1969 年　カツオ資源変動に関する調査　漁場調査

琉球近海のカツオ回遊状況を調査し、当業船の操業に資することを目的とする。

調査海域　宮古、八重山海域

調査項目　漁場調査、海洋観測

調査期間　1969 年 3 月 17 日～3 月 29 日

調査船　図南丸（159.31 ﾄﾝ、400 HP）

調査員　友利昭之助、上地清吉

琉球のカツオ漁業は 4 月～10 月の半年操業である。カツオ漁漁期前の 3 月では、宮古南と与那国南海域で鳥付群が見られたが、全般的にカツオ群の分布は希薄であった。表面水温及び塩素量は宮古南 23.8℃、19.25‰、与那国近海 24.4℃、19.25‰、魚釣島南 24.7℃を示した。なお、琉球近海の表面水温は平年に比べやや高目に経過している。今回の調査で与那国や慶良間の近くで多くの鳥付群や素群が発見されていることは、すでに接岸回遊時期に入っていることを示している。

3. 1971 年 3～4 月、尖閣諸島周辺のイカ類調査

琉球大学は尖閣列島の学術共同調査を実施した。沖縄水試は海洋観測及び漁場調査を担当した。調査期間中に夜間手釣りにより採捕したイカ類の資料と標本を調べる機会を得た。

調査海域、魚釣島近海

調査項目　海洋観測と一本釣漁場調査

調査期間　1971 年 3 月 29 日～4 月 10 日

調査船　図南丸（159.31 ﾄﾝ、400 HP）赤嶺正弘船長他 19 名

調査員　当眞　武、金城武光、

今回の調査でトビイカ Symplecteuthis　Ouealaniensis（LESSONI）とスジイカ S. .Lumimosa　SAKAKI 及びアオリイカの一種（方言名アカイカ）が魚釣島南約 8 ﾏｲﾙ沖合で捕獲された。スジイカはこれまで久米島沖や喜屋武岬でもトビイカと共に捕獲されている。これによりトビイカとスジイカは黒潮の内部や大陸棚の縁から沖縄近海まで広い範囲に生息されているのが確認された。また東シナ海に生息するスルメイカ　Todarodes　pacificus（TEENSTRUP）のそれより南方よりに生息するトビイカは黒潮の大陸棚よりの縁を境にすみわけているようである。その主な要因の1つに水温があげられる。((昭和 46 年度琉球水研事報、p104～107)

□. 主な刊行物資料

○、『琉球水産研究所　事業報告書　1961 年度』

①、第 1 次、第 2 次鯖漁場調査並に漁業試験

＊東シナ海大陸棚南部海域～魚釣島近海　60 年 11、12 月実施

○、『琉球水産研究所　事業報告書　1962 年度』

①、鯖漁場調査

＊東シナ海大陸棚南部海域～魚釣島近海　61 年 11、12 月

②、近海一本釣漁業試験

＊第 1 次試験は魚釣島～赤尾嶼近海、62 年2月

③、第 2 次一本釣漁業試験

＊第 2 次試験は魚釣島近海、62 年 5 月

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1963 年度』

①、サバ及びタイ漁場調査

＊サバ漁場は魚釣島近海～東シナ海南部海域

＊タイ漁場は尖閣諸島付近大陸棚前面沿い、62 年 12 月

②、近海「マグロ」漁業調査

＊宮古島南方海域、63 年 5 月

③、深海一本釣漁場調査

＊与那国～魚釣島～赤尾嶼近海、63 年 6 月

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1964 年度、1965 年度(1)』

①、深海一本釣漁場調査

＊久米島西方大陸棚沿線～赤尾嶼～与那国近海、64 年 7､8 月

②、サバ漁場調査及び海況調査

＊魚釣島～東シナ海大陸棚縁辺部～久米島北西漁場、64 年 4､5 月

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1965 年度』

①、深海一本釣漁場調査

＊八重山及び尖閣諸島近海、64 年 12 月

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1966 年度』

①、海洋観測並びに一本釣漁場調査

＊八重山及び魚釣島近海、66 年 6 月

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1967 年度』

①、深海一本釣漁場調査

＊赤尾嶼、魚釣島及び久米島、慶良間方面、67 年 1,2 月

②、漁海況速報事業　(マグロ漁況旬報、カツオ漁況旬報・速報)

＊第1回 67 年 4 月　第 2 回 67 年 5 月　第 3 回 67 年 6 月

③、海洋観測　黒潮流域観測　（海象、気象、水温、塩素量）

＊第1回 67 年 1 月　第 2 回 67 年 4 月　第 3 回 67 年 6 月

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1968 年度』

①、海洋観測　黒潮流域観測　(海象、気象、水温、塩素量)

＊第1次航海　67 年 12 月　第 2 次航海　68 年 6 月

○、『東海・黄海のアジ、サバ漁業とその資源』 森勇

（1968 年　長崎水試資料第 140 号）

○、『琉球水産研究所　事業報告書 1969 年度』

①、68､69 年度一本釣漁場調査

＊宮古近海、尖閣諸島海域、68 年 11､12 月、69 年 4､5 月

②、カツオ資源変動に関する調査　漁場調査　(69 年 3 月)

＊宮古、八重山海域、69 年 3 月

③、海洋観測　黒潮流域観測　（海象、気象、水温、塩素量）

＊第1次航海　69 年 3 月　　第 2 次航海　69 年 6 月

○、『琉球水産試験場　事業報告書 1971 年度』

①、尖閣列島周辺のイカ類について　当真武・金城武光

②、尖閣列島周辺の海洋観測及び漁場調査　兼浜安信・金城武光

＊①、②は、1971 年の琉球大学尖閣諸島共同学術調査による。

○、『九州山口ブロック水産試験場長会議録　1971 年 10 月』

＊「今後の試験研究の在り方として①日向灘や対馬沖、女島～魚釣島、南支那海等の未開発域調査の必要、マダイ、チダイ、アラ、フカ、カンパチ、キダイ、アマダイ、アジ、サバ等が対象となろう。この調査は各県共同で行うことが望ましく、又開発センターの参加が期待される。」としている。

□. 主な新聞記事

1963.04/17・八重山毎日新聞・「サバを標識放流。発見者は地方庁に連絡を」 ＊魚釣島近海でサバ（大中小 12,901 尾）を標識放流
1963.04/17・八重山タイムス・「印づきサバ、漁獲した人は届出よ」
1963.04/28・八重山毎日新聞・「かつお漁見通し明るい。水研が市長に連絡、水温 4 月に入って上昇」
1964.04/07・沖縄タイムス・「新漁場の発見へ、漁獲高は年々へる一方（時の問題）」 ＊琉球水産研究所の漁場調査、第 1、2 次（カツオ・サバ一本釣）予定範囲は本島～尖閣諸島周辺を中心に。
1965.05/15・八重山毎日新聞・「かつおのエサ。“こんなにとれますよ”原始的採取を打破、水研・気象台が 10 日間近海の調査」
1965.07/20・八重山毎日・「カツオ、魚は島の周囲にうようよ。エサがなくお手上げ、異常つづきの水産業。トビイカ出回る、漁民の経済うるおす」
1965.09/06・琉球新報・「水産資源の開発へ、八重山水産増殖場、近く着工」
1965.09/29・琉球新報・「農林水産業の現状と問題点、坂田農相に訴える、著しい本土との差。財政、技術の側面的援助を」
1965.10/11・琉球新報・「“資源調査船”25 日に入札。沿海、近海漁の再興を図る、水研」
1965.10/20・琉球新報・「水産庁、調査団 30 日に沖縄へ派遣、漁業の総合的振興策樹立」
1965.12/08・琉球新報・「まず資源造成から、田中氏、漁業振興策で講演」
1965.12/09・琉球新報・「本土資本の導入を、水産調査団、水産振興で強調」

1966.01/08・琉球新報・「二宮、坂寄農林技官が来沖、カツオ漁業の技術指導」
1966.01/27・琉球新報・「本土に市場開拓せよ、坂寄水産省技官、マグロ漁業で語る」
1966.02/05・琉球新報・「4 割が代船必要、二宮技官、沖縄の水産業語る」
1966.04/28・八重山毎日新聞・「カツオエサ、成長、量とも順調。図南丸、きょうから調査」
1966.05/05・琉球新報・「水産研究所、10 日から黒潮調査。カツオ魚群との関係究明」
1966.05/05・八重山毎日新聞・「かつお、今期、エサの悩みはない。魚種、集魚率もよい。図南丸の調査結果わかる。きのう報告会」
1966.05/17・琉球新報・「鳥島北方漁場は有望、図南丸、カツオ魚群調査終わる」
1966.09/09・琉球新報・「マグロ漁業、漁具改良で生産増、水産研究所、調査結果を発表」、
1967.02/10・琉球新報・「旋網漁業導入を促進、本土業者を招き試験操業」＊魚釣島近海
1967.03/05・琉球新報・「旋網漁船の試験操業遅れる」
1967.05/13・八重山毎日新聞・「カツオ、水温がまだ低い。漁船の準備整う、図南丸の情報」
1967.07/18・琉球新報・「カツオ漁船の大型化へ、漁獲不振に対処、漁場を開拓、年中操業図る」 230　＊琉水研ではカツオ旬報を配布
1968.04/23・琉球新報・「沿岸漁業の構造改善を。長田水産庁技官が報告書、生産性低く停滞、漁場の利用も十分でない」
1968.11/11・琉球新報・「近海資源調査など勧告、日米琉委、水産業振興で」
1969.04/04・琉球新報・「東シナ海の低層流判明、水産庁南西海区水産研究所、人工クラゲ流して調査」
1969.04/08・琉球新報・「水産調査団が来沖、一体化で総合調査。来月、東京で振興協議会」
1969.04/20・琉球新報・「有望な沿・近海漁業。水産計画指導員班が指摘。総合的な計画に欠ける」
1969.05/02・琉球新報・「沿岸資源の造成を、水産庁資源指導班が示唆」
1969.07/22・八重山毎日新聞・「豊富なカツオ漁場発見。石垣島の南々西・西南西地点に。琉水図南丸が地方庁に報告」＊図南丸の漁場調査、尖閣諸島付近に鰹小群
1969.07/29・琉球新報・「海洋調査船・図南丸、カツオの新漁場見つける。八重山沖に数カ所、気象変化で回遊路に変動」
1969.09/09・琉球新報・「カツオ回遊を調査。図南丸たつ、不漁続きに対処」
1969.09/11・琉球新報・「本島北部の海域で、カツオの魚群発見。海洋資源調査船・図南丸」
1969.09/26・琉球新報・「宮古近海に大魚群―図南丸のカツオ資源調査結果、ビリガツオの魚群が多い」

Ⅱ―2. 他機関の学術調査

(1). 琉球政府前期（1950～1960 年）学術調査

あらまし

1950 年 3 月、戦後初の尖閣諸島調査は高良鉄夫氏によって生物調査がなされた。

第 2 回は 1952 年4月、高良氏を団長とした琉球大学と琉球農林省資源局による資源共同調査であった。琉球水産研究所から知念正男技官が漁業資源調査で参加している。

第 3 回は、1953 年 8 月、琉球大学による尖閣諸島生物調査である。同調査に学生 11 名が参加、現地実習とフィルード調査を体験している。以下に第 2 回の共同調査を紹介する。

1. 1952 年4月、琉球大学・琉球農林省資源局による尖閣列島共同調査

1950 年の生物相調査をうけ、尖閣諸島の海鳥や有用植物などの分布と、土性・海鳥糞・漁業資源の賦存状況を琉球大学と資源局が共同調査

調査地域　南小島、魚釣島

調査項目　生物相、富源調査

調査期間　1952 年4月 10 日～4 月 20 日

調査船　突船基本丸（11 トン、33 H）

調査員　高良鉄夫、多和田真淳、知念正男、棚原清一
　　上運天賢盛、松元昭男、新垣秀雄

「・・台湾東海を浴流して北上する黒潮は、魚釣島附近に於て北東に転向している。更に同列島中の赤尾島附近に於て再び北方に転向している。そのため南方系植物の漂流物はこれら島々の沿岸に打ちあ上げられており・・。また近海はイルカ、アオウミガメ、シュモクサメその他の魚族も豊富であり、冬季にはカツオ、カジキ等の漁獲を狙って琉球各地は勿論、遠く内地からの出漁船も見え冬期漁場は壮観を呈するが、春夏の候ともなれば黒潮の南下に伴つて漁船の往来はない。なお近海は海流も早く且つ波も高く、前述したように適当な船着場もないので上陸は極めて危険である。・・。」（「尖閣列島の動物相について」 高良鉄夫　琉球大学農学部学術報告　第1号 1954.4　p61～62）

調査団と漁師たち、(前列右端高良鉄夫団長)、石垣船籍カジキ突船基本丸の漁師らはカジキ突ん棒のベテラン揃いである。
(新垣秀雄、1952.4)

□. 主な刊行物資料

○、『尖閣列島の動物物相について』 高良鉄夫 （琉球大学農学部学術報告 第1号 1954.4）

○、『尖閣列島の植物相について』多和田真淳 （前掲同）

○、『自然との対話』高良鉄夫（琉球新報社、1977.2）p61～63、

○、『尖閣の土性・海鳥糞調査に参加して』 棚原清一 （「尖閣研究 高良学術調査団資料集」2007.10）＊1952 年の琉大・資源局共同調査メンバー

○、『魚が鳥を食った話―南小島の動物たち、1977.2』p61～p63、＊前掲同

○、『尖閣列島生物調査に参加して』森田忠義（「前掲同」＊1953 年の琉大調査

○、『海鳥を両手一杯持ち帰り、船で食した』東江重男（前掲同）＊1953 年、高良氏一行は開洋高校（沖縄水産高校前身）の実習船開洋丸で渡島。筆者は当時の水産高校実習生。調査団と一緒に尖閣諸島へ渡島。

□、主な新聞記事

1947.09/30・南西新報・「尖閣列島より鳥糞採取、日本から申込み」
1950.04/15・自由民報・「尖閣列島へ積極的な関心を、学究高良氏調査から帰る」
1950.04/25～05/22・南琉タイムス・「無人島探訪記 1～10」（高良鉄夫）
1950.09/15～09/16・うるま新報・「尖閣列島訪問記 1～2」高良鉄夫
1952.03/01・琉球新報・「尖閣の秘境を探る、琉大が学術調査隊派遣」
1952.03/02・沖縄タイムス・「琉大学術調査団が『尖閣列島』にメス」
1952.04/04・自由民報・「尖閣列島調査団、明日現地へ出発」
1952.05/08～05/25・沖縄タイムス・「尖閣列島あれこれ 1～11」（高良鉄夫）
1952.06/02～06/04・琉球新報「尖閣列島調査報告 1～3」（琉大三年、松本昭男）
1952.06/29～07/15・琉球新報・「尖閣列島採集記 1～17」（多和田眞淳）
1952.04/29・沖縄タイムス・「尖閣列島学術調査団帰る。新種や珍種発見、“冬期漁場には最適”」 ＊日本、台湾から冷凍船が進出し、国際漁場の観を呈していると報告。
1953.08/16・琉球新報・「尖閣列島北小島に新資源、群れなす海鳥 1 千羽。琉大学術調査団の成果」
1959.10/20・琉球新報・「台風あけ待つ敬天丸。鹿大・琉大合同学術調査団。今度で一応の結論、八重山に 3 たび科学のメス、政府は冷たい態度？、積極的注文もつけぬ」 ＊「調査テーマに『魚釣島を中心とした尖閣群島の海況、水産生物』をあげている。
1959.10/21・沖縄タイムス・「鹿大学術調査団来島、けさ実習船敬天丸で」 ＊調査団は 2 週間の日程で石垣、西表、与那国、尖閣諸島の学術調査を行う予定、尖閣列島調査は、浅海の水産物調査、近海の海況調査、有用植物研究となっている」

1959.10/23・琉球新報・「敬天丸調査の旅へ、西表の地下資源に重点おく」
1959.10/25・沖縄タイムス・「鹿・琉両大学　共同学術調査団、石垣に到着、研究に着手」 ＊天候悪化や石垣から尖閣列島行き船の都合で今回は取止め、「来年早々の 4､5 月ごろ調査する」とのこと。

(2). 琉球政府後期（1961～1972 年 5 月）学術調査

あらまし

黒潮等の消長は気象、農林漁業上、大きな影響を及ぼすほど重要なものである。

1961 年 10 月、長崎海洋気象台・琉球気象台との初の黒潮協同観測がなされた。

以後、長崎側の協力で数回にわたり黒潮の協同調査が続けられた。これらの成果をもとに、1963 年琉球気象庁は、尖閣諸島の海流調査、68 年魚釣島及び南北小島の泊地潮流調査を実施している。深海調査船「よみうり号」は、那覇に寄港し、琉球近海の海底サンゴ調査等に携わった。

1968 年国連のエカッフェは、黄海・東シナ海には海底石油資源が存在する可能性が高いと報じた。一躍手、尖閣諸島海域が脚光を浴びて、調査ラッシュの観を呈した。

1968 年4月総理府委嘱の尖閣諸島鉱物資源予備調査。（同調査で琉球気象庁の泊地潮流調査がなされた）。次いで 1969 年.6 月～1971 年.6 月総理府委嘱の東海大学丸Ⅱ世号による尖閣諸島海底資源調査(1～3 次)。さらに 1970 年 12 月九州大学・長崎大学合同学術調査、1971 年 3 月琉球大学尖閣諸島総合学術調査が次々となされてきた。以下に 3 点を紹介する。

1. 1961 年、長崎海洋気象台・琉球気象台黒潮協同調査

「琉球近海の観測資料は皆無といっていいほど戦前、戦後を通じて空白期間が続いており・・四面海に囲まれた琉球における海洋観測業務は航海、海資源の開発に関連して重要なことである・・本報告は資料の乏しい近海についての唯一の資料蓄積の第一歩を飾るものであり・・海洋業務の育成と発展に大きく寄与するものと確信いたしております。」（同報告書：具志幸孝琉球気象台長の序）」

調査海域　下図に示す

調査項目　南西諸島東方の黒潮分流と台湾を北上する黒潮の調査観測

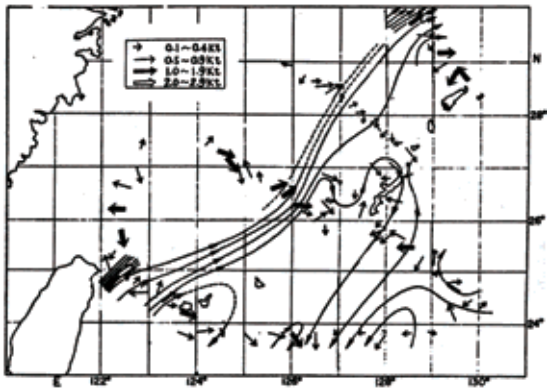
調査期間　1961 年 10 月 6 日～11 月 4 日

調査船　長崎海洋観測船長風丸(266 ﾄﾝ､500 H)

調査員　(長崎) 深瀬茂、松本次男、大塚一志、山野省三、真崎伸夫、山口和之、前田吉祐、森吾郎、藤田悠二　(沖縄) 伊志嶺安進、遊佐三郎

「本海流の状態を GEK、力学計算、水温、塩素量などの資料からみると、黒潮は台湾の三貂角と与那国の間を約 2.7 ノットで北東に流れ、東シナ海に入ると沖縄島西方約 100 海里を 1.7 ノット

で北東に流れている。北上した流れは幾分西偏して奄美群島西方 120 海里の大陸棚斜面に沿って1～2ノットで北北東～北東に流れかなりの蛇行がみられる。南西諸島南部の東側を北上する黒潮は GEK では明瞭でないが、水温・塩素量分布では北上するものが見られるが、優勢なものではない。大陸棚上の流れについては、水深が浅いことと、潮流の影響があるため GEK の結果からも論ずることはできないが、浅層の水温・塩素量の分布状態からみると、台湾東方から流入した黒潮の一部が、台湾北東 100 海里付近から北西に流入し、その北には大陸系沿岸水の張出しがうかがわれる。」（「1961(10 月～11 月)南西諸島近海共同海洋観測報告」長崎海洋気象台・琉球気象台 1962.3、p20）



黒潮主流(長崎海洋気象台・琉球気象台協同観測(1961 年

2. 1968 年 7 月、琉球気象庁による尖閣諸島の潮流調査。

1963 年 5 月の尖閣諸島の海流調査を更に究めるため、同島における潮流測定調査

調査海域及び調査項目　魚釣島と南北両小島泊地の潮流測定

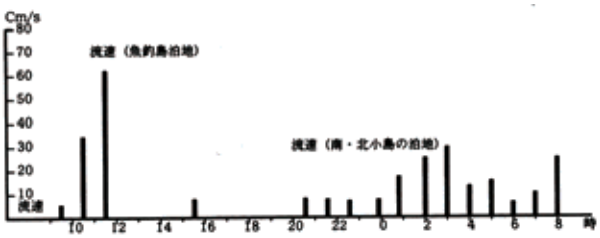
調査期間　1968 年7月８日～7月９日

調査船　図南丸(266トン)

調査員　伊志嶺安進、正木譲

「魚釣島の調査では7㎝／s から 64 ㎝／s までの値を得ているが、東西に急転するので満潮時を境にして方向反対の流れとなる。なお両干満時にはいずれも憩流となり、漲潮時と落潮時中にはおそらく 1.5kt 位の潮流が現れたかもしれない。

また一方、南・北小島の中間泊地は両島間が 200m ほどの距離でつながれた 1 つの湾奥を形づくっており、したがって魚釣島北岸とは趣を異にして潮流の毎時ベクトルを順次和にするとほぼ円形の回転潮流をしていることが分かった。なお前者よりも流速は全体的に弱い傾向にあることも気付くことができた。しかし、これらも夏期の穏やかな時期であったからであって水路の狭い所で流れは速くなるべきである。この度の調査が上記 2 つの泊地に限られたので漁夫や船乗りの言うような強い流れを得ていないので場所をかえ、季節別に繰り返し潮流観測を積み重ねる必要があ



尖閣列島の潮流(1968 年 7 月 8～9 日)

る。」(「海洋学的に見た尖閣列島」伊志嶺安進・正木譲　1969.6)

3. 1971 年 3 月、琉大調査団による尖閣諸島海岸の魚類及び無脊椎動物調査。

尖閣諸島の動物相に関する報告は、これまで主として陸棲動物や昆虫に関するもので、海岸動物に関する報告はほとんどなく、海岸の魚類及び無脊椎動物調査。

調査地域　魚釣島、南北小島、久場島(黄尾島嶼)海岸

調査項目　海岸の魚類及び無脊椎動物調査

調査期間　1971 年 3 月 29 日～4 月 10 日

調査船　図南丸（159.31 ﾄﾝ、400 HP）赤嶺正弘船長他 19 名(266 ﾄﾝ)

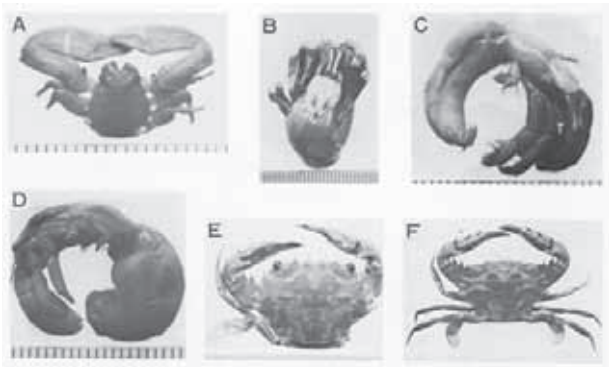
調査員　仲宗根幸男、長浜克重

「・・各島の海岸線は断崖や転石が多く歩行困難であり、おのずと調査地域も極度に制限されてくる。・・潮時もあまりよくなく・・黒潮暖流の流れが速く、波が高いため水面下の生きた珊瑚礁地帯の動物はほとんど得られていない・・。ここに報告される海綿動物から棘皮動物までの 141 種・・しかし、琉球列島の動物相に特に追加されるものは見当たらず、沖縄本島、奄美大島、小笠原諸島の各島の動物相とかなり類似している。・・上記 141 種以外にもまだ未同定種があり・・更に魚類についてはのち報告されるものと思われる。」

「南小島：島の半分を占める平地は隆起サンゴ礁からなり、・・所々にオオヘビガイの化石や死んだクダサンゴが見られる。これら両種は生きたものも得られた。・・島の小さい割には動物相は豊かなように思われる。東部にそびえ立つ新田立石近くの海岸のタイドプールには大きなハタゴイソギンチャク・・近くの汀線下にはトサカ類、オウギウミﾋﾄﾞﾗ、生きたクダサンゴなどが見られた。

礁上にはタイワンクロフジツボやヤドカリ類が多く見られ・・石サンゴ類が点在して見られた。北側の珊瑚礁海岸の砂礫地帯にはカクレイワガニ、オオアカハラやその他のカニ類が見られ、さらに陸地側の岩礁からはイワイガタマキビが得られた。

一般に南側の珊瑚礁海岸が動物相としては豊富である。」



尖閣諸島所産のカニ類 （「同学術調査報告 1971.7」より)

(「尖閣列島の海岸無脊椎動物」
仲宗根幸男、長浜克重　尖閣列島学術調査報告　琉球大学　1971.7　p121～129)

□. 主な刊行物資料

○、『1961(10 月～11 月)南西諸島近海　共同海洋観測報告』(長崎海洋気象台・琉球気象台 1962.3)

○、『尖閣列島海洋調査報告』 伊志嶺安進 （琉気時報　琉球気象台　1963.5）

○、『尖閣列島のアホウドリを探る』 高良鉄夫 （季刊『南と北』 第 26 号、南方同胞援護会 1964. 3）

○、『尖閣列島の植生』新納義馬（琉球大学文理学部紀要　理学篇　第7号 1964.5）

○、『琉球近海の黒潮の構造』伊志嶺安進（琉球水産資源調査報告書　琉球政府農林局 1967.3　p77～112）

○、『尖閣列島の海鳥について』高良鉄夫（琉球大学農学部学術報告　第 16 号 1969.10）

○、『海洋学的に見た尖閣列島』伊志嶺安進・正木譲（琉球政府復命書　1969.6）

＊ 『尖閣研究　高良学術調査団資料集　上』に所収

○、『尖閣列島の水質』 兼島清（『工業用水』第 128 号、日本工業用水協会　1968.7）

○、『尖閣列島周辺海域の学術調査に参加して』 高岡大輔 （季刊『沖縄』 第 56 号 南方同朋援護会　1971.3）

○、『尖閣列島の海藻類について』中山重明・古川哲夫 （「東支那海の谷間　九州大学・長崎大学合同　尖閣列島学術調査隊報告」同学術調査隊編　1973.12　p59～61）

○、『魚釣島のカニ類』中山重明・古川哲夫 （同上　p62～63）

○、『尖閣列島の海岸無脊椎動物』仲宗根幸男・長浜克重（「尖閣列島学術調査報告」琉球大学 1971.7　p115～128）

□. 主な新聞記事

1961.10/12・沖縄タイムス・「海洋観測船たちよる。きょう那覇へ」
1961.10/27・琉球新報・「琉球近海の調査終わる。長風丸きょう長崎へ」
1963.01/17・八重山毎日・「本土から自衛艦で調査に、石垣島測候所に便り。尖閣列島にすむアホウ鳥」
1963.01/29・沖縄タイムス・「尖閣列島のアホウドリ、探検調査計画進む。石垣測候所の資料提供で」
1963.02/27・八重山タイムス・「せん角列島、アホウドリの調査団。文保委 5 月中旬頃開始」
1963.05/18・琉球新報・「横波かぶり浸水騒ぎ。図南丸、一時は緊迫した空気」
1963.05/18・沖縄タイムス・「黄尾嶼は未踏査。米軍演習地域で停船命令。尖閣列島調査団石垣つく」
1963.05/19・琉球新報・「尖閣列島を総合調査。植物学上未開の宝庫、魚族の多い魚釣島近海」
1963.05/19~05/26・琉球新報・「無人島は生きている。尖閣列島調査日記(1)~(7)（森口・田積）」

1963.05/20~05/24・沖縄タイムス・「アホウドリを求めて(1)~(5)（粟国安夫）」
1963.05/27・琉球新報・「尖閣諸島・海鳥王国の無人島。激浪に浮く“黒い氷山”（琉球列島）」
1965.07/06・沖縄タイムス・「ナゾの深海にメス、日米の合同調査。若い科学者たち、観測船 2 隻が寄港」
1965.07/15・沖縄タイムス・「黒潮のナゾ究明へ、琉球気象台も初参加。今月末から 9 カ国が海洋調査」
1965.07/23・沖縄タイムス・「黒潮調査の“長風丸”入港。沖縄近海にメス、琉球気象台職員も参加」
1965.09/14・琉球新報・「黒潮の発生源わかる、潮流調査の結果発表 」
1965.10/03・琉球新報・「黒潮の生まれ故郷は、ルソン島の東方 500 ｷﾛ、観測船『拓洋』の調査でわかる」
1966.04/04・琉球新報・「沖縄近海の生物資源調査、東大海洋研究所、来月末から九日間、魚類採集、ほ乳動物を観察」
1966.04/23・琉球新報・「沖縄の深海を調査、『よみうり号』米側も許可」
1966.05/11・琉球新報・「きょうから黒潮調査、米軍ヘリコプターも出動」
1966.05/18・琉球新報・「よみうり号、那覇港にオレンジ色の姿。“サンゴ漁場”を調査へ、あすにも 14 水域で」
1966.05/25・琉球新報・「沖縄の深海をのぞく、よみうり号同乗記、南部近海でサンゴ発見、豊富な海草、魚も多い」
1966.06/02・琉球新報・「琉球近海の資源生物を調査、東大海研の淡青丸入港」
1966.06/04・琉球新報・「8 日から先島を調査。よみうり号、サンゴ漁場と漁労方法」
1966.07/02・琉球新報・「黒潮の調査始まる。8 カ国共同、台湾～沖縄～房総沖」
1966.07/03・琉球新報・「よみうり号、海底調査を 2 ケ月延長」
1966.07/06・琉球新報・「沿岸流の動態調査へ、沖縄本島近海の塩分など、海洋観測船が再び入港」
1966.07/10・八重山毎日新聞・「長風丸が 15 日入港、一般にも船内開放」
1966.08/05・八重山毎日新聞・「西表近海に温泉？「よみうり号」の調査結果」
1966.11/04・琉球新報・「凌風丸を黒潮観測に、来年 1 月から約 2 カ月」
1966.12/10・琉球新報・「沖縄の水産事情調査で寄港。水産大の実習船『天鷹丸』」
1967.03/03・琉球新報・「凌風丸、5 日に寄港。黒潮の深層を調査、7 日に船内を一般公開」
1967.03/06・琉球新報・「黒潮源流を追い―凌風丸が寄港。気象庁と情報交換、きょうから船内一

般公開」
1967.08/09・琉球新報・「来月から沖縄近海調査。よみうり号、台風前後の海底など」
1967.08/31・琉球新報・「水産資源を総合調査、『よみうり号』あす寄港」
1967.09/05・琉球新報・「政府委嘱で近海調査、潜行作業中の状況など 1 時間おきに記録、『よみうり号』再び来沖」
1967.11/06・琉球新報・「先島調査から帰る、深海調査船“よみうり号”」
1968.01/18・琉球新報・「ことしも海洋観測、長風丸が那覇港に入港」琉球気象台と琉球水産研究所から 3 人の技術員を乗せて黒潮観測
1968.01/21・琉球新報・「台湾近海の黒潮調査へ、3 調査員が出発」323
1968.02/21・琉球新報・「沖縄近海の黒潮を調査「凌風丸」が入港」
1968.04/10・琉球新報・「有望なカツオ漁場、“よみうり号“の調査まとまる。総合的な水産研の設置を」
1968.07/03・琉球新報・「尖閣列島の地下資源などを調査、高岡大輔氏が来沖」
1968.07/06・八重山毎日・「尖閣列島、きょう調査団来島。高岡大輔氏を団長に」
1968.07/07・八重山毎日・「魚釣島に観測所設置。尖閣列島調査団来島、高岡氏が記者会見」
1968.07/11・八重山毎日・「尖閣列島調査、10 月ごろ調査報告。激減している海鳥類、高岡氏語る」
1968.07/13・沖縄タイムス・「乱獲される尖閣列島の海鳥、早急に保護策を。高良教授が報告」
1968.08/21・八重山毎日新聞・「長風丸が寄港、長崎海洋気象台の観測船」
1969.06/05・琉球新報・「沖縄の近海漁業有望、東海大海底資源調査班、岩下光男教授語る。日本ウナギの産卵場発見」6
1969.08/30・琉球新報・「尖閣列島調査団の報告書」＊漁業：漁港設置を提案
1970.09/22・琉球新報・「尖閣列島学術調査団を編成―琉大。独自の研究体制に、29 日から第 1 次調査開始」
1970.09/22・沖縄タイムス・「尖閣列島を総合学術調査、独自の調査団編成。29 日から 1 週間の日程で―琉大」
1970.09/29・琉球新報・琉大尖閣調査団たつ、大陸棚などを総合調査」
1970.09/29・沖縄タイムス・「『尖閣』に学術のメス―琉大。地質・化学・生物分野を対象に、調査団が出発。米軍も演習中止で協力」
1970.10/03・琉球新報・「調査を一応中止、琉球大学尖閣調査団。悪天候で出港できず」
1970.10/03・沖縄タイムス・「大シケで引き返す。琉大の尖閣列島調査延期」

1970.12/04・八重山毎日新聞・「尖閣列島の学術調査、長崎大などから 9 人であす出発」
1970.12/18・八重山毎日新聞・「ネズミ、こん虫の新種。自然の保護強調、長崎、九大の尖閣調査団」
1971.02/06・八重山毎日新聞・「凌風丸が入港きよう近代装備を一般へひろう」
1971.03/29・沖縄タイムス・「“尖閣”に学術のメス。琉大調査団けさ出発」
1971.04/07・沖縄タイムス・「植物の新種？発見。学術的にも貴重な島。琉大尖閣列島総合学術調査団」
1971.04/10・琉球新報・「アホウドリ生息確認、動植物の新種発見。琉大尖閣列島調査団帰る」
1971.04/10・沖縄タイムス・「脚光あびる尖閣諸島。琉大調査団帰る。アホウドリ健在。息づく新しい島々」
1971.04/12～14・琉球新報・「尖閣列島。琉大調査団同行記(上、中、下)。南・北小島：世界の珍鳥アホウドリ発見。木はなく島全体が岩山、魚釣島：クバがおい茂るジャングル。海鳥もいない珍しい島、黄尾礁：火山でできた島。アホウドリの姿見えず」
1971.04/13・沖縄タイムス・「生息していたアホウドリ。琉大尖閣列島調査団に同行して。島は自然のまま。貴重な学術資料を収集」

なお、総理府委嘱の東海大学による海底資源調査については、ここでは割愛した。

琉球大学尖閣列島調査団の一行、琉球水産研究所試験船図南丸の甲板で (新納義馬.1971)

Ⅰ. 漁業の概要

尖閣諸島海域における琉球政府期の漁業操業実績、状況をまとめた資料は皆無である。

このため、行政文書や雑誌等の刊行物資料、新聞資料から関連する内容を拾い出す作業が主だったが、その中にも尖閣諸島の漁業を記した資料は僅かしかなかった。新聞資料は、「尖閣海域でカジキ漁船遭難」「ダツ漁で出漁」「冬のカツオ漁成功」等々を報じた内容が散見されるのみ。琉球政府期における漁業については、これらの散発的、断片的資料をもとに推察せざるを得ない。

本章では、このようなこともあり、刊行物資料と当時発行された新聞資料(沖縄本島中央紙、宮古・八重山地方紙)から尖閣諸島漁業に関連する内容や記事を探し出し、これらを時系列的に列記し、紹介することにした。表題を「漁業の概要」としてあるが、漁船の操業状況が主であり、沖縄漁船と本土漁船に分け、沖縄民政期（終戦～1950）、琉球政府前期(1951～1960)、同後期(1961～1972)に 3 区分している。 なお、作業時間が限られたこともあり、新聞資料探しは不充分であった。とりわけ、琉球政府後期(1961～1972 年)は、一部の紹介に止まったのは遺憾である。

Ⅰ－1. 沖縄民政府期（終戦～1950 年）

沖縄は戦争によって全土が戦禍を受け、漁船や製氷施設は悉く破壊された。

終戦時に残された漁船は、たまたま離島にあって大きな損傷を免れた 10 隻内外に過ぎなかったという。この僅か残存漁船と米軍戦闘用の上陸用舟艇の改造によって、戦後の漁業はスタートした。このような困難な状況下において、尖閣海域へ出漁がなされている。

加えて、台湾にいた沖縄漁民は、終戦時の早い時期から、台湾船に乗り込んで、同島海域でカジキ、カツオ漁に従事している。宮古・八重山のかつお船も、漁期の終える冬場には、尖閣海域へ出漁し操業している。当時は製氷施設がないため、漁獲したカツオは、魚釣島や南小島に陸揚げ、仮工場を設けて、鰹節に仕上げて持ち帰るなど工夫をなしている。

米軍政府は、終戦 3 年後には、尖閣諸島の久場島（黄尾嶼）を爆撃演習海域(永久危険区域)に指定、演習時には、漁船立入・操業禁止している。

本土漁船の操業状況は詳びらかでないが、1950 年、高良鉄夫氏は魚釣島を学術調査した際、南下してきた 2 本マスト船（大形かつお母船？）等々を報告している。

（イ）. 沖縄漁船の操業状況

1. 1947 年頃には、台湾在住の沖縄漁民(戦前から台湾残留者や戦後出稼ぎで渡台した漁民)は、台湾の突ん棒船やかつお船に乗り込み、台湾基隆港から、尖閣諸島海域へ出漁し、カジキ漁やカツオ漁を操業。※1

2. 1948 年 4～5 月、米軍政府は、久場島（黄尾嶼）を、米軍爆弾投下演習区域(永久危険区域)に指定、演習時には、漁船立入・操業禁止を告示。※2

3. 1948 年 6 月、宮古民政府は、カツオ漁業偏重から離脱し、宮古の大球ソネ～尖閣諸島周辺

に生育しているサンゴ漁奨励を計画、実施を検討。※3。

4. 1948 年 10 月、八重山漁民は、「沖合遠洋漁業の進出なくしては、水産業の飛躍的発展は期し得ない」と「共栄丸」以下 15 隻による尖閣諸島漁労団を編成、同島海域への出漁を計画。※4

5. 1948 年 11 月、石垣船籍「金隆丸」が、尖閣諸島海域へ出漁・遭難。※5

6. 1949 年 1 月、米軍政府は「爆撃演習時に久場島に近寄るな」と、飛行機から警告ビラを投下。宮古民政府は、南北小島（通称トリシマ）を、演習第 2 区域の鳥島（沖縄本島・久米島近海）と混同し、「トリシマも危険区域」）と誤報。※6

7. 1949 年 11 月、米国水産会社が缶詰用にマグロやカジキを買付けに来るならば、尖閣諸島等の好漁場を近距離に位置する八重山は、漁労基地に成り得ると報じる。※7

8. 1949 年～50 年、糸満漁民は、「栄丸」以下漁船団を組んで尖閣諸島海域へダツ漁で出漁、また米軍上陸用舟艇を改造した漁船 2 隻を母船にしてダツ漁を操業。※8

9. 1949 年～50 年初頭、八重山では「船を改善して、新規漁業に転業が続出、尖閣列島ではカジキ突棒漁業が行われ、カツオ漁は冬期まで出漁した」旨報告。※9

10. 1950 年頃、宮古島では、尖閣諸島海域で、カジキ突き漁や深海魚底釣、冬期のカツオ漁を操業。※10

11. 1949 年末～50 年 4 月、八重山石垣市の発田重春氏は、尖閣諸島近海で、冬期のカツオ漁を操業、魚釣島に仮工場を設け、鰹節を製造。※11

12. 1950 年 3 月、高良鉄夫氏は、発田氏のカツオ船「盛海丸」に便乗、魚釣島に渡島して学術調査を行う、その際、同島近海で漁船が 10 数隻操業しているのを遠望。※12

13. 1950 年 3 月、戦後初めて尖閣諸島調査を試みた高良氏は「上陸するのは全く命がけ」と報告、港湾設備がないためで、後続の調査団も同諸島への上陸に苦労。※13

14. 1950 年 11～12 月、宮古島伊良部の「かもめ丸」船主漢那吉郎氏は南小島、池間の「宝山丸」船主玉寄正雄氏は魚釣島に、各々仮工場を設けて鰹節を製造。※14

※1. 1947 年頃の台湾には沖縄漁民が多く在住していた。戦前からの残留者や終戦後出稼ぎで宮古・八重山・与那国から渡台して来た漁民である。今回、与那国漁協の長濱一男氏・賀数金次郎氏、伊良部漁協の國吉守夫氏、八重山漁協の玉城亀一氏からの聞き取りで、沖縄漁民は、終戦直後の台湾漁業の担い手だった。彼等沖縄漁民によって、台湾基隆港を漁業基地にして、突ん棒カジキ漁が、アジンコート（彭佳嶼）～尖閣海域諸島海域で操業がなされていた。また、カツオ漁は、主要な漁場と見なして尖閣諸島方面へ出漁し操業していたことが明らかになった。長濱一男氏は「終戦後の尖閣列島に、台湾の突ん棒船が来たけれど、沖縄の人が乗っている突船しか向こうには来れん、突ん棒でカジキ獲りは沖縄の人でないと出来ない。台湾の人は、未だこういう技術はなかった、と思う」。賀数金次郎氏は「台湾の人はカツオ漁はできんから、与那国の先輩に頼んで年寄りの漁師を連れてきた」としている。（当時の状況は「Ⅱ、漁業者への聞き取り」参照）

終戦時の台湾残留者及び戦後における宮古・八重山・与那国からの出稼ぎ漁民は、「・・宮古、八重山出身者も漁民を除き全部引き揚げることになったが基隆、蘇澳方面在住の漁民は来年 3 月

まで残留従業を許可される事になった（台湾帰来客談）」（1946.11/24・宮古民友・「宮古、八重山の台湾残留者、11 月中に全部引揚（漁民を除く）」）ともある。

1950 年 5 月、尖閣諸島では台湾漁船蓬莱号事件が起きている。（詳細は 1950.06/08・宮古婦人・「琉球人の信用に係る蓬莱号事件」）。また、台湾漁船東興号がアジンコートでカジキ漁中に故障漂流し、与那国へ辿り着いたが、船長東江幸一（以下 9 名）で 3 名は沖縄漁民がいたと報じている（1952.05/16・八重山毎日新聞・「台湾船籍東興号取調、沖縄船員も交る」）。さらに与那国漁船が尖閣諸島からアジンコートへ漂流、操業中の台湾漁船(両船長ともに宮古漁民)に救助された。（1954.02/07・八重山毎日新聞・「大安丸出漁中遭難、船体木ッ葉ミジン、無人島に漂着台湾船が救助」）。この記事から彼等が台湾残留者でなく、出稼ぎ漁民ならば台湾へ出稼ぎが 1950 年代半ば頃まで続いていたとも考えられる。

※2.「恒久危険区域、1948 年 4 月 16 日、1、次の区域は第一航空師団爆弾投下練習区域として使用される危険区域である。イ、第 1 区域・・（コービ礁）本区いき 5 哩以内に接近すべからず。ロ、第 2 区域・・（鳥島）・・」以下第 5 区域まで指定。「2、ぐん政ふ水上運輸部管轄下のすべての船長は海図上に上記のこと柄をく画しかつその地いきの場所及び危険なることをしらしむべし・・町村長はその権威ある指導しやによりその地いきの場所および危険なることを指示すべし、水上運輸部作戦係将校、ほ兵大い ミラード オーエンゲン」（公報「新宮古」第 3 号、1948 年 5 月 27 日、宮古民政府）

「◎特別告示第 1 号、軍政府長官の命令に依り常時危険区域（琉球軍作戦要項第 2 号）を次の様に告示する・・第 1 区域・・コベ礁、此の地域の五哩以内に近接してはならない」。以下前掲と略同。（公報第 35 号、1948 年 5 月 25 日、臨時北部南西諸島政庁註A）。これらの警告は周知徹底されなかったようである。新聞はその後の状況を次のように報じている。「・・米軍政府の指令に依り同島附近に近寄る事が禁止されていたが最近漁労其の他で接近する者が多くなって来たがそれに関し・・軍政官より八重山知事宛次の如き来電があり・・第一航空師団よりの報告に依れば船舶及びジンケンに依り其の爆撃投下訓練を妨害されつゝあり関係者全員に警告すべし。貴下は前記事項を新聞に掲載すると共貴下の総ての船主及び船長にコービ嶼地区は恒久危険地区にして禁止区域なる事を知らしむべし」（1948.11/03・南西新報・「尖角列島コービ嶼は、永久危険地域」）

米軍爆撃演習海域に指定の久場島(高良鉄夫.1968)

同島に投下された爆弾残骸 (新納義馬.1971)

※3. 台湾のアジンコートから尖閣諸島に至る海域のサンゴは戦前から有望視されていた。

「・・台北州水産会では試験船北丸をして3箇年継続事業でアジンコートから尖閣列島に至る90浬の間だを幅十浬長さ 30 浬に亙つて目下極力新漁場の探検中であるが前途頗る有望である。」(1927.07/22・台湾日日新報・「台湾の珊瑚(上)、一躍世界的となる引揚げられた海底の宝」)。また尖閣諸島を見ると、「本県に珊瑚・・就中尖閣列島の周囲は大いに有望視され一般の注目するところであったが尖閣列島と縁故者たる古賀氏に許可された。・・。」(1935.07/03・先島朝日新聞・「尖閣列島の珊瑚漁業古賀商店へ許可」。さらに「尖閣列島近海の珊瑚漁場は台湾を根拠とする漁船の漁場と化し台湾漁船は基隆港を足場として連日 70 隻からの出漁を見てゐるが本県の当業者は出漁許可を得たるものは 6 隻で実際出漁船は僅か 3 隻に過ぎず些か立ち遅れてゐるもので県当局は図南丸を近く現場へ派遣し漁場の探見をなさしめ本県当業者の出漁に便益を與へることになつた。」(1935.07/24・先島朝日新聞・「尖閣列島の珊瑚探見に図南丸が近く出漁」)等々といった動きが戦前にはあった。

終戦後 1948 年頃には、再び宮古の大球ソネ～尖閣諸島近海のサンゴが取り沙汰された。

「宮古の漁業は目下鰹漁業に偏して居るが・・民政ふ商工水産部ではさん瑚業に目をつけ水産業界の権威友利玄光氏に協力を求め之が奨励計画を樹立・・実施を急いでゐる。幸ひ本列島を中心とした100カイリ以内の近海即ち北は大球曽根より南はせん角列島周辺に至る海底に多量のさん瑚が自然成育し又さん瑚漁業に経験を有するものも相当ゐる・・之が実施の暁は本郡経済界に多大な貢献をなす・・」(1948.06/04・みやこ・「鰹漁業偏重を離脱し、珊瑚漁業併行せん、本郡水産業の大飛躍」)

池間漁協・西里勇氏への聞き取りで、1952 年頃、尖閣諸島近海でサンゴ漁をしたが、「本サンゴは 1 つも採れなかった・・採れたのは赤サンゴだけ」との報告あり、詳細は「Ⅱ、漁業者への聞き取り」参照。有望視されたのは与那国沖と報じている。(1952.08/09・八重山毎日新聞・「はるばる高知県の漁船が、本格的採取に乗り込む。脚光浴びるか与那国サンゴ」)。(1953.09/10・八重山毎日新聞・「相當な水揚げ。附近はサンゴ樹林、発見者大城氏に一陽来復」)等々。

1961 年に作成された「琉球列島沖合漁場図」には、尖閣諸島海域にサンゴ漁場が掲載されている。尖閣諸島近海のサンゴ生産報告は 1966 年以降になされている。

※4.「・・今回郡下漁船共栄丸の15隻は尖頭諸島海域に於ける合理的漁業経営を企図し、こゝに漁労班と運搬班となる漁労団を編成、沿岸漁業の打開と秘蔵資源の開発に乗り出すことになった。・・・然し同漁労団の計画は現有漁ぐのみに因る計画である為に盛漁期内における操業であり補修資材の入手が可能となれば、永久周年漁業として発てんの可能性もあり、又運搬船共栄丸には冷蔵庫を設置するのでそれらの資材漁ぐの入手補助方は同団で軍政府へ陳情することゝなつている。・・本郡初の画期的集団漁業によるその成果は、本郡水産発てんに一大足跡を印すものと期待される。(1948.10/11・海南時報・「沿岸漁業の打開に乗り出す、尖頭諸島漁労団編成、本郡初の画期的集団漁業に期待」)。その後の新聞報道も見つからないことから、同計画は頓挫したものと思われる。

冷蔵施設は魚の運搬に欠かせないが、1952 年、宮古・八重山には、糸満と並び製氷工場(15 トン機工場)が設置された。尖頭諸島漁労団編成計画の 2 年後ことである。

※5.「最近海上事故が頻々と起つているが今度は又金隆丸（登野城金城亀福所有船）が行衛不明になり捜査されている。金隆丸は去る 6 日与那国を出航し尖閣列島え 5 日の予定で漁ろうに出掛けたのであるが今に帰らず遭難のうたがいが濃厚であるので 19 日夕刻共栄丸を急派捜索に當らしめている。」（1948.11/21・南西新報・「海難頻々、今度は金隆丸」）。
翌日、「・・金隆丸（船長仲地宗正、乗組員 7 名）は去る 20 日無事与那国え帰港した旨通知があつた。」（1948.11/22・八重山タイムス・「金隆丸無事、与那国に帰港」）

※6. 米軍政府は、漁業関係者に対し周知徹底させるため警告ビラを機上から投下した。
「琉球列島の住民に告ぐ　貴方達は沖縄における米航空軍により発行されたる貴方達の保護のため軍政府を通じて協調し指示されたる次の情報に注意を向けなければなりません。・・地図省略・・右のスケッチ（地図）は米国航空軍より使用される永久的な爆撃並びに砲撃の射爆地域の 1 つであるコビショを含むものであります。実弾及び弾薬がこの島に訓練の目的で使用されるのでその附近にいる人は誰でも重傷をうけるか、或ひは死ぬ可能性があります。貴方自身の保護及び友人、家族の保護のためにいかなる事情があってもこの島に上陸せず又その地域の半径 9 キロ以内（4哩半）の水域に船を航行しないことであります。どうぞこの情報を貴方の知っている人全部に知らせて下さい。（1949.01/14・宮古民友・「尖閣列島に近寄るな、米航空軍が警告」）及び（同・宮古公論・「飛行機が撒いたビラの内容」）

THE MINYU
尖閣列島に近寄るな
米航空軍が警告
琉球列島の住民に告ぐ
コビショ

「尖閣列島に近寄るな、米航空軍が警告」　（宮古民友 1949.01. 14）

さらに、南北小島（通称トリシマ）が、演習第 2 区域の鳥島（沖縄本島・久米島近海）と混同して、「トリシマも危険区域」と誤報している。「尖閣列島中のコービシヨウと魚釣島は米国航空軍の砲爆撃も目標に指定されているため近よることを禁じられているが更に同列島中のトリシマも標的に指定された旨次のごとく通知があった。宮古民政府知事殿、首席軍民政官より、作戦覚書の第 2 号の危険区域に関する件参照、射的場は第 1 地域はコービショウ、第 2 地域はトリシマである・・発番 70」（1949.01/20・宮古民友・「トリシマも危険区域」）

なお、1951 年 10 月 19 日付沖縄群島経済部長から各市町村長宛文書には、「黄尾嶼(空中より地上爆撃)　(イ)位置・・北緯 25 度 56 分東経 123 度 41 分　(ロ)危険区域・・半径 5 哩　(ハ)高度・・

4 万呎 （ニ）近接距離・・周囲 （ホ）使用時間・・自月曜日至金曜日　毎日午前 7 時より午後 5 時まで （ヘ）使用期限・・1951 年 12 月 17 日まで」（「海軍爆撃演習海域設定について」）と緯度経度で位置を明示し、混同を避けている。

※7.「・・戦前日本の南方漁港基地は台湾の高雄港は・・南方海域の漁場を一手に掌握し、文字通り水産王国を形成しその威容をかちほこっていたのであるが今や中国の支配下に帰し・・、一歩後退した基地を吾々は何富に需めんとするか、八重山において他に之を求め得ないのである。吾々は正に水産業の復興と発展と為地の利を獲得したのである。・・・米国の有力会社パンキャンプカンパニーは此の程代表者を琉きゅうに派遣して水産業の状態を調査し愈々明年から鮮魚の買付を行のうこととなりその設備として 1500 屯の冷凍庫を設備することになつている・・・先方の需める魚類は缶詰用であるとすれば旗漁や鮪の類であることは想像し得る。之等は突船による漁獲品で幸八重山は漁場に近距離にあり基地として格好の位置にある。即ち尖閣列島から彭佳嶼近海更に台湾東南部海域が好漁場として指摘されているのである。従って鮮魚の取引が開始された暁に於ては八重山こそ漁労基地となるのである」（1949.11/14、5・南西新報・「自立経済設計と水産業」(3、4)、鳩見武）

※8. 1949 年、製氷工場が那覇に設置された。翌 49 年には糸満に 15 ﾄﾝ機を 1 基づつ備えた製氷工場が 2 箇所に設置され、沖縄本島から尖閣諸島へ出漁できるようになった。

糸満漁民によるダツ漁は「・・ウシーアッピー上原信吉さんが船長して・・栄丸で尖閣諸島でダツ漁を始めた。行ったら、もう行くたびに、もう 2～3 万斤獲れて、いつも満船で帰港した。・・僕も、1950 年の頃、尖閣にダツ漁に行った。・・上陸用舟艇で行った、2 隻で・・。」(糸満漁協・金城亀吉氏から聞き取り)、詳細は「Ⅱ、漁業者への聞き取り」参照。

※9.「・・漁業経営に関しては漁場が次第に遠方に移る傾向にあったので、船を改善して、新規漁業に転業する企業者が続出した。すなわち尖閣列島を根拠地として母船式でかじき突棒漁業が行われた。鰹業もまた尖閣列島を根拠地として漁期を延長して冬期まで出漁された」「△将来の水産施設、イ製氷工場、・・軍政府の御援助によつて・・1950 年 7 月竣工・・漁場拡大せられ・・」（「新八重山博覧会記念誌」八重山復興博覧会　1950.8、p169～170）

※10.「例年冬になれば各漁船は運搬に鞍替し昨年 12 月迄は 20 隻以上の漁船が沖縄及び八重山との運搬業に従事していたが、然し採算がとれず青色吐息の有様であつたが漢那吉郎君が尖閣列島を大漁して以来業者の眼はこの新漁場へ注目され運搬業をかなぐりすてゝ本来の漁船に立かへりこの新漁場へ進出、最近は冬漁に活気づいている。」（1950.02/05・宮古タイムス・「新漁場を開拓」）。冬期漁場の開拓を「・・なほ水産復興上特筆すべきは尖角列島に於ける冬期漁業の開拓でその漁獲高 20 万ポンドを見た事は今后の鰹業の一大飛やくを示すものであり・・・」（1950.04/02・宮古タイムス・「各種産業の成果」）としている。

なお、カジキ漁については「・・渡台した漁夫たちは基隆やスゥオで突き船に乗り込み・・その中で突きが上手だとされたのは・・仲間武雄、仲間忠勝、仲間武一、西銘繁のほか佐久本正一、野里太郎、山口金光、下地栄、山口銀朝、・・伊良部光一さんなど優秀な面々・・終戦により島に帰り、昭和 25 年ごろから突き漁業の経験を活かして冬場には尖閣諸島にでかけ突き漁に励んだ。同海域に出漁した漁船は・・かもめ丸（25t）、・・得宝丸（15t）など 3､4 隻であった。両船の乗組員は次の通り。

かもめ丸

船　　長	池間　武雄（38）
機　関　長	大浦　金助（40）
面舵　突手	上里　盛栄（28）
取り舵突手	池間　清一（37）
甲　板　員	池間　　浩（26）
甲　板　員	国吉　孝助（27）
甲　板　員	名城　豊吉（20）
甲　板　員	大浦　繁雄（19）

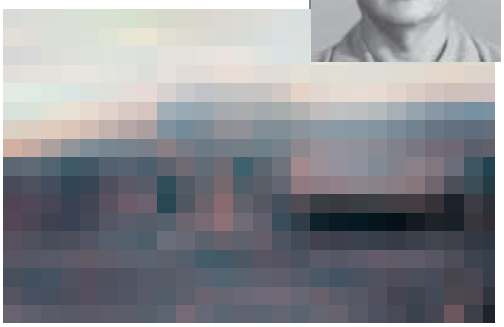
得宝丸

船長兼面舵突手	西銘　　繁(28)
機　関　長	浜本　　真(26)
のちに	与那覇　徹(26)
取り舵突手	伊佐　忠三(23)
現	仲間　忠三(23)
甲　板　員	源川　朝昌(21)
甲　板　員	源川　長幸(21)
	そのほか 2､3 人乗り組み

・・奥原好之助と・・池間加根の 2 人はかもめ丸にサバニを積んでもらい同海域で一本釣り漁を行ない、深海魚を大量に釣り上げ底釣り業者の注目を集めたと言う」（「伊良部町漁業史」 仲間伊佐六著　伊良部町漁業協同組合　2000.7、p70～73）

※11.「・・尖閣周辺はカツオの群で一杯である。いくらでも獲れたそうだが・・その頃は製氷設備がないから石垣港まで運ぶのに時間がかかり過ぎ鮮度が落ちて、使い物にならない・・悩みの種だった。父はかねてから古賀さんの旧鰹節工場があった魚釣島に目をつけていた。そこに鰹煮立てに必要な鉄製の大釜が残されていた。父が考えた 2 隻の船を使う方法だった。1隻は鰹を獲る漁船で、尖閣沿岸に押し寄せるカツオの群を狙う。船一杯獲るとすぐに魚釣島の仮工場へ持っていき、そこで大釜で煮炊きして半製品にすれば、鮮度の心配なしに思い切り漁労に専念できる。

魚釣島で戦後初鰹節製造した発田重春氏→



古賀氏の旧工場小屋 （多和田真淳 1952.4）

あとは漁場と仮工場を何度も往復すればよい。もう 1 隻は運搬船で、煮炊きした半製品ができ次第、それを石垣港へ運ぶのである。漁船と運搬船の2隻で、尖閣の漁場と仮工場、石垣港をフルに

操漁・稼働すれば生産はかなり上がるという目論みだった。1950 年には魚釣島に鰹節製造の仮工場を設け、2 隻の船を配置・・生産は格段に増加した。父の魚釣島での事業を可能にさせたのは、古賀さんの大釜のお陰でもある。古賀さんはこの大釜を島へ運ぶのに大変苦労しただろう。事業を撤退する時も、持ち帰らず島にそのまま残して置いていたから仮工場を営むことができた。

当時のことはうろ憶えで、『又吉工場長、大底、前富里、金城、米城タケオ』さんら(？)・・皆物故し・・絶海の孤島で工場の設備はもとより劣悪な条件―食べ物や住まい、健康を損ねる危険な環境の中で、よく頑張ってくれたと思う・・」(「父と鰹業、魚釣島仮工場、等々」発田俊彦　尖閣研究「上」p349～352)

※12. 高良鉄夫氏は、1950 年 3～4 月、発田氏の魚釣島鰹節仮工場に2週間ほど滞在、魚釣島を学術調査した。その際に見聞をした「無人島探訪記(1～10)1950.04/25～05/22・南琉タイムス」の中で、魚釣島 200m 周辺海域は、沖縄宮古大島等各地の漁船が操業し、「3 月 29 日、魚釣島近海に漁船 8 隻(カジキ船 2 隻、かつお船他)。4 月 2 日魚釣島、南北小島周囲に 10 数隻。4 月 5 日給水のため漁船 5 隻が碇泊していた」等々を記している。また他の著作で、本土漁船等の操業を報告している。

※13. 1952 年、琉球大学・資源局合同団メンバー(学生で参加した上運天研成氏)は、上陸時の困難な状況を次のように述べている。「・・波は岩をかみ、船を近よせることさえできない、・・船員が、からだにしっかりとロープをまきつけて・・海に飛びこみ・・ぬき手をきって泳いでいき・・1つのとがった岩にロープをしばりつけ・・調査団の人たちは、船員たちにかかえられるようにして、ボートに乗りうつり、ロープをつたって波うちぎわにむかいます。ちょっとでも油断しようものなら、足をとられ、波にのみこまれしまいそうです。」(「魚が鳥を食った話―尖閣列島・南小島の動物たち」とくだきよ・上運天賢成 1980.10)

← 波にのまれま命がけで上陸　右掲書より

他方、高良団長は、「同島を基点とする冬期の水産業は世界的価値を有する。即ちカジキ、鰹、フカ、イルカなどの漁獲、日本、台湾から冷凍船が進出している点から見た時冬期の水産は世界的漁場として最も有望で、そのためには同島で給水設備、船溜り場、冬期の無線設備が是非必要である」(1952.04/29・沖縄タイムス・「尖閣列島学術調査団帰る」)旨を強調し、港湾施設設置等を提言している。

※14.「・・昭和 25 年ごろ・・かもめ丸は・・南小島で仮カツオ製造工場を造り、カツオ漁に乗り出した。出漁した初日は 1 屯 200 位いの漁で同島に設置した仮の製造工場で処理できたが、2 日目はおよそ 3 屯を水揚げしたため同工場では処理できない・・佐良浜の工場へ運び処理した。だが、尖閣周辺海域の豊漁を見込んだ池間船長らは早速、製造に必要な鍋や煮かご、それにセイロなどを積み、さらに乗組員・・男工、女工も雇い、同諸島の南小島へ向けて出港した。しかし、操業を続けていくうちに、餌不足に見舞われたため操業を短期間に打ち切り、帰港した・・当時雇われていた船員及び男工、女工は次の通り。

船員	男工	女工
漢那　栄一（24）	川平金四郎（　）	西里　ハル（31）
前里　一郎（43）	池原　勇吉（　）	仲松　スズ（30）
奥原　隆治（18）	仲地　行雄（20）	浜川　梅子（29）
上里　　栄（20）	糸満　博文（19）	佐久田ヨシ（16）
福里　良平（　）	吉浜アッピー（　）	
喜久川繁（15）	平良　寛雄（32）	
	国頭　秀雄（37）	

工場長　奥原　栄良（43）・・なお工場長の漢那国光氏は佐良浜の工場へ交代・・塩辛をつけるため・・仲地平徳（43）が 10 数日後に南小島に上陸した。・・・」。（「伊良部町漁業史」仲間伊佐六　同上、p71～72）

伊良部漁民の鰹節製造仮工場はここに建てた？
南小島の旧古賀村の石積跡　(仲間均.2002)

また、池間の宝山丸(船主玉寄正雄)は、魚釣島で仮カツオ製造工場を造り、カツオ漁に乗り出した。「・・山から大きな木を伐ってきて、・・工場を造っていた・・工場に・・少なくとも 7,8 人位はいたように思える。・・池間の製造工場の人を連れてきたかもしれない。・・潮水と流れてきた雨水が混ざって・・カツオはあれを汲んで来て炊いたと思う。食料は米食料は米や芋を船で積んできて・・自分らで炊いてて食べていたj（池間漁協・与那嶺正雄氏から聞き取り）、詳細は「Ⅱ、漁業者への聞き取り」参照。

(ロ). 本土漁船等の操業状況

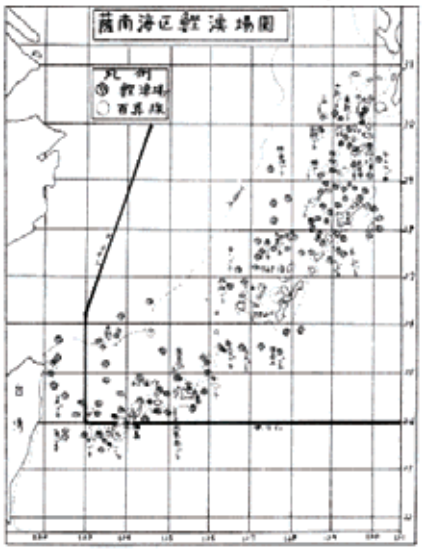
1. 1946 年 6 月、戦前台湾を本拠地とした日本のかつお漁船が台湾に接収され、尖閣諸島近海でカツオ漁を操業。※1

2. 1945 年敗戦と共にマッカーサー・ラインの操業区域制限もあり、鹿児島県かつお漁船をはじめ本土漁船は南下して、南西諸島近海で操業した。当時の「薩南海区鰹漁場図」には、尖閣諸島のカツオ漁場が掲載されている。※2

3. 1950 年 3～4 月、高良鉄夫氏は魚釣島を学術調査、同島沖合は沖縄漁船や本土漁船、台湾漁船で賑わい、国際漁場の様相を呈していると報告。※3

※1. 1946 年 6 月、フィリピンの戦場から、西田定一軍曹以下 9 名の日本兵がカヌーに乗って 2 千 6 百キロの波濤を越え、日本へ自力生還した。バシー海峡から台湾を経、やっと尖閣諸島近海にたどり着き、魚釣島に上陸した。「・しばらく休憩することにした。その日の午後、『船が来た！』という声で全員跳び起きた。・・百トンほどの船が 1 隻こちらにやって来る。日本の漁船のようだったが・・甲板で待っていたのは日本人だった。・・西村(船長)によれば、その船は日本資本のカツオ船で、敗戦後船長の西村1人が身柄を拘束され支那軍の食料補給のため働かされているとのこと。『我々を、内地に運んでもらえんかね？』・・『いやぁ、それは』、西村は、逃亡防止のためギリギリの燃料しか支給されてないので無理だと答えた。『ほんなら、雇ってもらえんやろか？』・・基隆に帰ればすぐ支那軍に捕まり収容所行送りだからとこれも断られた。・・」(「波濤 2 千 6 百キロ・日本兵の漂流―ポリリオ島」足立倫行、アジアの人波、海の道 1990・10)

※2. 1945 年の北緯 30 度以南のマッカーサー・ラインの操業区域制限でカツオ生産は大きな打撃を受けた。このため鹿児島県のカツオ漁船は、「・・占領による制限を受け本県かつお漁業は南西諸島の曽根に大半を依存する状況下で、・・・漁獲高は戦前の 1938(昭 13)年 11.740 トンであったが、1949(昭 24)年には 5.800 トン前後で、・・翌年には 1 万トン台を回復し、全国よりも先んじた。(鹿児島県 1950・昭 25 年水産年鑑より)」。また(「鹿児島県水産技術のあゆみ」福元覚、鹿児島県 2000.3、p14)。なお、同書の「昭和年代の本県船のかつお漁場」(p34)には「赤尾曽根、黄尾曽根、魚釣曽根」が記されており、戦後初期においても尖閣諸島海域で操業したものと推測される。 また、『三重県水産研究に 100 年』(創立百周年記念誌)にはマッカーサー・ラインを記した「薩南海区鰹漁場図」があり、これらソネが示されている。



南西海区鰹漁場
(ウエブサイト『三重県水産研究 100 年』より)

※3.「・・魚釣島の周辺は漁猟でにぎわっていた・・2 本マストの大型船（註、高良鉄夫氏は高知県船籍大形かつお母船？と推察している）から小は 8 トン級の漁船まで、どちらも漁にはげむ漁師の姿が手にとるように見える。・・漁船がつぎつぎと現われ、13 隻にふえた・・中型と大型船はカツオ漁船で・・カツオを・・つぎつぎと釣りあげている。・・小型船はカジキをとる突き船で・・ヘサキに立っていた漁師が、カジキを目がけて力強くモリを投げこむ。・・3 月下旬までは、ほとんど毎日・・漁猟の情景がくりひろげられるが、4 月の上旬になると次第に船の数はへっていく。・・尖閣列島近海は、たしかに魚族が豊富であり、ここに出漁する漁船は遠く本土から南下してきたもの（2 本マスト）、沖縄島、宮古島、石垣島、与那国島の漁船のほか、台湾から出かけてくる漁船も見られる。尖閣列島の冬期漁場は、まさに国際漁場の観を呈する・・ 」。（「自然との対話」高良鉄夫、1977.2）

□. 主な刊行物資料

○、『父と鰹業、魚釣島仮工場、等々』 発田俊彦 (「尖閣研究・上」 データムレキオス 2007.10) p349～352

○、『自然との対話』 高良鉄夫 （琉球新報社 1977.2） p61～p63

＊1950 年魚釣島調査の際、多数の漁船が沖合で操業している状況を記述

○、『鳥が魚を食った話―尖閣列島・南小島の動物たち―』 とくだきよ・上運天研成 （那覇出版社 1980.10）

○、『伊良部町漁業史』 仲間伊佐六 （伊良部町漁業協同組合 2000.7） p70～73

○、『キラマガツー、慶良間の鰹一本釣り』 兼島秀光 （ボーダーインク 1995.9） p113～125

○、『公報「新宮古」第三号』恒久危険区域（宮古民政府 1948.05.27）

＊1948 年 4 月 16 日、コービ礁は第一航空師団爆弾投下練習で使用され、米軍政府長官の命令に依って恒久危険区域に指定。

○、『公報「新宮古」第 35 号』 琉球列島住民に告ぐ （宮古民政府 1949.01.13）

＊演習時の立入禁止旨の周知徹底と危険を警告。

○、『特別告示第 1 号（琉球軍作戦要項第 2 号）』（臨時北部南西諸島政庁公報第 35 号、1948.5.5） ＊同上

○、『鹿児島県水産技術のあゆみ』 福元覚、（鹿児島県 2000.3 p14）

＊同上「昭和年代の本県船のかつお漁場 p34）

○、「『三重県水産研究に 100 年』（創立百周年記念誌）（三重県水産研究所 2005.2）

＊マッカーサー・ラインに関わる「薩南海区鰹漁場図」掲載

○、『新八重山 博覧会記念誌』（八重山復興博覧会 1950.8） p169～170

○、『波濤 2 千 6 百キロ・日本兵の漂流―ポリリオ島』 足立倫行 (「アジアの人波、海の道」文藝春秋 1990.10) p240～242

□. 主な新聞記事

1946.08/02・宮古タイムス・「不漁続く、漁獲半減す、現在迄の漁獲高 190 萬斤」

1946.11/06・宮古タイムス・「各漁船の腐朽で来漁期SOS、郡水が修理資材輸入方陳情」
1946.11/24・宮古民友・「宮古、八重山の台湾残留者、11 月中に全部引揚（漁民を除く）
1948.05/06・新宮古・「漁業の振興は、宮古最大の資源。製氷所も近く設置」
1948.06/04・みやこ・「鰹漁業偏重を離脱し、珊瑚漁業併行せん、本郡水産業の大飛躍」 ＊サンゴ漁業の候補地として尖閣諸島周辺海底のサンゴを 1 つにあげている。
1948.07/14・沖縄タイムス・「製氷工場増設、近く機械到着」
1948.07/31・沖縄タイムス・「海の宝庫、新漁法で開拓、近く水試験場が手繰り船試験」
1948.10/11・海南時報・「漁獲の戦前水準えの復活。資材さえあればわけなし」
1948.10/11・海南時報・「沿岸漁業の打開に乗り出す、尖頭諸島漁労団編成、本郡初の画期的集団漁業に期待」
1948.11/01・八重山タイムス・「尖角列島コービ嶼は、永久危険区域なり」
1948.11/03・南西新報・「尖角列島コービ嶼は、永久危険地域」
1948.11/21・南西新報・「海難頻々、今度は金隆丸」 ＊尖閣諸島海域へ出漁し遭難
1948.11/22・八重山タイムス・「金隆丸無事、与那国に帰港」
1949.01/14・宮古民友・「尖閣列島に近寄るな、米航空軍が警告、琉球列島住民に告ぐ」
1949.01/14・宮古タイムス・「鳥島と尖角列島、危険区域に指定、船舶の近接をさけよ」
1949.01/14・宮古公論・「飛行機が撒いたビラの内容」 ＊上記内容
1949.01/18・宮古公論・「第 2 射程地域にトリシマを指定」 ＊上記内容
1949.01/20・宮古民友・「トリシマも危険区域。宮古民政府知事殿、主席軍政官より」
1949.06/26・沖縄タイムス・「大型に変わりゆくぎょ船、隻数 205 戦前の 2 倍半」
1949.11/14、5・南西新報・「自立経済設計と水産業」(3,4)、鳩見武） ＊米国水産会社が缶詰用にマグロやカジキの買付けに来らば尖閣諸島等の好漁場が近距離に位置している。
1950.01/06・宮古婦人・「漢那吉郎氏のかもめに、凱歌」 ＊冬季の尖閣諸島海域でカツオ大漁。
1950.02/05・宮古タイムス・「新漁場を開拓」 ＊同上
1950.04/02・宮古タイムス・「各種産業の成果」 ＊上記冬期漁業開拓で漁獲量 20 万ポンド見た。
1950.04/25～05/22・南琉タイムス・「無人島探訪記（3） 5、海の宝　高良鉄夫」
1950.05/26・宮古タイムス・「宮古漁夫優遇」 ＊基隆では今尚台湾人に雇われ相当優遇と報告。
1950.06/08・宮古婦人・「琉球人の信用に係る蓬莱号事件」 ＊台湾への出稼ぎ漁民による尖閣海域で起きた蓬莱号乗取り事件。
1950.09/15・うるま新報・「尖閣列島訪問記 （一） 海岸で鰹の釣れる島、高良鉄夫」
1950.10/30・時事新報・「氷販売開始」 ＊宮古製氷工場漁船・漁業者に対し氷販売開始。

Ⅰ－2.琉球政府前期(1951～1960 年)

1950 年代に入ると、ガリオア資金による木造漁船が建造され上陸用舟艇改造漁船の代替として、各地域の漁業者に配給され、製氷施設も完備した。このため、尖閣諸島海域への出漁が増加し、那覇地区漁民の深海一本釣、糸満のダツ漁、与那国、八重山の突船カジキ漁、宮古の冬期のカツオ漁、等々で活況を呈した。それに伴って、同島海域での遭難事故も多発した。

他方、李ライン追われた本土漁船は、東シナ海を南下、魚釣島附近のサバ資源に着目し、漁場調査・操業がなされ、同海域は新たにサバ漁場として脚光を浴び、本土漁船の進出が急増した。

琉球政府は、サバ跳ね釣漁法を導入、沖縄漁船のサバ漁業へ参入を奨励した。

米軍爆撃演習については、久場島（黄尾嶼）は好漁場だったため、演習区域変更を訴えたが、認められず、新たに大正島（赤尾嶼）が指定され、演習時の漁船立入・操業禁止がなされた。

（イ）. 沖縄漁船の操業状況

1. 1950 年初頭には、那覇地区漁民は、尖閣諸島海域へ深海一本釣で出漁。※1

2. 1951 年、糸満漁船は、木造漁船団を組み、尖閣諸島海域でダツ漁を操業。※2

3. 1951 年 3 月、八重山の漁業は製氷実現で活気づく、与那国ではカジキ漁が盛んとなり、突船の遭難が続発。※3、

4. 1952 年 3 月、石垣漁船「ずい徳丸」が、尖閣諸島海域へカジキ漁で出漁し遭難、宮古漁船「かもめ丸」に全員救助される。※4

5. 1952 年 12 月、糸満漁船「生徳丸」（船長以下 12 名）が、尖閣諸島海域で僚船 6 隻と共にダツ漁を操業中に遭難、のち宮古に漂着。※5

6. 1953 年 3 月、米軍政府は、台風の前哨地点として魚釣島とラサ島(沖の大東島)へ測候所設置を計画、取止めとなる。※6’

7. 1953 年 4 月、宮古・八重山は 1950～53 年までカツオは不漁続き、尖閣諸島に出漁した宮古漁船によれば、魚群の遊泳が多数見られ、当期のカツオは大漁を予想。※7

8. 1953 年 8 月、琉球政府は、尖閣諸島近海のサバ資源の発見でサバ漁法技術の導入と資源調査予算を計上、サバ漁業の奨励に乗り出す。※8

9. 1954 年 2 月、李ライン追われた本土漁船は尖閣諸島近海でサバ・カジキ漁に大挙繰り出す、対抗する八重山漁船は装備不備な突船 7,8 隻が操業、政府の積極援助に期待。※9

10. 1954 年 1 月、与那国漁船「大安丸」は、尖閣諸島でカジキ漁中に遭難、アジンコートで台湾船に救助されて尖閣諸島へ、八重山漁船「福輔丸」に乗り移り帰還。※10

11. 1954 年、琉球政府は、サバ跳釣講習会を各地で開催、長崎県水試と琉球水研が共同漁場調査を実施、7 月にはサバ跳釣漁業の第 1 号が誕生、好成績をあげた。※11

12. 1954 年 11 月、琉球水産会社の与那国大型冷凍庫設置事業が頓挫、代わり大型マグロ船漁船（250 トン）を建造、尖閣諸島方面に出漁計画を発表。 ※12

13. 1955 年 3 月、沖縄本島船籍突き船「第三清徳丸」（15 トン・8 名）が尖閣諸島海域で台湾旗

を立てたジャンク船に襲われ乗組員 2 名が射殺、4 名が行方不明。琉球政府は、同事件勃発後、同島海域への出漁を差し控えるよう通告。※13

14. 1955 年 9 月、サバ漁不振は魚群探知機がないためと導入を奨励、宮古漁船が魚探機を備え、科学装備を施して尖閣諸島海域でのサバ漁を計画。※14

15. 1955 年 11 月、米軍の爆撃演習で荒らされる久場島（黄尾嶼）漁場、好漁場であるため爆撃演習区域の変更を訴える。※15

16. 1956 年 2 月、大正島（赤尾嶼）の所轄不明問題が取り沙汰、同島はマグロ漁場として知られていると紹介。大正 10 年に石垣市行政地番に登録済みと判明。※16

17. 1956 年 3 月 13 日、糸満船「第三栄丸」が、尖閣諸島近海でダッ漁操業中に沈没。※17

18. 1956 年 4 月、水産物入超でサバ缶が 5 千万円、琉球缶詰会社がサバ缶製造に意欲、長崎県へ原料入手の技術導入協力を申し入れる。※18

19. 1956 年4月、米軍政府は、久場島（黄尾嶼）に加えて、新たに大正島（赤尾嶼）を爆撃演習海域(恒久的危険区域)に指定、爆撃演習を実施。※19

20. 1956 年 4 月、石垣船籍「永福丸」（19 ﾄﾝ）は、尖閣諸島に採貝出漁、6月に貝殻・海人草を積んで帰港したが、ブラタス島へ出漁、不法に海外操業したことが判明。※20

21. 1956 年 6 月、沖之島水産社（福岡県在）照屋敏子社長（糸満町出身）が西表島を漁業基地とし、尖閣諸島での魚探母船方式によるサバ、アジ漁業を計画。※21

22. 1957 年、琉球水産会社がサバ棒受網漁を導入、一航で 6～7 万斤も水揚げする。※22

23. 1957 年 5 月、石垣の新造カツオ漁船「基本丸」等、尖閣諸島へのかつお漁船、暫時大型船に切換。※23

24. 1957 年 6 月、宮古漁協代表天久恵秀組合長らは「魚釣島への漁港設置に関する請願」（琉球立法院）を行う。※24

25. 1958 年 1 月、宮古伊良部のかつお漁船、尖閣諸島で「冬の鰹漁に成功、漁船続々と大漁」と朗報。※25

26. 1958 年 2 月、宮古伊良部の「幸洋丸」（31 ﾄﾝ）・船主前泊力氏と同「隆祥丸」（34 ﾄﾝ）・船主奥平幸三氏、宮古平良の「進漁丸」（30 ﾄﾝ）・船主洲鎌蒲四郎氏は、尖閣諸島の南小島に仮工場を各々設けて、鰹節を製造。※26

27. 1958 年 4 月、水産庁派遣の岡伯明・井田家基氏が「琉球漁業者の開拓している漁場図」を作成、尖閣諸島海域はカツオ、タイ類、トビウオ、マグロ、サバ漁場が記載。※27

28. 1958 年 7 月、米軍政府は、尖閣諸島地主古賀善次氏と久場島（黄尾嶼）の演習使用に対する米軍用地賃貸借契約を締結（1958 年度軍用地料年額 5,763 ﾄﾞﾙ）。※28

29. 1959 年 1 月、琉球のサバ漁船は 5 隻（150～130 ﾄﾝ級、50 ﾄﾝ級）が操業。58 年は 200 万斤水揚げで好調、59 年魚群が疎らになり、60 年頃には終業に追い込まれる。※29

30. 1959 年 8 月、与那国・尖閣諸島海域等で有望な八重山近海深海漁業は、台湾へ鮮魚輸出し、台湾から米、茶等の輸入策を講じれば大巾な伸展が期待される。※30

31. 1960 年 2 月、糸満港から尖閣諸島海域へダツ漁で出漁した漁船 2 隻（金生丸、豊洋丸）の

うち「豊洋丸」(15トン)が、天候不良により遭難、乗組員 15 名行方不明。※31

※1. 那覇垣花漁民は深海一本釣を専門にし、戦前から尖閣諸島は主要な漁場だったという。1950 年初頭には尖閣諸島への出漁が再開された。「終戦後、・・親父と一緒に漁をやった。17,8 才(1953,4,年)頃には船をこしらえて、一本釣で尖閣へ行っていた。那覇地区漁協は深海一本釣が中心で、尖閣が主な漁場だったから、ずっと向こうへ行っていた。・・びっくりするほど魚が獲れた。・・3､4トンを水揚げし、5 日間で帰れた。航海日数は大概 1 週間ほど、・・ひと月で 3,4 航海・・。」(那覇地区漁協・國吉真一氏から聞き取り)、詳細は「Ⅱ、漁業者への聞き取り」参照。

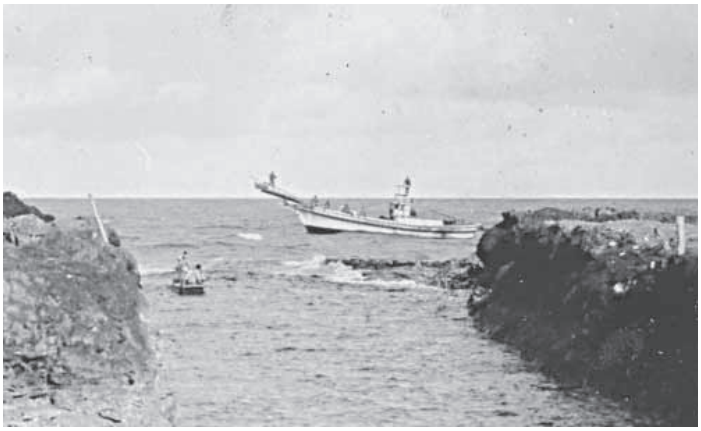
※2. 1951 年 10～11 月、尖閣諸島周辺で深海一本釣試験に従事していた兼島秀光氏は、「八重山・宮古は勿論、台湾からもたくさんの漁船が来てました。糸満からの漁船は、シジャー(ダツ)や・・上物の追い込み漁で、大型船が 3 隻船団を組んで来て・・・・漁船 2 隻で遠い所から円をつくるようにしてロープを引っ張って・・2 キロ・3 キロ先に袋網を張って、サバニが 2 艘、裸の若者たちを乗せて待機しています。・・ロープが近づいた所を、サバニに乗っていた者たちが一斉に海に飛び込み、一気に魚を網に追い込むのです。この日、20 歳になる青年がダツにこめかみを刺されて死んだということを聞きました」(「キラマガツー　慶良間の鰹一本釣り」 兼島秀光　1995.9　p113～125)と記している。なお、兼島氏が 1951 年 11 月に見た糸満からのダツ漁船 3 隻は、改造した上陸用舟艇ではなく、木造漁船だったという。1950 年頃には、ガリオア漁船の建造によって、沖縄漁船は急速に復旧し、戦前の隻数、トン数を凌駕するほどになり、出漁は増加の途にあった推察される。1951 年 2､3 月の新聞は、尖閣諸島海域での糸満漁民の遭難事故 2 件を報じている。

前者は、操業中に時化に遭い、母船との曳航ロープが切れてサバニ 1 艘が行方不明になったが、鳩間島に漂着した件(1951.02/21・沖縄タイムス・「えい航のロープが切れ、闇の洋上で迷子、くり舟の漁夫はと間島へ漂着」)、後者は、薪拾いのため魚釣島に上陸した漁民が誤まって崖から転落し死亡した件(1951.03/30・うるま新報・「変死の船員を、冷凍して帰港」)である。

※3. 漁業の隘路となっていた製氷が実現、与那国では突船漁が活況を呈してきた。「八重山製氷の実現の共にカヂキの盛漁期に入り郡下の漁船とくには与那国港の突船は一斉に活躍を開始大抵の荒天は憶せず出漁連日大漁の成績を上げて居りそれ丈に又海の事故も散発して居るが何分昨年の如く販路の心配もなく冷凍船の出入が複ソウ魚が不足を来す程であり去る 12 日其のカヂキ船の船員が事故を発生貴い海の戦士の犠牲が報ぜられて居る。石垣港謝敷寛氏所有船瑞幸(50 馬力)は前新城船長(与那国)の元にアヂンコウ沖漁場に於てカヂキ漁中 12 日午前 11 時山為なす巨浪を避け損ね・・水夫長村里清治(与那国　39)・・は海中に没してしまい・・附近海上の捜査も空しく死体の収容も出来ないので報告のため一応母港に帰港した。」(1951.03/19・与那国新聞・「突船船員又遭難、続発する海の犠牲」)

※4.「宇登野城井上重行氏所有のずい徳丸は先月 24 日せん角列島方面へカジキ漁に出漁した

が同島附近で遭難、去る 4 日宮古籍のかもめ丸に全員無事救助平良市に入港したと警察へ入電があった。船体は破損流失した。(1952.03/07・八重山毎日新聞・「遭難漁船、2 つ」)



魚釣島堀割沖に碇泊中のカジキ突船基本丸
琉球大学・資源局調査の用船で活躍　(新垣秀雄.1952.4)

※5. 尖閣諸島附近にダツ漁で出漁した沖縄船籍生徳丸(乗組員 12 名)は僚船 6 隻と共にダツ操漁中に遭難、行方不明となった。「・・生徳丸はバロメーター等を波にさらわれる九死に一生を得て宮古に辿り着いたとの入電があり遺族をホツとさせている。同船の僚船は6 隻で尖角列島で操漁中であつた。」(1952.12/04・八重山毎日新聞・「生徳丸宮古で無事」)

※6.「軍では尖閣列島魚釣島とラサ島(いずれも無人島)に新たに測候所を設置、観測網を拡充する計画のようでこの程、中央気象台に予算見積を提出するよう要請してきた。これは軍の予算で琉球気象台に業務を代行させるものと見られ、何れも気象観測の重要前しょう地点だけに台風の早期発見、予報に大きな成果をもたらすことになるので気象台でも是非実現したいと張切っている。・・」 (1953.03/20・琉球新報・「台風の前哨地点、魚釣島とラサ島に測候所。軍が計画」)

その顛末として「1953(昭和 28)6.25 ラサ島及び魚釣島の気象観測施設について 3 月から米軍第 15 気象隊・軍政府・琉球政府及び琉球気象台との間に文書の往復があった、検討した結果、職員の配置難と運営維持の困難により取止める旨民政府に回答」(「沖縄気象台百年史」沖縄気象台編、1990.3、p272)とある。

※7.「4 年も不漁続きをかこっている郡下 20 余の鰹業者らは・・思案投首であるが、宮古では早くも先幸よしの情報があり、尖角列島附近に出漁した帰島者の話によれば、魚群の遊泳が多数見られ例年より様相が変ってきている等々の朗報も伝えられ・・昔から黒潮の関係で宮古が大漁をみれば、八重山もおこぼれがあるといわれている。北上する黒潮から支流が宮古、八重山の中間沖にあり、ここに鰹群が乗ってくるものらしく、業界では資金の準備や出漁整備に忙殺されている。」(1953.04/29・八重山毎日新聞・「鰹業今年は大漁を予想」業界展望)

※8.「水産立国とかが叫ばれていながら毎年水産部門の予算は余りに少ない・・政府予算総額の僅か 0.64%であり水産人が嘆くのも無理はない・・まず 627 万円の事業予算から目新しい事業をみると・・尖角列島の鯖資源の発見により鯖漁業の奨励費 134 万円―を取り上げているが、日本からの技術者を招聘し・・鯖羽釣の漁法を導入する計画・・試験船と民間船を利用し技術習得希望者を実施に指導する・・その他尖閣列島を中心に資源調査費 20 万円がくまれている。従来多様性の魚が少なかった為、この新しい鯖釣漁法が普及すれば将来貴重な漁業となる可能性があり期待されている。・・依然として悩みの種は水産試験船の購入であり・・今年度もチャターで試験する以外に方途はないようである。(1953.08/19・沖縄タイムス・「尖閣列島の資源調査。悩みの種は試験船」)

※9.「李ラインを追われた本土漁船は優秀な設備と資金にものをいわせて琉球近海に殺到する。・・地元漁民はジリ貧の一途をたどり拱手傍観より外術なく・・問題視されている宝庫漁場尖角列島はサバ、カジキの魚ろう期で、電探装置の本土船の独壇場となり本郡の漁船は設備の不完全な突き船 7、8 隻にしかすぎない・・どの程度関心をもって政府が対策を講じるかが問題である。・・・喜舎場追漁協専務談＝根本問題は資金で政府で、真剣になって水産業を援助すべきだ。水産発展の害をなす党的感情の争いを捨てゝ単協全漁民一丸となって対策を講じなければならない問題だ。」(1954.02/10・八重山毎日新聞・「水産界は叫ぶ、日本漁船にどう対抗する。政府の積極的援助を、現状では地元漁民ジリ貧一途」)

※10.「与那国船籍大安丸(30 馬力＝船主宮城太次郎氏＝船長上原秀雄氏)は・・尖角列島へ出漁でカジキ 10 本をつってなお操業続行中・・舵が折れ・・1 月 1 日朝 6 時頃無人島アジンコート中の島に漂流・・船にあった米、野菜類を集めて命をつないでいたところ・・7 日、台湾漁船 2 隻が初漁に出たとみえて・・やっと発見された。宝成丸一号(船長浜川某)宝成丸二号(船長浜川太郎氏＝いずれも宮古人)の台湾漁船・・9 名の遭難者を 2 隻に分乗させ、沖縄船に・・めぐりあわず 11 日の朝尖角列島に到着してみると・・日本船 12 隻、八重山船籍福輔丸(船主内間安助氏＝船長糸数竹市氏＝21 トン)等が出漁にきていたので同福輔丸に便乗 12 日全員与那国に生還することが出来た。」(1954.02/07・八重山毎日新聞・「大安丸出漁中遭難、船体木ッ葉ミジン、無人島に漂着台湾船が救助」)

※11.「・・昨年の 1953 年頃から日本で盛んに行われ好成績を上げている鯖はね釣漁業が、この年の 3 月 18 日から政府で招聘した 3 人の技術者によって、技術講習会が各群島で行われた。その翌月の 4 月は宮古漁連が招聘した。宮崎県の鯖はね釣船共和丸の大漁により鯖の好漁場が近海にあるのと、その有望性が実証された。更に 7 月には長崎県の試験船鶴丸が来航し、琉球水産研究所と共同調査が行われ、それにより好漁場が多くある事が確証された。それで政府でも早速これが施設費に対して相当額の補助金を交付して奨励した。そして 7 月には糸満の金福丸が鮪延縄漁業から鯖はね釣に業態転換し、鯖はね釣漁業の第 1 号として好成績を上げている。」(水産業戦後十年の歩み　琉球政府)

※12. 琉球水産株式会社(那覇在、1951 設立)は、与那国に製氷工場設置を計画、尖閣出漁に一大貢献すると期待された。「なお計画中の与那国製氷工場は 5 月中までに竣工敷地は久部良港に構想・・予算は250 万円で、日産 5トン製氷、50トン冷蔵、100トンの貯蔵装置で、これで尖閣列島への距離も近くなり、漁業者を活気づけている。」(1954.02/13・八重山毎日新聞・「久部良に製氷工場。尖角出漁に一大貢献、5 月頃竣工」)。ところが同計画は頓挫した。「・・即ち琉水社による設立計画の冷凍庫は・・建築許可も済み、いよいよ着工となって・・町当局は敷地提供を拒み・・・・遂に琉水社では役員会議を開いた結果、冷凍施設は一時保留、それに代わるべき事業として・・大型マグロ船の建造を計画、近く与那国近海、尖角列島方面で操業の運びとなった。

同船は冷凍設備を施した近代船で切角の冷とう庫保留問題は換金ろを封じるものだと地元漁民を憂うつにしているもよう。」(1954.11/17・八重山毎日新聞・「大型マグロ漁船建造。近く与那国近海へ出漁」)

※13. 尖閣諸島近海で操業中の突き棒船(第三清徳丸 15トン、沖縄本島船籍 8 名)が、台湾旗を掲げたジヤンク船 2 籍に銃撃され遭難。船長は射殺、残る 7 名のうち 3 名は僚船第一清徳丸に保護、他 3 名は後日宮古に生還。なお当時は第三・第一清徳丸 2 隻の他、別の突き船基本丸、新福丸も近海で操業、両船も同ジヤンク船 2 籍に追われたが、両船は船足が速いため無事逃れることが出来た。この悲惨な事件は尖閣諸島へ出漁していた漁民を驚かせた。

「・・第三盛徳丸襲撃事件について民政府は 3 日緊急会議を開いて対策を練り、軍も直に現地を鋭意操作を開始する一方琉球政府では『同水域内に出漁又は航行を差し控えるよう』、1 昨日地方庁あて住民への通達方を指示してきたが、目下カジキ漁の最盛期を控え、出漁準備中の『突き船』の悩みと不安は深刻なもの。・・尖角列島を目ざして待機している『突き船』は 5 隻、1 日てい泊すれば1隻 1500～2000 円の出血だ。某船長は『積込みを終え出漁しようとしたら、この事件だ我々の領海でありながら自由に操業出来ないのは遺憾だ早く事件の解決を見ないとこのかき入れに家族は干し乾きになるんだが』と暗い顔」(1955.03/06・八重山毎日新聞・「漁船襲撃事件、尖閣列島水域の出漁差控えよ。不安水産界をおう、かき入れを前にため息をつく漁船」)

尖閣諸島海域で海賊船に襲撃された突船第三清徳丸
(琉球政府文書「船舶登録に関する書類」より)

この憂慮すべき事態に対し、沖縄漁協連合会は、「・・この事件は事件発生現場が領海内であること、並びに琉球近海に於いて最も優れた漁場であること、しかも今尚同海上にはジャンク船が出没していること、更に噂によれば、琉球漁船が同漁場への出漁を差し控えておるのに反し、台湾の漁船が同漁場近くで操業しているという点に於て等閑に出来ない重大事件で

あると思料致します・・。」(「琉球政府宛陳情書　第三盛徳丸事件について」 沖縄漁協連合会 1955.06.15)。（同事件の経緯は、「Ⅵ. 補足、尖閣諸島をめぐる動き、1、台湾漁民の不法入域・操業」参照）

※14. 米国民政府係官は、「・・昨年 7 月サバ船導入とその成功により 5 隻の琉球漁船がサバ船に切り換えたがうまくいかなかった。残念に思うのは大切な魚群探知機がなく 2,3 回出漁したが漁獲が少ないため興味が失せ、負債が多くしなっている。その責任は水産課にある。」（1955.03/19・八重山毎日新聞・「水産行政を痛烈非難。沖漁連総会で民政府係官が、水産業に熱意なし、振わぬサバつり漁」）としたため、琉球政府は漁船の近代装備、魚探導入の水産奨励補助を行った。「・・平良市字下里 36 番地武富盛市氏（漁業）から行政主席あてきのう『水産奨励補助』の申請・・これは宮古最初の魚群探知機購入のため・・冬期は『さば釣り』夏期は『かつお釣り』の 2 本建で年中をフルに使って就漁しようとするもの。武富氏は先に本土の造船所に卅屯級の新造船を発注、・・魚群探知機を整備し、科学的装備で近海にワンサと遊泳する『サバ群』を漁かくするもので、宮古に於て画期的なものとして期待されている。政府としては・・こう入補助申請に対し 4 ケ諸に許可する方針・・サバ漁場は尖角列島から南九州を結ぶ線・・朝せんの斎州島までの圏内で、宮古島から一昼夜北方に航行すればすぐ漁場にぶつかる・・漁かく実せきは上々で、魚群探知機のそう備によれば漁かくはグンと上るものと見られている。」（1955.09/29・宮古毎日新聞・「探知機で『さば釣り』、武富氏が宮古最初の計画」）

※15.「・・こう尾島近海は沖縄でも指折りの好漁場として漁船の出入りが激しかった所だが、爆撃によって魚族が死滅、魚巣が破壊され、・・魚群の回ゆう路が移動するのではないかと憂慮・・経済局水産課は爆撃演習場を民政府と接渉を進めている・・次に予定されている演習地は赤尾島で、尖角列島から約 100 マイル離れたところにあるので漁場に与える爆撃の影響はなくなる。・・水産課友寄生産係長の話によると、沖縄の漁業はさばつりに転換していこうとする今、・・魚つり島近海は最良のさば漁場・・近接したこう尾島で米軍が爆撃演習を行い禁止区域となっているので漁獲に従事することが出来ない。・・演習地を変更することが出来たら業者にとっても喜ばしい・・なほ関係者は民政府との接渉について恐らく演習地は変更されるだろうと期待している。」（1955.11/10・宮古毎日新聞・「“荒らされる黄尾島漁場”爆撃演習区域変更訴える」）。同報道の翌日 11 月 12～14 日の演習に続き、12 月には 9～13、15 日の 6 日間にわたる爆撃演習が予告された。（1955.11/23・宮古毎日新聞・「再び黄尾島で、爆撃演習を行う」）

※16.「八重山地方庁から工務局へこのほど赤尾島の行政管轄が不明であるので、その所属を調査のうえ通知してほしいと照会があり・・琉球船舶規則に拠る船籍地域としては宮古地方庁の所轄になっているが・・同島の所管区域がハツキリしないもの。赤尾島は尖閣列島内にある断崖絶壁（270 尺）の無人島で周囲は 10 町足らず、燐鉱とマグロ漁場で知られている・・。」「（1956.02/23・琉球新報・「赤尾島、所管不明で宙にうく。八重山地方庁から管轄照会」）。この管轄問題に対し

「・・八重山地方庁から新たな報告があり・・同島は大正 10 年 7 月 25 日付で内務省所管により当時の沖縄県庁が「大正島」と命名し次の通り登録している。「石垣市字登野城 2394 番地」「官有」従って「大正島」の行政権は石垣市に所属している・・。」(1956.03/16・琉球新報・「“赤尾島”の石垣市の所管、大正 10 年に大正島として登録」)。なお、米軍政府は、同新聞報道から 1 カ月後の 4 月 11 日、新たに同島を演習区域に指定した。

※17.「・・尖角列島魚釣島東方役 70 米海上で糸満船籍漁船OF第三栄丸(10.16ﾄﾝ)―船長糸満町 3 区 1 班 57 号金城亀太郎さん(54)―がダツ魚追込み操業中に、三角波を強く左げん受け、船体が右にかたむいたため・・補助燃料タンクがエンジンのシャードパイプにあたって横転、エンジンが停止し・・リーフに打上げられて座礁・・海水がエンジン部に浸水沈没した。船長外乗組員 6 名は泳いで魚釣島にあがり無事救助されたと・・糸満港に帰ってきた船長金城さんが糸満水上派出所に届け出た。船主は糸満町7区 2 班 4 号金城徳一郎さん(50)で損害は 13 万円。(1956.03/17・沖縄新聞・「漁船、魚釣島で遭難。船員は無事泳ぎつく」)

※18. 琉球の水産物入過は 1 億 5 千万円(軍票B円)である。魚缶だけで半数に達し、うちサバ缶は全魚缶の 30%、5 千万円を占めている。尖閣諸島等の豊富なサバ漁場を有していながら、サバ缶は本土から移入している。「・・先決問題は琉球内の消費をまかなう事だ。幸いに八重山は水産資源に恵まれ、特にサバ漁場は全琉一の漁場をもっている関係上業者が一体となってサバはねつりの研究をなすべきである。・・輸入缶詰の主体を占めるサバの加工に重点を置き、政府が遠洋漁に対して長期融資をなせばシビ等を逆に日本に輸出する事が出来る。・・」(1956.04/19・八重山毎日新聞・「水産国琉球が泣く、水産物入超 1 億 5 千万。基本施設の整備、遠洋の長期融資・漁業界の声」)。琉球缶詰会社はサバ缶製造に意欲を示し、長崎県に対して原料入手技術協力の申し入れを行った。「琉缶の大城社長、林発工場長が・・八重山において 9 月～5 月までの同社工場休期をさば、はねつり缶詰製造に向けるため原料入手の方法として技術導入が可能かどうかについて種々の意見をきいていた・・長崎県では・・琉缶詰の申し入れに協力したい。しかしさば缶詰が永続的に可能かどうか八重山を根拠としたまき網漁業またはさばはねつり漁業の操業試験の結果を見ねば決定しかねるとして一応地元と共同試験を実施したい・・①試験操業の種目はまき網漁業又はさばはねつり漁とし①期間は約 3 カ月長崎県では試験操業船の外に水産試験指導船鶴丸の派遣を考慮中など、・・。」(1956.05/19・八重山毎日新聞・「八重山近海、漁場共同調査したい。長崎水産商工部が、琉缶に申入れ、永続的操業可能かどうか。是非提携したい、業界の協力を」)。なお琉缶社は 1955 年 6 月石垣市に設立され、パイン缶製造が主たる事業である。後続の報道がないことから琉缶社によるサバ缶製造計画は頓挫したと推測される。

※19. 米軍は1956年4月11日、大正島(赤尾嶼)＝国有地を演習区域に指定した。(「季刊『沖縄』 特集尖閣列島第 2 集、第 63 号 p269」参照)

なお、射撃演習実施は以下の新聞報道がある。「民政府の予定表により 10 月中の実弾射撃演

習を赤尾礁と大東島無人島で実施することになっている。赤尾礁＝10 月 10 日、11 日、12 日、午前 6 時～午後 6 時・・赤尾礁は東支那海の尖角列島境界内にある・・5 マイル以内の海洋は事前警告を発せず射撃演習が実施される、恒久的危険区域となる」(1957.10/11・宮古毎日新聞・「沖の大東島等で米軍が実弾演習」)

新たに演習区域に指定された大正島(赤尾嶼)
(奥茂治.2000)

同島海底には砲弾が散乱
(比嘉健次.1971)

※20.「採貝のため尖角列島に出漁したはずの小型漁船が・・5 百哩彼方のプラタス島まで船足をのばし、貝類、海人草を積み、取締り官庁の目をかすめて・・入港したが、これが現地商社から経済局への連絡で発覚、南方出漁に再び暗影を投げかけ注目されている。船籍石垣の永福丸（19トン）船主船長玉城亀長氏（47）―さる 4 月 14 日・・採貝の目的で乗組員 19 名で尖角列島附近に出漁去月 24 日貝殻千斤、海人草 5 千斤積んで帰港した。ところが最近富亜公司（台湾）から経済局への報告によって・・判明したもの。・・」（1956.07/24・八重山毎日・「許可なく南方出漁、永福丸に経済局も重視」）

この種の違法事件として「延縄漁業目的で・・尖角列島へ向け 10 日間の予定で船出した昌安丸（19トン）・・布令 148 号（琉球列島外航行）の違反の疑いで・・船主伊豆味外関係者 17 名を逮捕、厳重操作中。」（1957.01/23・八重山毎日新聞・「尖角列島へ出漁とは真っ赤なウソ、ルソン島で悠々採貝、関係者 17 名八重山署で取調中」）

※21.「沖之島水産社長照屋女史は・・宜野座経済課長と共に西表島に渡り浦内、白浜、船浮の各地を視察・・尖角列島えの漁業基地調査のようで・・照屋社長は現地へ 7 月頃母船を廻航きせしめ試験操業を行うと宜野座経済課長に約したがこれが実現すれば本郡水産界に一エポックを築くことになる。宜野座課長の話＝・・尖角列島のサバ、アジの漁労が目的である魚群探知機をつけた母船で操業をやるが使用するキンチャク網は長さ 750 間、巾 75 間で八重山からは追込業者が従事する、ここに待望の近代式漁法が八重山で照屋社長の手により初めて行われる事になるわけだ」（1956.06/27・八重山毎日新聞・「尖角中心に漁労。魚探母船で沖之島水産進出」）

後続の報道がないことから沖之島水産社による尖閣諸島でのサバ、アジ漁業計画は実施されてないようだ。

※22.「・・戦後はじめて行われたサバ漁業は沖縄の水産史にとつてまさに画期的である。最初もサバ一本つりの跳ね釣漁法が入り、ついで今年流水社の手で、サバ棒受網が導入され、今同社のサバ漁船は多くの本土漁船に伍しながら 1 航、6 万斤も 7 万斤もあげてくるといった好調さである・・・今、さば漁業しているのは、琉球水産会社の船 4 隻なのだが、5 月の漁期に入ると同時に、10 日位の間に、20 万斤・・1 日平均、2 万斤ずつのさばをあげたことになる・・魚だけの卸市場である泊市場に出る魚の数量はこれまで、1 日平均 1 万 5 千斤程度・・2 万斤のさばだけで、卸市場の 1 日分以上ある・・八重山の北にある尖閣列島の北、90 マイルほどの地点にある海からとったものであって・・・」(「沖縄と魚」大浜英祐 1957.12、p59～60、72～74)

琉水社が誇る海の幸　サバの水揚　“新漁場開拓”
(1957 年度「琉球水産株式会社」の広告より)

※23.「日帰り操業はすでに時代おくれ、氷を積載 2～3 日泊りで尖閣列島附近まで足を伸ばして鰹を釣ろうとし業者は暫時大型船に切り替えつつある。篠原光次郎氏は予てより宮古造船所で新造船基本丸(18 トン)を建造中のところこのほど進水、一昨日石垣港に廻航した、同船はヤンマーディーゼル 75 馬力を取付け時速 8.6 哩を誇る優秀船、建造費は船体、機関共に約 150 万円を要しており篠原氏は近く政府補助を申請する。」(1957.05/19・八重山毎日新聞・「鰹の近代操業へ。篠原氏の基本丸」)

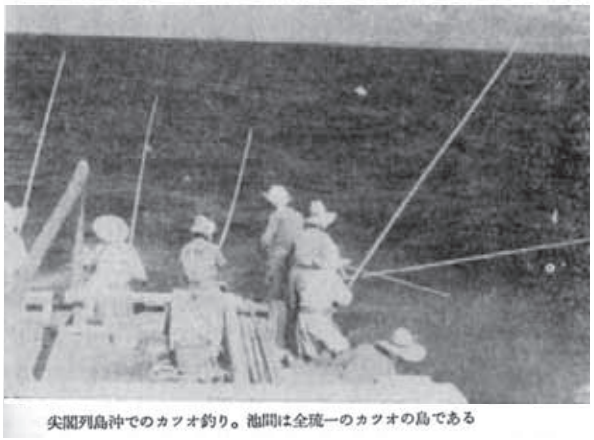
※24.「1957.6.22、『魚釣島への漁港設置に関する請願』宮古漁業協同組合代表　天久恵秀他 2 名、第 10 回、琉球立法院定例 42 号(1957.9.27)公報(号外)」がなされている。

1958 年 2 月の新聞は、尖閣諸島でのカツオ漁に成功、漁船続々大漁と報じ、南小島に仮工場を設けて、鰹節を製造している(※25,26 参照)。このような宮古漁船の尖閣諸島での活発な動きに伴って、宮古漁協による『魚釣島への漁港設置に関する請願』がなされたと考えられる。琉球立法院会議録には同請願文は掲載されておらず、請願内容は詳らかでない。

なお、1952 年の尖閣諸島学術調査団は、魚釣島への漁業施設を以下のように提言している。「・・資源的立場からみるならば冬期漁場としての価値を認め得べく、更に給水設備、気象観測所、暴風設備を施すならば漁場としての価値を一層高めることができよう。」(「尖閣列島の動物相につ

いて」 高良鉄夫 琉球大学農学部学術報告第 1 号、1954.4)

※25.「冬期カツオ業が成功し、転業問題まで出されて暗い表情の漁村に明るい希望を与えている快ニュースがある。さる 1 月 10 日に先角列島で、冬期カツオ漁業のため、出港した幸洋丸（船主前泊力氏）は大漁して・・この外同出りょうの同隆祥丸（船主奥平幸三氏）も大漁しているという連絡があり、冬期漁業の期待は大きい。」（1958.02/05・八重山毎日新聞・「宮古版、冬の鰹業に成功、漁船続々大漁」）。



池間漁民の尖閣諸島沖でのカツオ漁光景 1961 年頃?
(「沖縄池間島民俗誌 野口武徳」より)

※26. 前掲「冬の鰹業に成功」の記事に「・・幸洋丸（船主前泊力氏）は大漁して、同列島でカツオ節に加工して去る 26 日帰港した。カツオ節は 1 万 1 千斤製造されており・・」とある。

1958 年 1～2 月頃、宮古伊良部の「幸洋丸」（31 トン）・船主前泊力氏と同「隆祥丸」34 トン）・船主奥平幸三氏、宮古平良の「進漁丸」（30 トン）・船主洲鎌蒲四郎氏は、尖閣諸島の南小島に、3 箇所に各々仮工場を設けて、鰹節製造を行った。

幸洋丸・船主前泊力氏

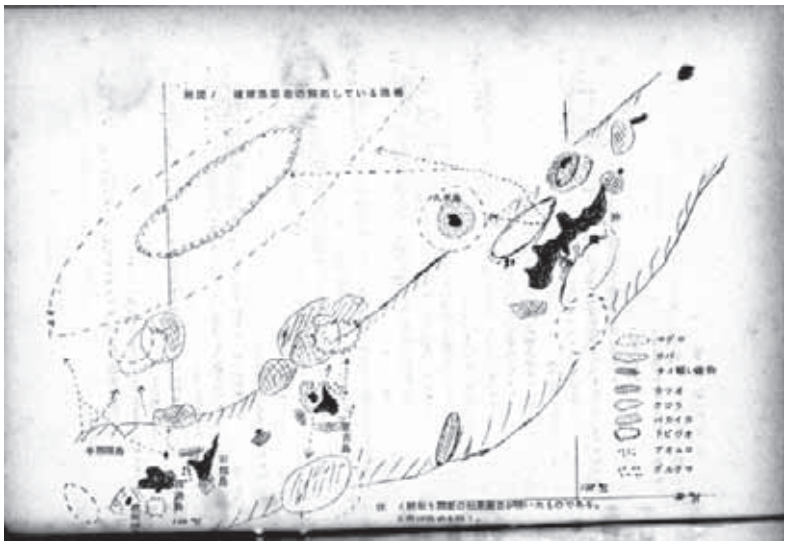
隆祥丸・船主奥平幸三氏

南小島に仮工場を設けて鰹節を製造

進漁丸側の渡真利浩氏は当時を次のように回顧している。「尖閣へは 25,6 人位で行った。・・幸洋丸と隆祥丸の人たちと一緒にトリシマでやった。・・・海岸近くの、昔の工場跡は石垣が一杯積んであった。・・テントを、石垣を利用して張り、小屋(仮工場)を建てた。・・鰹節の製造は・・潮水で炊いた・・全行程に大凡 10 日位・・製造人は 3 名、・・他の 2 つの工場の製造人も、私たち同様 3,4 名位、漁する人も 22,3 名位・・向こうで造った鰹節は 1000 本位だったと思う・・。」(宮古島漁協・渡真利浩氏から聞き取り)、詳細は「Ⅱ、漁業者への聞き取り」参照。

※27. 1958 年4月、水産庁から岡伯明・井田家基氏が派遣され、沖縄の漁業調査を行った。調査結果は「琉球漁業の概括的調査報告」（琉球政府経済局刊）として刊行されている。

同調査報告には、尖閣諸島の漁業の記述はないが、漁業関係者から聞き取り調査して作成された「琉球漁業者の開拓した漁場図」があり、尖閣諸島海域の漁場は「カツオ、タイ類、トビウオ、マグロ、サバ」が記されてある。



琉球漁業者の開拓した漁場図　　(「琉球漁業の概括的調査報告 1958」より)

※28. 尖閣諸島地主古賀善次氏は、戦時中、日本本土へ疎開、東京に居住していた。

米軍政府(琉球列島米国民政府USCAR)が、久場島（黄尾嶼）を爆撃演習地に使用していることを知り、1958 年に賃貸契約を願い出た。米軍政府は、古賀氏の申請を受理、賃貸契約を締結した。「久場島の軍用地基本賃貸借契約書 (1958.7.1)、GRI Nr. 183 この賃貸借契約書は 1959 年 1 月 20 日から施行された 1959 年 2 月 12 日付高等弁務官布令第 20 号『賃貸権の取得について』の規定に従い、1960 年 1 月 18 日、東京都北区港野川 7 の 46 に居住する古賀善次と琉球列島政府との間に締結され、次の通り規定する。以下略・・」(「季刊 『沖縄』 特集尖閣列島、第 56 号、p142～149」)。その結果、米軍政府は、古賀善次氏に対し、1958 年度軍用地料年額 5,763ﾄﾞﾙ(毎年変動)を支払っている。

※29.「・・サバ漁業は私の会社（琉球水産株式会）で、昨年すでに 2 百万斤ほど水揚げし、今年、3 百万斤の計画である。サバという新しい漁業は軌道にのってきた。現在、90 屯の船でも、1 航 5 万斤あげ、50 屯の小型船でも 3 万 5 千斤平均をあげてきている。しかし、今のところサバ漁をしているのは私の会社 1 つで、現在、150 屯、120 屯、50 屯の 4 隻が動いているにすぎない。ほかに個人船主の 130 屯級 1 隻いるだけである。海のあらい冬にサバは大漁するので、小型船では無理だから他の船主たちが手をだしかねているのであるが、もったいない資源である。

内地からはサバ船 300 隻ほどのサバ船が琉球の近海へ押しよせている。ここにも漁船の大型化が必然的である。・・」(1959.01/01・八重山毎日新聞・「漁船の大型化が先決、－琉球の漁業への

雑感―、大浜英佑」)。

このようにサバ漁業は大いに期待された。が、1960 年には終業してしまう。琉球水産社の長嶺彦昌社長はこの経緯を次のように述べている。「本県では 1955 年頃にサバ漁業を始めた。・・宮古、八重山の漁業者が尖閣諸島の海域でサバを釣っているとの情報が入り、・・1957 年に 150 トン船の許可を得て事業にとりかかった。1957 年～58 年は最盛の年であった。それが 1959 年頃から魚群がまばらになり、1960 年には企業として成立しない状況になってしまった。」(「漁場利用調整対策会議報告―尖閣諸島海域の漁場利用について―」昭和 53 年　沖縄県農林水産部p 44～46)。

新しい大衆サバの生産に活躍する本社！！
沖縄の基幹漁業になると、期待されていたが・・・。
(1958 年「琉球水産株式会社」の広告より)

※30.「八重山近海の深海漁業資源は、未だ荒れていないので、この面への進出は鮮魚の輸出対策さえできたら有望である・・活動範囲も多良間南方より与那国の周囲、光(尖)閣列島より東支那海に豊富に連なっている・・この漁獲物の処理対策として台湾へ輸出し台湾より米、茶、その他の琉球の必需品を受け入れることによって解決できるなら八重山の深海漁業は大巾に延びるだろう。・・」」(1959.08/31・八重山毎日新聞・「八重山水産業の今昔と将来⑤、仲本信幸」)。

※31.「・・消息を絶った豊洋丸(16 トン)は、その後、軍民共同で空と海から捜索を続けているが、6 日午前現在までいぜん手がかりも得られず、15 名の乗組員の生死がきづかわれている。・・・同船は姉妹船金生丸とともに赤尾礁をへて黄尾礁に向かう途中、とつぜん季節風におそわれたもの。

22 日午後 8 時頃ごろ赤尾礁から約 20 マイル・・地点で、2 船は波にもまれて別々になり、それっきり消息を絶ったという。同船らはシジャー(ダツ)の追込み漁業で・・」(1960.02/06・琉球新報・「豊洋丸いぜん手がかりなし」)。

尖閣諸島にダツ漁で出漁、消息を絶った豊洋丸(16 トン)
(琉球政府文書「船舶登録に関する書類」より)

（ロ）. 本土漁船等の操業状況

1. 1950 年代の鹿児島県まぐろ漁船は、5 月～7 月は南西諸島～魚釣島近海で、クロマグロ、カジキ、サメの捕獲を目的に操業。※1

2. 1952 年 3 月、高知県漁船「達見丸」（57 トン）が、尖閣諸島・与那国方面へ出漁、2 万斤余の漁獲を揚げるも、帰港途中、波照間島附近で遭難。※2

3. 1952 年 4 月、尖閣諸島学術調査（篠原光次郎氏所有カジキ船「基本丸」で渡島）に参加した多和田真淳氏は、発動機船 5.6 隻がシケで避難、2 本マスト漁船 1 隻の航行を記している。※3

4. 同上、八重山紙は「尖閣列島へ調査団、日本漁船は既に基地化、調査から施策へスピード要す」（1952.04/04・自由民報・コラム欄）と時事短評する。※4

5. 1953 年 4 月、琉球警察隊の警備船「あかつき」は武装し、密貿易・海賊船取締りで再度、尖閣諸島へ向かうが海賊船は見あたらず、本土漁船・宮古漁船が操業、本土漁船はエサ釣のため集魚灯を照らし不夜城の様と報告。※5

6. 1953 年 12 月、韓国李ラインから締め出された西日本各県のサバ漁業者は、南方東シナ海・魚釣島近海に新サバ漁場の調査に乗り出す。千葉県 18 船主らが大型漁船団派遣を検討、長崎県漁船 3 隻は琉球側との共同経営を希望。※6

7. 1954 年 2 月、尖閣諸島付近は本土漁船でざわめく、愛知県漁船太和丸（62 トン）はカジキ及びエサのサバ漁中、機関故障で石垣港へ寄港、臨検船に“元気でゴワッサイ”。※7

8. 1954 年 3 月、米軍の久場島近海の爆撃演習に対し、長崎県では廃止を陳情、鹿児島県では「八重山近海演習地反対・吉田内閣打倒県民大会」を開催。※8

9. 1954 年5月、長崎県の調査船が、尖閣諸島方面で 2 日間操業、約 8 千貫大漁して帰港、これを受け本土大型漁船 40 隻が同諸島近海への出漁を計画。※9

10. 1956 年 1 月、大分県突棒漁業組合（カジキ漁）が、魚釣島附近へ出漁を再開するため石垣、与那国に前進基地の構築を検討。※10

11. 1956.年 4 月、長崎県が、アジ鯖のまき網漁試験操業の根拠地に久米島、平良港、船浮港の 3 港使用を申し入れる、琉球政府は、民政府布令を検討して困難と回答。※11

12. 1956 年末、長崎県漁船が、魚釣島附近でサバを好漁、茨城県、福島県をはじめ県外船の水揚げは急増。※12

13. 1957 年 4 月、三重県カツオ漁船は、薩南海域漁場として奄美・沖縄本島～八重山～尖閣諸島近海で操業。(三重県水産試験場漁況報告)。※13

14. 1959 年 4 月、鹿児島県枕崎母港にしている宝幸水産のかつお漁船 2 隻（160 トン）は、4～5 月頃、尖閣諸島近海で操業。※14

15. 1959 年 9 月、鹿児島県で、米軍の海上演習撤廃を求め、決起大会開催。※15

16. 1959 年 10,11 月、国会で米軍演習の件が取り沙汰される。※16

17. 1960 年 11 月、本土漁船 3 隻が、魚釣島北方 100 浬～150 浬海域でサバ漁を操業、琉球水研試験船図南丸が報告。※17

※1. 戦後の鹿児島県のマグロ漁業は、規模は小さく、かなりの遅れをとっていたのは伝承的漁場に依存によることも一因であるとし、1950 年代の漁場を記している。

「 1月～4 月　沖縄、大東島北、種子島東方海域　、ビンナガ、クロマグロ
5 月～7 月　南西諸島～魚釣島近海　クロマグロ、カジキ、サメ
8 月～10 月　紀南礁、小笠原諸島、三陸沖合　メバチ、キハダ、ビンナガ
11 月～12 月　東シナ海　カジキ類、サメ　などがある 」

(「鹿児島県水産技術のあゆみ―まぐろ漁業―」山下智明、鹿児島県、2000.3、p42)

※2.「波照間島西側リーフ内へ不幸コースを誤り突入した高知県籍達見丸(船長市川雅義氏)の離礁救出は去る 5 日船員 17 名船舶 2 隻が出動、更に翌 6 日も部落民船員 60 名が全力をつくした。離しよう作業も効を奏せずリーフの間隙にはまりこんでいる関係上全く絶望視されるに至ったので近く民政官府の認可を得て競売されるのではないかと見られている。達見丸は 120 馬力 57 トンデイーゼル機関の優秀漁船、救出に出た島民の垂えん物で、2 月 6 日高知の漁港を出港、せん角列島、与那国南東方面で 2 万斤余の漁獲物をあげ帰航途次去る 3 日午後 10 時ごろ波照間近海に近ずくや降雨のため視野がきかずこの事故となったもの。」(1952.03/12・八重山毎日新聞・「達見丸離しょう絶望、波照間漁民総動員」)

※3. 1952 年 4 月琉球大学・琉球政府資源局合同学術調査団(団長高良鉄夫琉球大学助教授)は石垣のカジキ漁突船「基本丸」で渡島した。一行は嵐に遭い、南小島に閉じ込められた。時化てくる海上の様子を記している。「・・基本丸の帰りを待つ。・・波が逆巻き初めた。・・白い煙が中天に立上つた、魚釣島南岸に 5,6 隻の発動機船が波間に見えかくれする・・。1 時間、2 時間、あゝやつて来た、大波にゆり上げゆり下げられながら、だんだん近づいてきた。よく見ればそれは 2 本マストの日本船らしいもので横目でこつちを見ながら島影に消えた。・・」(1952.06/29～07/15・琉球新報・「尖閣列島採集記 1～17」多和田眞淳)

※4. 高良鉄夫調査団長は「・・同島を基点とする冬期の水産業は世界的価値を有する。即ちカジキ、鰹、フカ、イルカなどの漁獲、日本、台湾から冷凍船が進出している。」(1952.04/29・沖縄タイムス・「尖閣列島学術調査団帰る」)と報告している。地元八重山紙は、時事短評コラム(1952.04/04・自由民報)で、「日本漁船は既に、尖閣諸島を基地化し、盛んに操業しているではないか。今回、琉球政府は調査団を送り込んだが、これら調査をもとに、我々地元漁船も出漁、操業できる漁業施策を、一刻も早く構築・実現してほしい」旨を訴えている。

※5. 当時密貿易船や海賊船が横行していた。尖閣諸島が根城になっているとの噂を聞きつけ、琉球警察隊は取り調べのため警備船「あかつき」を派遣した。「幾多のなぞをひめる尖閣列島へ調査に向った武装警官隊は・・何等得るところなく帰港した。無数に空を覆うアホウ鳥、人間の住めるような処ではなく、全く鬼が島だ。・・日本船がエサをつるため船の周囲に電灯を点けて流しつりを

しているが、10 隻もよれば実に壮観で不夜城だ。日本人漁船や宮古船 2、3 隻いて漁の根拠地にしている。・・漁船 3 隻の臨検をしたが目ぼしいものはなく 9 日午後 3 時引き揚げ、酷い潮流に流され、風の方向が絶えずぐるぐる変わり 21 時間かかってやっと帰港した。・・」(1953.04/11・八重山毎日新聞・「なんら得るところなし、空をおうアホウ鳥、武装警備艇帰港」)

※6. 1952 年1月、韓国大統領李承晩が一方的に設定した李ラインによって日本漁船は韓国側に拿捕され、問題は悪化していた。「・・李ライン問題は・・悪化・・済州島附近の漁場を失った本土サバ漁業者達はその漁場を一挙に南方、南部琉球に向け、すでに土佐、門司、ふく岡、鹿児島各県の水産試験場では近く漁業並びに水質調査に乗り出すと、・・石垣港に避難入港した長崎県水産試験場所属船によって明らかにされ、本郡漁業関係者を緊張させてる。・・李ラインによって・・サバのはねつり漁船が 270 隻乃至 300 隻長さき県だけで 50 隻・・対策には各県とも真剣であり・・来年頃から李ラインを追われた大型漁船が大量、魚つりとう北方 100 哩きん海に殺到すると思われる・・」(1953.12/01・八重山毎日・「来るぞ続々日ぽん漁船琉球近海へ、リ・ライン閉め出されて南方進しゅつ、ねらわれている魚つり島附近、新漁場開拓に血眼」)

その新漁場は魚釣島北方に発見され、西日本各県だけでなく千葉県の大型漁船 18 船主たちも船団も組んで出漁計画していると云う。「・・・新漁場というのは魚つり島をずっと北上長崎列等を結ぶ一線の水域のことで・・このほど鹿児島、宮崎県の漁業者が発見、すでに相当の水揚げがなされており有望であることが確認された・・水産庁でもサバのしん漁場開拓に力を入れている時なので・・しん漁場に活路を求めるよう、神奈川県千葉県などのぎょ漁者にも広く呼びかけ千葉県大型ぎょ船 18 船主たちは来年早早県船団を組んで出ぎょ計画をたてている・・・」(1953.12/19・八重山毎日・「発見されたサバ新漁場(魚釣島―長崎列島間)日ポン水産庁カイ拓にほん腰」)

また、長崎県漁船 3 隻は琉球側と共同経営を希望していると報じている。「・・この程長さき県水産部から、提携の申し入れがあり、なお同県大戸漁協の第十一福住丸(24 トン)同太陽漁協の冨久まる(14 トン)大湾漁協の法栄まる(21 トン)側も共同経営を望んでいる・・長さき県山本水産部長から『試験船つるまる(120 トン)を利用し、16 名の調査員を派遣りゅう球近かいの漁場を共同で調査したい』との事で政府の意向を照会している。」(前掲・八重山毎日新聞・「長崎県が提携申いれ、琉球近海に目指すほん土漁船」)

※7.「・・尖角列島近海で漁労中・・漁船1隻が機関に故障を起こし修理のため石垣港に投錨した。以下は・・船員等が吹きなぐる北風に水鼻をすすりながら語る李ラインを追われ、漁場を求めて続々南下する日本漁船のざわめき・・愛知県籍機帆船太和丸(62 トン)もその類だった。メインマストに日章旗が翻えっている。前部デッキ、両側通路には一ぱい延縄、浮玉等を積んでいる。・・鹿児島港を出港・・尖閣列島に到着、カジキのエサにサバつりを操業したが、水温の関係か漁はふるわなかった。・・それでも翌 2 日・・カジキ 1 本、フカ、サバ等 500 斤位水揚げ、・・機関室から頓狂な声・・クラッチ、ガバナー筒の中部が破損した・・士官協議の結果、石垣港に帰港することにケリ、やっとの思いで石垣にたどりついた・・『沖縄も外国になつて手続きがうるさい・・なんとか寛大にならな

いものか』とは船員たちの切実な悩みだが、『そのため一寸した機関の故障位無理して航海するため遭難しないとも限りません』と真面目に語っていた。同じ日本人だのに歎いているようでもあった。・・臨検終えて同船から離れる警備艇に向かって・・『元気でごわっさい』と名残り惜しそうに別れの言葉をかけていた。」(1954.02/06・八重山毎日新聞・「李ライン追われ南へ南へ、尖角列島にざわめく本土漁船、臨検船に“元気でゴワッサイ”」)〔ニュースストリー〕

※8.「マグロ、カツオ、サバの宝庫として期待されている尖角列島漁場が、2 月から米軍演習水域となったため該附近の入漁困難となり・・長崎県では業者と協力、米軍当局に強力な演習廃止を陳じょうするという騒ぎを起こしている・・2 月 9 日から毎週火木曜 2 回午前 7 時から午後 5 時まで魚つり島東北方から・・5 哩の範囲内で・・入漁禁止となり・・該海域は 1 月～6 月がカジキ、2 月～6 月が鰹、9 月～12 月がサバ、サメ等つり漁業の宝庫とされているだけに打撃が大きく・・鹿児島県では鹿児しま地方評議いん会主催で八重山近海の演習地問題を掲げて吉田内閣打倒県民大会を開いて気勢をあげているが、地元漁業界は至って平穏である。ようやく政府が被害調査にのり出して被害保障を米軍当局に請願するもようだが成行が注目されている。」(1954.03/23・八重山毎日新聞・「尖閣列島、魚場宝庫とられる。水域一帯爆撃演習地。長崎では米軍当局に陳情」)

※9.「・・李ライン閉出しで先に長崎のサバ漁場調査船がせん角列島方面で 2 日間で約8千貫のサバを大漁して帰寄、それに勢いを得て 40 隻の大型漁船が近く大挙せん角列島に殺到すると云う報に設備の貧弱な地元小型船は漁場をあらされることになり『命とり』と悩みは深刻である。そこで同島では去る29 日来島したサバはねつり技術員江口氏の指導でその講習をうけ、かつお業とタイアップさせようとサバの模型を作って一本釣つりの稽古に死に物狂いである・・日本漁船の南進は最大の悩みとされている。」(1954.05/02・八重山毎日新聞・「(波照間)サバの模型で猛練習」)

※10. 大分県の突ん棒漁業は、戦前台湾基隆港を基地に、東シナ海・魚釣島近海を漁場にカジキ漁が活発に営まれていた。与那国や台湾における突ん棒カジキ漁はそれを受け継いだものである。大分県突棒漁協がその再建に乗り出すことになった。「【福岡支局発】300 年の伝統を誇る大分県の突棒漁業を再建するため県突棒漁業組合(臼杵市)では早々東支那海の新漁場めざして再建壮途につく準備を進めている・・戦前は東支那海方面に出漁の際は台湾基隆港を基地として操業を行ったが戦後同基地を失つたため同海域魚釣島付近への出漁はほとんど絶望視されていた。このほど県突棒漁協が・・出漁を計画したため県としても出漁船団に水や氷の供給、荒天の際の避難港を確保する必要から沖縄に漁業基地を設置する方針を決めた。・・石垣島または与那国島が予定され近く正式に水産庁、外務省を通じ琉球政府と折衝に入る・・。」(1956.01/17・琉球新報・「沖縄に前進基地、突棒漁業再建に乗り出す大分県。近く琉球政府と折衝」)。「・・昭和 31 年には、事前の準備を整え、2 月下旬には東シナ海漁場で操業したため、各船平均して大成功を収め、平均 80～100 万円の漁獲をあげ、済州島漁場に代わるべき漁場として突棒漁業の展開は開けた。東シナ海漁場での・・1～3 月は魚釣島漁場、3～5 月は草垣島西方・・。現在では、船が小

型化されたこともあって、東シナ海での操業は行われていない。」(「黒潮の狩人―かじき突棒漁業の沿革」大分県臼杵事務所 1988.3、p20～21、27)

大分県臼杵突ん棒漁船団の出港風景

カジキを見つけると狙いをつけて銛を投げる

(「黒潮の狩人」より　いずれの写真も昭和 40 年代前半)

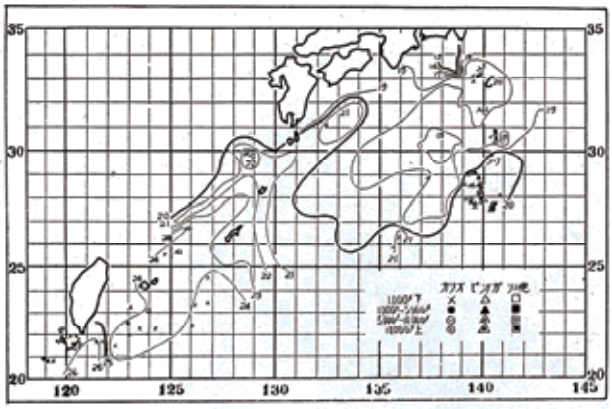
※11.「長崎県水産商工部から政府にアジ鯖のまき網による試験操業の根拠地として久米島、平良港、船浮港を使わしてくれと申し入れがあったが、政府では民政府布令を検討した結果次のように回答することになった。1, 琉球への外国商船、漁船の入域はすべて“商船出入管理令”で処理されている。2、特定港湾の長期使用は現行法規では許可されていない。3、緊急時における入域は国際慣例による。(1956.04/23・琉球新報・「漁業基地提供は困難、長崎の申入れに政府回答」)

※12.「・・昭和 31 年末頃、南方海上魚釣島の北北東の海域周辺に優秀な漁場が発見されたため、サバはね釣漁業も息を吹き返し、本県船はもとより、初出漁の茨城県、福島県をはじめ県外船の水揚げが急激に増加したことで、昭和 32 年の水揚高は 9145ﾄﾝ（310 隻）、33 年は 1 万 6415 ﾄﾝ（717 隻）、取扱金額で 6 億 3700 万円となり、数量、金額とも急増し過去最高を記録しました。」（「長崎県における漁業種別の変遷　沖合漁業―サバはね釣漁業」 2003.3　長崎魚市株式会社編）。他方、「琉水所属の・・サバ船第五琉水丸(50ﾄﾝ)は東シナ海からサバ 1 万 2 千斤を積んで・・1 週間振りに帰った。日本船も 15,6 隻出漁しているといわれ、琉球(水？)丸はエサが切れて帰って来たものでエサを補給して明日出港することになった。・・j(1956.04/02・琉球新報・「どっと入った海の幸、マグロ 10 万斤にサバ 1 万斤」)。なおマグロ 10 万斤は南方チモール付近漁場から漁獲されたものである。

※13. カツオ漁況は、各標本漁船から定期的に漁獲成績を蒐集して作成される。昭和 32 年 4 月上旬の三重県のカツオ漁況は「漁場の形成も昨年度と非常に類似しておりカツオはバシー海峡から八重山列島附近、諏訪瀬島附近にみられる。ビンナガは西の島からソーフ岩SW60 浬附近にかけて・・・」(三重県水産試験場事業報告、第 13 号、昭和 32 年 3 月)、と記しているが、同報告掲

載の漁況図から、三重県のカツオ漁船は、薩南海域漁場として奄美・沖縄本島～八重山～尖閣諸島近海（宮古島寄りの赤尾嶼附近？）で操業していたことがわかる。

昭和 32 年 4 月上旬・漁況海況図 →
(「三重県水試事報」 第 13 号より)



※14.「宝幸水産といえば、日本の水産5大会社の 1 つである。そこに鰹船（160 屯級）が 2 隻いる。・・この鰹船は、鹿児島の枕崎を基地にして、遠くフィリッピン近くの鰹漁を始めてくる。そして尖閣列島あたりで漁をするのは、4 月、5 月だそうだが、餌はむろん鹿児島からカタクチイワシを仕込んでいくのである。琉球の鰹船が、10 トン、せいぜい 26 トンの小型で日帰り漁しかできないのとは、雲泥の差である。」(1959.01/01・八重山毎日新聞・「漁船の大型化が先決、－琉球の漁業への雑感―、大浜英佑」)

※15.「米軍が一方的に設けた沖縄海域の広大な永久的演習場問題は本土でも大きな反響を呼んでいる・・鹿児島県議会ではこれをとりあげ漁民は近く決起大会を開き、一方、政党筋でも単に沖縄近海の問題ではなく、日本民族の問題として強く撤廃を要求する動きと伝えられている。・・」(1959.09/23・八重山毎日新聞・「米軍の海上演習撤廃を、鹿児島県が決起大会」)。これに対し、「20 日の東京新聞朝刊は、米軍当局の見解を次のとおり報じている。・・・外務省は・・沖縄駐留の米軍当局に対し、沖縄周辺の公海上における日本漁船に及ぼす影響を照回していたがこのほど公式回答が届いた。それによると米海軍の演習で、日本漁船が沖縄周辺の公海上から締め出されるという那覇放送は事実に反するものである。沖縄における危険区域は海上保安庁の告示通りである。若し日本漁船に影響を及ぼしているなら事実を示してもらえれば検討するというもの。」(1959.10/21・八重山毎日新聞・「日本漁船に影響せず、駐沖米軍の演習に回答」)

※16. 国会においても米軍爆撃演習問題が取り上げられた。「・・黄尾嶼、赤尾島嶼付近・・の漁業が不可能・・本年 8 月 17 日に那覇無線局からの放送を鹿児島県の枕崎漁業用海岸局で傍受・・公海上に設定していた危険区域におきまして船舶の航行及び漁労を禁止・・カツオ、マグロの漁業者は相当の割合をこの放送された海域に依存しており・・この漁場が使用できなりますと大へん困るという趣旨の連絡及び陳情が当庁にあった・・・鹿児島県におきまするカツオ、マグロの関係者の漁場としては依存度が 6 割程度・・サバも相当の損害があろう・・ここで指摘された数字は約 2 万トン、16 億程度でないか・・向こうの演習が今度非常に強化されてこちらの漁業に影響があると・・いたしますれば、その演習のやり方を変えてもらうというような交渉をしなければならぬ・・。」(「第 032 国会

農林水産委員会　第 15 号」1959 年（昭和 34 年）10 月 2 日）

なお、同問題は「第 033 国会　農林水産委員会　第 5 号」1959 年（昭和 34 年）11 月 12 日」でも論議された。

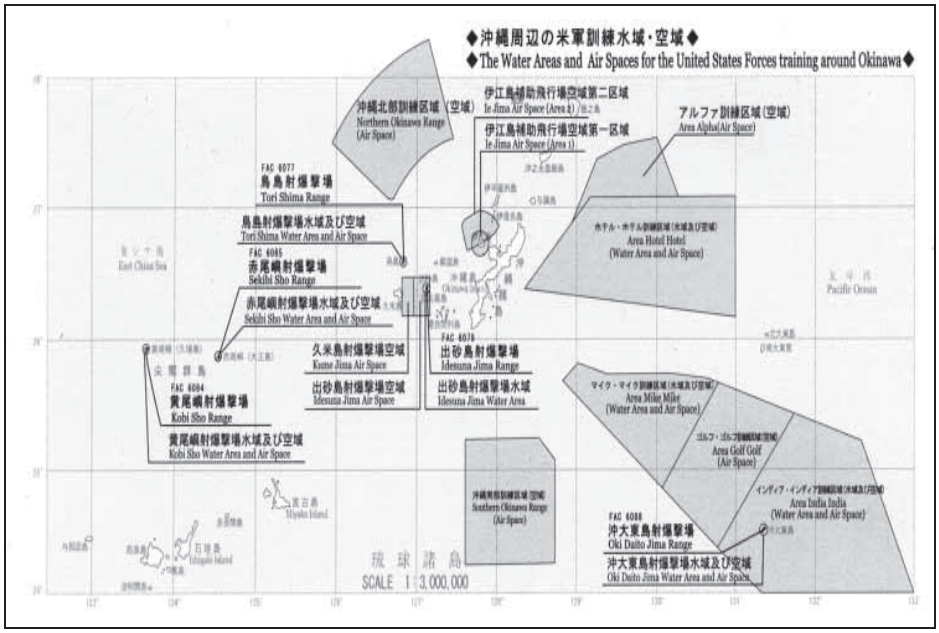
ちなみに、大正島(赤尾嶼)と久場島(黄尾嶼)は今なお、下表の演習海域に指定されている。

○、米軍演習海域(1969 年琉球政府農林局)

位置番号	場所	演 習 時 間	演 習 内 容	摘　　要
19	尖頭列島 赤 尾 嶼	無 制 限	艦砲および対地上演習	島の周囲から5浬半径以内の海域
20	尖頭列島 黄 尾 嶼	毎日 7.00～17.00	対地上演習	島の周囲から 100 ヤード半径以内

（季刊「沖縄」特集尖閣列島　第 56 号　南方同胞援護会　1971.3）より

○　沖縄周辺の米軍訓練水域・空域（平成 20 年 3 月 31 日現在）



(「沖縄の米軍基地　平成 20 年 3 月　沖縄県知事公室基地対策課編」より)

※16. 1960 年 11 月、琉球水産研究所は、試験船図南丸を使い、東シナ海南部の農林海区 534、505, 495 等、魚釣島北方 100 浬～150 浬にあたる海域で、サバ漁場の調査を行ったところ、「・・534 と 524 の中間には稍々濃厚な魚群を発見、釣獲試験を実施した。魚体は 460g～664g 程度、餌付も稍々良好・・・付近には日本漁船 3 隻が操業して居り、1 日 2 千貫程度の漁をして居ると

の報告をうけた。従って今後同方面には夙に日本漁船が来集するものと思われる。・・」(「鯖漁場調査(第1～2 次)昭和 36 年度琉球水産研究所事業報告、琉球政府」)

□. 主な刊行物資料

○、『海軍爆撃演習海域設定について』黄尾嶼爆撃演習の通知 (沖縄群島政府文書、1951.10.19)

○、『水産業戦後十年の歩み』 (琉球政府) ＊サバ漁の記述あり

○、『琉球政府宛陳情書 第三盛徳丸事件について』(沖縄漁協連合会 1955.06.15)

○、『漁場利用調整対策会議報告―尖閣諸島海域の漁場利用について―』(昭和 53 年 沖縄県農林水産部) p44～46 ＊サバ漁の記述あり

○、『沖縄と魚』 大浜英祐 (自費出版 1957.12 p59～60、p72～74)

○、『琉球漁業の概括的調査報告』 岡伯明、井田家基、(琉球政府経済局 1958.4)
＊尖閣海域漁場図掲載あり。

○、『「鹿児島県水産技術のあゆみ―まぐろ漁業―」山下智明、(鹿児島県 2000.3)p42

○、『黒潮の狩人―かじき突棒漁業の沿革』(大分県臼杵事務所 1988.3)、p20～21、27。

○、『長崎県における漁業種別の変遷 沖合漁業―サバはね釣漁業』
(長崎魚市株式会社編 2003.3)。

○、『三重県水産試験場事業報告 第 13 号―かつお漁業報告 昭和 32 年度』(三重県水産試験場 昭和 33 年 3 月) ＊同漁況図には薩南海域漁場図が掲載

○、『米軍演習に関わる国会議事録』(第 032 国会 農林水産委員会 第 15 号 1959 年・昭和 34 年 10 月 2 日)

○、 ―――――― (第 033 国会 農林水産委員会 第 5 号 1959 年・昭和 34 年 11 月 12 日)

○、『琉球要覧』(1957 年度 琉球政府行政主席官房情報課) ＊サバ漁の記述あり

○、『鯖漁場調査(第1～2 次)』(昭和 36 年度琉球水産研究所事業報告書 琉球政府))

○、『資料沖縄経済二十年市』(沖縄教育図書刊行会 1969.10、p68)。＊サバ漁記述あり

○、米軍演習関係資料
『久場島の軍用地基本賃貸借契約書写』(昭和 33.7.1 古賀善次氏との契約書) p142
『米軍の射爆演習地域と範囲』(昭和 44.3.17・米民政府)p150。
『米軍爆撃演習位置図』(昭和 44 年、琉球政府作成)p153
以上 3 点は(「季刊『沖縄』 特集尖閣列島 第 56 号 南方同胞援護会、1971.3」に所収。

□. 主な新聞記事

1951.02/21・沖縄タイムス・「えい航のロープが切れ、闇の洋上で迷子、くり舟の漁夫はと間島へ漂着」 ＊尖閣諸島海域で操業中の糸満漁船遭難事故。
1951.03/19・与那国新聞・「突船船員又遭難、続発する海の犠牲」＊製氷の実現に伴いカジキ突

船漁は活発化、遭難事故が続発。

1951.03/30・うるま新報・「変死の船員を冷凍して帰港」 ＊魚釣島で転落死。

1951.03/31・沖縄タイムス・「冷凍の死体、魚釣島から運ぶ」 ＊同上

1952.03/01・琉球新報・「尖閣の秘境を探る、琉大が学術調査隊派遣」

1952.03/07・八重山毎日新聞・「遭難漁船、2 つ」
＊尖閣諸島へカジキ漁に出漁し遭難した石垣漁船と高知県籍達美丸の 2 隻が遭難。

1952.03/12・八重山毎日新聞・「達見丸離しょう絶望、波照間漁民総動員」
＊高知県漁船が尖閣諸島・与那国南東方面へ出漁、帰路座礁事故に遭う。

1952.04/04・自由民報・コラム欄「尖閣列島へ調査団、日本漁船は既に基地化、調査から施策へスピード要す」

1952.04/29・沖縄タイムス・「尖閣列島学術調査団帰る。新種や珍種発見、“冬期漁場には最適”」 ＊日本、台湾から冷凍船が進出、国際漁場の観と報告。、

1952.05/16・八重山毎日新聞・「台湾船籍東興号取調、沖縄船員も交る」

1952.06/29～07/15・琉球新報・「尖閣列島採集記 1～17」（多和田眞淳）

1952.08/09・八重山毎日新聞・「はるばる高知県の漁船が、本格的採取に乗り込む。脚光浴びるか与那国サンゴ」 ＊1950 年代の与那国沖はサンゴブーム

1952.12/13・八重山毎日新聞・「希有のそうなん事件、生徳丸も行方不明か」
＊尖閣諸島海域で操業中に遭難事故。

1952.12/14・八重山毎日新聞・「生徳丸宮古で無事」

1953.03/14・八重山毎日新聞・「警備艇 2 隻でせん角列島へ」
＊尖閣諸島に出没する密貿易船・海賊船逮捕で出航・巡邏。

1953.03/20・琉球新報・「台風の前哨地点、魚釣島とラサ島に測候所。軍が計画」

1953.04/09・八重山毎日新聞・「再びせん角列島へ昨夕武装警備艇出港」

1953.04/11・八重山毎日新聞・「なんら得るところなし、空をおうアホウ鳥、武装警備艇帰港」
＊日本漁船が尖閣海域で集魚灯を点けた夜間操業は実に壮観、不夜城の様。

1953.04/29・八重山毎日新聞・「鰹業今年は大漁を予想」（業界展望）
＊尖角列島附近に出漁した帰島者が魚群の遊泳を報告。

1953.07/31・南西新報・「昨日尖閣列島へ、研究と指導。琉大農学部生来島」

1953.08/16・琉球新報・「尖閣列島北小島に新資源、群れなす海鳥1千万羽。琉大学術調査団の成果」

1953.08/19・沖縄タイムス・「尖閣列島の資源調査。悩みの種は試験船」

1953.09/10・八重山毎日新聞・「相當な水揚げ。附近はサンゴ樹林、発見者大城氏に一陽来復」
＊上記与那国沖サンゴブーム。

1953.12/01・八重山毎日新聞・「来るぞ続々日ぽん漁船琉球近海へ、リ・ライン閉め出されて南方進しゅつ、ねらわれている魚つり島附近、新漁場開拓に血眼」 ＊サバ漁業関連

1953.12/05・八重山毎日新聞・「本土漁船、電探で漁場活歩、ぼやぼやで来ぬ琉球業界。
＊上掲サバ漁業関連

1953.12/15・八重山毎日新聞・「実弾射撃演習尖角列とう付近」
＊久場島で 12/18～19 実弾射撃演習。

1953.12/19・八重山毎日新聞・「発見されたサバ新漁場（魚釣島―長崎列島間）日ポン水産庁カイ拓にほん腰」＊サバ漁業関連

1953.12/19・八重山毎日新聞・「長崎県が提携申いれ、琉球近海に目指すほん土漁船」
＊上記サバ漁業関連

1953.12/22・八重山毎日新聞・「超音波を利用、漁船大挙新漁場へ」＊上記サバ漁業関連

1954.02/06・八重山毎日新聞・「李ライン追われ南へ南へ、尖角列島にざわめく本土漁船、臨検船に“元気でゴワッサイ”」（ニュースストリー）

1954.02/07・八重山毎日新聞・「大安丸出漁中遭難、船体木ッ葉ミジン、無人島に漂着台湾船が救助。事故続発の与那国」 ＊尖閣諸島附近でカジキ操漁中に遭難。

1954.02/09・八重山毎日新聞・「近海に殺到する日本漁船、いずれも科学的装備を施した優秀漁船、琉球漁業界よしっかり頼むぞ」（ジープ） ＊サバ漁業関連

1954.02/10・八重山毎日新聞・「水産界は叫ぶ、日本漁船にどう対抗する。政府の積極的援助を、現状では地元漁民ジリ貧一途」 ＊上記サバ漁業関連

1954.02/13・八重山毎日新聞・「尖角列島漁場調査に。長崎から大挙くり込む、サバつり漁場として特に注目」

1954.02/13・八重山毎日新聞・「久部良に製氷工場。尖角出漁に一大貢献、5 月頃竣工」

1954.03/23・八重山毎日新聞・「（尖閣列島）魚場宝庫とられる。水域一帯爆撃演習地。長崎では米軍当局に陳情」 ＊2/9～毎週火・木の 2 回爆撃演習

1954.04/27・八重山毎日新聞・「サバつり講習来る 29 日から」
＊波照間、鳩間、与那国、石垣で講習会、終了後、尖閣諸島方面で海上実習。

1954.05/02・八重山毎日新聞・「（波照間）サバの模型で猛練習」 ＊波照間で講習

1954.06/01・八重山毎日新聞・サバハネつり実地講習」 ＊琉水研試験船宮島丸で海上実習。

1954.07/27・八重山毎日新聞・「サバ漁群、尖閣列島近くに多い、鶴丸調査船の調査成果、今後も引続き続行」

1954.11/17・八重山毎日新聞・「大型マグロ漁船建造。近く与那国近海へ出漁」
　＊与那国・尖角列島方面で操業計画。

1955.01/16・八重山毎日新聞・「サバツリ、奨励金など陳情。きのう水産協議会」

1955.03/04・琉球新報・「尖閣列島付近で漁労中、第三清徳丸襲わる。中国旗を立てた怪船 2 隻に。2 名射殺行方不明 4 名、脱出者 3 名が救援依頼。」

1955.03/04・琉球新報・「“ほんとでしょうか”悲報に驚愕する兄嫁」

1955.03/04・琉球新報・「当局鋭意捜索中、所属不明のジヤンク船を。」

1955.03/04・琉球新報・「馬天から出港、乗組員は 9 名（第三清徳丸）」

1955.03/04・琉球新報・「曳航を頼んで接近、悲惨時を語る金城さん」

1955.03/04・八重山毎日新聞・「操業中の第三清徳丸（馬天籍）襲わる、発砲弾受けて金城船長ら即死。遭難船を装いギャングに早変り。ひまわりマークの兵隊海賊、40 名余が拳銃で一せい乱射。新福、基本両漁船ら逃げ帰る。」

1955.03/06・八重山毎日新聞・「漁船襲撃事件、尖閣列島水域の出漁差控えよ。不安水産界をおう、かき入れを前にため息をつく漁船」

1955.03/08・八重山毎日新聞・「生きていた 3 船員、弾痕の本船で無事宮古へ。第三清徳丸襲撃事件」

1955.03/19・八重山毎日新聞・「水産行政を痛烈非難。沖漁連総会で民政府係官が、水産業に熱意なし、振わぬサバつり漁」

1955.03/25・八重山毎日新聞・「新南群島の貝殻取り尽し、3 年後には廃業の憂目。サバつりの転換急務」＊「政府は貝殻船からサバつり船への切り換え計画を進めている」旨。

1955.06/17・八重山毎日新聞・「水産業の前途は多難。暴落した鰹節、サバは消費市場がない。玉城漁連会長帰日土産談」
　＊「折角誘致した“サバはねつり”も消費市場がないため不振」としている。

1955.10/05・宮古毎日新聞・「黄尾島で射撃演習、来る 10 月から米軍が」

1955.10/31・宮古毎日新聞・「漁群探知機でサバハネ漁業　玉寄正雄氏が計画」
　＊池間船籍弥栄丸(30 トン、玉寄政雄船長)が計画、地方庁へ補助申請。

1955.11/03・宮古毎日新聞・「黄尾礁を艦砲射撃、船舶の航行に注意」

1955.11/10・宮古毎日新聞・「“荒らされる黄尾島漁場”、爆撃演習区域変更訴える」

1955.11/12・宮古毎日新聞・「“鰹漁一辺倒”に転換期、だが業者は資金難の悩み」 ＊資金面さえ解決出来れば漁場も近く、年中フルに操業できるサバはねつり漁業への転換は容易。

1955.11/20・八重山毎日新聞・「市に缶詰工場を、水産業者要望聴取会」 ＊サバつりの技術船舶を導入・サバつり漁業の奨励、石垣市に缶詰工場の設置等について話し合った。

1955.11/23・宮古毎日新聞・「再び黄尾島で、爆撃演習を行う」 ＊12/9～13、15 の 6 日間。

1955.11/28・宮古毎日新聞・「魚群探知機を斡旋、漁連が本土商社に照会」 ＊宮古漁連ではサバつり漁業に不可欠として本土メーカーに色々照会、漁民の便宜を図っている。

1955.12/06・宮古毎日新聞・「漁港とさば釣り補助金交付」 ＊上記の主旨

1956.01/17・琉球新報・「沖縄に前進基地、突棒漁業再建に乗り出す大分県。近く琉球政府と折衝」

1956.01/29・八重山毎日新聞・「近代化式設備の漁法」
＊漁船を装備に切換、魚探を導入、サバハネつりは漁場も近く、有望である。

1956.02/07・八重山毎日新聞・「琉球水産飛躍の年、石垣港の使命加わる、崎山漁連主事談」
＊サバ漁場で日琉競争、琉球側の装備改善を力説、水産加工缶詰にも言及。

1956.02/23・琉球新報・「赤尾島、所管不明で宙にうく。八重山地方庁から管轄照会」

1956.03/04・琉球新報・「水産研究所の移転、沖漁連が政府に陳情」
＊琉球政府はサバはね釣り漁業振興に重点をおいているので那覇近郊が望ましい。

1956.03/07・琉球新報・「赤尾島の所属問題。先島両地方と協議の上決定」

1956.03/16・琉球新報・「“赤尾島”の石垣市の所管、大正 10 年に大正島として登録済」

1956.03/17・沖縄新聞・「漁船、魚釣島で遭難。船員は無事泳ぎつく」

1956.04/04・沖縄新聞・「大漁旗おし立て 3 隻帰る、11 万斤を水揚げ」
＊サバ漁船第五琉水丸(50トン)が 1 万 1 千斤のサバ積んで大漁寄港。

1956.04/19・八重山毎日新聞・「水産国琉球が泣く、水産物入超 1 億 5 千万。基本施設の整備、遠洋の長期融資・漁業界の声」） ＊サバ缶製造について水産加工施策を提案

1956.04/23・琉球新報「漁業試験基地提供は困難、長崎の申入れに政府回答」
＊長崎県からアジ鯖のまき網による試験操業の根拠地として久米島、平良港、船浮港を使わしてくれの申入れに対し、民政府布令を検討した結果、困難と回答。

1956.05/19・八重山毎日新聞・「八重山近海、漁場共同調査したい。長崎水産商工部が、琉缶に申入れ、永続的操業可能かどうか。是非提携したい、業界の協力を」)。
＊長崎県へのサバ缶製造で原料入手の技術導入協力、長崎県から漁場共同調査の申入れ。

1956.06/27・八重山毎日新聞・「尖閣中心に漁労、漁探母船で沖之島水産進出」

1956.06/28・八重山毎日新聞・「沖之島水産社を誘致したい。追込漁政府へ陳情。漁場財産を大切に、考え 1 つで楽になる、照屋社長離島談」

1956.07/24・八重山毎日新聞・「許可なく南方出漁、永福丸に経済局も重視」
＊下記と同内容

1956.08/29・八重山毎日新聞・「沖之島水産社、9 月上旬頃操業に来島」

1956.10/03・八重山毎日・「西表西岸にサバの大群。一本釣漁法でハネ。望まれる近代漁法」
＊『地元は一本釣り漁労、取り逃がした。この魚群は尖閣諸島から五島近海へ回遊、そこで水揚げされ塩サバとなって沖縄へ入ってくる。近代漁法でやれば尖閣諸島附近でサバの回遊を食い止め、逆に本土への移出も夢ではない』旨。

1956.10/03・八重山毎日新聞・「永福丸船員ら近く帰郷」

1956.12/26・八重山毎日新聞・「爆撃演習」 ＊久場島で 12/31～01/02 演習。

1957.01/20・八重山毎日新聞・「射撃演習」 ＊久場島で 1/20 演習

1957.01/23・八重山毎日新聞・「領海侵犯常習の昌安丸。尖角列島へ出漁とは真っ赤なウソ、ルソン島で悠々採貝、関係者 17 名八重山署で取調中」

1957.05/19・八重山毎日新聞・「鰹の近代操業へ。篠原氏の基本丸」 ＊氷を積載 2～3 日泊りで尖閣列島附近まで出漁できるカツオ漁船の大型船へ転換操業に踏み切る。

1957.10/11・宮古毎日新聞・「沖の大東島等で米軍が実弾演習」
＊尖閣諸島の久場島に加えて、新たに大正島（赤尾嶼）で 10/10～12 演習。

1957.11/06・宮古毎日新聞・「11 日から尖閣列島で実弾演習」 ＊大正島で 11/11.12 演習。

1957.12/05・宮古毎日新聞・「尖閣列島で米軍の艦砲射撃」 ＊大正島で 12/7 演習。

1958.02/05・八重山毎日新聞・「宮古版、冬の鰹業に成功、漁船続々大漁」。
＊尖閣諸島海域での冬期カツオ業成功。

1958.02/05・八重山毎日新聞・「深海一本釣り等、水産庁が沖縄近海漁場調査」 ＊琉球近海の底魚漁場調査、海底海洋調査、マグロ延縄漁業等調査のため試験船俊海丸を派遣。

1958.02/09・八重山毎日新聞・「沖の大東島で米軍爆撃演習」 ＊久場島で 2/11 演習。

1958.02/23・八重山毎日新聞・「爆撃演習」 ＊久場島で 2/27.28 演習。

1958.04/01・八重山毎日新聞・「爆撃演習」 ＊大正島で 4/2.3、久場島で 4/9 演習。

1958.04/26・八重山毎日新聞・「爆撃演習」 ＊大正島で 4/28.29 演習。

1958.10/12・八重山毎日新聞・「米軍爆撃演習」
＊大正島で 10/1～30、久場島で 10/2～15 演習。

1959.01/01・八重山毎日新聞・「漁船の大型化が先決、－琉球の漁業への雑感―、大浜英佑」
＊尖閣諸島海域での本土漁船のカツオ漁、沖縄漁船のサバ漁に言及。

1959.02/15・八重山毎日新聞・「爆撃演習」 ＊大正島で 2/14～24 演習。

1959.08/31・八重山毎日新聞・「八重山水産業の今昔と将来⑤、仲本信幸、缶詰におされる鮮魚、販売に頭を使え」 ＊八重山の深海漁業資源は、尖閣諸島等々に豊富に連なり、台湾へ鮮魚輸出、台湾から米、茶等の輸入貿易できれば深海漁業は大巾にのびる。

1959.09/19・八重山毎日新聞・「石び礁で爆撃演習」＊大正島で 9/22 演習。

1959.09/23・八重山毎日新聞・「米軍の海上演習撤廃を、鹿児島県が決起大会。沖縄の損失年間 74 万弗、広範囲な漁業禁止区域」
1959.10/17・八重山毎日新聞・「転換期の農水産業。地方庁の構想、西表の漁業基地化、水産高校設置も」 ＊「漁業基地化の理由に「尖角列島の漁場も近い」旨をあげている。
1959.10/21・八重山毎日新聞・「日本漁船に影響せず、駐沖米軍の演習に回答」
1960.02/06・琉球新報・「豊洋丸いぜん手がかりなし」 ＊尖閣諸島へダツ漁、消息絶つ。
1960.02/06・琉球新報・「食糧もなくなるころ、安否きづかう留守家族」
1960.05/17・八重山毎日新聞・「サンゴ。おこぼれブーム、八重山船も池間島へ。第一日向丸、13 万キロ水揚げ」
1960.06/01・八重山毎日新聞・「竹富の麻、引っ張りだこ。サンゴ景気の宮古から、船具店のロープも売切れ」

Ⅰ－3. 琉球政府後期(1961～1972 年)

この期の後半には大きな出来事が 2 つ起る。1968 年国連エカフェの黄海・東シナ海域沿岸海底鉱物資源共同調査によって豊富な石油・天然ガス資源の存在が有望視され、日本復帰の政治日程が決まり、官民挙げて 1972 年 5 月の復帰準備に忙殺されている。

前半期の尖閣諸島海域では、糸満漁船がダツを大漁とか、新サンゴ漁場が発見され、サンゴ漁船が急増しているとか、1960 年には沖縄のサバ漁は終業しているが、琉球政府は、アジ、サバ旋網漁業の導入促進するため、長崎県から業者を招いて試験操業を計画している穏やかに推移しているが、後半期になると隣国の領有権主張も起こり、かまびしくなる。

これまで漁民は尖閣諸島に港湾施設が皆無のため不自由を強いられたが、避難港、無人灯台、気象観測施設設置問題が浮上する。

なお、本章の冒頭で、琉球政府後期(1961～1972 年)に関する資料が少ないことは述べた。

限られた時間内で収集調査であったため、手が回らず、新聞資料については、一部しか紹介できなかったのは遺憾である。(とりわけ、当期の宮古地方紙は殆ど紹介していない)

(イ). 沖縄漁船の操業状況

1. 1961 年 5 月、アジア財団から派遣された日本水産資源協会理事藤森三郎が、漁業関係者から聞き取りして「琉球列島沖合漁場図」を作成、尖閣諸島海域はサバ、マグロ、カジキ、サンゴ漁場が示されている。※1

2. 1963 年 12 月、糸満漁船 2 隻「鹿島丸」(5トン)と「一義丸」(29トン)が、尖閣諸島海域へ出漁、うち鹿島丸が遭難。※2

3. 1964 年 11 月、糸満漁船「第5清丸」が、尖閣諸島で、新漁法“追い込み刺し網”のダツ漁への試験操業を行う。※3

4. 1966 年 4 月、糸満漁船「清福丸」(22 トン)が、尖閣諸島海域で操業中、座礁事故で行方不明になった本土漁船員の遺体を発見、魚釣島でダビにふす。※4

5. 1966 年 6～10 月、宮古漁船が、尖閣諸島海域でサンゴ漁を操業。(琉球政府「さんご漁業生産報告」より)。※5

6. 1966 年7月、総理府派遣の水産庁調査団は、沖縄側に、旋(巻き)網漁業の新技術を導入し、魚釣島附近のアジ、サバ資源の利用を提案。※6

7. 1966 年 11 月、水産庁、巻き網漁船を派遣、魚釣島周辺で操業指導を決定。※7

8. 1966年11月、糸満漁船が、尖閣諸島近海でダツ漁、100名近くの漁夫が出漁、1ヵ月余で3万 5 千キロを水揚げ。昨年 2 倍の豊漁。※8

9. 1967 年 2 月、琉球政府は、アジ、サバ旋網漁業を導入促進のため、本土業者を招いて試験操業を計画。※9

10. 1967 年 5 月、カツオ漁獲量は、過去 3 年間は大幅に落ち込む、漁獲不振打開のため、琉球水産研究所は「カツオ漁況旬報・速報」事業を実施。※10

11. 1967 年 6 月、魚釣島沖合で新サンゴ漁場が発見され、尖閣諸島海域でのサンゴ漁業が盛んとなる。※11

12. 1967 年 10 月、宮古漁船「豊丸」(35 トン)が、尖閣諸島に出漁・遭難。※12

13. 1968 年.1 月、糸満漁船、尖閣諸島沿岸のダツ漁は、昨年に続き大漁。※13

14. 1968 年 8 月、日本政府沖縄問題懇委員・高岡大輔氏は、尖閣視察報告で港湾施設等を提言。※14

15. 1969 年 5 月、与那国漁船が、魚釣島付近でカツオ漁を操業していたのを石垣市行政標柱建立団が目撃。※15

16. 1970 年 4 月、尖閣諸島近海でトビウオ漁で出漁し帰港した石垣漁船「宝徳丸」(17.3 トン)の船員らは、島には海鳥の死体が山積していたと報告。※16

17. 1970 年 8 月、琉球気象庁は、魚釣島に“風ロボット設置”を計画、八重山気象台が調査開始。※17

18. 1970.年 9 月、琉球政府は、灯台建設を検討　石垣市長らが魚釣島へ設置要望。※18

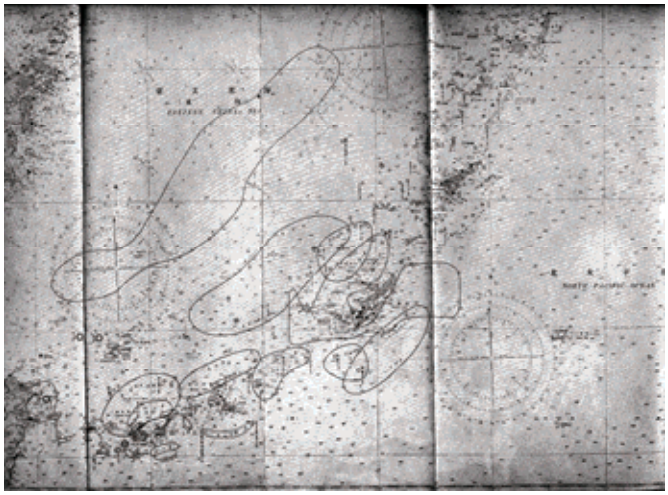
19. 1970.年 12 月、大蔵省、沖縄援助調整費使用を解除、気象観測所設置を計画。※19

20. 1971 年 5 月、魚釣島近海に出漁した石垣船籍くり船 2 隻「金勇丸・入松川丸」が遭難、母船の「福竜丸」が通報。※20

21. 1967～1971 年度の「農山漁家の暦」(米国民政府作成の広報誌)には、尖閣諸島海域の漁業にダツ類、サバ、カジキ類を紹介。※19

※1. 1961 年 5 月、アジア財団の技術援助で派遣された日本水産資源協会理事藤森三郎は、沖縄の沿岸漁業を調査(1961 年 5 月 6 日～6 月 19 日実施)、振興策として回遊性魚に重点をおいた研究機関の強化、カツオエサの増殖、真珠、海綿、海草、貝類の浅海養殖増殖策を提案、とくに沿岸漁業を破壊するダイナマイト密漁の徹底的防止を強調している。

同調査報告書には、漁業関係者から聞き取りして作成した「琉球列島沖合漁場図」があり、尖閣諸島海域には、サバ、マグロ、カジキ、サンゴ漁場が示されている。沖縄漁船のサバ漁業は 1960 年には終息しているが、尖閣諸島の北方大陸棚には広範囲にわたりサバ漁

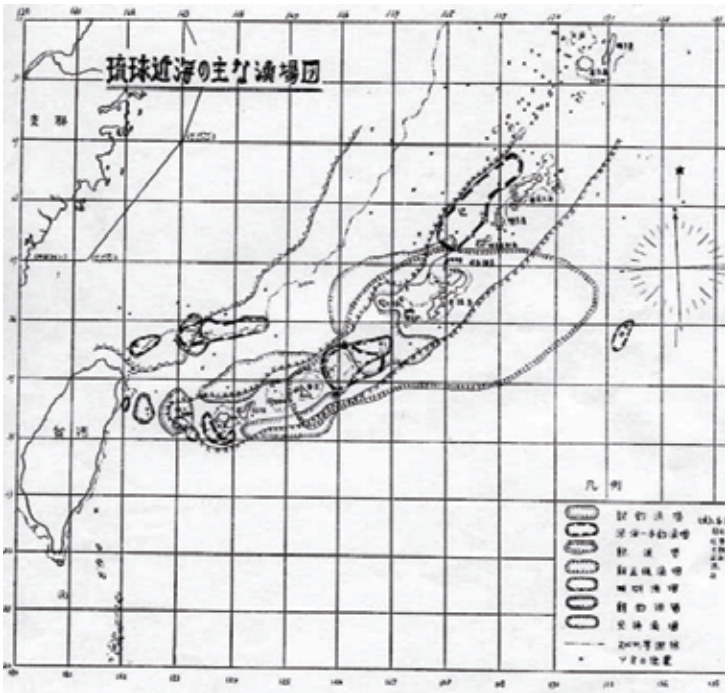


琉球列島沖合漁場図　1961.5､6 作成
(「水産増殖面から見た琉球沿岸漁業振興方策　藤森三郎」より)

場が占めている。サンゴ漁業は 1959～1960 年には、宮古島南西沖合の宝山ソネで豊富なサンゴ漁場が発見され、サンゴ漁ブームに湧いた。尖閣諸島海域は、1966 年以降にサンゴ生産報告がなされている。(詳細は※5 参照)。 なお、他に沖縄側で作成した漁場図を紹介する。

1963 年「琉球水産業の概況　琉球政府経済局水産課」に掲載の漁場図である。同漁場図は「薩南海区鰹漁場図及び琉球近海資源分布図を借用」したとある。

尖閣諸島海域は、「鯖釣漁場、突棒漁場、深海一本釣漁場、珊瑚漁場」の4漁場が示されている。



(1963 年「琉球水産業の概況　琉球政府経済局水産課」より)

※2.「・・尖閣列島方面向出漁に出た糸満船籍の鹿島丸(5 トン)王保世泰蔵船長他乗組いん 5 名の船がまだ帰港していないので八重山署から・・警備艇を出動させ捜索を始めた・・同船は 11 月 28 日僚船一義丸(29トン)と共に尖閣列島へ向け糸満港を出港したが・・一義丸は鹿島丸を見失い風波が高く捜索不能だったので魚釣島で待機していたが、2 月 1 日になっても到着しなかったので・・警察に連絡したもの。同船の乗組いんは次の通り敬称略、5 人とも糸満町字糸満在で、大城松一(34)、上原幸一(25)、屋嘉比敏勇(27)、カッース(46)、久場真一(27)。(1963.12/07・八重山毎日新聞・「糸満船籍鹿島丸絶望か、尖閣列島に出漁して」)。「・・鹿島丸(5 トン)が沈みかかっているのを通りかかった外国船が発見し乗組員 6 人を救助したが、そのうち 1 人は死亡している。・・日本向け航行中 6 日・・宮古北方 60 マイルの地点で・・発見したもの。残りの 5 人の乗組員も衰弱状態で船内で手当てをうけている。(1963.12/08・八重山毎日新聞・「宮古島北方で発見、外国船が、遭難の鹿島丸」)

※3.「【糸満】秋から冬にかけてダツ、トビウオなどの漁獲期だが糸満町糸満漁船所属の第五清(福)丸(平安名栄福船主＝17トン)は新しい操業法として“追い込み刺し網”を採用、先月 25 日ごろ尖閣列島に試験操業に出たが、その成果が各方面から注目されている。・・これまでの追い込み網は楕円形になって底は袋状になって・・魚を追い込むという式・め新しい網は底がなく、魚が網にからむ仕掛けになって・・追い込みする漁夫もいらなくなり・・操業がスピード化され、水揚げもよいといわれる。・・この網はこれまでのものに比べ大型のもので、・・これを使用する船も動力漁船でなければならない。この大型網の出現で動力漁船の従来の追い込み作業は少なくなっていく傾向を示すだろう、と同町役所宮城正吉水産技手はいっている。」(1964.12/03・琉球新報・「新漁法で試験操業。糸満町“追い込み刺し網”採用」)。以後、尖閣諸島でのダツ、トビウオ漁は、新“追い込み刺し網”漁法で、1977 頃までなされることになる。糸満漁協・金城亀吉氏から聞き取り参照。

※4.「さる 25 日、八重山の尖閣列島付近で座礁した愛媛県船籍「竜喜丸」(トン数・乗り組み員数不明)から行くえ不明になった船長とコック長の死体らしいのを、糸満町船籍の漁船「清福丸」(22 トン・玉城善吉船長)が魚釣島付近でみつけ、魚釣島でダビにふし、遺骨を同島に置いてきた。・・清福丸の話だと、竜喜丸の座礁直後、自衛隊の巡視船と自衛隊機が現場にきて、乗り組み員を救助するとともに、乗り組み員 2 人の死体を収容した。ところが船長とコック長が行方不明になって・・捜索を打ち切り、付近で操業中の清福丸に 2 人の捜索をたのんで引き揚げたという。」(1966. 03/04・琉球新報・「船長ら 2 人の遺体みつかる、尖閣列島で座礁した竜喜丸の」)

※5. 1950 年代初頭の与那国沖のサンゴブームに次いで、1960 年代初頭には、宮古がサンゴ漁ブームに湧いた。宮古のサンゴブームは、(1960.05/17・八重山毎日新聞・「サンゴ。おこぼれブーム、八重山船も池間島へ。第一日向丸、13 万キロ水揚げ」)と1963.07/05・八重山毎日新聞・「宮古はサンゴブーム、六月までの水揚げ 50 万ドル」)に詳しい。

他方、1966 年には、尖閣諸島沖合において、サンゴ漁業生産報告がなされているが、全てが宮古船籍のサンゴ漁船によるものである。

琉球政府の「さんご漁業生産報告」には、下記が報告されている。

1966 年 6 月	宮古島平良市	第三新徳丸	小橋川長助	赤尾島	17キロ
1966 年 10 月	宮古島平良市	第三新徳丸	小橋川長助	赤尾島	4キロ
1967 年 5 月	宮古島平良市	第三新徳丸	小橋川長助	赤尾島他	1.8 キロ
1967 年5月	宮古島平良市	第八宝央丸	慶田　清稀	赤尾島ＮＥＣソネ他	50.8キロ
1967 年 5 月	宮古島平良市	第十八住吉丸	前西原　豊	赤尾島	7.5 キロ

(「1966、67 年・さんご漁業生産報告　琉球政府農林局」より)

1967年6月、魚釣島沖合で、新にサンゴ漁場が発見された。これを契機に、尖閣諸島沖合で小

規模ながらサンゴ漁が盛んとなる。(詳細は※11 参照)

※6. 総理府特連局が派遣した農林省水産庁沖縄水産視察団は、1965 年 11 月～66 年 1 月にかけて沖縄の水産業を視察、旋網漁業導入した沖合漁業資源の振興策を提案している。

「・・アジ、サバ資源については殆んど未利用といってよいであろう。魚釣島附近にはこれら資源主産卵場があり・・又、魚釣島より更に南にもあじ資源があることが本土の調査でわかっている。沖縄としては・・あじ、さば資源を利用することが必要であろう。・・＜沖合漁業振興のための新技術導入へ＞　回遊性のイワシ、アジ、サバ類の沖合漁場は未開発である。日本本土漁船は魚釣島周辺で多量のアジ類を漁獲している。これは旋網によるもので、この技術を導入すべきであろう。具体的方法としては、日本漁船による試験的操業を行うことが最も早道であろう。又、長崎県あたりの旋網船に実際に乗り込んで、南(東？)支那海の操業を琉球漁民が体験することも必要である。」(「沖縄における水産事情視察報告書　昭和 41 年 7 月」総理府特別地域連絡局)

※7.「【東京＝時事】水産庁は沖縄援助計画の 1 つとしてかねて米民政府から要請のあった漁業育成のための巻き網漁船 1 カ校を沖縄に派遣することを決めた。計画では日本側が長崎県所属の巻き網漁船を、沖縄側から漁船員約 20 名を提供し、八重山群島を基地に東支那海・魚釣島周辺で巻き網漁業を指導する一方、現地に必要量のアジ、サバなどを水揚げすることになっている。また漁船員の給与は沖縄持ちとし水揚げ代金の回収は日本側があたる。・・・実際に派遣する時期については、日本側としてはことしの 12 月から予定しているが、正式には米側と折衝したうえ、決められることになっている。」(1966.11/25・琉球新報・「沖縄に巻き網漁船、水産庁が派遣を決定」)

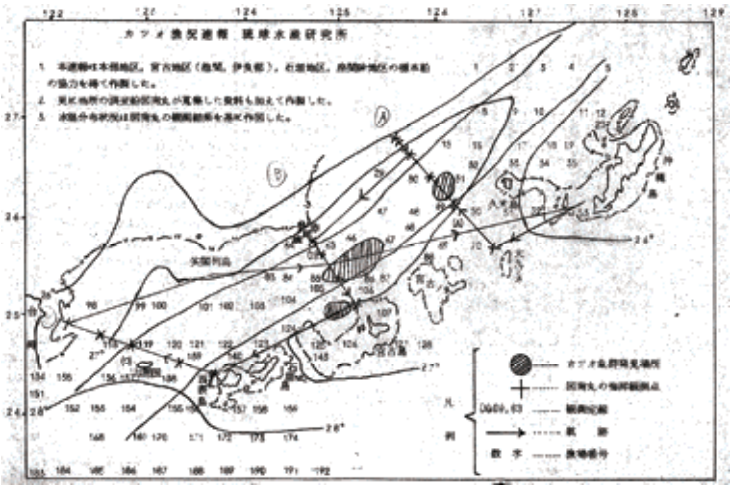
※8.「・・ダツ(方言でシジャー)のシーズンにはいり糸満町の漁夫は荒れがちな冬の海でのダツの追い込みに必死になっている。ダツは 11 月から 2 月までが漁期だが、ことしは 7 日までの 1 ヶ月余ですでに 3 万 5 千キロを水揚げし、昨年中の水揚げ高、1 万 8 千キロの 2 倍に達した。同町はかってないダツの豊漁に活気を呈している。糸満独特のダツ追い込み漁は 15 トン以上の母船 3 隻に、クリ舟 4 隻がつき、はえなわでクリ舟が押い込んで母船に揚げる。母船 3 隻のうち 2 隻は漁場と糸満港間の運搬にあたり、漁夫は漁期の終わるまで漁場に残る。ことしは台湾近海の尖閣列島で 100 人近くの漁夫が出漁しているがひと航海で 1 万数千キロを水揚げするという豊漁。またダツの値段が年末のため上がっているとあってホクホクだ。・・・」(1966.12/10・琉球新報・「ダツ大漁。1 カ月で昨年の 2 倍、糸満漁夫はホクホク顔」)

尖閣列島近海で追込漁でダツ漁に励む
(琉球新報 1966.12.10)

※9.「・・旋網漁業は1回の水揚げが100～120トンみある大がかりな漁業で、アジ、サバの捕獲がおも。沖縄は毎年約 80 万ドルのアジ、サバを本土から輸入しており、このため早くから旋網漁業の導入が叫ばれていたが、・・最近業界に旋網漁業の導入の動きがあることから水産部ではこれを促進するため本土業者を招いて試験操業を行ない沖縄でも同漁業が採算あうかどうかをテストすることになった・・・旋網漁業は・・1カ月 1500 万円以上の経費・・1回の運搬に100～120トンを水揚げしている。・・現在の沖縄では処理が困難であるばかりでなく魚価の暴落も懸念され、採算もあうかどうか疑問である。・・が、業界では①毎年約 80 万ドルのアジ、サバを輸入している。②尖閣列島付近に有望なアジ、サバの漁場がある一などの点から導入しても採算があうとの判断で、最近ある業者が積極的導入に動いているといわれる。業者としては、一応近く行われる試験操業をみたうえ、どうにゅうするかどうかを決定するが、水産部では「年間 80 万ドルのドル流出を防止することができる」としてできるだけ促進したい意向・・・。」(1967.02/10・琉球新報・「旋網漁業導入を促進、本土業者招き試験操業」)。と、琉球政府は旋網漁業の導入に意欲を示したものの、紆余曲折の末、計画はご破算になった。沖縄の漁業は資本脆弱であることが大きな理由だった。

※10.「・・2」カツオ漁況旬報、1966 年のカツオ漁獲量は 3500 トンという史上最悪の不漁だった・・1959 年、1960 年の最盛時に比べて、その斜陽化は目を覆うばかりである。・・早急に必要なのは、漁場分布であるため、漁場位置を含めたカツオ漁況速報事業に着手した。・・漁況は本部、座間味、池間、佐良浜、石垣の5地区から10日毎の葉書による各標本船から、漁獲成績を蒐集し、1967 年 5 月下旬、第1号から 1967 年 6 月下旬第 4 号まで 4 回カツオ旬報を作製し、各漁協組合、関係機関に配布した。・・3」カツオ漁況速報、調査船図南丸によるカツオ漁期の初期における漁場調査、廻遊状況の調査を行い、航海速報として、そのつど組合、業者、期間に配布した。・・・」(「昭和 42 年度琉球水産研究所事業報告書―漁海況速報事業」p53)

カツオ漁況速報　1967 年 4 月 10 日～4 月 19 日



(「琉球水産研究所事業報告書　1967 年度」より)

※11.「琉球サンゴ漁業組合（柴田重利組合長）所属の方興丸（28トン）は、・・魚釣島北方 12マイルから 16 マイル沖合いでサンゴの漁場を発見、同漁場から桃サンゴ 35 キロ余を採取した・・また同じ組合所属の福島丸（28 トン）も同じ場所から桃サンゴ 20 キロを採取した。まだ資源調査をしたことがないのでどのくらいの量があるかわからないが、かなり有望だと柴田組合長はいい、サンゴ漁船はこの沖合で操業するよう呼びかけている。(1967.06/08・琉球新報・「新サンゴ漁場を発見、柴田組合長“かなり有望”」)

尖閣諸島沖合のサンゴ漁は、下表の通り急増している。

1967 年 6 月	宮古島平良市	第十八住吉丸	前西原豊	赤尾島	7.5 キロ
1967 年 6 月	宮古島平良市	振揚丸	伊波幸夫	魚釣沖 鳥島沖	36.1 キロ
1967 年 6 月	宮古島伊良部	昇得丸	池間幸雄	黄尾崎	20 キロ
1967 年 6 月	宮古島平良市	第八光徳丸	上地晃晴	赤尾島	7.5 キロ
1967 年 7 月	宮古島平良市	振揚丸	伊波幸夫	魚釣沖	58 キロ
1967 年 7 月	宮古島伊良部	昇得丸	池間幸雄	黄尾崎・赤尾崎周辺	25 キロ
1967 年 7 月	宮古島平良市	第八光徳丸	上地晃晴	赤尾	—
1967 年 7 月	宮古島伊良部	昇山丸	長崎キヨ	黄尾崎・赤尾崎周辺	5 キロ
1967 年 7 月	宮古島平良市	瑞光丸	伊良部平盛	赤尾島	10.7 キロ
1967 年 7 月	宮古島平良市	珊金丸	砂川鎌吉	尖閣列島他	13 キロ
1967 年 7 月	宮古島平良市	第三盛福丸	久貝藤一	魚釣島	5 キロ
1967 年 8 月	宮古島平良市	第十八住吉丸	前西原豊	赤尾島	18.7 キロ
1967 年 8 月	宮古島伊良部	昇山丸	長崎キヨ	黄尾崎・赤尾崎周辺	10 キロ
1967 年 8 月	宮古島平良市	珊金丸	砂川鎌吉	尖閣列島他	5.5 キロ
1967 年 8 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	赤尾	20 キロ
1967 年 8 月	宮古島平良市	第八幸集丸	内間武雄	尖閣列島	5.5 キロ
1967 年 10 月	宮古島伊良部	昇得丸	池間幸雄	黄尾崎・赤尾崎周辺他	10 キロ
1967 年 10 月	宮古島平良市	珊金丸	砂川鎌吉	尖閣列島他	3.2 キロ

（「1966、67 年度・さんご漁業生産報告　琉球政府農林局」より）

なお、尖閣諸島沖合のサンゴ漁業は、1967 年 11 月以降の生産報告は見当たらない。

1968 年頃には、沖縄近海のサンゴをほぼ獲り尽くしたのか、水揚げは減少、サンゴ組合は大幅な赤字を抱え、業者は経営不振に陥って、サンゴ漁業は衰退した。

1976年(昭和51年)の尖閣諸島海域へ出漁状況表(沖縄県農林水産部、後出)には、宮古平良市漁協所属サンゴ漁船2隻が操業、水揚げ1000キロが報告されている。

採れたサンゴを飾り談笑するサンゴ船員達。1960 年頃。
(「記録写真集与那国」より)

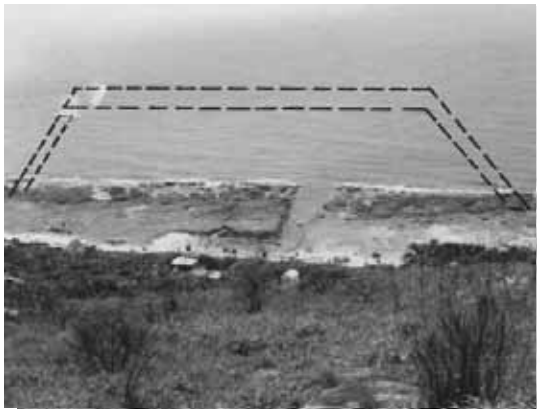
※12.「‥12 日の出漁以来行くえ不明だった伊良部漁協所属の豊丸(35 トン)(石原一吉船長)を捜索していた第三漁泉丸は、22 日午前 6 時、4 人の乗り組み員を無事救助しては伊良部佐良浜港に帰港した。第三漁泉丸の浜川敏一船長の話によると4人の乗り組み員は、15日まで尖閣列島クバ島近海で操業していたが、大シケとなり帰れなくなった。エンジンの油も切れたので船をすて 18 日、同島に泳ぎ渡って 6 日間飢えと寒さにふるえながらがんばっていたという。」(1967.10/24・琉球新報・「不明の漁船員救助」)

※13.「○‥ヨイショ!、ヨイショ!寝静まった糸満港の夜のしじまを破って、ダツの水揚げが始まる。白い腹を見せた 1 ㍍もあるダツが、ワシづかみに船から投げ上げられる。○‥ダツ漁の最盛期にはいつた糸満漁民は、冬海の荒波に向かっていのちがけの毎日を送っている。昨年も大漁が続き、水揚げ高も一昨年並みーという好成績。○‥台湾近海の尖閣列島まで出漁、15 トン以上の母船 3 隻に、クリ船 4 隻がつき、約 6 百㍍のハエ縄で追込み、母船に引き揚げる。糸満独特の追込み漁だ。‥‥」(1968.01/04・琉球新報・「“ダツ漁”は最盛期、好成績の水揚げ―糸満」)、また、糸満船籍精栄丸(上原信吉船長以下乗組 15 名)がダツ漁で尖閣諸島へ向かう途中遭難、母船の清福丸(22 トン)に救助された海難事故が起きている。(1967.12/07・琉球新報・「20 日間も遭難知らず、無線施設のない漁船―糸満。船員を救助、1 隻捨てて帰港」)

※14. 高岡大輔氏は、視察報告の中で「‥3. 魚釣島と南小島に漁港と避難港を兼ねた港湾施設をする必要がある。これは尖閣列島一帯の経済開発には必須の条件である。‥現在、尖閣列島一帯が台湾人によって‥極めて豊富な漁場が荒らされているのも、パトロールが不十分であるためであり、また、避難港を兼ねた漁港がないためと、沖縄漁民が餌料の不足やその他の経済的理由から、この漁場に近ずき得ないことに依るものである。4. 尖閣列島は気象観点から重要位置に存在する。‥」としている。(「尖閣列島一帯の視察報告要旨」高岡大輔、1968.8)

1979 年 5～6 月、沖縄開発庁は「‥地元住民からは、資源の活用、安全操業など産業振興及

び安全性の確保の観点から所要の施設の建設・・検討が望まれていた」(同報告書序文)として、尖閣諸島利用開発可能性調査を実施した。その中で、魚釣島と南小島の漁港(避難港)建設を計画、し、魚釣島に設置候補 2 海域、南小島に 1 海域を選定、各面から検討した。が、施工性の面で問題が多いとの理由で、結局計画実施は見送られた。



魚釣島西避難港(漁港)候補地　　南北小島間避難港及び漁船避係留浮標設置水域
(沖縄縄開発庁 1979 年 「尖閣諸島利用開発可能性調査編」 より)

※15. 石垣市行政標柱建立団の同行記「・・島を離れる時、付近の海では与那国の小型漁船がおもしろいほどカツオを釣り上げていた。」(1969.06/12・琉球新報・「現地ルポ尖閣諸島記＜5＞」)

※16.「・・2、3 日前、尖閣列島近海で操業を終え帰ってきた・・報告によると・・羽をむしられた海鳥の死体が散在、見るに忍びない。・・・と、現地の悲惨な状況を伝えている。これを確認した人たちは、宇新川 2357・外間守成さん所有の報徳丸(17.38 トン)に乗組んでいる漁夫たち。・・台湾漁夫が羽ふとんの材料を取るため海鳥を殺したのではないかと言っている。・・これから 5,6 月にかけて仲の御神島、尖閣列島は海鳥の産卵期を迎えるが、これと同時に八重山群島は夏の風物詩『飛び魚』の時期である。この時期になると与那国、波照間、西表、尖閣列島は・・台湾漁船の領海侵犯が公然と行われる。これらの漁期を目前にして・・台湾漁夫による仕業となれば・・不法侵入監視を、ことしも強化しなければならないだろう。」(1970.04/09・八重山毎日新聞・「尖閣列島を無惨に荒らす、海鳥の死体が山積み。台湾漁船乗組員の仕わざか、宝徳丸が報告」)

※17.「琉球気象庁は・・尖閣列島に無人風速観測所(風ロボット)を設置したい意向で同計画に関する基礎調査を八重山気象台(宜寿次長章台長)を通じ開始している。・・台長自ら石垣市や出入管理部を回り魚釣島の地形を詳しく聞いている。・・同調査は本庁の指示によるもので、魚釣島の山頂に“風ロボット”を設置できるかどうか、現地の実情を報告するよう指示を受けたという。

八重山気象台管内の無人風速観測所は、現在黒島に 1 個所に。風ロボットの性格、性能は自動的に風速を観測、その結果を電波で報告する役目が主体。尖閣列島にこのような観測所で

きると居ながらにして尖閣列島周辺のおおまかな気象がわかるという。」（1970.08/27・八重山毎日新聞・「尖閣列島、風ロボット設置、琉球気象庁が計画進める」）

黒島に設置の同型風ロボット
（「石垣島の気候表」 1968.4 より）

※18.「行政府は、・・沖縄・北方対策庁とも・・今年度中に無人気象観察所を建設することで一致したが地元八重山では桃原石垣市長(石垣市尖閣列島周辺の石油開発資源開発促進協議会会長)らが「漁船や一般船舶の安全航海などのために魚釣島に無人灯台を設置してほしい」との要望書を出しているため同日の局長会議で再度話し合った結果、魚釣島に無人灯台を設置する方向で今後検討を続けることになった。無人気象観察所の建設には約 9 万ﾄﾞﾙの費用がかかるといわれているが、行政府としてできれば・・両方の設置を希望しており、これらの建設費の問題を含めて 28 日に来沖する山野対策庁長官と協議することにしている。」（1970.09/25・琉球新報・「灯台建設の建設を検討、行政府」）、ところがこれらも、復帰後に持ち越された。

1979 年 5～6 月の沖縄開発庁による「尖閣諸島利用開発可能性調査」に調査された。

魚釣島東灯台と西灯台設置候補地点

南小島灯台設置候補地点

上 2 枚、次頁 1 枚の写真は(前掲「尖閣諸島利用開発可能性調査編」より)

無人灯台は、魚釣島と南小島に設置候補 3 地点を選定し、各面から設置を検討したが、避難港(漁港)同様に尖閣諸島への設置は棚上げされ、今に至るまで実現を見ていない。

※19.「大蔵省は、・・今年度沖縄援助費に計上していた調整費 10 億円の一部の使用を解除した。・・尖閣列島の気象観測施設は、同列島の領有権、周辺大陸棚問題で台湾側が一方的に既成事実を積み上げてきているため、日本側も既成事実をつくるのがねらいの 1 つである。

尖閣列島の無人気象台設置費は総額3千795万2千円で魚釣島に来年早々設ける。」(1970.12/19・琉球新報・「『尖閣』に気象観測気象観測所、領有権からみ既成事実つくる、大蔵省、沖縄援助の調整費使用を解除」)

魚釣島西無人気象観測施設
設置候補地

※20. 遭難したのはクリ舟は石垣船籍金勇丸(0.88 トン)に乗った金城勇(35)、親川松夫(39)さんと同入松川丸(0.71 トン)に乗った入松川義雄(44)、伊敷寛信さんの 4 人で、「・・29 日午後 4 時ごろ、・・石垣港を尖閣列島へ向け出港、その際母船として食料や飲料水などを積んだ福幸丸(クリ舟)の速度がおそいことから・・2 隻だけが先に行き、30 日午前 7 時ごろ尖閣列島の魚釣島でおち合いいっしょに漁をすることになっていた。しかし母船である福幸丸が・・現場についたが、先に到着しているはずの金勇丸と入松川丸は見あたらず、夕方になっても来ないので・・遭難したのではないかと見られ、・・連絡をうけた八重山署ではさっそく救難艇『ちとせ』を出動させて尖閣列島一帯の捜索にあたっている。(1971.05/02・八重山毎日新聞・「クリ舟 2 隻遭難か、4 人の漁夫行くえ不明」)

※21.「農山漁家の暦」は、米国民政府が作成した沖縄農林漁家向けの広報誌である。

1967 年～71 年号の「魚種別のおもな操業時期、漁具および漁場」欄には、「ダツ類(シジャー)10 月～翌年の 4 月　追込網、流刺網　尖閣列島、宮古、沖縄近海」「サバ　2 月～4 月、10 月～12 月　一本釣り　尖閣列島、与那国近海」とある。また、1966 年7月の同ラジオ沖縄版には、「旗魚突棒漁業＝マカジキ、バショウ、クロカワ、シロカワ(魚釣島、与那国)」とあり、同英語版は、「Goad fishing “Makajik、“ “ basho、“ “ kurokawa、“and “shirokawa” Uotsuri- jima、Yonaguni」と紹介している。

(ロ). 本土漁船等の操業状況

1. 1964 年 4 月、本土サバ漁船(殆んどが棒受網漁)が、魚釣島海域で毎晩最低 3 隻、最高 11 隻が操業。(琉水研試験船「図南丸」がサバ漁場調査帰任で報告)。※1

2. 1965 年 11 月、多数の本土旋網漁船が、魚釣島周辺で、11 月から翌年 2 月にかけて、アジ、サバを漁獲。※2

3. 1966 年 3 月、愛媛船籍「竜喜丸」、魚釣島東方で座礁、自衛隊巡視船と自衛隊機が出動捜索。※3

4. 1966 年 11 月、西日本の旋網漁船は、東シナ海南部、魚釣島周辺のサバ漁の漁場開発を企図。※4

5. 1966 年の山口県水産試験場研究報告書はアマダイ漁を報告。※5

6. 1969 年 4 月、長崎県漁船「第一静山丸」が、尖閣諸島近くの漁場に向かう途中、クリ舟で漂流中の遭難者を救助。※6

7. 1971 年 3 月、長崎県のカツオ一本釣魚船「第八福徳丸」(51トン)が、尖閣諸島近海で遭難。※7

8、1971 年4月、鹿児島漁船「雄しょう丸は、久場島附近で操業中、SOS旗をかかげている台湾漁船(51トン)を発見・通報。※8

※1.「第 1 次試験は操業 3 晩・・漁獲高は 6 屯余で稍々好漁・・第 2 次試験は操業三晩で・・約 1 屯の凶漁に終わった。然し時化続きの天候と・魚群探知機も故障したため漁場条件も悪く低調・・・が日増しに餌付も良くなり・・好転する気配があった。尚当漁場に出漁した「サバ」漁船は 8 日間(2 航海)毎晩最低 3 隻、最高 11 隻操業しておりその殆んどが跳釣船で棒受網、漁船も 1～2 隻見受けられ各船好漁している模様であった。」(「サバ漁場調査及び海洋調査」事業報告書 1964 年度 琉球水産研究所)

魚釣島近海で魚群探索中の日本サバ棒受網漁船 1964.4
(「琉球水産研究所 事業報告書 1964 年度」)より

※2. 水産庁の沖縄水産事情視察団は、魚釣島附近には豊富なアジ、サバ資源がありながら、沖縄側は殆んど未利用であり、多数の本土旋(巻き)網漁船が出漁していると報告している。また「・・水産庁では昨年 7 月総理府の依頼で沖縄の水産事情を視察、沖縄列島周辺の有望漁場を調査したが魚釣島付近はアジ、サバの産卵場で、日本本土からも 11 月から翌年の 2 月にかけて多数の巻き網漁船が出漁しているので今後漁港、冷凍庫などの整備次第で産業としてじゅうぶんなり立つものとみている。」(1966.11/25・琉球新報・「沖縄に巻き網漁船、水産庁が派遣を決定」)

※3.「名瀬海上保安部から警本を通じて捜索手配が出されていた漁船リウキ丸(32トン)が 23 日、魚釣り島の東方で座礁しているのを海上自衛隊の対潜水シヨウ戒機が発見、連絡を受けた海上保安部の巡視船イキムが・・乗り組み員全員 9 名を救助したと八重山署の無線が傍受した。・・リウキ丸は・・八重山署保安課は近海航行船舶にその旨手配したところ、これをキヤツチした大(清？)福丸が現場に向かった。が、それまでにはシヨウ戒機も現場にいたようで座礁した付近の島のほら穴に 8 人の船員が確認され、シヨウ戒機から投下された食料と水を回収していたという。」(1966.02/26・八重山毎日新聞・「魚つり島で日本漁船が座礁」)

※4.「・・旋網漁業は 1 回の水揚げが 100～120 トンもある大がかりな漁業で、アジ、サバの捕獲がおも。・・いま西日本の旋網は、東支那海南部、魚釣り島周辺の漁場の開発を企図している。このためには八重山または台湾方面の根拠地、避難港が必要である。・・」(1967.02/10・琉球新報・「旋網漁業導入を促進、本土業者招き試験操業」)

八重山漁協・具志堅用徹氏は、次の語っている。「一本釣で、尖閣行くと、内地のサバ漁船が操業していた。長崎辺りの巻き網漁船で、4,5 艘はいたと思う。電気をつけて夜中獲っているから大都会みたいだった。・・巻き網で何 10 トンも獲っていた。まき網漁は相当な資本がかかる、船や網を見ただけで直ぐ分かる、船も 4,5 艘は必要、運搬船でも 3 百～5 百トンクラスはあった。何億の予算、何十億だ。私らにはとても無理な話だ。あの時分、サバ節造りの話があった。・・魚はもうここでおろそうというて、八重山でサバ節つくれば、・・丸紅か、伊藤忠とが、全部買い上げるから、あんたらが製造してくれとの話だった。・・サバ節は 3 日日干しすると、内地は乾燥しておいたらカラカラになるが、こっちは湿気があるから駄目だ、そう言って、この話はオジャンになった。」(八重山漁協・具志堅用徹氏から聞き取り)、詳細は「Ⅱ、漁業者への聞き取り」参照。

※5.「漁場は春から秋にかけて農林 544・・冬期 567・・区において操業、アマダイでは 4 月～6 月、10 月～12 月」(山口県外海水産試験場・鮮魚処理技術研究報告書 1966.2)

「日本近海漁場図」(全漁連; 1977.3)には、山口県では、9月～翌年7月(盛漁期は11月から翌年 5 月)、アマダイ、シロアマダイ、キダイ、イトヨリダイ、シログチ、その他底魚、アラ等の延縄漁は、尖閣諸島北方大陸棚を主要な漁場として表示している。

※6.「ほとんど絶望視されていた玉城信良さん(20)＝石垣市登野城 485・漁業が 18 日午前、奇跡的に助かった。・・救助したのは長崎県松浦名良尾町字丸佐野在の村KK所属の漁船第一セイザン丸(浜口ヨシオ船長＝105.85 トン、乗組員 18 名)・・第一セイザン丸は尖閣列島近くの漁場へ向かう途中、サンパン(平底舟)で漂流していた玉城さんを発見、同日午前11時30分ごろ救助したものだが、10 日間の漂流にもかかわらず玉城さんは元気だという。第一セイザン丸は玉城さんを乗せたまま目的の漁場に向かうが、玉城さんの身柄は警本の救難艇『ちとせ』が漁場で引き取ることにしており、・・現場へ向かった。・・」(1969.04/16・八重山毎日新聞・「漂流10日目に無事救助。(遭難した玉城さん)。本土漁船が発見。悲しみから喜びへ一変。きょう『ちとせ』で石垣港に」)

※7.「・・さる 21 日午前 8 時ごろ、台湾のキールン北西金山海水浴場で 13 日未明、尖閣列島近海で消息を絶った長崎県南高来郡西有屋町、多良重吉さん(52)所有のカツオ一本釣り漁船『第8福徳丸』(51 トン)の漁労長、荒木俊秀さん(35)＝同町＝の水死体が見つかった。同船にはほかに多良重寿船長ら 8 人が乗り組んでいるがいずれも絶望視されている。(時事)」(1971.03/24・八重山毎日新聞・「第八福徳丸乗員の水死体を発見、台湾の海水浴場に漂着」)

※8.「・・尖閣列島で操業中の鹿児島船籍、『雄しょう丸』から黄尾礁北方 20 キロの地点で台湾

の漁船が遭難中との連絡があり、八重山署の救難艇所『ちとせ』が・・救助に向かった。・・雄しょう丸は台湾船（15 トン）がSOSの旗をかかげているのに気付き接近したが風波が強く、救助できなかった。エンジンの故障とみられている。」（1971.04/05・沖縄タイムス・「尖閣で台湾漁船SOS」）

□. 主な刊行物資料

○、『サバ漁場調査及び海洋調査』（琉球水産研究所　事業報告書　1964 年度）

○、『漁海況速報事業』（琉球水産研究所　事業報告書　1967 年度）

＊かつお・まぐろ漁況事業がスタート

○、『くろしお』 第 6 号、1966 年 2 月　琉球水産研究所　＊同上

○、『1966、67 年度・さんご漁業生産報告』（琉球政府農林局行政文書綴り）

＊尖閣諸島周辺海域のさんご漁業生産報告あり。

○、『山口県外海水産試験場・鮮魚処理技術研究報告書』(1966.2)

○、『琉球農林水産業の現状と問題点』(琉球政府農林局総務課　1965.9)

○、『沖縄における水産事情視察報告書』(総理府特別地域連絡局　1966.7)

＊「沖合い漁業振興のための新技術導入」として、本土漁船は魚釣島周辺で多量のアジ類を旋網で漁獲、沖縄にも旋網漁法を導入すべきと提案。

○、『日本近海漁場図』 全漁連沿岸漁場開発対策室 （全国漁業協同組合連合会　1982.3）

＊昭和 45 年度調査をもとに昭和 51 年再検討し漁場図を作成。尖閣諸島海域漁場図（海域区分 113）7 図掲載。

○、『沖縄水産資源(魚類編)―目で見る郷土の魚』 具志堅宗弘 （琉球水産協会　1969.10）

＊尖閣諸島近海で漁獲されるハマダイ(アカマチ)、アオダイ(シチュウマチ)、カジキの記述がある。

○、『農山漁家の暦』 1967～1971 年号

沖縄情報「農山漁家の暦」 №14　1966 年7月　ラジオ沖縄版

沖縄情報「農山漁家の暦」 №14　1966 年7月 （ 英文 ）

＊米国民政府が沖縄農林漁家向けに作成した広報誌で、「魚種別のおもな操業時期表」には、尖閣諸島近海漁業を紹介。

○、『琉球水産事情調査報告書』、(長崎県水産部水産振興課　昭和 37.3)

○、『水産増殖面から見た琉球沿岸漁業振興方策』 藤森三郎 （琉球政府経済局　1964.6）

p32～33　＊同上

○、『 琉球水産業の概況』（琉球政府経済局水産課、1963） ＊同上

○、『尖閣列島周辺の学術調査に参加して』 高岡大輔 （ 季刊「沖縄」特集尖閣列島　第 56 号　南方同胞援護会　1971.5　p42～64） ＊尖閣諸島周辺海域漁場を紹介

○、『尖閣列島一帯の視察報告要旨』 高岡大輔 （「復帰問題研究」 復帰問題研究会編　1968.8）　p222～223

○、『沖縄県の漁具、漁法』沖縄県水産試験場（財団法人　沖縄県漁業振興基金　1986.3）
＊各単協の漁具、漁法、漁場を紹介

なお、本調査で確認している琉球政府の漁業行政刊行物は下記のものである。

イ.「水産だより」 琉球政府　1962～1968 年　第 1～48 号

ロ.「琉球の水産業」 琉球政府農林局漁政課　1956～1967 年

ハ、「琉球水産業の概況」琉球政府経済局水産課　1959～1963 年

ニ、「沖縄の水産業」琉球政府農林局漁政課　1968～1971 年

イには、尖閣諸島海域漁業に関する記述は見当たらない。

ロ～二には、水産業の実態、推移を示す重要な水産統計資料が掲載してあるが、同資料では尖閣諸島漁場等の区分はなく、八重山圏で一括とりまとめているため、同海域の漁獲高統計等に関する個別の資料は得られない

ロ. 主な新聞記事

1962.01/01・八重山毎日新聞・「第 2 の段階に来た八重山の産業、東地方庁長に聞く」
1962.01/18・八重山毎日新聞・「黄尾礁で演習」＊大正島と久場島で 2/21.22 演習。
1963.05/19・八重山毎日新聞・「調査団寄港、アホウドリは全滅。荒らされ放題の尖閣列島、演習や台湾漁船のたまり場」
1963.05/20・沖縄タイムス・「荒らされる尖閣列島。領海侵犯で抗議も、海鳥保護せねば滅亡のおそれ」
1963.07/05・八重山毎日新聞・「宮古はサンゴブーム、6 月までの水揚げ 50 万ﾄﾞﾙ」
1963.12/07・八重山毎日新聞・「糸満船籍鹿島丸絶望か、尖閣列島に出漁して」
1963.12/08・八重山毎日新聞・「宮古島北方で発見、外国船が、遭難の鹿島丸」
1963.12/08・八重山タイムス・「遭難の糸満漁船、外国船が救助」＊鹿島丸遭難の件
1963.12/08・八重山毎日新聞・「カツオ、魚は島の周囲にうようよ。エサがなくお手上げ、異常つづきの水産業」
1964.04/07・沖縄タイムス・「新漁場の発見へ、漁獲高は年々へる一方（時の問題・我那覇）」
1964.12/03・琉球新報・「新漁法で試験操業。糸満町“追い込み刺し網”採用」 ＊尖閣諸島でダツ漁に、新漁法で試験操業
1965.07/20・八重山毎日新聞・「カツオ、魚は島の周囲にうようよ。エサがなくお手上げ、異常つづきの水産業。トビイカ出回る、漁民の経済うるおす」
1966.02/26・八重山毎日新聞・「魚つり島で日本漁船が座礁」 ＊愛媛県船籍竜喜丸の座礁遭難報道。

1966. 03/04・琉球新報・「船長ら二人の遺体みつかる、尖閣列島で座礁した竜喜丸の」 ＊同上。
1966.11/25・琉球新報・「沖縄に巻き網漁船、水産庁が派遣を決定」
1966.12/10・琉球新報・「ダツ大漁。1ヵ月で昨年の 2 倍、糸満漁夫はホクホク顔」 ＊尖閣諸島附近でダツ漁
1967.02/10・琉球新報・「旋網漁業導入を促進、本土業者招き試験操業」
1967.02/27・琉球新報・「まき網漁導入へ、玉城水産部長が上京」
1967.03/05・琉球新報・「旋網漁船の試験操業遅れる」
1967.03/15・八重山毎日新聞・「きよう赤尾嶼で、米軍の実弾演習」＊大正島で 3/15 演習。
1967.04/02・琉球新報・「米軍の射爆演習」＊久場島で 4/4 演習。
1967.06/08・琉球新報・「新サンゴ漁場を発見、柴田組合長“かなり有望”」 ＊魚釣島近海でサンゴ漁場発見。
1967.07/18・琉球新報・「カツオ漁船の大型化へ、漁獲不振に対処、漁場を開拓、年中操業図る」＊琉球政府・琉球水産研究所は、カツオ旬報の定期的配布に着手
1967.10/20・八重山毎日新聞・「気づかわれる漁船、宮古署から八重山へ捜索依頼」＊尖閣諸島へ出漁し遭難した宮古漁船『豊丸』の報道。
1967.10/24・琉球新報・「不明の漁船員救助」＊同上の『豊丸』漁船員
1967.10/28・琉球新報・「遺族に見舞金 8 千ﾄﾞﾙ。ジャンク船に襲われた第三清徳丸乗り組み員」＊1955 年尖閣諸島海域で、ジャンク船に襲われて死亡した遺族への見舞金
1967.12/07・琉球新報・「20 日間も遭難知らず、無線施設のない漁船―糸満。船員を救助、一隻捨てて帰港」＊尖閣諸島附近でダツ漁船の遭難事故。
1968.01/04・琉球新報・「“ダツ漁”は最盛期、好成績の水揚げ―糸満」 ＊尖閣諸島附近でダツ漁
1968.07/07・八重山毎日新聞・「魚釣島に観測所設置。尖閣列島調査団来島、高岡氏が記者会見」
1968.08/24・八重山毎日新聞・「エサ取りに新漁法、宮古出身平良さん。巻き網でいくらでも」
1968.08/28・八重山毎日新聞・「零細漁民お手上げ、巻網漁で問題かもす。漁民が訴える」
1969.04/03・八重山毎日新聞・「尖閣列島で米軍が演習」＊大正島で 4/3 演習。
1969.04/04・琉球新報・「東シナ海の低層流判明、水産庁南西海区水産研究所、人工クラゲ流して調査」
1969.04/16・八重山毎日新聞・「捜索いぜん進展なし。関係者次第に暗い表情。消息絶ってから 1 週間玉城信良さん」

1969.04/16・八重山毎日新聞・「漂流 10 日目に無事救助。(遭難した玉城さん)。本土漁船が発見。悲しみから喜びへ一変。きょう「ちとせ」で石垣港に」

1969.04/19・琉球新報・「漂流十日、奇跡の生還、本土漁船が救助。石垣の玉城君、クリ舟で出漁、遭難」＊救助した漁船は尖閣海域へ出漁途中の長崎県サ野村KK所属漁船『第一静山丸、105.88トン、迫口義江船長』

1969.04/19・琉球新報・「生還に耳疑う父親、“ほとんどあきらめていた”」

1969.06/12・琉球新報・「現地ルポ尖閣諸島記＜5＞」

1969.08/30・琉球新報・「尖閣列島調査団の報告書」＊『漁港、・・・常時漁場調査を行い、尖閣列島に漁港をつくれば一大漁場になると思える』と報告。

1970.03/11・沖縄タイムス・「28 年前に“尖閣測候所”計画。当時の軍事極秘資料が語る。戦争で立ち消え、連絡も暗号電使い秘密に」

1970.04/09・八重山毎日新聞・「尖閣列島を無惨に荒らす、海鳥の死体が山積み。台湾漁船乗組員の仕わざか、宝徳丸が報告」

1970.08/09・八重山毎日新聞・「最盛期迎える巻き網船。集魚灯に魅せられる魚群」＊漁場は石垣島沖、『連日大漁しても・・過剰ぎみで、思うように消化されない』と嘆いている。

1970.08/20・沖縄タイムス・「魚釣島に灯台建設、海底油田、鉱業権も年内に処理、政府」

1970.08/27・八重山毎日新聞・「尖閣列島、風ロボット設置、琉球気象庁が計画進める」

1970.09/13・琉球新報・行政府、気象観測所設置へ、「尖閣列島」の領有裏付け」

1970.09/19・沖縄タイムス・「魚釣島に灯台の設置を、宮良地方庁が主席に要請」

1970.09/25・琉球新報・「灯台建設の建設を検討、行政府、尖閣海域の安全航行で」

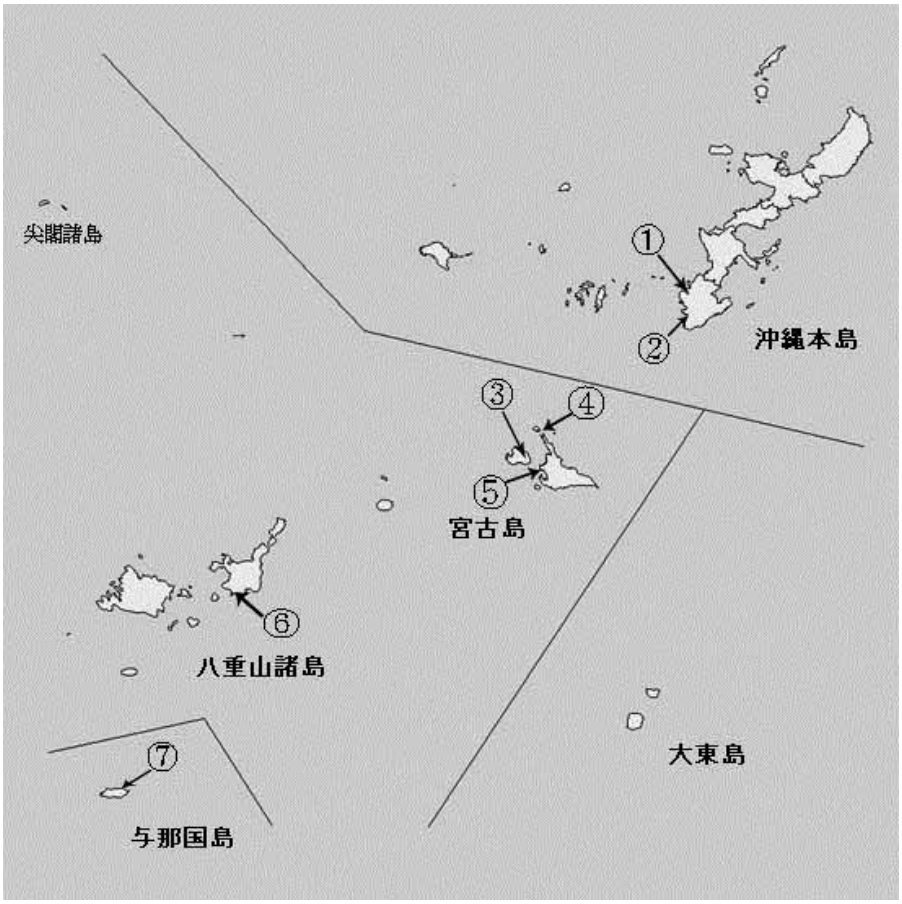
1970.12/19・琉球新報・「「尖閣」に気象観測所、領有権からみ既成事実つくる、大蔵省、沖縄援助の調整費使用を解除」

1971.03/24・八重山毎日新聞・「第八福徳丸乗員の水死体を発見、台湾の海水浴場に漂着」＊長崎県かつお船第八福徳丸が、尖閣諸島近海で操業中に遭難。

1971.05/02・八重山毎日新聞・「クリ舟 2 隻遭難か、4 人の漁夫行くえ不明」
＊魚釣島近海に出漁した石垣船籍クリ船『金勇丸・入松川丸』が遭難。

Ⅱ. 漁業者への聞き取り

漁業者への聞き取りは下記の7漁協で実施した。



各漁協組合員に対する聞き取り実施日・人数は下表の通りである。

漁　協　名	所　在　地	聞き取実施日	人数
① 那覇地区漁協	那覇市曙町	2009 年 11 月 27 日	2 名
② 糸満　漁協	糸満市字糸満	2010 年 6 月 18 日	1 名
③ 伊良部 漁協	宮古島市伊良部	2009 年 12 月 16 日	3 名
④ 池間　漁協	宮古島市平良字池間	2009 年 12 月 15 日	3 名
⑤ 宮古島 漁協	宮古島市平良字荷川取	2009 年 12 月 17 日	1 名
⑥ 八重山 漁協	石垣市新栄町	2009 年 11 月 19 日	2 名
⑦ 与那国 漁協	与那国町字与那国	2009 年 11 月 18 日	2 名

①. 那覇地区漁協

②. 糸満　漁協

③. 伊良部 漁協

④. 池間　漁協

⑤. 宮古島 漁協

⑥. 八重山 漁協

⑦. 与那国 漁協

糸満漁協掲示の演習区域図

國吉 真一　くによし しんいち　（ 那覇地区漁協 ）

沖縄の一本釣漁業は、那覇市垣花の我那覇生敏氏によって大正～昭和初年に確立された。戦前から尖閣諸島は垣花漁民(那覇地区漁協)の一本釣漁場だったという。

國吉真一氏（73 才、昭和 11 年生）は、垣花漁民出身で、尖閣諸島を主な漁場にして、長年深海一本釣業に従事してきた。尖閣は、沖縄本島からは一昼夜半の遠隔にあり、海の荒い難所である。氏が所属する那覇地区漁協は、尖閣での深海一本釣が中心だけに、情報を聞いて漁に向かわせるとか、先発隊を入れていくとかの方法をとり、漁協ぐるみで効率的な操業体制を組み、大きな成果を上げていた。

ひと航海 3～4トン水揚げ　ひと月 3 航海

僕は、終戦後、学校を半途でやめて、親父と一緒に漁をやった。17､8 才(1953､4 年)頃には船をこしらえて、一本釣で尖閣へ行っていた。那覇地区漁協は、深海一本釣が中心で、尖閣が主な漁場だったから、ずっと向こうへ行っていた。あの当時はびっくりするほど魚が獲れた。1 週間では 3～4 トン獲れた、5,6 千斤位は積んできた。尖閣に行くには 1 昼夜半、30 時間ほどかかる。向こうに着くと、魚はびっくりするほどいたから、3 日ほどで船のいっぱいになった。3､4 トンを水揚げして5日間で帰れた。航海日数は大概 1 週間ほど、天気のよい時はピストン航海して、ひと月で 3,4 航海だが、大体 3 航海だった。

船は第三五真丸（13トン）、那覇地区漁協のあった泊港から 5,6 人で行った。

情報聞いて　向かわせる

一本釣漁業は季節は問わない。年中行っているが冬の時期がいい、夏は潮の流れが速いから。時期によって潮の流れが速くなると、別の場所に移動する。宮古、八重山とか、宝山ソネとか、あの辺りに行く。夏場の台風時期は避ける。宮古八重山では 5,6 時間ではすぐ港に入れるが、尖閣は遠い、発生して逃げてくるのに 30 時間位はかかる。こういう計算して台風が出でない前の時期に、大体 10 月から 3 月頃に行く。向こうへ行って運悪くシケて、1週間、長くても 10 日間碇泊してもおさまらない場合は、すぐ帰ってくる。

季節によって尖閣が荒れる時期は、宝山ソネとか、八重山のクボウの西側とか、水納島のツリーグワーとかに行った。当時は宮古、八重山近海でも大部獲れた。

尖閣へ出漁は、船は、一緒ではなく、大概交互に行った、情報を聞いていい時は、向かわせる。無線機をもっているから、無鉄砲には行かない。先発隊を入れていく。どんなか、どうか、潮はどうか、いいよと言ったら、向かわして、駄目よと言ったら、別の漁場を変える。合い船、僚船で2隻組んで行く場合もある、多いときなら 5、6 隻でも行った。

向こうでは、操業している船が、周囲に、各単協の船が大概 1､2 隻はいる。宮古や八重山から、糸満から来た船もいる。もっといる場合もある。海は広いから見えないでも操業しているから。海では互いに情報交換する。聞かれたら答えないといかん、情報交換して、どんなか、どうかを聞いて、

漁をする。

シケたら　島影に避難

地元の船が多いが、日本船も、台湾船も来よった。シケるとよく一緒に避難した、クバシマ(魚釣島)の島影へ、北からシケると南側へ、南からシケると北側へ廻って、ここは全部の避難場所だった。昼は見えないが、シケてきたら、東シナ海でやっている船があっちこっちから来た。日本船は、一本釣やカツオ、サバ漁だった。台湾船は、マンビキかシイラとか、浮魚を獲っていた、一本釣もいたが、大概サメ獲り船のようだった。今でも大九、宝山ソネでサメ漁している。あの頃はヒレだけ取って、胴体は捨てていた。

フチミグワー　いい漁場だ

尖閣では海の深さによって、魚の種類が変わる。100m以下はマーマチ、シチュウマチが釣れる。尖閣の場合アカマチは 150mの浅い所にいる。海によっても魚は違う。一本釣だから量を獲るために、あっちこっち、全部やる。深い所やつては、又浅瀬でやったりする。潮の流れによっても、こちらは潮が強いからと、あっちこっちへ移動してやる。大陸棚の落ちるこのラインをフチミグワー(大陸棚縁辺線)と呼んでいる、このフチミがいい漁場だ。ここに沿って漁をやっていく。釣れる時は浅瀬にアンカー入れてやる。深い所はアカマチとか、浅瀬にはシチュウマチとか、マーマチとか、いろんなトィマチグワーがいる。また、小さい魚しか釣れないと、場所を移動し、大きいものを探しまわる。フチミの崖の所になるとすごかった。15 キロのアカマチが釣れる。また、ヒラマチーといって、アカマチに似て大きなもの、大きくなったらロンコウという。100 キロクラスなると若者 2 人で担ぐのは精一杯、あの頃は、あんな大きなロンコウが獲れた。今はもう見たことがない。

今はもう　昔のように獲れない

復帰前は、僕等の時代は、もうびっくりするほど釣れた。3 日で満船し、3～4トン釣って5日で帰ってきた。ひと月に 3～4 回は航海した。復帰後は、今は、同じ日数で殆ど漁がない。1～2週間かけて 2 百キロ、多くても 5 百キロ、航海もひと月に 1～2 回しか行かない。

そんなに魚が獲れないかと、今の一本釣を見ると悲しくなる。もう尖閣は昔の面影はない、禿げ山見たようになっている。この数 10 年間でこんなにも変わった。

昔は、魚はどこでも多く獲れた、今、獲れなくなったのは尖閣だけのことではないが。

僕は、終戦後の頃から一本釣をやっている。その頃は、やる人は僅かだった。

那覇地区漁協も少なかった。それが一本釣は儲かると聞いて、尖閣へ行けばいっぱい釣れると知って、自分たちもやると言うて、あれから広がっていった。ここからも、他所からも、交互に押し掛けて行った。戦後 64 年経つが、50 年で計算しても大変な数になる。尖閣にも、魚がいなくなるは当たり前、成長するのと獲るのとが合わない。

だけど、今は、県や国が、マチ類の禁漁区を決めて保護していると聞いている。

昔のように尖閣が豊かな漁場になり、魚が回復できれば、と願っている。

高江洲 昇　たかえす のぼる　（那覇地区漁協）

高江洲昇氏（76 才、昭和 8 年生）は、漁業歴 55 余年、一本釣歴 40 年、尖閣漁業歴 35 年のベテラン漁師である。八重山では素潜りを特技とし、那覇へ移籍後は那覇地区漁協に所属、深海一本釣を専業、尖閣諸島を主な漁場にしてきた。

氏は、漁業気象の風力は、尖閣では 1.5 倍、モンゴル高気圧が 1050 ミリ以上になれば、漁を止めすぐ避難準備、長年の漁業体験で身につけた天気予測を仲間の船に知らせたり、もらったりでお互い情報交換しながら操業。那覇地区漁協の漁船が、尖閣で遭難したことがないのは、相互に情報を交換・共有し合い、漁協ぐるみで安全操業に徹しているからであろう。

一本釣歴 40 年　殆ど尖閣で漁

僕は、両親は那覇泉崎の出身だが、八重山で漁師に生まれ育ち、主に素潜り漁をしていた。25 才の頃、石垣から那覇に出てきた。船長免許をとって第一安州丸を造った。

那覇地区漁協に所属し、70 才を超して退職したが、それまで 40 年間、深海一本釣を専業してきた。最初はニシ(北)の海、与論・徳之島、宝島、小宝島附近まで行った。漁する人は情報聞いてあっちがいいと聞けばあそこへも行くし、こっちが駄目なら漁場を変える。第三安州丸(9.9 トン)を造ってから、アコウ(赤尾嶼)、クバシマ(魚釣島)附近がいいとのことで、尖閣方面へ出漁するようになった。1962 年(昭和 37 年)、29 才頃、初めて尖閣へ出漁した。底魚はいっぱいいて、一本釣のいい漁場だった。以来、向こうを主漁場にして、35 年間、一本釣をやってきた。那覇泊港から早朝には出港し、22 時間ほどで夜が明けると、すぐ岩見たいな島のアコウが見える。そこから 6 時間位でクバシマに着く。泊港からクバシマ迄は 28 時間位かかる。今の船ならもう少し速いはずだが。

アカマチ　マーマチ　シチュウマチ釣る

クバシマ附近ではマーマチ、シチュウマチ、少し離れた所ではクルキンマチとかが釣れた。そこから1時間半ほど西の方へ行くと、(そう言いながら海底地形図を指して)、この大陸棚ラインが突き出しているところだが、センカ・クイリーヌマガイグワー(尖閣西の曲線部)と呼んでいる。このマガイグワーの外側では、アカマチ、内側ではマーマチ、シチュウマチが釣れる。またこちらのセンカク・アガイ(東)ヌマガイグワーでもよく釣れる。(大陸棚線の特有な海底地形の場所に、マガイグワーといった沖縄方言で名称を付け、尖閣漁場の釣場ポイントにしているのに感心した)。

海底地形は魚探で見ていくとよく分かる。崖状に急に深くなるところは、フチミーグワー(大陸棚縁辺線) と呼び、外側はいい漁場でアカマチが、また大陸棚内側の魚釣島北方一帯は、マーマチが釣れる。アカオ附近も同じで、大陸棚外側ではアカマチ、内側ではシチュウマチ、マーマチで、フチミーグワーでは、ロンコー、ヒラマチ、アカマチなどがよく釣れる。沖の北岩は、トィジーグワーヌ(鳥島の)ニシヌ(北の)シーグワー(瀬)と呼んでいるが、附近は浅くシルイユ、カンパチ、ミーバイが釣れる。そこへは海がシケた時に行って、よく夜釣をした。

尖閣列島には、宮古、八重山の地元船以外に、日本船も多く来ていた。日本船は一本釣船が

大部いた、僕等がアンカーかけて漁している側から、流し釣をやって、底魚マチ類を獲っていた。5,6 隻位の船団組んでいたが、鹿児島、宮崎、長崎からの漁船だと思う。

宮古・八重山に寄港　魚 船で那覇に送る

那覇地区漁協は、大体 4,5 隻で船団組んで、出漁していたが、毎日出ているから、尖閣では、多いときは 12,3 隻から 15 隻位が漁をしていた。

普通 4,5 日で満船したら那覇へ戻ってくるが、いつも魚がいっぱい釣れるとは限らない。あまり魚が獲れず、漁が長引いて燃料や食料が切れた場合は、近くの宮古か、八重山に寄港した。獲った魚は、そこでコンテナに入れて船で、那覇に送った。燃料の油や食料、水などを補給し、仕込みを済ませると、2 航海目は、ここ宮古や八重山から出漁した

新たに魚の釣れる場所を探して、漁場を変えて、2 航海をするのだが、那覇から尖閣まで距離が遠いため、宮古、八重山からの出漁は、時間的、経費の上から好都合だった。そんな時は、仕込みするから金送ってくれと漁協に電話するなどで大忙しだった。船をもっていると、あれやこれやで苦労も多く、漁業経営は大変、締めてみると、あまり儲けはなかったように思う。

モンゴル高気圧 1050 以上　急いで避難

尖閣の冬は波が荒く、黒潮が北上し、潮の流れも速く危険な海だ。ラジオの漁業気象にはたえず耳を傾けていた。東シナ海の何処は風力何mと言えば、尖閣は、予報の数値より 1.5 倍ほど風は強くなる。風力 10mと予報すれば、向こうでは、15m位に強くなる。

また、東シナ海では北よりの風に変わるとか、冬のモンゴル高気圧の数値が千何ミリバールと言えば、尖閣辺りは、何m位にシケてくるかが分かる。1050 ミリ以上と予報すれば、漁を止めて、すぐ避難準備をした。沖縄近海では、1050～1060 でも漁はできるが、尖閣では、風は 16m以上、波の高さは大体 5m位まで上がり、海は大荒れになるから避難しないと危険だ。これらは僕等が尖閣で長い漁業体験で身につけた天気予測のやり方だが。こんな風に天気を予測して仲間の船に知らせたり、もらったりして、お互いに情報交換した。だから、僕はこれまで一度も危険な目にあったことがないし、また那覇地区漁協の漁船仲間が、尖閣で遭難したことはない。

底曳き船・サンゴ船　漁場荒らす

魚釣島の北方大陸棚はマーマチが最初釣れよったが、あとでは釣れなくなった。この辺には、中国漁船団が来て、底曳き網を曳いていた。復帰後の話だが、7,80 隻の大集団で根こそぎ曳いて漁場が荒らされたかもしれない。この一帯では、以前のように釣れなくなった。

アコウ附近には、サンゴ船は沢山来ていた。宮古船も台湾船も入り交じっていたようだ。

サンゴ船は網を下げ、ロープを引っ張っているからよく分かる。これも復帰後のことだが、30 隻以上はいたと思う。サンゴ船が網で引っ張って、海底のサンゴを採ってしまったら魚は寄りつかなくなる。サンゴがもとのように生えるには 100 年以上はかかる。

尖閣の漁場は、底曳き船やサンゴ船に漁場が荒らされて、魚は逃げたかもしれない。

金城　亀吉　きんじょう　かめきち（ 糸満漁協 ）

糸満が誇る漁は追込である。集団で潜って網に魚を追い込んでいく勇壮な漁である。金城亀吉氏(78 才・昭和 6 年生)は糸満で出生、若い頃から追込で鍛えられ、潮水を多く飲んだという古参の漁師である。氏は終戦直後、尖閣諸島でダツの追込漁を行った。米軍上陸用舟艇で漁した体験をもつ。氏は 40 代にハワイに渡り、10 数年間、かつお漁に従事。米国籍も取得、今は趣味の釣りを楽しみながら悠々自適に暮らし、青年漁師の指導にあたっている。

糸満伝統の追込漁　ダツ獲る

僕は糸満生まれのウミンチュ(海人)だから、学校卒えると、すぐ漁を手伝わされた。

戦争を終えると、那覇の米軍部隊に1年半位は軍作業に行っていた。その部隊が天願に移動したから辞めて元の漁師に戻った。最初は糸満港地先でシジャー(ダツ)獲りをした。

このシジャー獲りも、トビウオ獲り、グルクン獲りも、昔からの糸満の追込漁でやる。

シジャー獲りの場合は、母船2隻とクリ船 3 隻で行うが、海に大きな網を敷いて、皆なで魚を取り囲んで行く、母船2隻は左右に分けて網の縄もっている。クリ船は真ん中にいて、潜りの人は、泳ぎながら魚を追込んで行く。おどし縄の先にクバの若芽を結んでいるから海の中では白くピカピカ光るさぁ。魚をそれでおどして網に入れる、網から出る魚は海水をパンパンして逃がさない。あとは綱を引けば網が閉まる、そんなやり方で獲っていたが、母船やサバニに乗る人、追込潜りの人と相当の人数が必要だ。だから追込漁期になると、あっちこっちに人間を取られて、シンカ(組人数)が不足し、漁できない所も出てくる。

上陸用舟艇　漁船に改造

糸満は戦災にあって漁船は1隻もなかった。当時和船はなく、漁船は、全部米軍の上陸用舟艇を改造したものだった。かつお船もそれでやっていた。舟艇だから何丸というのもなかった。僕が最初に乗ったのは、LCVP型の小型舟艇を改造した漁船で小さくて遠くへ行けなかった。それに氷もない頃だから、漁はいつも日帰り。久米島にシジャー獲りに行った時は、3隻の舟艇で行き、2隻は漁をし、1隻は毎日毎日、獲った魚を本島に運んでいた。そのあとから、エンジンが2個付いたLCM型という大型の上陸用舟艇を改造した漁船になった。大きさは 10 トン位の漁船を横に3隻並べた位だった。この頃にはもう氷も積めたから、宮古・八重山や尖閣へ行けるようになった。それと、もとの糸満漁港には、戦時中に米軍の空襲を受けて大きな漁船が沈んでいた。この船のエンジンは海水にずっと浸かって、空気に触れないで錆び1つなかったから使えた。この沈んでいる船を引

米軍上陸用舟艇・ＬＭＣ型を改造して漁船にした。
（「ウエブサイト」より）

き揚げて修理した。それが栄丸という大きな漁船で、50 トンはあった。親方は大城組の大城武徳さん、糸満漁協組合長もした人で、パンジャン・ウシーアッピー上原信吉さんが船長して、この栄丸で尖閣諸島でダツ漁を始めた。行ったら、もう行くたびに、もう2～3万斤（12～18 トン）獲れて、いつも満船で帰港していた。

舟艇2隻で　シジャー獲りに

僕も、19 才(1950)の頃、尖閣にダツ獲りに行った。5,6 回位は行ったが、この栄丸には乗っていない。上陸用舟艇で行った、2隻で。ダツ漁で綱引くには 2 隻ないと出来ない。30 名ほどのシンカで、それにサバニを横に積んで行った。舟艇は、戦車を積むから、入口の扉はキャタピラーが掛かるようギザギザが付いて頑丈、この扉が絶対開かないように溶接し、デッキも氷施設も造ってあった。部屋は小さかったので、僕ら若い者は飯炊き用の薪積んでいる片隅で寝起きした。スピードも遅い。普通の漁船だと糸満～久米島～アカオ(赤尾嶼)～クバシマ(魚釣島)は 30 時間位だが、箱形だから 48 時間位かかった。漁は 11～12 月頃で1週間から 10 日位だった。冬場で波も高く、風も強かった。舟艇は箱形だったからシケても横には強かった。クバシマ付近を中心に漁をし、シジャーを大漁して帰ってきた。

トリシマに　人が住んでいた！

尖閣で漁していた時、鳥を採りに、トリシマの南小島に上陸した。

当時生肉がないので、そこで鳥を沢山採って持ち帰ったが、そこに何と人が住んでいた！！

あそこのガマ(洞窟)の中に 1 人で暮らしていた。八重山には糸満人がいっぱいいるが、この人も八重山から来た 4,50 代の糸満人だった。ここで鳥の羽毛を採る仕事をやっていた。

無線もない頃だから、鳥の羽毛がたまった時分、大体の日にちを決めて、八重山から船が来る。採った羽毛はその船に積んで持ち帰り、代わりに食料を置いていくという。こんな順繰りで羽毛採りの仕事を島でやっていた。昔カツオ工場があった頃はそうしていたという話は聞いていたが、戦後に実際羽毛採りしている人に会って驚いた。1人で島にこもってやる位だから相当利益があるだろう。魚を獲る以上に、相当儲けがないと、とてもできる仕事でない。

追込ダツ漁から　マチ類専門・底延縄漁へ

今の糸満では追込漁はもう見られない。パンジャン・ウシーアッピーと平安名栄照ヤッチーさんらが、ダツ漁やトビウオ漁を、最後までやっていた、昭和52年頃までだが。その頃には、もうマチ類が出てきた。ダツやトビウオは金にはならないから、底延縄や深海一本釣に変わってきた。

垣花の人達は戦前からマチ釣りは専門だったが、糸満は復帰少し前から始まった。

だから、尖閣諸島へは、糸満のシジャー獲りに代わって、マチ類専門の底延縄船や一本釣船が盛んに行っていた。延縄船だけで 20 隻位はあった。だが、その延縄船も次第に行かなくなった。今は、糸満漁協では、尖閣諸島でマチ類専門の深海延縄船は、上原常太郎さんの常丸(7.27 トン)他 4,5 隻ほどに止まっている。

國吉 守夫　くによし もりお　（ 伊良部漁協 ）

國吉守夫氏（80 才、昭和 4 年生）は、終戦直後は、台湾でカジキ、カツオ漁に従事し、尖閣海域に出漁した。26 才に宮古に戻り、サバニ漁を皮切りに、宮古・八重山～尖閣海域で幅広く操業、尖閣諸島では、深海一本釣、シマガツオ漁を得意としている。

また漁業先進県長崎で立延縄、底延縄やジャンボマグロ竿釣り漁法など修得、これら導入を試みるなど、漁業技術の向上・発展、創意工夫に熱心である。氏は年間水揚げ千万円を超え、自他共に「尖閣長者」と認められている所以はここにあろう。

終戦後　カジキ　カツオ漁で行く

南洋のパラオから高等 1 年で引揚げ、宮古に戻り台湾に疎開、卒業後はスオウで叔父がカジキ漁していたので台湾で漁師になり、宮古に帰り、又台湾へ行き、1954 年 26 才に宮古に帰ってきた。台湾にいた時は、カジキ漁の突船にも乗っていた。台湾に雇われて、何回も尖閣へカジキ獲りに行った。台湾船の乗組員は伊良部と与那国の人。船長は伊良部の人、船主は呉禮さん。船は呉栄丸だった。僕は銛手もした。海に突き出た舳先にモリを持って 2 人立つが後ろに2番手は 1 人ずつだ。北風になったら、海がシケたら出る、波が荒い時が魚が動いているから。カジキは 20 何本も獲った。もう舵を切るのが大変だった。尖閣ではカジキはものすごく多かった。

あとになって、宮古からは行った時はあまり獲れなかった。

台湾で　夏カツオ釣り　冬カジキ船乗る

台湾はカツオがいくらあっても足りない、カツオは台湾海岸から与那国迄来ていた。あの頃はものすごく獲れた。1回エサ投げて、釣り始めると船はもたない、もうあんまり釣って、船長があの時 20 だったから、もう早く止めなさい、止めんと、船が沈むよと叫んでいたが、その位獲れたこともある。7、8 キロ位のカツオが多く獲れた。アジンコートは毎航海する、アジンコートで獲れなければ、尖閣へ行った。

底魚　いっぱい　いますよ

宮古に戻り、最初の頃はサバニから漁を始めた。1トン位のサバニではせいぜい多良間付近までだった。やがて 2 トン半の船を持つたので、夏にはアカオ(赤尾嶼)まで1日、日帰りで行った。

当時は氷がないから日帰りでないと行けない。それから尖閣には一本釣やシマガツオを獲りに行くようになった。

尖閣には底魚がいっぱいいますよ。アカマチ類も多い。（海図で魚釣島と黄尾嶼の間を指しながら）コウビトウ(黄尾嶼)から、2,3 マイル位離れた所にウキモロといって、アサバともいうけど、向こうが一番いい、当時は、誰もやっていなかったもんだから、マチ類が相当獲れた。いい漁場だった。

北の方の近い所にもあった。もう誰もやってないから。でも、道具がないと獲れない。向こうは潮が速いから釣機といった巻揚機を使わんと、ものすごく潮が強い荒沖なんだよ。

水深 73mのこの浅い所は、カンパチがものすごく獲れた。

クバシマ(魚釣島)付近での一本釣はカツオでなかったら底魚は何でも釣れる。

割合が多かったのはシチュウマチ、キンメダイだが、あれは立て延縄で釣れる。

カジキはマガジキ、クロカワ、シロカワ、バショウと色々あるけど、マカジキは台湾のアジンコートで大部獲れた。クバシマではクロカワとシロカワカジキがいっぱい獲れるが、内地のサバ船がサバを大部獲っていたからねぇ、尖閣にはサバはいなくなっている。

カジキのエサのサバがいなくなったら、今度はカジキが来なくなる。

だから、今は昔ほどは獲れないかもしれない。尖閣列島は、本当にいい漁場だった。

エサを一杯積んで行くが残る場合もあつた。少しのエサで 3 トン釣って、もう船はいっぱいになった。また、4,5 人位で行って、マチ類を1日で1トン余り獲ったけど、多く獲れたものだから、安くしても余り売れなかった。

底魚は、池間の人は獲るが、伊良部の人は少なかった、僕だけだったかもしれん。

シケに遭ったり　座礁したり

クバシマの、ここの方に小さな瀬がある。(飛瀬付近か？)。そこでは魚がものすごく釣れる。そこで 2 時間位釣って、眠くなったから寝ていたわけさー。浅い所で潮が変わってその間に船は暗礁にのし揚げ、座礁していた。起きてもうびっくりだ、あれこれとやったがどうにもならない。助けは無線さぁ、保安庁に来てもらって乗せて行ったわけだが、又、3,4 日シケにあって、14,5mの風だから帰れない。凪てから帰ってきたが大変だよ。

尖閣では、底魚の外にシマガツオ、マチ類とか色々な魚を釣ったが、シケたらもう行けない。一度は、天気予報で 3 日迄はいい天気ということで出港したらもうお昼 12 時頃ひどく荒れたことがある。20mの時化で、大波でブリッジの戸はぶち破られて、もう大変だった。天気予報は明後日までいいと言うもんだから、あの時の船は大喜丸(10トン)だったから助かった。プラスチック船だから丈夫だった。大喜丸は、僕が 45,6,才の頃、長崎で造ったファイバー船、いい船だった。

水揚げ3千万円余 「尖閣長者」

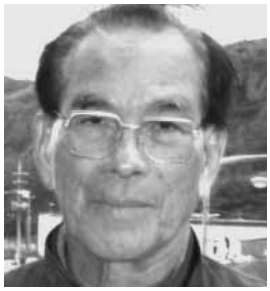
若い頃は、水揚げは 3 千万円余り位、年間で。大喜丸を持つようになってからだが。

あの船が 10 トン位あったから、上等な船だった。小さい船の時は遠くまで行けない。

1、2 トンの船では多良間付近まで。船が大きくなってから向こう、尖閣に行くから。

(氏に「水揚げ 3 千万円余は、月収にすると 2 百 50 万円余の高額に上る、まさに『尖閣長者』ですねぇ」と言ったら、笑顔で頷いた)。尖閣諸島ではシマガツオの他に底物、マチ類とか、色々な魚を釣った。60 才過ぎてから船は替えて、隆祥丸を持った。小さい船だが、あれからでも 2 千万円は揚げた。ひと夏でもすごかった。この場合は尖閣ではないが、シビの、マグロねぇ、あれを内地に尾付を千円で送った。あの時も相当儲けたよ。

仲間 恵義　なかま けいぎ　（ 伊良部漁協 ）



仲間恵義氏（80）は、伊良部漁協を代表するリーダー、勇壮闊達な漁業人である。

氏は、漁師に加えて、役場や漁協に勤めたり、漁船や定期航路の船長をしたり、伊良部島における戦後初の鰹節製造に携わるなどした。

尖閣諸島における漁業は、終戦直後に 19 才で曳き縄・底釣で出漁したのを皮切りに、その後は、漁船をしたてて曳き縄やカツオ漁を行うなどの豊富な体験を有している。

終戦後　尖閣へ　曳き縄・底釣に

尖閣列島へ行ったのは終戦後。19 才の頃だから 1949 年、大漁丸という 8 トン位の小さな船で、台湾の突棒船戻り、あれを改造してかつお船にした中古船で、5,6 名で行って、曳き縄、底釣漁をした。曳き縄はカツオ、マグロ、サワラを獲った。

マグロは小さいものだが、カツオは本ガツオとかスマガツオ（ウブシュウ）が獲れた。

コウビトウ(黄尾嶼)から南寄りにソネがある。浅く 100m位かなぁ。そこにアカマチとは違った大きいマチが居る。底釣はあれが釣れた。曳き縄では大部獲れた。1 つの本縄に 4 本位の枝縄に針をつけ走らして、3,4 本ついたらもう引っ張れなかった、手繰りだし船を走らしているから。フカが多いので全速力で走らさないと、魚は食い千切られる。

スマガツオを曳き縄でやると、半分も残ってなかった。だが、当時は、獲ってもそんなに持って来れない。氷もないし、船も小さい、もう早くに帰らないと、獲った魚は売れない。だから、昼漁したら夜間を走らせて、急いで帰って行った。

その頃、かもめ丸船主の漢名吉郎さんたちが、トリシマ(南小島の意)に小屋を建ててカツオ製造やっていたのを聞いていた。僕等も島に上がったら昔の石囲い工場跡があった。

そのトリシマにはものすごい鳥がおった。空いっぱいのカツオドリ、棒を投げたら当たって落ちて来る位だった。それで島の高い所に登って棒を持っていって鳥を叩いてねぇ、これを 200 羽程、棒で潰して、すぐ持て行けないから下へ投げ落とす。2、30m位下方で引っかかるものだから、下りて又投げて、それを集めて、船の曳き縄で縛り、持ち帰って食料にしよった。食物もない頃だから、だが今考えると、随分野蛮なことをしたものだ。

隆祥丸で　曳き縄漁

そのあと尖閣へ行ったのは船が大きくなってから、もう自分で船長やったり、人と一緒に行ったりして、船長で航海して尖閣列島まで行ったが、大概曳き縄でした。スマガツオを曳き縄漁でやって、相当釣れたんだが、その時もフカにやられて、半分も獲れなかった。

隆祥丸（20 トン未満）という船、40 才位の頃かな、大分のヒジ造船所で建造したのを僕が回航したファイバー船だが、この船で夏はカツオ漁をやって、冬場になると曳き縄で、尖閣に行ったりしていた。大概ウブシュウの曳き縄だか、氷があるので漁のあり次第で帰るが、尖閣の下の方で投錨し、

そこで碇泊しながら、夜は一本釣、夜釣をしていた。付近には伊良部船では喜翁丸や盛海丸とかがいた。八重山からも漁に来ていたようだが、船名が分からない。内地の漁船もたまには見た。尖閣は波が荒い所だ。

ある時、漁を終えて帰る途中、北風が吹き荒れて、隆祥丸はどうしても佐良浜に向かうことが出来ず、多良間まで行った。その時は大変だった。

試験船に乗り　底釣実習

船長免許を取る前は漁協にいた。37、8 才のその頃に、琉球水産研究所の試験船図南丸で底釣の実習に行ったことがある。

尖閣列島から南の方へ1時間位、そこへアンカー降ろして釣ったが、よく釣れた。

コウビトウは一番漁はやりやすかった。アカマチ、マチ類を釣った。

だが、尖閣諸島は潮が強いもんだから、大きい錘を 2,3 本縛り、それを引っ張って底につけるのが大変な仕事だった。

(海図で示しながら)。この 100m線が一番の漁場だ。こういった 500mの所には深海のアジしかいない。400～500m深くなったらアカマチ、ナガジュー、メンタイがこの辺で釣れる。300mの深さ位か。赤い魚で 7,8 キロもなるが。アカマチ、マチ類、ナガジューは値段が高い。きれいなキンギョマチという魚も釣れる。

サバ獲っても　売れなかった

尖閣では、内地の大きなサバ釣船が、夜集魚灯で漁していたが、伊良部もサバ釣業をやっていたようだ。サバ漁の技術者が、沖縄の方から来て、元漁協長奥平幸三さんが一緒にやっていたと思う。サバ船は 2 隻ほどいたかな。1 隻は奥平さんの日の出丸？と憶えている。

だが、販売が全然だめだった、島では売れない。沖縄で売るしかない。

離島の離島だけに飛行機は飛ばない。船で持っていったら経費はもたない。だから直接、この船で沖縄本島に持って行って売っていたようだが、売れなかったかもしれない。

もう 2,3 航海で終ったと思う。僕は、それには参加してないのでよく分からないが。

演習のあと　焼け野原だった

尖閣はいい漁場だから、昔の漁船は 13 時間を走らして行っていた。仕事をしないと皆食べていけなかったから、夜行で船を走らして行く。そしたら、米軍が演習していたからそこには近寄れない。演習を知らないで来て、そのまま引き返して帰った人もいる。

だが、漁が出来ないものだから、その分だけ琉球政府が補償金を払っていた。

演習のあと、コウビトウに上がって見たら向こうは焼け野原だった。弾の跡とか不発弾とかが散らばっていた、島を目がけて撃っているものだから。

また。演習の時は向こうで、アメリカの艦船が何隻かまわっていた。飛行機だけじゃない、アメリカの艦船がコウビトウ近海で、一緒に列を組んで走っているのを 2,3 回見たことがある。

漢那　一浩　かんな かずひろ　（ 伊良部漁協 ）

伊良部島は、池間島と並び漁業の島、カツオ業の盛んな島。戦争を終えるや、伊良部からも、尖閣諸島の好漁場めざして多数の漁船が出漁していた。

漢那一浩氏(62 才、昭和 23 年生)は、伊良部の先人たちからシマガツオ漁の伝統を今に受け継いでいる海人、伊良部漁協の若手手リーダである。氏は、日本全国でも、シマガツオ・ヤイトを 60 年間も専門にしてきたのは、伊良部の船、尖閣諸島のウブシュウ漁だけと、誇りを以て語っている。

冬のシマガツオ漁

僕は、シマガツオ（スマ、ヤイト）を獲りに、冬場尖閣列島に行く。喜翁丸(9.9 ﾄﾝ)に、大体 7 名位が乗って尖閣列島に行っている。僕が 20 代の頃からだから、この船で 35 年以上も行っている。シマガツオは回遊で、沖の魚でなく、瀬付の魚でサバ類、漁場は島の近く、黄尾島、魚釣島、北小岩、北小島から南小島、全部島の近くで漁をする、赤尾嶼にも行く。

シマガツオは、冬場 12 月～3 月、水温が下がり寒くる時期に獲りに行く。昔は引縄だったが、今はカツオ一本釣だから鮮度的にもよい。生き餌にはグルクンの小さいのを撒いて、最近は 2 ﾄﾝとれたら大漁だが、以前は 3～5ﾄﾝも獲れた。夕方に出て翌日早朝には着いて、仕事をして、翌々日の朝には戻る。ひと月に漁は 5.～7 回、悪いとき 3,4 回、1回の航海日数 3 日。その順繰りでやっている。冬場だから天氣が悪く動けないこともある。

伊良部　日本唯一のヤイト専業

シマガツオは、本土ではヤイト、スマ、宮古ではウブシュウといい、大きさは 3 ｷﾛ前後である。尖閣列島には、冬場水温が下がって寒くなって脂がのる時期に獲りに行く。鮮魚で刺身で食べるが、赤身で脂がのっているからとても評判が良い。別の魚は売れなくても売れる。マグロ類が売れなくても売れる。マグロ類より値段が上がっても売れる。珍しい魚だから皆が待っている。だから売れる。仲買人も他の魚がいっぱいあってもシマガツオを買って行く。

沖縄県で尖閣列島に行ってシマガツオを獲るは、前は八重山・石垣にもいたが、元々これ専門ではなくて、底物一本釣、アカマチ一本釣をしながら、時たま曳き縄で釣っていた位。伊良部の船は、シマガツオだけを、一生懸命朝から晩まで釣っている。

ｼﾏｶﾞﾂｵ　本土ではヤイト、スマ
宮古ではウブシュウという

日本全国でも、シマガツオ・ヤイトを専門にしているのは、伊良部の船だけだと思う。池間の船もあるけど、尖閣列島では殆んどやっていない。伊良部の船がシマガツオ専門になったのは、我々の先輩が向こうを拠点に仕事をしていた。台湾に行っていた先輩も尖閣列島に来ていた。色々な魚がいっぱいいることを先輩たちは知っていた。だから台湾帰りの皆さんを中心に、この漁で尖閣列島に行ったと思う。僕も亡くなった先輩方の何名かと一緒に行った。35 年以上前にこの船でも行った。

先輩達から受け継ぎ　60余年も

何 10 年も行っていると、一番先に何処で釣れて、次は何処で、という順番がある。

最初に黄尾嶼、次は魚釣島の方に下り、その周辺でやる。そこがあまり獲れなくなると赤尾嶼、大体この順序・循環でやっている。黄尾嶼から最初に行って、次ぎに魚釣島周辺に行って南小島を廻って、最後は赤尾嶼に。大体そういった順繰りで廻っている。そうやって赤尾嶼で漁が少なくなると大体終わりだな、もう我々の先輩たちは昔から手順でやってきている。最初黄尾嶼にウブシュウがいないと、別の処にもいないと、先輩たちから教わり頭に叩きこまれてきた、大体当っている。このやり方を受け継ぎ、尖閣列島でのウブシュウ漁を 60 年余り続けてきたことになる。

照明弾　目の前に落ちる

以前は、赤尾嶼で米軍演習が多かった。今はやってないが。当時は、何時から何処で、米軍演習やるという連絡がある。が、僕らは演習があると知らないで、赤尾嶼周辺で漁していた。夜釣りをしていたら、突然飛行機が飛んできたサーチライト照らして、ぐるぐる合図してきた。最初は島から離れろとの注意だ。だけど漁師は魚を釣りだしたら動けなくなる、急には。それにぐるっと大きく廻ってくるが飛行機だから速い。上空に来たときには照明弾を落とす、もう離れても遅い、目の前で爆発、パアーと明るくなる。また廻って来ては落とす、パアーと爆発、今度はかなり遠くに行ったなあと思っても来る、演習だから何回も来る、パァー、パァーと爆発、昼間の様に明るい、こんな状態で仕事していた。赤尾嶼ではこんな経験を何回もしており、照明弾位と思っているが、島の中心に落としている積もりだが、島でなくその周辺落ちること結構ある、飛行機からだから。

尖閣へ　遠出しない　パヤオが原因

僕が尖閣列島へ行き始めの時、復帰前の頃は、ウブシュウは浅瀬の魚、瀬の魚だから、島の周辺にマチ類もいっぱいいて、曳き縄もした。カジキも多かった、少し北風になると上に浮き、何 10 とヒレ見せて走り廻っていた。底魚もいっぱいいた。やっぱり獲り過ぎたからか、魚は昔のようには獲れないし、漁船は少なくなっている。パヤオ(浮魚礁)ができたことが漁船が減った原因の1つと思う。伊良部はパヤオ発祥の地で、パヤオの水揚げが多い、近くのパヤオに行けばカツオやマグロが獲れる。漁船は大型でなくても、小型でも安心して漁ができる。伊良部の場合、尖閣辺りへ遠出しなくてもよい、パヤオで魚が獲れるから。全盛期には、尖閣列島へシマガツオを獲りに行く船は 10 隻以上はいた。かつお船だけで 7,8 隻が、ウブシュウ・ヤイト漁をしていた。

現在、かつお船は 3 隻だけになり、私の喜翁丸と久高さんの八幸丸の 2 隻だけが出漁して、奥原さんの船は冬は休んでいる。だが、ウブシュウは、尖閣列島に行かないと獲れない。脂の乗った美味しいウブシュウは、冬の尖閣周辺でしか獲れない。先輩達から受け継いできたウブシュウ漁は素晴らしいものだ。僕たち伊良部漁民はこれを誇りにしている。

だから、尖閣列島でのウブシュウ漁をずっと続けていきたい。

仲間 惇　なかま じゅん　（ 池間漁協 ）

池間島は、カツオ漁が盛んで、伊良部と並び南方カツオ漁の中心。

仲間惇氏（81 才、昭和 4 年）は、池間を代表するベテラン漁師である。

カツオ漁を主体に深海一本釣、サンゴ漁、マグロ延縄漁を、沖縄、先島、尖閣近海で行ってきた。ソロモン、オーストラリア海域でも 15 年間、漁業に従事してきた。

氏は、終戦後 1953 年、糸満漁民がチャーターした漁船2隻で、初めて尖閣諸島でのダツ漁に参加した。以後、持船八幸丸で、同島へ出漁、カツオ漁、延縄漁や底魚一本釣などを操業している。

ダツ漁　大豊漁

尖閣列島へ初めて行ったのは 50 年以上も前、26,7 才(1957,8 年)の頃だったか？

糸満から上原信吉さん、通称パンジャン・ウシーアッピーが来て、かつお船２艘をチャーターしてダツ漁に行った。もう上原さんは 90 才を越す、数年前に亡くなったと聞いた。池間漁船泰光丸（30 トン、焼玉 100 馬力、船主仲間正雄）と慶良間座間味の船だった。漁民は自分が誘った。池間から 14､5 名で、総勢 30 人位だったと思う。沖縄から尖閣へ一昼夜、宮古からは 10 時間位かかる。ダツ漁の時期は 11 月から正月前までだった。

漁船 2 艘で網を引っ張ってまわして、逆に網を降ろしたら追込み役が、網の縄の外側を泳いでダツを追い込んでいくんですよ、ものすごく獲れた。

一網で 30 分位で船を満船したから、水揚げは 10 数トンもあって、大豊漁だった。

当時かまぼこ原料は、ダツしかなかったから幾らでも売れた。

糸満のウシーヤッピーさん、皆さんらは、大部儲けた筈よ。水揚げ収入は配当制だったから、我々漁民も 10 人前、給料で言えば 10 倍位もらった。うんと稼がせてもらった。

日本船　100トン以上　2,3 隻

漁場はコウビ(黄尾嶼)からクバシマ(魚釣島)付近だった。シマガツオは多かった。ダツに混じって相当獲れた。しかし、あの時分は商売にならないから、おかずにする位で、皆んな捨てた。あのあとから伊良部の連中が、シマガツオを釣るようになっているが。

近海には宮古や八重山辺りから一本釣船がいた。日本の漁船も見えなかった。たまには突船がいたかなぁ。だが風が強くなり、クバシマの側に避難していると皆、そこに入って来る。沖縄の船も、内地の船も、台湾の船も。沖で操業していた船は、風がでると、大シケになると、もう沖に流すわけにいかないから。(先)島にも、台湾にも、急いで行けない。だからここに、クバシマの島影に休みに来ていた。

日本船で 100トン以上の船が 2,3 隻はいた。一本釣船でなくかつお船のようだった。

一本釣り　水揚げ　日当ほど

そのあと 2,3 年して、南方ソロモン、オーストラリア方面に出漁していた。そこでカツオ漁やマグロ

延縄を 15 年間やっていた。宮古に戻って、尖閣へ行ったのは自分のかつお船を購うてからだ。今から30年前の1980年頃、冬は宮古でカツオは獲れないからと、八幸丸（17,8トン）で、一本釣に行った。当時の船は魚探がなかったが、私の船は魚探があって海の底が皆んな見えるから、深海一本釣を行った。釣機もあったが、大体が手繰りで、流し釣で漁をした。アカマチは 200～300m以下でないと釣れない。100～200mの程度でマーマチを狙っていた。クバシマ、コウビ付近で釣った。2 つの島のあいなかでもポイントを探して入れてみた。アコウ(赤尾嶼)、あんな遠い所には行かなかった。向こうは岩だけの島、碇泊する場所も、避難する所もない。

尖閣諸島での一本釣はあんまりだった。あんなに魚は獲れなかった。2,3 航海で 5,6 名で行ったのだが日当位のもの。宮古近海に魚がいない時期に行くからねぇ。いる時期はこっち（宮古付近）でやって、ここが釣れなくなったら、向こう（尖閣付近）に行って魚を釣ってくる。だが、向こうは悪い漁場じゃない、いい漁場だ。時期的に冬になったら危険になることはある。間違ったら船を捨てないといかんこともあるが。

冬　カツオが来た

冬は温度差は、尖閣が一番いい、だからカツオが向こうへ廻っていた。沖縄へは絶対寄らない。全部尖閣へ。内地からも大部来寄った。大体鹿児島、宮崎そういう所から。かつお船は最低 5,60トン、100 トンクラスの漁船だ。あの当時から氷積んでいた筈だが、長いことはおらん、行き来していたようだ。大部儲けた筈だよ。

あの当時は、尖閣で本カツオが釣れたから。今はシマガツオしか釣れんが。

米軍演習　行くなと補償

米軍が爆撃演習するからコウビやアカオに近寄るなと言ったから皆、行かなくなった。

それで補償が出ている。行くなと言って補償をくれている。米軍が演習するからと云うことで、琉球政府や県が行くのを止めたんです。行く行かんは別です。

一応は漁に行ってたからと補償を上げていた。補償をもらっていても、行ってはいいんだけれども、運悪くやられたら自分の損だ。だからなかなか行かない。それで皆、復帰前も、復帰後も、補償をもらって行かないようになっている。

コウビやアカオで演習している場合、その時余所では演習してなくても、クバシマにも行かない、センカク方面（尖閣諸島全体の意）には行かない、危ないから。

米軍演習の補償をしてからもう何十年にもなる。私は池間漁業組合の中では最初もらった方だが。これがいつ頃から始まったか分からない。この1年間水揚げしたのを漁業組合が県に報告するわけだ。だから彼らが計算して、この人はいくら釣ったから、いくら補償やると決まっている思う。これは水揚げに対する補償だから、尖閣で漁した人なら誰でも皆もらった筈だ。だが、米軍は爆撃演習を今はやっていない。大部前から止めている。だから、今は補償はない。もらった人は1人もいない。

西里　勇　にしざと いさむ　（ 池間漁協 ）

西里勇（77 才、昭和 8 年）は、勇壮果敢な池間漁師である。

氏は、18､9 才の頃から尖閣諸島海域で、深海一本釣、曳き縄漁を長年にわたりやってきた。尖閣に出漁したのは数知れず、東シナ海の荒波を乗り越えてきた百戦錬磨の漁師である。深海一本釣を得技とし、尖閣の海と魚を知り尽くしている感さえある。往時は、尖閣へは、「魚を釣りにではなく、積みに行く」ようなもので、いつも満船・豊漁で帰港していたという。

終戦直後　一本釣りで行く

僕は 18,9 の歳、学校を卒業してすぐ尖閣諸島へ行った。第三瑞光丸という 2,3 ﾄﾝの小さな船で行った。深海一本釣で行った。手繰りでマチ、タマン類などだが、潮の強い時は曳き縄でシマガツオ、マンビキ、サワラとかをよく釣っていた。向こうは潮のいい時はカジキなども来るから。潮のいい時は深海のマチを釣って、潮がよくなかったら曳き縄でシマガツオ、サワラとか、シイラとか釣っていた。クバシマ(魚釣島)から北は、あんまり一本釣は食いつきが悪い、向こうは下は泥だから。コウビトウ(黄尾嶼)は一本釣の魚はよく食う。氷がない時代だから、午後 3 時頃に出て、向こうに夜船を走らして行った。

朝早く着いて漁をして、魚を釣ったら、そのまま引き返した。商売しておったから、そのまま直ぐ引き返した、朝 8 時の定期船で魚を平良に送っていたから。

あの頃の船は遅くから、14～15 時間位かかっていたと思う。

朝から漁をやって、沢山つれて、昼 3 時頃には、はなれんと、朝頃には帰れんかった。

沢山釣れることは釣れたけど、あんまり儲けはなかったなぁ。

ゼロ戦機　屋敷跡　長嶺老人のこと

あの頃、コウビトウに上陸したら、日の丸が付いた飛行機があった。ゼロ戦機と思う。芋畑の真ん中にあった。芋畑は屋敷の跡から上がった所だが、ゼロ戦機は、あの時は、芋づるが後ろには這い上がって茂っていたが、きれいだった。乗ってみたりして遊んだ。

50 年前のあの飛行機、コウビトウの芋畑に、今でもあるんじゃないか。

芋畑は1町歩位あったと思う。屋敷跡の家の基礎なんかもきれいに出来て、大きい家の様だった。コウビトウでカツオドリを捕まえた。毛をとつて皮をむいて、裸にして持ち帰ったら、仲買が買いに来て、1 匹 25 ｾﾝﾄで売れた。高く売れた方だ、魚でも 15 ｾﾝﾄしかしなかったから。1人で 200 羽位しかできない、でも殺して縛るから、怖かった。

僕がコウビトウに 3,4 日泊まった話をしたら、長嶺加那志というおじいが、もう亡くなっているけど、今生きていたら 120 才位だが、自分はもう何年も住んでいた。向こうで鳥の羽毛を採る仕事をやっていたそうだ。こっちが足らなかったらﾄﾘｼﾏ(南・北小島)に行って採った。羽毛は船が来て積んで行き、食糧は持って来て置いていった。1年分の食糧は貯えていた。自分の家は屋敷の何処にあったとか、いろいろな話を聞かせてくれた。

採れたのは　赤サンゴだけ

その頃、19 才位の頃（1952 年）だと思うが、尖閣にサンゴがあるからとサンゴ網下ろしに行ったこともある。幸丸という 11 トンの船で、船長は仲間ヤマさんで、長嶺金五郎さんも一緒だった。

本サンゴを1つも採れなかったけど。コウビトウの周辺やって、アカオ(赤尾嶼)のところでやってもだめだった、赤サンゴは軟らかい、採れたのは、この赤サンゴだけ、ものすごく大きいものが上がってきたが。向こうには、台湾船も来ていた。だが、サンゴを採っているのか、何をしているのか分からなかった、僕等は 19 才位だから、未だ子供だったから。

24,5 頃、(1960 年頃か)には、宮古沖の大九ソネ、宝山ソネへサンゴ採りに行った、伸光丸で。その時は僕等が、最初に行っていたから、早かったから、うんと採って、大部儲けたよ。

狙ったのは　深海のマチ

深海一本釣は、クバシマ付近はよく釣れたけど、余り良い魚ではない。

アコウとかの東側の魚はいい魚だ。皆、マチを狙っていた、アカマチとかを。

コウビトウの東へ出て、あんなところへ行くのはきつい。クバシマから北になれば、向こうはもう海じゃない、一本釣の場所じゃない、向こうは浅いから、泥、東シナ海の泥だ。サバとか、サンマとかあんなものしかいない。浅瀬だから、向こうに行ったら何もしない。

（海図を指で示しながら）ここになるともう泥よ、浅くして一本釣には向かない。

クバシマから東側でなければ、一本釣は出来なかった。一本釣はマチ狙い、マチとかシロダイ、シロダイは、殆んどシケた時に、島の周辺にいる、深い所にいない。

向こうまで行ったら、深海のマチ狙いしかやらなかった。浅い所だったらシロタマンとか、フエフキとか、あんなものがよく釣れたけど、安い魚だからセリにはやらなかった。持ってきて、自分で食べるおかずにする位、だから、少ししか釣らなかった。

魚釣りにでなく　積みに行く

マチ類は、もう沖縄本島の船、糸満の船、那覇の船、ああいう所からもずっと獲りに来ていたから、相当やられている。それに、今はもう道具がいいから、魚探も付いてあるし、絶対逃がさないからね、よく釣れるはずだ。だけど、尖閣では昔見たいに釣れないかもしれない、いないんだから。

昔はものすごく釣れた。魚を釣りに行くではなく、魚を積みに行っている見たいだったからねぇ。

尖閣は潮の強い所だから波がものすごく強い。だから危ない目にあったりで、うんと苦労した。10 回行ったとすれば、そのうち 6 回位は苦労だ、半分以上は苦労だった。

もう少しシケたら大変だから、八重山からの北風にかかったら、宮古には上りきらん。

八重山に行って、少し凪てから、そこから伊良部に帰ってきた時もよくあった。

危ないことだけど、でもそんなしないと、食えなかったからね。

与那嶺正雄　よなみね まさお　（ 池間漁協 ）

1950 年の冬、伊良部漁民が尖閣諸島近海でカツオ漁を行い、南小島に仮工場を設けて、鰹節を製造していた。ほぼ同じ時期に、池間漁民も、魚釣島で鰹節を製造をしていたと云う。今回、与那嶺正雄氏（77 才、昭和 8 年生）からの聞き取りでこの事実が明らかになった。氏は家業は農家で漁師ではないが、17 才の歳に船の飯炊きとして尖閣諸島に連れて行かれた。島に上陸する機会を得、魚釣島の仮工場の様子を実見した。当時の池間漁民の関係者は亡くなっている。氏が 60 年前の事実を語る唯一の生存者である。

17 才で　エサ採り行く

私は 17 才の頃、飯炊きで尖閣列島へ連れられていった。お正月前だったと思うけど、11～12 月頃だったか、宮古には冬はカツオはいないから、冬は尖閣列島へカツオ漁に行った。かつお船は宝山丸、船主は池間の玉寄正雄さん、乗組員は 30 名位だったと思う。

私は当時子供だから何もできない、飯炊きや雑用係り、また先輩たちが海に潜って、小魚を追い込んで、エサを採っていたが、そのエサ採りの手伝いなどをした。

エサはバカジャグでキビナゴよりはずっと小さい小魚。エサの採り場は魚釣島の周辺だった、でも余り多くは採らなかった。カツオの群が多かったので、少しのエサで、カツオは大部釣れた。釣れたカツオは、本カツオです、シマガツオ、アブラカツオは釣らなかった。カツオの釣場は魚釣島の表側、南側ねぇ。向こうを主に、島の周りその近くで釣っていた。乗組員は 30 名位だった。その中の 20 名近くがカツオを釣っていたかもしれない、島に下りた人もいたから。魚釣島で鰹節を造っていたから。

鰹節工場　島の南側で

（『伊良部町漁民史』には 1950 年伊良部のかつお船が、南小島で鰹節を製造したことが記載されている。同書に目をやりながら）。その時はこの佐良浜(伊良部)の人たちと一緒ですよ。私ら池間の人たちが魚釣島でカツオ漁して、鰹節製造していた時に、佐良浜の連中は南小島でやっていたと、先輩たちから聞いていた。

魚釣島南西端、工場はここに？　断崖絶壁で海岸狭い、
古賀氏工場跡はここより西側　（新納義馬.1979）

佐良浜のかつお船は金光丸だったと憶えている。私は船にいて、たまにしか島に下りなかったので、魚釣島の工場はよく分からない。昔の桟橋見たようなものね。(旧古賀村の堀割を指す)。

私は桟橋の所に上陸したことはないが、船から廻って行った時に、その桟橋や石垣の形のもの

が見えていた。工場は其処にはない。その桟橋からもっと南の方にあった。工場から桟橋までは何百mも離れている。工場のある所は、島の表側、南側の海岸で、すぐ後ろ側は崖になっている。後ろは崖だから海岸はそんなに広くない。

木を伐りだし　屋根 テントで

カヤブキ小屋も、何んにもなかった。山から大きな木を伐ってきて、あれで工場を造っていたようだ。柱を組んで、屋根はアメリカのカバー（米軍野戦用天幕シート）を被せて、雨が入らないようにしていたが、あまり丈夫な造りには見えなかった。

工場に何人いたかは知らない。少なくても 7,8 人位はいたように思える。誰の名前も知らない。池間の人やよその島の人が混ざっていたが、池間の製造工場の人を連れて来たかもしれない。宝山丸の製造工場は、池間港の近くにあった、今はないけど。

工場裏の崖に　商号を彫る

魚釣島の工場は水は一杯あった、工場のある所の絶壁の山から水が流れていたから、飲み水や食事は、その水で炊いた。島にはあちこちに壺みたいな池（海岸のタイドプールの意）がいっぱいあった。そこには海から上がった潮水と流れてきた雨水が混ざって溜まっていた。カツオはあれを汲んで来て炊いていたと思う。食料は米や芋を船で積んで持ってきていた。もうどの位おっても大丈夫ということで自分らで炊いて食べていた。

カツオ炊きに使っていた釜は見なかった。池間の工場の釜は、五右衛門風呂みたいに丸かった。それを魚釣島の工場へ船から積んで持って来て、使っていたかもしれない。
工場のあった所の後ろの崖に、⑪の字を彫っていた。池間の宝山丸の鰹節場の印も⑪だったからねぇ。その⑪印を工場で働いていた若い連中が登って彫っていた。彫っていた所は高い崖で水はそこから流れてくる。そんな高い崖に苦労して彫っていたが、今もあるか知らんが。

連れられて行った　1回だけ

尖閣列島に行って危険な目に遭っていない。冬の海は荒れるが、風の強いときはエンジン起こして風の方向を考えて魚釣島の周りをぐるぐる回って、島蔭に避難した。

南小島には佐良浜の連中がやっていたと先輩たちから聞いていた。

漁に出ている時には、カツオはトリシマの間から上り下がりがひどかった。だから漁している船は見えていた。南小島には、沖の方から水タンクが見えていた。人は見えなかったが、漁している船は見えたから、島に人はおったかもしれない。

私は尖閣列島には1年だけ行った。そこで 2,回もしていたかも知らないが。

17 才と言うたら当時は子供だから、私は 1 回だけ連れられていった。

2,3 回行った人は、外にいるかもしれない。

もう向こうに行った人たちは殆ど亡くなっている。だから名前も、何も分からない。

渡真利 浩　とまり ひろし　（ 宮古島漁協 ）

渡真利浩氏（85 才、昭和元年生）は、終戦、23 才で海軍から復員、宮古島に戻ってきた。以後、漁業に専念、1950～60 代にはプラタス島で海人草・貝殻採取を行うなど豊富な漁業体験を持つ。氏は、尖閣諸島で鰹節製造を試みたカツオ業者の一人である。1957,8 年の頃、同島付近で、冬期にカツオ漁を行い、南小島で鰹節製造に従事したという。当時 30 代で最年小だった氏だけが健在である。以下はその体験要旨。

カツオ漁 3 隻 操業

私が尖閣諸島へカツオを獲りに行ったのは、32、3 才の頃で、昭和 32、3 年頃の冬だったと思う。宮古付近の漁が終わってから自分たちの進漁丸 30 トンで行った。乗組員全員が佐良浜の人達だった。宮古付近でのカツオ漁は 40 名位だが、尖閣へは 25、26 人位で行った。甘露の頃から1月頃までの寒い時季だった。尖閣では大概獲れた。私は製造する係だった、

鰹節の製造はトリシマ（南・北小島）でやった。こっちの漁が終わったら向こうで、尖閣で漁をしようということで、その時は 3 隻が一緒に行った。全部トリシマでやっていた。他の 2 隻の船名は覚えていない。（氏は、こちらから持参していった 1958.02/05 付「冬の鰹業に成功、漁船続々大漁」の記事を見て、思い出したようだった）。この時ですよ。2 隻は幸洋丸と隆祥丸だった。前泊さんと一緒。前泊光さんは幸洋丸の機関長していた。

別々に 南小島で 鰹節づくり

幸洋丸と隆祥丸の人たちと一緒にトリシマで鰹節つくりをやっていた。一番高い島だから、この南小島だと思う。ここで、皆（3 箇所の漁船）、別個に、鰹節を製造していた。昔の工場跡があったが、そこには釜はなかったので、宮古の工場で使っていたのを船で運んできた。海岸近くの、昔の工場跡は石垣が一杯積んであった、レンガ造りの水溜も残っている。家から持ってきたテントを、その石垣を利用して張り、小屋（仮工場）を建てた。魚のカツオは島の周辺で釣れるからピンピンしていた。カツオがピンピンしていたら製造はできない、少し弱くしないと使えない。鰹節の製造は、弱くしたカツオをさばいて、これを釜に入れ潮水で炊いた。炊いたカツオを取り出し骨を抜いて仕上げる、あとは乾燥させて鰹節にするのだが、全工程に大凡 10 日間位かかったと憶えている。

南小島の古賀氏工場跡。写真は 1952 年琉大・琉球政府資源局合同調査団一行。（新垣秀雄.1952.8）

島の近辺で　カツオ漁

カツオが獲れたのは島の近辺、島からそう遠くない。釣っているのを海岸から見える時がある。陸に揚げる迄は魚はピンピンしているほどだから。隣のクバシマ（魚釣島）付近でも獲っていた。エサはその周辺にいるキビナゴで、島の全体、周辺ばかりで採っていた。また、私も、たまに製造する魚の無いとき漁は 2,3 回位、漁に出たことはあった。

鰹節は本ガツオで造った。本ガツオに混じって、アブラガツオは沢山獲れた。

アブラガツオは、脂が多くて鰹節には適しないから、島(宮古)に持ち帰った。

製造人　3名

製造人は3名、内間某（70 才位）、前泊某（50 才位）、私（渡真利、33 才）が担当した。
どんどんカツオを獲ってくるもんだから製造する人は、鰹節は乾燥したら宮古へ船で運んだ。また宮古から船の燃料、食糧などを積んで持ってきた。そういう様にトリシマと宮古とを何往復かしていた。私が運んだり、持ってきたりしたのは 2 回位。宮古には留守番が 2,3 人しかいなかった。トリシマの鰹節仮工場では、2,3 ヶ月間仕事をしていたと記憶している。他の 2 つの工場の製造人も、私たち同様 2,3 名位、漁する人も 22,3 名位だったと思う。工場にしかいなかったので、船の様子はよく分からない。

鰹節 1000 本　約 2 ﾄﾝつくった

向こうは岩だらけの島で、大きな木がないが、海岸は流木が多い。カツオを炊く薪は、流木を持ってきて、斧で割って使った。向こうで造った鰹節は 1000 本位だったと思う。

製造したものは、全体で 2 ﾄﾝ（約 3300 斤）位になる。（幸洋丸・船主前泊力氏側が鰹節 1 万 10000 斤を製造した旨の新聞記事を見て）　幸洋丸の方は、キロにすると 6.6 ﾄﾝを製造したことになるが、そんなにカツオが獲れて、鰹節を造ったのかな？　進漁丸の 3 倍になるわけだが、それとも、私の記憶違いなのか、よく憶えていない。

進漁丸は株式でやっていたので、代表者は洲鎌蒲四郎氏だった。

水は充分なく、虱が出た

トリシマというから、空が真っ黒くなるほど鳥がいっぱいいる、昼はいない。朝に出て行って、夕方しか帰って来ない。いっぱいいる時は、もう糞が落ちてくるから、外ではご飯は食べられない、外には出れなかった。(カツオドリの写真を見て)、この白い(雛)のは少ない、黒い(成鳥・親鳥)のは多かった。時々は捕えて食べた。これは大きいから 1 羽で 2,3 食分あった。肉はカツオ臭い。卵は家に持ち帰った。飲み水は、宮古から運んだ。船が宮古に行っている時は、そこにある水を飲まんといけん。古賀さんの造った工場にはレンガで造った水溜め池があった。その水は汚れて飲めないが、もう目をつぶって飲んだこともあった。それに水が充分にないから身体も、髪も余り洗えんから、あとで髪に虱が出た。もういろいろな苦労があったよ。

私が、鰹節を製造したのは1冬期間だった、1 年だけだった。

玉城　亀一　　たましろ　かめいち　（ 八重山漁協 ）

明治期の八重山には糸満漁民が移住し、八重山漁業の礎を築き、発展に貢献している。玉城亀一氏（86 才、大正 14 年生）は、祖父の代に石垣に移住した糸満漁民二世である。氏の 70 余年の漁業歴は、糸満漁民の血を継いだ勇壮と進取の気性に富んだものである。戦後の八重山では、カツオ業は冬場の休漁が問題だった。氏は、尖閣諸島での冬場のカツオ漁、底魚の曳き縄漁、一本釣に挑戦して成功し漁民の多くが氏のやり方を見習い、八重山での周年操業に寄与した。

台湾から　カツオ漁で　アカオへ

僕は、85 才だから漁業歴は 70 年余り。14 才で南方のマーシャル、サイパン、トラックに漁で行き、20 才に徴兵検査で八重山に帰ってきた。終戦後の 1947、8 年、22,3 才でまた台湾に行った。台湾では基隆社寮町に 1 年位いた。沖縄(本島)、宮古、八重山の人が多かった。台湾のかつお船で、基隆から尖閣に初めて行った、船名は忘れた。

乗組員は 17.8～20 人位。船長は具志という沖縄の人、乗組員全員沖縄、石垣の人だった。かつお船は 2 艘あったが、大概交互に 1 艘づつ行っていた。

当時は天気予報もなく遭難も多かった。荷物も積んでエサも積んだら、エサは長くはもたんから、天気が悪くても出漁しないといけない。基隆からそのままアカオ(赤尾嶼)に向かった。

ユクン(黄尾嶼)やクバシマ(魚釣島)付近でも釣れるが船長が分からないから、そこを飛び越してアカオに行った。そこでは大部釣れた。5,6 トン位は釣れたと思う。ふつうのカツオとマガツオ、アブラカツオも、ナガイユ、ダツといろいろ混ざっていた。エサはタラピサー（内地のイワシと同じ）。

基隆からアカオまでは 17,8 時間かかった。行きは潮の流れに乗るから早いが、帰りは 21,2 時間位かかった。あるとき、丁度台風シーズンの頃だから暴風に遭って、三角波では台湾に帰れんからと、八重山に向かい、石垣港に避難したこともあった。

八重山から　冬場行く

そのあと、僕がよく尖閣へ行くようになったのは、昭和 44,5 年頃からだと思う。復帰前の 40 年代だが、あの時分は沖縄(本島)からも一本釣で何 10 艘と来よった。尖閣は殆ど沖縄の一本釣の漁場になっていた。僕はもぐりも、一本釣も、曳き縄も、延縄も何でもやった。生産も、加工も、出荷も、全部自分でやった経験があったから、一本釣や曳き縄しに、向こうへ行った。

また、あの頃は、カツオ漁は夏だけやり、冬は船を休ませて、半年は遊んでいた。

僕は、冬も船を遊ばさんで、向こうで漁をしていた。あれから皆、僕の様に、尖閣へ行くようになったと思う。もう、一本釣の魚はいっぱいいたよ。4,5 日で 1～2 トン近くまで揚げた。あんなに釣れよった。あの時分の魚の量は、今とは全然話にならない。深海一本釣で狙うのはマチ類だ。水深 300～400mもあるが、大体は 70～80mから下、漁場はクバシマ付近を基準にしていた。

一本釣は時期は関係ないが、僕の場合はカツオ漁が終る 11 月～3 月頃の冬場に行った。

カツオ　曳き縄で釣る

アカオに行けば、マガツオが曳き縄で釣れた。釣れるのはお正月頃、その頃は産卵期と思うが、脂が乗って美味しい。宮古はカツオ漁が専門、カツオを好む。だから宮古から注文をとってよく持って行った。このあとから宮古の人は、シンカ(組集団)も多いし、エサを持って行き、一本釣りで、竿で、夏のかつお船見たいに、尖閣で釣りよった。

僕がやったのは2,3年先だったし、あそこでは竿で釣るとは思わない、4,5名で行って、曳き縄で、手で釣っていた。だから大概240～250本、4,5百キロ位しか釣れない。宮古は竿だから1日2,3トンも釣れたはずだ。あの頃石垣からクバシマまで9～10 時間位かかった。石垣からアカオへ行くにも、距離は離れているが、それほど時間は変わらない。

漁は金剛丸(17トン、焼玉50馬力)1艘だけで、曳き縄は2,3日、長くて3日まで、魚の鮮度が落ちるから。

魚釣島に　船揚げ場　　アカオとユクンで　米軍演習

クバシマのカツオ工場跡にねぇ、丁度今の 17トン位の船が揚げられるように海岸を割って、溝みたいに造られていた。(古賀氏の堀割を指す)。昔の人は偉いよ、人力でどんな苦労で堀つたか分からないが、今の人では、岩をあんなに割っては、とても造れない。

鰹節工場もあるし、人間も住んでいたから、暴風の時は船を揚げたのではないか、暴風はどこからくるか分からないし、船の避難場所ないから、是非揚げないといかん。

絶壁にアメリカさんがヘリコプターで下りて、僕等が釣っている時、演習か何か分からんがたまに来よった。あの時分だが、演習基地になっていたかも分からんが、復帰してからは、ユクン(久場島)とアカオで、時々演習があった、何日までは出漁は遠慮してくれと。復帰してからだがねぇ。復帰前はあんな連絡、何もないですよ。

深海、浅瀬には　魚がいっぱい

尖閣に夜光貝はいる。僕等は自分ではやってないが潜りで獲った人から話を聞いた。海底の絶壁には大概おると思うが。大陸棚の 300m付近にはアカマチが多い。島の付近ではプップーグワ、シチュウマチ、タイ、サバ、マガツオが釣れる。100m以上なるとサバがいっぱいいる。マチ類もいるし、浮きもの、カンパチもよく釣れる。一本釣ではサバは釣らなかった。釣れてもダメ、鮮度が直ぐ落ちる、食べる分しか釣らない。それに群が大きいからエサを全部食ってしまう。波打ちぎわの浅い処には、ブダイ(イラブチャー)とか、アダナーミーバイ、アカジンミーバイ、ヒレイカーとか、タームン(チヌマンの種類と同じ)、でかい魚でマチとは種類が違うもの、あんな魚が多かった。絶壁に近い所にはクチナギとか、タマンがいる。あの時分ブダイがいっぱい獲れたら、かまぼこ屋に出した。いくらあつても足りなかった。アカジンミーバイは、2,、3 月の産卵期にはいくらでも釣れた。約1トン 2,3百キロも釣れた。だが、肉がしまってかまぼこの材料にはならないので止めたが。今はアカマチよりもこっちがは高い、こんな魚が、尖閣ではいっぱい獲れたよ。

具志堅用徹　ぐしけん　ようてつ（ 八重山漁協 ）

具志堅用徹氏（84 才、昭和元年生）は、沖縄本島本部(もとぶ)から八重山に移住してきた本部二世、父君用徳氏は、裸一貫からカツオ業に成功した立志伝中の漁業人。氏が、夏のカツオ漁が終わったので、冬場の尖閣での一本釣を申し出たら、「他人もしない事はするな！！」と一喝反対されたという。また、氏の話から 1960 年代に、大型巻き網船が、サバを石垣港に水揚げして、八重山で鯖節製造が計画され、地元業者へ試験的に鯖節づくりがなされていたようだ。

他人もしない事　するな！！

こっちから尖閣に出漁していたが、今は頻繁に行く人いない。私は夏はカツオ漁して、冬になると深海一本釣とマグロ延縄をやっていた。兵隊から帰り、陸の仕事をし、海の仕事に替わり船に乗ったのは、昭和 33 年、33 才の頃からだ。親の跡継ぎで、やったのはカツオ漁が主、当時のカツオは一本釣、八重山では殆ど竿釣だが、本土あたりは機械でも釣ったりしていた。船はカツオ船徳栄丸（17 トン）一艘だけでカツオ漁した。

私は一人息子だったので、両親は船に乗せるのは反対だった、遭難の危険もあるので。父の鰹業者仲間の 5 人の方にお願いして、父を説得させてやっと漁師になれた。あの頃カツオ漁が終わったら、船の機械を全部バラして、冬は倉庫に入れてあった。

親父は頑固者で、「尖閣で一本釣する」と言ったら、「他人もしない事はするな！！」と猛反対だった。が、玉城亀一さんを見習い、冬には向こうで漁をやるようになった。

カツオ漁を終えると9～10 月、マグロ延縄に切り換えたり深海一本釣をやったりした。マグロ延縄では、尖閣付近に行ったことはない、他のマグロ船が行ったと聞いたこともない。

アカオ付近で　カツオ漁

夏のカツオ漁は近海でした。燃料を考えてできるだけ近海でするが、カツオが少ないと、尖閣辺りまで行った。徳栄丸は乗組員 15 名位。9 月頃入ってこちらの漁が少ないのでアカオ(赤尾嶼)へ行った。石垣から 12、3 時間かけて着いた。

アカオは東よりは西の方がよく釣れた。アブラガツオもいたが、カツオ工場で使えない。鰹節に不向きだから獲らなかった。水揚げは本カツオで 2,3 千斤(1.2～1.88 トン)位だった。その時はエサの小魚がなくなったので帰ったが、イワシのようなイキのいいエサなら1泊して、もっと釣れていたかもしれない。獲れないときもあった。この時はカツオ漁の始まり頃だった。こちらも不漁で、やはりアカオにカツオがいる話を聞いて行ってみた。

あの時は、300 キロ位しか釣れず、燃料代も出なかった。

冬場　深海一本釣りだけ

八重山で全くカツオの獲れない年があって、流木付きの魚が釣った場合があったが、当時の仲盛組合長に相談して、水産試験場に電話して、八重山近海の漁場を調査させたら、流木に付いて

いる魚しか見えなかったとの報告がきた。それではいかんということで深海一本釣をやった。一本釣漁は、与那国近海や尖閣方面によく行った。

尖閣では、コウビトウ(黄尾嶼)で漁をした。丁度 11 月の今頃から始めるが、そこからクバシマ(魚釣嶋)付近で釣る。そこが釣れないと、アカオ近くまで行った。深海だけでなく、浅瀬でもやった。アカマチ、チョウチンマチ、シチュウマチなどを釣った。

与那国では1トンほどの水揚げだったが、尖閣では 3 千キロ位しかなかった。

また、あの頃、冷凍設備がないから氷を積んで、カツオは水氷でよいが、深海一本釣の魚は、アカマチ類は、鮮度がすぐ落ちるから、一段並べてからバラ氷かぶせて、また一段並べて氷かぶせていく、そんなことも知らなかった。

玉城亀一さんは、深海一本釣が専門で、大部尖閣に行っている。向こうで相当水揚げもあり、成功している。私の場合は、一本釣はそんなにやってない、尖閣にもそんなに行ってない。カツオ漁が不振こともあって、私は昭和 63 年、八重山のカツオ漁に見切りをつけた。南方海域の遠洋漁業に活路を求めて、私はグアムにマグロ漁に行った。海外での漁業の難しさ、現地の複雑な事情にさんざん苦労させられた。グアムでの操業を 3 年間で切り上げ、石垣に戻った、今は次男が家業の漁業を継いでいる。10 年前に海の仕事を引退した。

尖閣にもそんなに行ってないが、忘れられない思い出が1つある。それを紹介したい。

八重山で サバ節づくり？

一本釣で、尖閣に行くと、内地のサバ漁船が操業していた。長崎辺りの巻き網漁船で、4,5 艘はいたと思う。電気をつけて夜中獲っているから大都会みたいだった。

11 月の今頃、冬の時期。サバというとクバシマからアカオまで大陸棚は続いている。あの近辺に大部いる。サバは群が大きいから、内地のサバ漁船は、巻き網で数 10 トンも獲っていた。まき網漁は相当な資本がかかる、船や網を見ただけで直ぐ分かる。船も 4,5 艘は必要、運搬船でも 300～500 トンクラスはあった。何億の予算、数 10 億だ。私らにはとても無理な話だ。あの時分、サバ節造りの話があった。丁度、玉城亀一さんら4名で、カツオの生産組合を作った頃。カツオ工場を作った時の年だった。巻き網船が内地に行っておろしてくるまでは 1 週間閑あるから、魚はもうここでおろそうと言うて、八重山でサバ節つくれば、丸紅か、伊藤忠とが、全部買い上げるから、あんたらが製造してくれとの話だった。

私達は、金は 1 銭も出さない。カツオ工場に、鍋も釜もあるから、炊いて、乾燥して、サバ節をつくるだけ、造れば、キロ幾らの手数料を上げるからとの話だった。

巻き網漁船は 1 日で数 10 トンも獲るから、手数料は数千万円にもなる。

ところが、サバ節は 3 日日干しすると、内地は乾燥しておいたらカラカラになるが、こっち八重山は、「湿気があるから駄目だ！！」、そう言って、この話はオジャンになった。

サバ節つくりが成功していたら、もう皆んな大金持ちになっていたかもしれない。

長濱　一男　ながはま かずお（ 与那国漁協 ）

与那国島は、日本の最南端の島、台湾を望む国境の島、カジキの島である。

明治から戦前期にかけて、九州各地からは南海の富みを求めて海の男たちがやってきた。長濱一男氏(79 才、昭和 6 年生)は、鹿児島県枕崎からきた豪放磊落な薩摩隼人二世。氏は、台湾で漁に魅せられ漁師になると決意、台湾船で尖閣諸島のカジキ漁をした。与那国帰郷後は、突船 3 隻建造、鰹節工場をもつなど手広く漁業経営を行い、尖閣諸島にも幾度か出漁した。業界引退後は 20 年間、漁民代表として町会議員を歴任した。

こんなに魚が獲れるなら　漁師に

1945 年、私が 13 才の頃、姉夫婦が台湾にいたので、終戦直後に学校を卒えた時に、義兄大城正嗣さんが台湾を見にこないかと連絡があって、台湾に行った。2 年半位はいた。基隆の社寮町という所にいて、義兄は光隆丸という突ん棒船に乗っていた。船主は台湾人の号禮さんで、突ん棒船を 4､5 隻持っていた。私はそこで働いた。基隆島のすぐ横に、アジンコートがある。40 分位で行ける所にあり、大陸に近い。そこには灯台があって、潮が速い所で、魚はわんさといた。潮が速いから錨を 1 日に 10 回位、揚げ下ろしながら漁をした。突ん棒でカジキ獲りもした。卒業したての私は、こんなに魚が獲れるならと喜んで漁師になった。

台湾の突ん棒船　皆んな沖縄の人

終戦後の尖閣列島に、台湾の突ん棒船が来たけれど、沖縄の人が乗っている突船しか向こうには来れん、突ん棒でカジキ獲りは沖縄の人でないと出来ない。台湾の人は、未だこういう技術はなかった、と思う。大分の臼杵や千葉辺りから来た人たちが元々とやっていたというが。号禮さんの船は、呉栄丸(約 15ﾄﾝ、第 11、12、21 号)や光隆丸(約 15ﾄﾝ、第 16 号)等があった。これらの船は 7 名位しか乗れない。台湾の人は突ん棒船には乗ってなかった。沖縄の人たちが乗っていて、船長も全部沖縄の人だった。この突ん棒船で、台湾近海から、アジンコートを経由して、尖閣列島方面へカジキ獲りに行っていた。アジンコートで漁をするが、カジキが少ない場合は、そこから尖閣列島に行きよった。

クバシマで大漁　カジキ 90 本も

ある時、尖閣列島へ直接行こうという話になった。呉栄丸と光隆丸 4 隻で、尖閣列島へ直行して、カジキ漁をすることになった。夜行で行って、明け方から漁をはじめたら、もう大漁だった。30 本1 日に獲れて、その明日も 30 本余り、3 日漁で 90 本を水揚げした。

普通だと 2,3 本だが、こんなにカジキが獲れて、ホント夢みたいだった。

漁場はクバシマのすぐ西側、潮見の立つ所、それにトリシマ(南・北小島)、イシジマ(沖の北岩))付近、時期は冬場、11 月、北風が吹いて白波が立つ時がいい。

私は光隆丸 16 号に乗って大変だった。3 日間は寝る暇なかった、カジキはお腹を割いて腸を取

り、きれいに洗って、冷凍するのに、もうてんてこ舞い、当時若いし体力もあったからやれた。基隆港に着いたら、台湾の人たちはもうびっくりですよ。これが大きな評判になって、台湾突船は、あれから尖閣列島方面によく行くようになったと思う。

カジキ漁は運、不運がある。あのあと船主の呉禮さんが、早く行けと、急いで出漁の準備させ、また尖閣へ行かしたが、そんなに獲れなかったですね。

船団組んで　与那国から　カジキ獲りに

1947 年、2.28 事件が起こり、台湾は危険になったので、与那国へ引き揚げた。与那国へ帰って突ん棒とか、カツオ漁とか、いろいろやった。突船を 1961 年までに 3 隻を造った。与那国で、3 隻持っていたのは私だけ。(船の模型を見せながら)、第一，第三、第五がこれです。船を持ちながら鰹節工場もやった。人間も 70 名ほど使っていた。船員不足の時は、自分で機関長もやり、船長もやった。突船に乗ればモリを投げる役もやった、何でもやった。突船カジキ漁は、大概与那国近海でやった。尖閣方面にも行ったが漁は少なかった。

だが、尖閣では、カジキはエリ(背ビレ)出して、ハリがでる位いっぱい泳いでいる。カジキは高い魚だ、与那国でも斤千円から落ちないほど、儲けがいい。私が 30 の頃に、大型の冷凍船大栄丸(50 トン)を、沖縄本島本部(もとぶ)からチャーターし、私の大宝丸(第三と第五)と漁仲間のハチ丸、共栄丸、松福丸 6 隻で船団組んで、尖閣へカジキ獲りに行った。獲れた魚は冷凍船に積んで那覇に持って行き、売りさばく積もりでいた。

ところが向こう行ったら、もう台風のような大きなシケを喰らってしまった。暴風にあったから行ったのは 7,8 月かと思うが、とても漁はできず、もうそのまま帰ってきた。カジキはやっぱり時期ものだ、あの時は時期も合わず、運もついてなかった。

尖閣は、カジキだけじゃない、カツオ、サバ、マグロといろいろな魚がいる。サバなんか、グワチャグワチヤ湧いているけど、獲っても何んの金にもならない。

私ら与那国の人間は、大物だけを当てにする、大きなカジキだけを。

魚も　カツオ工場も　なくなった

コウビアカ(赤尾嶼)という所、久米島のすぐ西にある岩山で、宮古からは 7 時間、久米島から 1 時間で行ける。カツオ漁でよく行った。コウビアカでは、カツオがよく釣れた。

台湾にいた時は、呉禮さんの船でカツオ漁で来たこともある。光隆丸をかつお船に仕立てて、コウビアカへ行った。ここでカツオを獲って　台湾基隆で売りさばいた。

終戦直後や復帰前の頃、このコウビアカでも、与那国近海でも、カツオがいっぱい釣れた。だが、あんなにおった魚がいない。獲り過ぎではないか、獲り過ぎだと思うが。

あんなに揚がっていたカツオはもういない。鰹節工場もドンドンなくなって、与那国で 7 軒あったが、もう 1 軒もない。そのあと石垣市の工場も、全部なくなっている。不思議だ。今は本部(もとぶ)の渡口港にしか、かつお船はいない。やがて沖縄からなくなるのでは。

賀数金次郎 かかず きんじろう（ 与那国漁協 ）

賀数金次郎氏(81 才、昭和 4 年生)は、終戦直後、台湾に渡台した。

社寮町の親方に信頼され、カジキでは銛手で活躍、カツオ漁は責任もたされた。氏は「僕以上に与那国で尖閣へ行った人はいないと思う」と言うように、尖閣諸島のどこに行けばシロカワやクロカワが獲れるかを熟知、カツオ漁、曳き縄漁、いろいろ経験している。そんな氏が、いみじくも「日本の警備船は、尖閣列島をずっと廻っていいですよ。国はその位の経費は使ってもいいさ」と言い切っている。

アジンコート ダメなら　尖閣へ

僕等の若いときは台湾の島がなかったら飯喰えなかった、与那国でかつお船に乗っていたが、冬は仕事はない。だから 23 才(1950 年)で、台湾に行った。台湾蘇南方へ行き、そこで働いて、基隆の浜町、社寮町に移った。与那国の人は皆んな船は乗っていた。

僕も台湾のトクリュウ丸(15～20 トン)という突ん棒船に乗って、アジンコートから尖閣にカジキ獲りに行った。カジキ漁は、大体が冬場 9 月から翌年 2 月頃まで、小さい突ん棒船 20 馬力だと 5 日位、トクリュウ丸は 50 馬力で大きいから 7,8 日位、ひと月に 3,4 航海していた。

アジンコートで潮がよくて、漁がいい時には、そこから基隆に帰るが。アジンコートでカジキが少なくて、漁する船も多いから、そこがダメなら尖閣方面に逃げて、向こうで漁する。

尖閣だと船が少ない、あの時は、沖縄からの船もあまりいなかった。夜行くがアジンコートから6時間位かかる。昼は出て、夜はクバシマ(魚釣島)に、アンカーを入れてやった。

シロカワカジキ　獲る

僕はオウトクリュウ親方に信用されて、家族みたいによくしてもらった。「トクリュウの息子」といわれた。親方は浜町では一番力の強い親方で、船も 4,5 隻持っていた。

あの頃、基隆全体で突ん棒船は 30 隻位、バンセイ丸とか、呉栄丸とか、あった。

トクリュウ丸は 5,6 名乗るが、与那国の人 3,4 名、あとは八重山と台湾の人たちだった。
台湾船は、もう冬場のカジキは尖閣列島をあてにしている。シロカワカジキの獲れる所だから、僕は銛手もやっていたから、錨あげたらもう泳いでいるのが見える。大体がシロカワでクロカワは本数が少ない、クバシマの西側の方に瀬があるが、そこにはクロカワは多い。アジンコートではアカカジキというマカジキが獲れるが、60～70 キロが上で小さい。トクリュウ丸の水揚げは、大体 5 日の航海で 99 本は獲ったことがある。これ以上は船に入れられなかった。アジンコートと尖閣の両方で漁をして。

与那国から　かつお船漁師を

夏は突ん棒はかつお船にする。僕は、冬場の突ん棒の松川船長と交替して、かつお船の責任もたされた。かつお船には 25 名位乗るし、台湾の人はカツオ漁はできんから、与那国の先輩に頼んで年寄りの漁師を連れてきた。大体5月～8 月の 4 ヶ月間、台湾で儲けさせた。コウビアカ(赤尾嶼)

付近にはカツオがいるからとよく行った。与那国、石垣白保沖も、全部廻った。

魚買う船　待たせて　　カジキ漁

27,8 才(1954,5 年)頃に、台湾から引き揚げてきたが、僕以上に与那国で尖閣列島へ行った人はいないと思う。そのあと、何回も尖閣列島やコウビアカまで行ったから。

一遍は、魚買う船を沖縄から呼んで、あっちに待たして、大朝商店(与那国在)の日の出丸という兄弟船 2 隻で、カジキ獲りに行った。目当ては大体シロカワカジキ。あそこは 10 本シロカワを獲れば、1本はクロカワはいる。2,3 日位やったが、漁が少ないから母船は帰ると言うし、僕等も帰ってきた。儲ける積もりだったが、大部損したさぁ。

クバシマとトリシマ(南・北小島)付近によく行った。ユクン(黄尾嶼)は北にあって遠い、行ったことない。コウビアカは、そんなにアンカー入れて船はおれん。島が小さいし両方から波被る、海も深い、海人が一番怖がる所。だから与那国からは、行った人は少ない。

トリシマ側　フカ多い

クバシマには、石垣やカツオ工場跡があって、鰹節を造っていたらしい。僕が行った時は、石垣に納屋造った跡があった。あの前には船泊(堀割)はある。尖閣は風が強くて荒いからね、だから、あそこに錨を入れたら、底が浅いし、もう風か廻ったら、船は座礁する、だから危ない。

与那国には、クバシマから木を伐ってきて建てた家が 2 軒ある。チャーギ(リュウキュウマキ)だから、とても頑丈だ。建てたのは戦後。いつも風が強いから向こうの木は堅いはずだ、だが高さには伸びない、だからふつうの家より少し低い。

トリシマは、歩けない位に鳥がいた。バカドリ(カツオドリの意)を獲って 1,2 食は食べた。巣から出て飛びないのを棒で叩いたが、コックが料理するが難儀と文句言うので止めた。臭くて、あまり美味しくなかった。夏行ったら、カボチャや冬瓜、いろんなものが生えている、鳥糞が肥料になるからね。トリシマの側では海に飛びこんで泳いだら危険。鳥が死んで落ちて、それを食べるためフカは多い。だから船を島につけてからが泳がしていた。

警備船でずっと廻っていいですよ

最近、尖閣列島は中国と色々な問題があって危ない。だから今は与那国漁協は行かない、行く船もいない。また1人では無理、前と違って大きな船はない、今は殆ど 1 人乗りの船、サバニだから。尖閣列島は石垣市の番地だが、中国や台湾が何で問題するか分からん。

台湾の船で来た時は、僕等は沖縄のものとは知っていたが、あの時は頭は儲けることしか考えなかった。それに台湾船に乗っていたから。また、今みたいに警備船もいないで自由だったし、だから台湾の船は利用できた。尖閣列島は日本のものだから、石垣の番地だから、警備を厳重にやるべきだ。中国の船や、台湾の船が、来れば追っ払わんといけない。尖閣列島を日本の警備船はずっと廻っていいですよ。 国はその位の経費は使ってもいいさぁ。

Ⅲ. 漁場図・漁船の操業状況

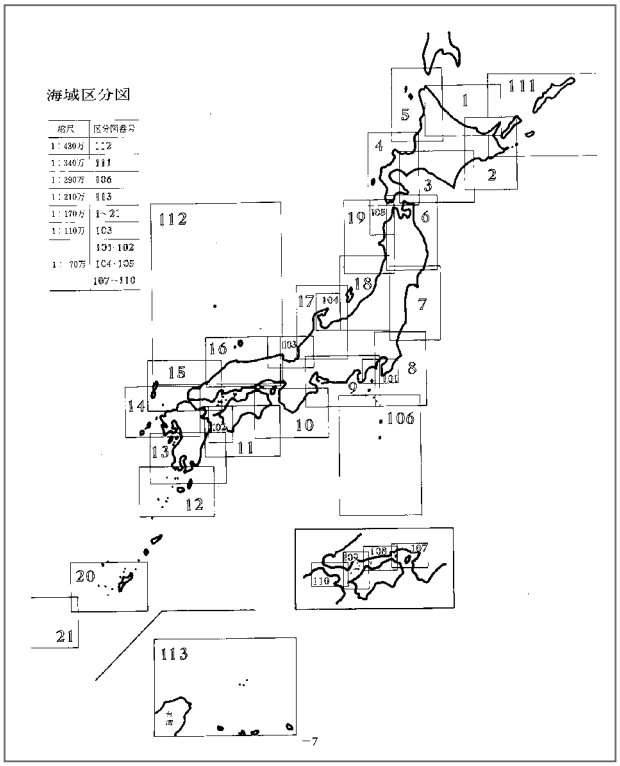
Ⅲ－1. 尖閣諸島海域の漁場図

これまで、琉球政府期の尖閣諸島海域における漁業、とりわけ漁業開発・利用状況については、行政文書や定期刊行物、漁業関係者の著作物や新聞資料、漁業者への聞き取り等を通して見てきたが、いずれも断片的把握しかできない。

1970 年(昭和 45 年)、全国漁業共同組合連合会は、各都道府県および水産試験場に対し漁業実態調査のアンケートを行った。これをもとに、1976 年(昭和 51 年)に再度、各都道府県および水産試験場が検討、修正し、全漁連沿岸漁場開発対策室において統一して漁場図を作成した。

全漁連が編集した「日本近海漁場図」(1977.3 発行)がそれである。

日本全国の漁場を 1～113 に海域区分し、尖閣諸島漁場は、海域区分 113 である。

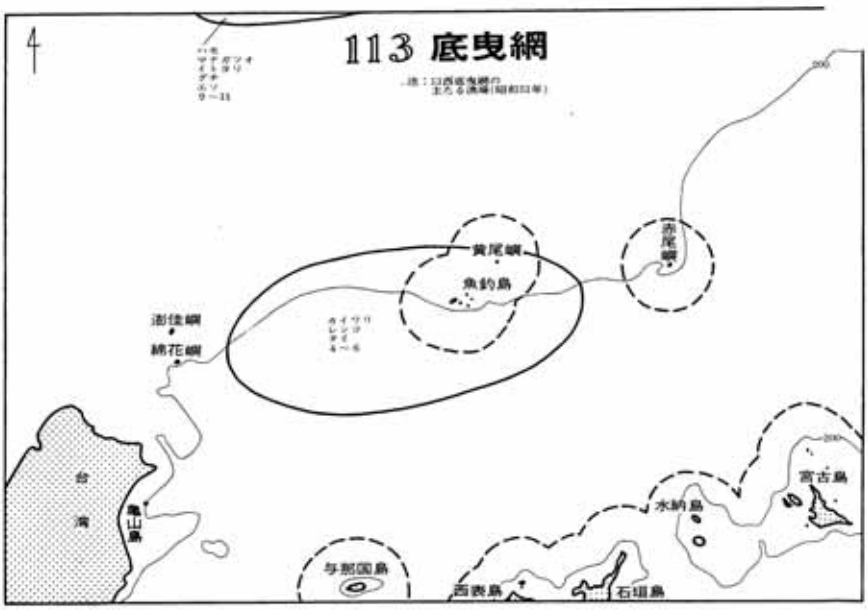


「日本近海漁場図」は、各海域区分の漁場については、漁法、漁期、漁獲対象魚、操業海域、出漁県、等々を概ね記してある。

このようなことから、尖閣諸島漁場・海域海域区分 113 は、琉球政府期における沖縄漁船や本土漁船の開発・利用状況を知ることができる貴重な資料である。

尖閣諸島漁場・海域区分113は 7 枚の漁場図からなり、抜粋して掲載する。

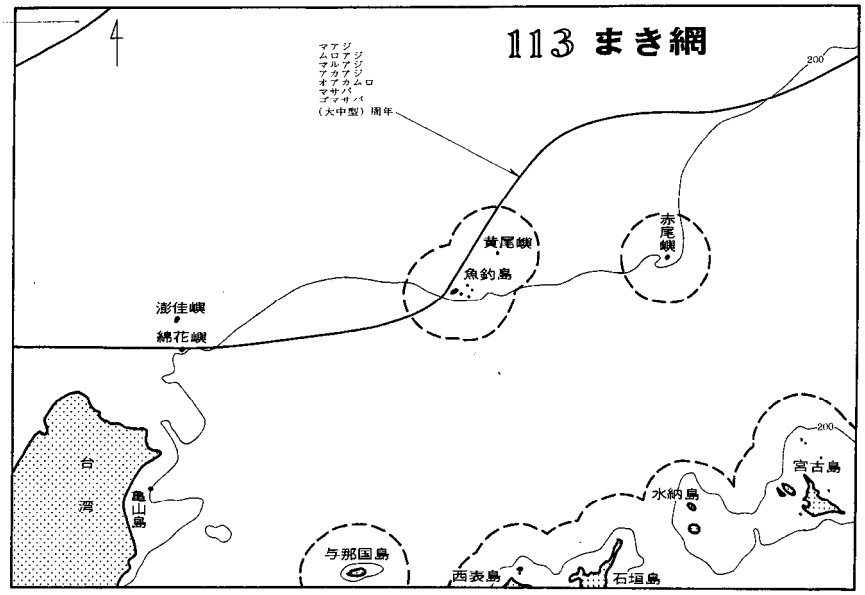
１１３ 底曳網



底曳網　4～6月　カイワリ、レンコ、タイ　黄尾嶼・魚釣島西方海域

9～11 月　ハモ、マナガツオ、イトヨリ、グチ、エソ　魚釣島・赤尾嶼の北方大陸だな

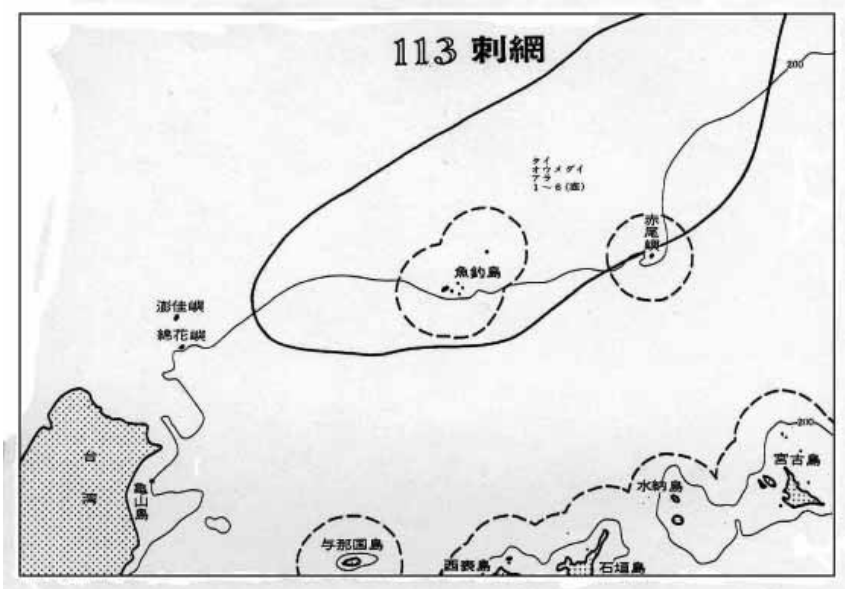
１１３ まき網



大・中型まき網　周年　アジ、ムロアジ、マルアジ、アカアジ、オアカムロ、マサバ、ゴマサバ

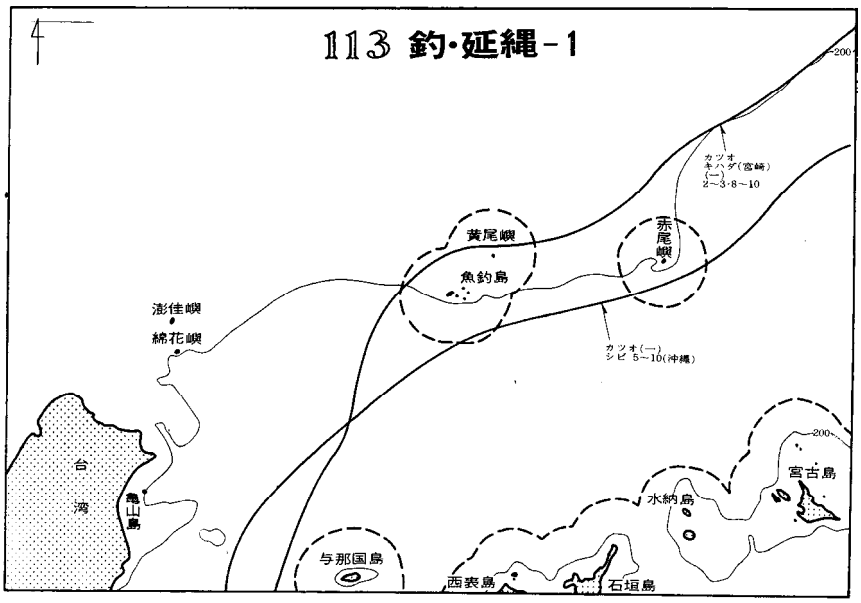
魚釣島・赤尾嶼大陸だな縁辺

１１３ 刺網



底刺網　1～6月　タイ、オウメダイ、アラ　魚釣島・赤尾嶼大陸だな縁辺

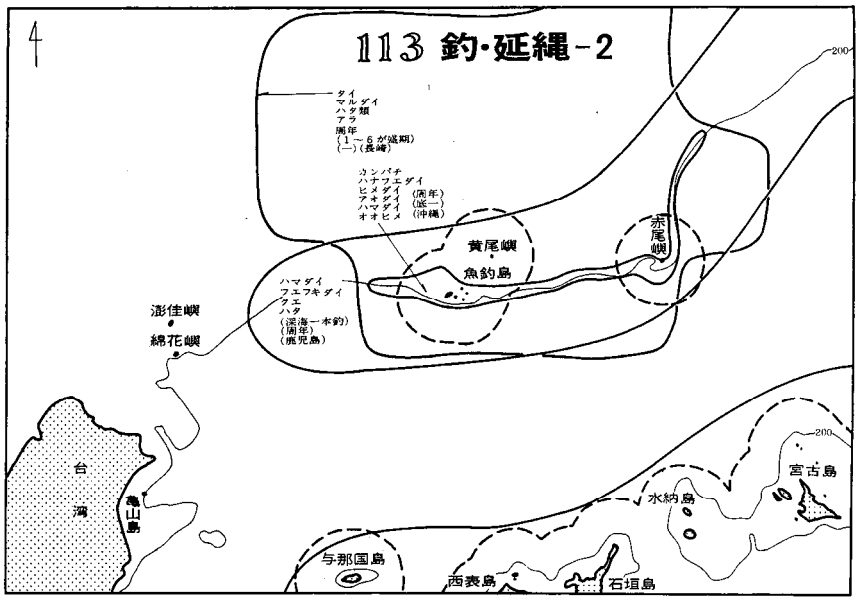
１１３ 釣・延縄―１



一本釣　5～10 月　カツオ、シビ　魚釣島・赤尾嶼陸だな縁辺　沖縄

2～3、8～10 月　カツオ、キハダ　魚釣島・赤尾嶼大陸だな縁辺部　宮崎

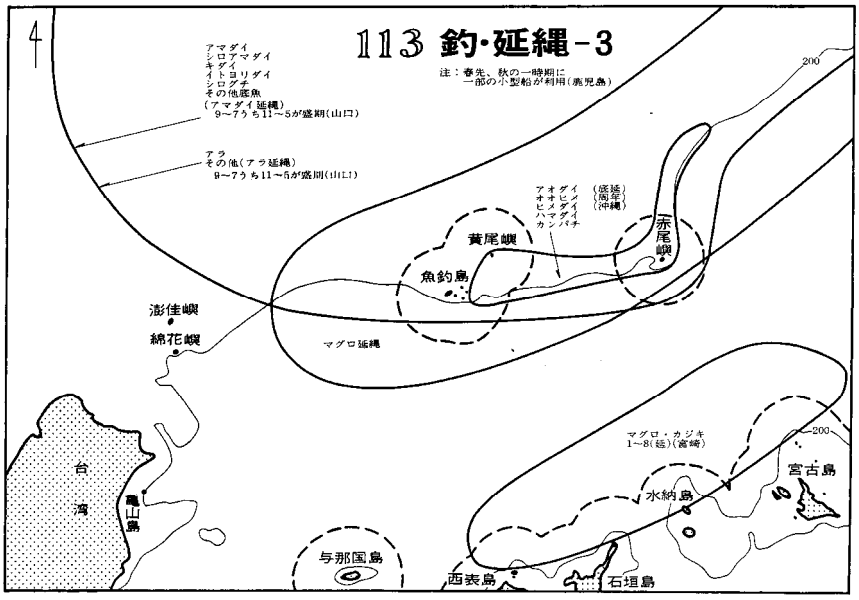
１１３ 釣・延縄―２



一本釣　周年(1～6月盛期)タイ、マルダイ、ハタ類、アラ。魚釣島・赤尾嶼大陸だな縁辺　長崎

底一本釣　周年　カンパチ、ハナフエダイ、ヒメダイ、魚釣島・黄尾嶼・赤尾嶼周辺　沖縄・・他

１１３ 釣・延縄―３

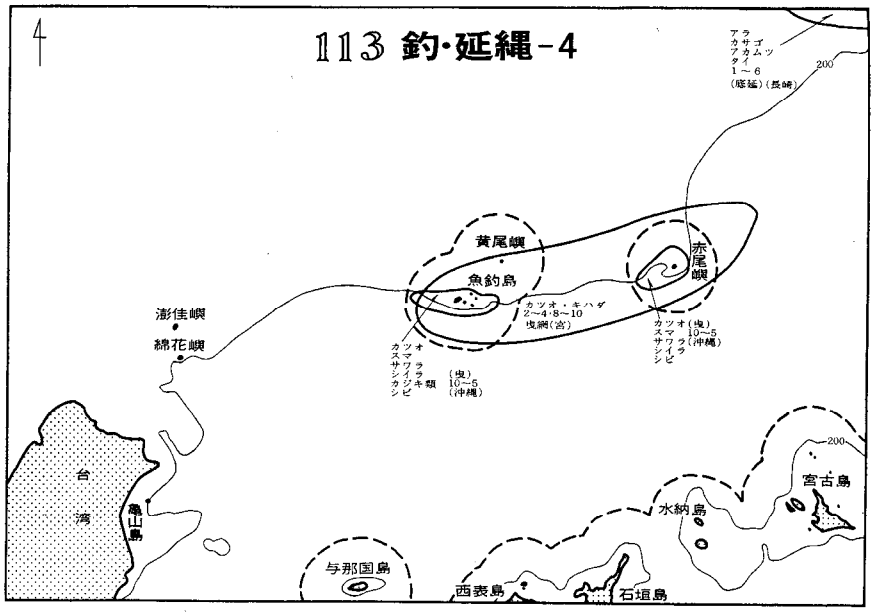


アマダイ延縄　9～7月　アマダイ、シロアマダイ、キダイ、イトヨリダイ　魚釣島西方大陸だな　山口

底延縄　1～6月　アラ、カサゴ、アカムツ、タイ　赤尾嶼東方大陸だな　長崎

周年　アオダイ、オオヒメ、ヒメダイ、ハマダイ、魚釣島・黄尾・赤尾嶼周辺　沖縄・・他

１１３ 釣・延縄―４



曳縄釣　10～5月　カツオ、スマ、シイラ、サワラ、カジキ類、シビ　魚釣島・黄尾嶼周辺　沖縄

曳　縄　2～4月、8～10 月　カツオ、キハダ　魚釣島・黄尾嶼・赤尾嶼周辺　宮崎・・他

なお、漁場図に記載されている漁法、漁期、漁獲対象漁種名、及び操業海域、出漁県について、漁場図の下段に列記しているが、一部に止まっている。

全体をまとめて、表に作成して以下に掲げる。

なお、漁法については、同漁場図の漁法分類表（p9 に掲載）に従った。

尖閣諸島漁場・海域区分113の開発・利用状況

漁　法	漁　期	漁獲対象 魚種名	操業 海域	出漁県
底曳網	4～6月	カイワリ、レンコ、タイ	黄尾嶼・魚釣島西方海域	
	9～11 月	ハモ、マナガツオ、イトヨリ、グチ、エソ	魚釣島・赤尾嶼の北方大陸だな	
大・中型まき網	周年	マアジ、ムロアジ、マルアジ、アカアジ、オアカムロ、マサバ、ゴマサバ	魚釣島・赤尾嶼大陸だな縁辺	
底刺網	1～6月	タイ、オウメダイ、タラ	魚釣島・赤尾嶼大陸だな縁辺	

一本釣	5～10 月	カツオ、シビ	魚釣島・赤尾嶼陸だな縁辺	沖　縄
	2～3月 8～10 月	カツオ、キハダ	魚釣島・赤尾嶼大陸だな縁辺部	宮　崎
	周年（1～6月盛期）	タイ、マルダイ、ハタ類、アラ	魚釣島・赤尾嶼大陸だな縁辺	長　崎
底一本釣	周年	カンパチ、ハナフエダイ、ヒメダイ、アオダイ、ハマダイ、オオヒメ	魚釣島・黄尾嶼・赤尾嶼周辺	沖　縄
深海一本釣	周年	ハマダイ、フエフキダイ、クエ、ハタ	魚釣島西方大陸だな縁辺	鹿児島
アマダイ延　縄	9 ～ 7 月（11～5月盛期）	アマダイ、シロアマダイ、キダイ、イトヨリダイ、シログチ、その他底魚	魚釣島西方大陸だな	山　口
アラ延縄	9～7月(11～5月盛期)	アラ、その他	魚釣島西方大陸だな	山　口
底延縄	周年	アオダイ、オオヒメ、ヒメダイ、ハマダイ、カンパチ	魚釣島・黄尾嶼・赤尾嶼周辺	沖　縄
	1～6月	アラ、カサゴ、アカムツ、タイ	赤尾嶼東方大陸だな	長　崎
マグロ延縄		マグロ	魚釣島・黄尾嶼・赤尾嶼・大陸だな縁辺	
曳　縄釣	10～5月	カツオ、スマ、シイラ、サワラ、カジキ類、シビ	魚釣島・黄尾嶼周辺	沖　縄
	10～5月	カツオ、スマ、サワラ、シイラ、シビ	赤尾嶼周辺	沖　縄
曳　縄	2～4月、8～10 月	カツオ、キハダ	魚釣島・黄尾嶼・赤尾嶼周辺	宮　崎

（「日本近海漁場図」1977.3 より作成 ）

Ⅲ－2. 沖縄漁船の操業状況

これまで尖閣諸島海域における沖縄漁船の操業状況を見てきたが、大凡のことしか把握できない。琉球政府期における漁協別出漁隻数、生産量、生産高、等々の具体的操業状況を示す資料もない。

幸い、復帰後の昭和 51～53 年度における尖閣諸島海域へ出漁した漁船に関する統計資料は記録されている。「漁場利用対策会議報告 ―尖閣諸島の海域の漁場利用について―」(沖縄県農林水産部、1978.11)がそれである。

なお、昭和 53 年度は、尖閣諸島海域に中国武装漁船団 200 余隻が押しかけ、県漁連主催の「尖閣漁場を守る漁民大会」が開催された年であり、このときに統計資料は記録された。これ以後、未記録・未整理のままである。

同資料は、1972 年復帰から 4～6 年経過しているが、復帰直前の操業状況と比較してさほど大差ないものと思える。琉球政府後半期における沖縄漁船の操業状況を考える上で貴重な参考資料である。このようなことから、同会議報告から 3 表を抜粋して掲載する。

①. 尖閣諸島海域への出漁状況

年次／漁業種類	出漁隻数			生産量（実績）		生産額（実績）		漁期	漁獲魚種
	51	52	53（計画）	51	52	51	52		
底魚一本つり	95	104	122	523	577	290	459	1～12月	ハマダイ，オオヒメ，アオダイ，ヒメダイ，ハナフエダイ
曳縄	78	48	56	191	368	112	192	主に 10～5月	カツオ，サワラ，シイラ，カジキ類，シビ（キハダの幼魚）
かつお一本つり	21	22	22	832	830	193	202	5～10月	カツオ，シビ（キハダの幼魚）
まぐろはえなわ	15	28	14	70	503	45	336	1～12月	マグロ，カツオ，カジキ類
さんご漁業	2	1	2	1	0.35	120	17	1～12月	サンゴ
底はえなわ	－	19	19	－	311	－	311	1～12月	アオダイ，オオヒメ，ハマダイ，ヒメダイ，カンパチ
合計	146	164	164	1,616	2,590	761	1,516		

（「漁場利用対策会議報告 ―尖閣諸島の海域の漁場利用について―」沖縄県 1978.11）より

＊ 51 年と 52 年を比較すると、出漁隻数、生産量、生産額は増加傾向となっている。

②. 昭和52年尖閣諸島海域への出漁状況（漁協別）

漁協 ＼ 漁業種類		底漁一本つり	曳縄	かつお一本つり	まぐろはえなわ	さんご採取	底はえなわ	計
那覇地区漁協	隻数	18	−	−	−	−	−	18
	生産量	323	−	−	−	−	−	323
	生産額	272	−	−	−	−	−	272
那覇市沿岸漁協	隻数	1	−	−	22	−	−	23
	生産量	3	−	−	226	−	−	229
	生産額	3	−	−	143	−	−	145
糸満漁協	隻数	2	−	−	6	−	19	27
	生産量	10	−	−	277	−	311	599
	生産額	8	−	−	194	−	311	513
名護漁協	隻数	2	−	−	−	−	−	2
	生産量	22	−	−	−	−	−	22
	生産額	18	−	−	−	−	−	18
平良市漁協	隻数	18	4	2	−	2	−	26
	生産量	18	4	72	−	0.35	−	95
	生産額	18	2	2	−	17	−	39
池間漁協	隻数	15	14	6	−	−	−	17
	生産量	2	4	24	−	−	−	30
	生産額	2	3	7	−	−	−	12
伊良部村漁協	隻数	−	7	6	−	−	−	7
	生産量	−	260	377	−	−	−	636
	生産額	−	130	113	−	−	−	243
八重山漁協	隻数	24	−	7	−	−	−	24
	生産量	81	−	277	−	−	−	358
	生産額	81	−	55	−	−	−	137
与那国町漁協	隻数	24	23	1	−	−	−	24
	生産量	119	100	80	−	−	−	299
	生産額	56	57	24	−	−	−	137
合計	隻数	104	48	22	28	2	19	168
	生産量	577	368	830	503	0.35	311	2,590
	生産額	459	192	202	336	17	311	1,516

（「漁場利用対策会議報告　―尖閣諸島の海域の漁場利用について―」沖縄県　1978.11）より

＊　隻数では、底魚一本釣104隻、曳縄48隻、まぐろはえなわ28隻の順である。

生産高では、底魚一本釣459、まぐろはえなわ336、底はえなわ311の順である。

③. 昭和 52 年漁業種別・規模別・着業隻数別・生産報告

トン数階層	漁業種類	底魚一本つり	曳　縄	かつお一本つり	まぐろはえなわ	底はえなわ	さんご漁業	計
～4.99	隻　数	75	40	7	0	9	0	87
	生産量	179,886	107,725	80,950	0	87,554	0	456,115
	生産額	115,136,478	61,336,850	4,723,500	0	87,557,906	0	268,754,734
5.00～9.99	隻　数	6	4	2	0	7	0	17
	生産量	83,148	80,468	112,941	0	136,195	0	412,752
	生産額	65,463,000	40,385,600	33,882,300	0	136,201,188	0	275,932,088
10.00～19.99	隻　数	23	4	12	27	3	1	58
	生産量	314,291	179,888	627,027	457,117	87,554	350	1,666,227
	生産額	277,981,800	89,944,000	160,388,300	304,027,267	87,557,906	16,842,050	936,741,323
30.00～49.00	隻　数	0	0	1	1	0	0	2
	生産量	0	0	9,000	46,162	0	0	55,162
	生産額	0	0	2,700,000	32,280,000	0	0	34,980,000
合計	隻　数	104	48	22	28	19	1	164
	生産量	577,325	368,081	829,918	503,279	311,303	350	2,590,256
	生産額	458,581,278	191,666,450	201,694,000	336,307,267	311,317,000	16,842,050	1,516,408,045

（「漁場利用対策会議報告　―尖閣諸島の海域の漁場利用について―」沖縄県　1978.11）より

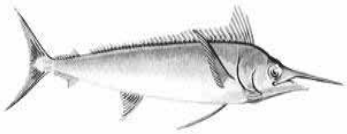
＊　底魚一本釣を見ると、沖縄本島の出漁船は 10 トン以上、先島は小規模であることがわかる。

Ⅲ－３．漁獲対象の魚

尖閣諸島海域では、どのような魚が釣り上がるのか、

本書に取り上げた刊行物資料・漁場調査や操業報告、漁場図及び当該漁民への聞き取り、新聞記事、等々から抜き出すと概ね下記の通りとなる。(　)は俗称、方言名。

カジキ類　マカジキ　シロカワカジキ
クロカワカジキ　バショウカジキ



シロカワカジキ

マグロ類　クロマグロ　メバチ　キハダ
シビ(キハダの幼魚)

キハダ

カツオ類　カツオ　ハガツオ　(マガツオ)
スマ＝ヤイト(シマガツオ、アブラカツオ、
ウブシュウ)

サバ類　ゴマサバ　マサバ　瀬付サバ

カツオ

サワラ類　サワラ

シイラ類　シイラ(マンビキ)

ダツ類　ダツ(シジャー)

ダツ

トビウオ類　トビウオ

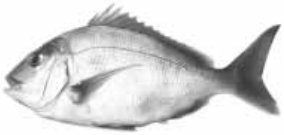
ブリ類　ブリ　カンパチ(ウキモロ、アサバ)

アジ類　マアジ　ムロアジ　マルアジ　アカアジ
オアカムロ　ツムブリ(ヤマトナガイユ)
カイワリ類(ガーラ)

ゴマサバ

キンメダイ類　キンメダイ

タイ類　タイ　マダイ　キダイ(レンコ、レンコダイ)
ヘダイ　チダイ



マダイ

イトヨリダイ類　イトヨリダイ

アマダイ類　アマダイ　シロアマダイ

ブダイ類　ブダイ(イラブチャー)

キントキダイ類　キントキダイ(赤目)

ニザダイ類　テングハギ(チヌマン類、タームン)
　　トサカハギ(ヒレイカー)

ハタ類　アカハタ　コモンハタ　ハタ類　コクハンアラ
　　スジアラ(アカジンミーバイ)
　　バラハタ(ナガジューミーバイ)
　　クエ(カンナギ)　アラ

フエダイ類　ハマダイ(アカマチ)　アオダイ(シチューマチ)
　　ハチジョウアカムツ(ヒラマチ、ロンコ、ドンコ)
　　ヒメダイ(クルキンマチ、プップグワー)
　　オオヒメ(マーマチ)　ハナフエダイ(ビタロー)
　　オオクチイシチビキ(タイクチャーマチ、タレクチマチ)
　　ウメイロ　タカサゴ(グルクン)

チビキ類　チビキ(チョウチンマチ)

フエフキダイ類　ハマフエフキ(タマン)
　　シモフリフエフキ(シロタマン)
　　フエフキダイ　イソフエフキ（クチナジ）
　　メイチダイ(シルイユー)

ギンメダイ類　ギンメダイ(タルミ)

エソ類　エソ

スズキ類　アカムツ

フグ類　フグ

キダイ

アマダイ

ブダイ

スジアラ

ハマダイ

アオダイ

テンクハギ

ニベ類　イシモチ

グチ類　グチ　シログチ

カサゴ類　カサゴ

タラ類　タラ

ハモ類　ハモ

サメ類　サメ　シュモクサメ　フカ

マナガツオ類　マナガツオ

イルカ類　イルカ

稚魚・魚卵　カタクチ　マアジ　オキエソ　イバラハダカ
ハダカイワシ科 レプトセファルス

不明魚類　（オウメダイ）（マルダイ）（メンタイ）
（ハチビキ）　（キンギョマチ）
（ダンバラー）（アダナーミーバイ）

イカ類　スジイカ　トビイカ　アオリイカ　スルメイカ

貝類　ヤコウガイ

サンゴ類　赤サンゴ

※-分類、俗称・方言和名対比は、(「沖縄県の漁具、漁法」沖縄県水産試験場 .1986.3)及び（「魚類図鑑 南日本の沿岸魚」益田一、荒賀忠一、吉野哲夫　東海大学出版会　1975.11）によった。

ハマフエフキ

ハチジョウアカムツ

タカサゴ

シュモクサメ

トビイカ

アカサンゴ

Ⅳ. 補足、尖閣諸島をめぐる動き

ここでは、尖閣諸島をめぐる動きとして、台湾漁民の不法入域・操業と琉球政府の領土・漁場の保全措置の状況及び尖閣諸島海域の石油資源、台湾・中国の領有権主張と沖縄の動きについて概観する。前者では石垣市の行政区画(領土)標柱建立、琉球政府の不法入域警告板設置や救難艇「ちとせ」「おきなわ」による台湾漁船取締り等々。後者では、国連エカフェ報告及び尖閣諸島海域への石油鉱業権出願、台湾・中国の領有権主張と琉球政府の「領土権声明」、「尖閣を守る」運動、「尖閣開発KK」設立等々について見てみる。

Ⅳ－1. 台湾漁民の不法入域・操業と領土・漁場の保全措置

A. 尖閣諸島海域の治安と不法入域・操業

1. 1955 年 3 月、沖縄本島船籍第三清徳丸（15 トン）は、尖閣諸島海域で操業中に台湾旗を立てたジャンク船に襲撃され、乗組員 2 名が射殺、4 名が行方不明になった。※1

この事件は、尖閣諸島に出漁している漁民を恐怖に陥れ、沖縄漁協連合会は事件の徹底的解明と安全操業措置を要請。※2

2. 1963 年 5 月、尖閣諸島アホウドリ調査団は、台湾漁民の不法操業と海鳥乱獲に驚き、同行した記者によって、領海侵犯の実態が報じられた。※3

調査団長高良鉄夫氏は、海鳥保護の立場から、「保護区域指定」と「上陸禁止・制限措置」を提言。※4

3. 1967 年 5 月、「与那国、荒らされる漁場、台湾漁船わがもの顔」(八重山紙)。※5

4. 1968 年 5 月、総理府は派遣の尖閣諸島調査団の高岡大輔団長は、台湾漁民の尖閣諸島での不法操業・不法上陸状況を日本政府に報告。※6

5. 1968 年 8 月　琉球警察局と琉球出入管理庁、米国民政府渉外局は、尖閣諸島に係官を派遣、台湾人作業員に対して帰国命令を発した(15 日)。※7

台湾側は、尖閣諸島への正規の入域手続を申請、米国高等弁務官名で、作業員及び船舶に対する南小島への入域許可を得る(30 日)。※8

6. 1970 年 7 月、琉球出入管理庁は、尖閣諸島へ警告板設置のため渡島、台湾漁船の不法入域状況を現認報告。※9

※1.「・・魚釣島西方約 2 マイルの地点で 2 隻のジャンク船が手真似で救助をもとめ、曳航を頼んだので私達の第三清徳丸はジャンク船に接近、曳航しようとしたとき 2 名の兵隊風のものが私たちの船に乗りうつるやいなや船長を射殺、また伊野一男さんは相手に飛びついたがこれも直ちに射殺されてしまった。それで私たちは無我夢中で海に飛びこみ、2 マイル離れた魚釣島にのがれ、直ちに島の裏側で漁労中の第一清徳丸に連絡、その付近で漁労中の数隻の船にも危機を通報し

て石垣島に逃げてきました。他の４名はどうしていたかわかりません。双眼鏡で見たとき１隻は大安丸と書かれていました。」(1955.03/04・琉球新報・「曳航を頼んで接近、悲惨時を語る金城さん」)

※2.「・・・行方不明者の捜索救助のため、軍民両政府の尽力に拘わらず・・生死不明のまま・・この事件は、事件発生現場が領海内であること、並びに琉球近海に於いて最も優れた漁場であること、しかも今尚同海上にはジャンク船が出没していること、・・・このような重大事件が琉球政府の外交権の有無で、不問に附され、究明されることなく放置されるとすれば、琉球の漁民は今後安心して漁業を営むことが出来なくなるだけでなく、国際的問題、人権問題としても由々しいことでありますので本事件の徹底的究明をなし、・・・今後琉球漁民が安心して漁業できるための保障、残された家族に対する応急的な生活救援について必要なる措置を早急に講じて下さるよう陳情致します。」(「琉球政府宛陳情書　第三盛徳丸事件について」 沖縄漁協連合会長 1955.06.15)

二名射殺行方不明四名
頼依援救が名三者出脱
尖閣列島付近で漁労中
第三清徳丸襲わる
中國旗をたてた怪船一隻に
ほんとでしようか!
悲報に驚愕する兄弟
当局鋭意捜索中
曳航を頼んで接近
悲惨事を語る金城さん

(琉球新報　1955.5.1)

※3. 1963 年 5 月、尖閣諸島のアホウドリ調査(高良鉄夫団長)の同行記者によって、台湾漁船による領海侵犯、不法上陸の状況が初めて新聞で報じられた。「・・この調査でまず目についたのは「徳隆」「興振発号」などと特有の船名を持つ・・11,2トンの台湾漁船が７隻も南、北両小島の間に碇泊していた・・『3 日ほど前にサバ漁でスオウからきた。支那国やここらあたりはよく寄る』と得意気だ。りっぱな領海侵犯である。ところが天気になっても彼らは出漁する気はさらさらない。相変わらず若者たちは早朝からワイワイしゃべりながら・・鳥追である。・・10 年前には北小島に青草が見られなかったほどにセグロアジサシが群がっていたが現に推定だがその頃の５分の１の 100 万羽に減っている。いまや無人島とは名ばかりになりかねない・・」(「1963.05/19・琉球新報・「無人島は生きている 1」(田積友吉郎・森口豁)」

※4.「・・海鳥類はその群集状態により、魚族の種類、来集および移動方向を察知しうるので、漁業上極めて有益な存在であり、尖閣列島の如きは琉球近海における著名な漁場である。・・・南小島および北小島は天敵も少なく、また食物も豊富であり、海鳥の絶好の楽土である。・・特に許可を得た場合、または緊急の場合(この際は事後報告を必要とする)の他は上陸を禁じ、海鳥およびその卵の採獲することは勿論、海鳥類の繁殖を妨害する一斉の行為を禁止する。なお尖閣列島は

冬期になると国際漁場の観を呈するので、両島への立入禁止は単に琉球籍を有する人のみでなく、日本本土ならびに台湾の漁師に対しても、海鳥の保存ついて厳重な警告を与え、特に台湾漁船に対しては米国民政府を通じて強く要請する必要がある。」（「尖閣のアホウドリを探る」高良鉄夫 1964.3）

南小島で海鳥の卵を採る台湾漁民
（平良繁治.1968）

※5. 台湾漁船の不法入域、操業は尖閣諸島だけでなく宮古・八重山海域に及んでいた。「1966.05/19・八重山毎日新聞・「日に日に増える台湾漁船、与那国の漁場奪う、わがもの顔で“マイト”も平気で使用、きょう『ちとせ』現場へ急行。地元代表が訴える」とある。さらに「・・台湾漁船がおよそ 30 隻が、与那国沖の琉球海域に不法入域し、トビウオ漁を操業しているが出域を命じてもいっこうに応じないという。・・台湾漁船は近く 50 隻にもなる可能性があるということで、与那国近海はますます無法海域化しつつある。・・現地の警官がいくら出域を命じても応ぜず、また、漁船で追跡すると一時は逃げるが再び舞いもどるといった状態で“イタチごっこ”を演じている。不法入域として逮捕するには追跡者の船足が遅いといった不利な条件が多く、琉球警察は台湾漁船になめられたかっこう。一方、民政府側も台湾政府との関係で、国際的にもデリケートな問題も含んでいるといわれ、これまで抜本的な対策はない。・・与那国漁民は生活と密接な関係にある漁場を荒らされるばかりで、『なんとかしてほしい』訴えつづけている。」（1966.05/22・八重山毎日新聞・「与那国、荒らされる漁場、台湾漁船わがもの顔」）

※6. 総理府派遣の調査団長兼沖経懇専門委員高岡大輔氏は、日本政府に台湾漁民の不法入域・操業の状況を報告した。「魚釣島に到着・・沖合に台湾の漁船を数艘見受けた。・・・南小島の沖合に向かうと、漁船は船団を組み、その数は20数艘に及んでいた。彼らは台湾の蘇澳の漁民だったが 3 メートルほどの太い竹を 10 数本を結んだ筏を幾つともなく船に載せており、その筏を巧みにあやつって海上を漕ぎ回り、珊瑚礁の渚にも容易に接近して行くのであった。彼らは南、北小島を碇泊地としてカツオの一本釣りをやり、島に生息している海鳥類の卵や雛を乱獲しているのであった。」（「尖閣

北小島沿岸で不法操業する台湾船　（高良鉄夫.1968）

列島一帯の学術調査について」高岡大輔　1968.10）

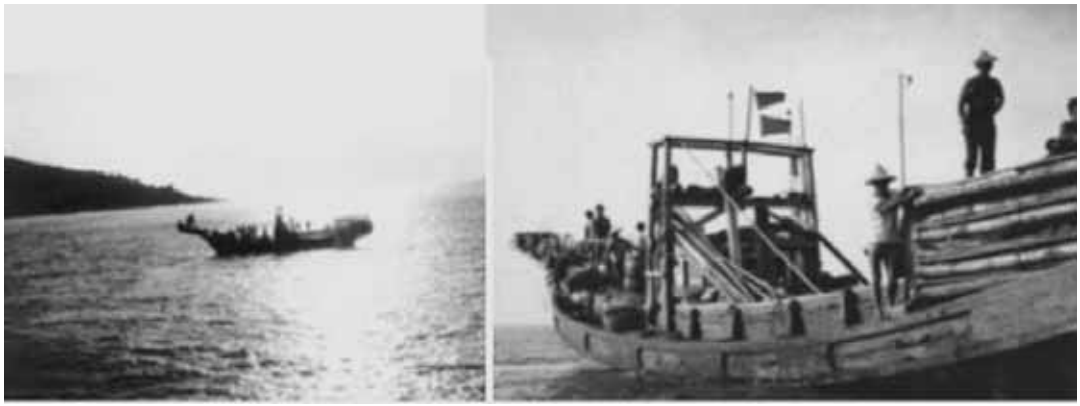
※7.「‥12 日午前 8 時に台湾人が上陸している尖閣列島南小島西側沖に到着、‥監督者出るように命じ‥高等弁務官からの入域許可証を持っているかと問いただしたところ、そういうものは持っていないと答えたので･･･台湾人代表 3 名を出させ‥取り調べを開始‥彼我の問答は次の通りであります。我「この島に上陸するには入域の許可書が要るが分かっているか」、彼「はい分かっております。1 カ月程前にも警官がきて入域の許可書をもらってくるように言われましたのでスクラップを積んで帰える船の人に手続をするようを頼んでありますがまだなんの連絡もありません」･･･、我「では 2,3 日うちに船がきたら‥その船で全員帰国するように」、彼「はい仕方ありません。帰えります」、我「若し帰国しなければ逮捕する」、彼「はい分かりました･･･。」（「尖閣諸島における不法入域台湾人の調査について(報告)」出入管理庁 1968.8）

南小島に不法上陸、難破船を解体している台湾人
1969.10 入域許可を得て不法滞在？（比嘉健次.1970.7）

※8. 台湾側は、尖閣諸島への正規の入域手続を申請した。その結果、米高等弁務官名で、南小島への作業員及び船舶については、以下の要件で入域許可を得た。「八重山石垣市尖閣列島南小島近辺において沈船の解体作業に従事する作業員及び船舶の琉球列島入域許可について、琉球政府出入管理庁、1、入域許可通知年月日、1968 年 8 月 30 日、69 年 4 月 21 日追加修正。2、許可期間、1968 年 8 月 1 日から 1969 年 10 月 31 日まで 14 カ月。3、許可の方法、米国高等弁務官名で在台北米国大使館を通じ電話で許可されている。HCPS―91203。4、許可人員及び船舶数、68.8.30、50 名、船舶 3 隻、69.4.21 追加修正、78 名。5、沈船名、シルバーピーク号･･･10、保証責任、許可期間満了の際は全従業員及び関係船舶が同地点から本国向け引き揚げること。」（「八重山石垣市尖閣列島南小島近辺において沈船の解体作業に従事する作業員及び船舶の琉球列島入域許可について」琉球政府法務局出入管理庁、1968.8/30）

※9. 尖閣諸島海域は、数年前と変わらず台湾漁船が蝟集し、不法入域・操業を繰り返していた。「(1) 、･･･わずか 5 日間の短期間で‥直接臨船して船長に対し厳重警告を与えて即時領海外に退去を命じた台湾漁船 6 隻、われわれ取締船を見て領海外へ逃走した船名未確認の台湾漁船 8 隻その他遙か洋上に台湾漁船らしいもの数隻を発見するに至った。これらの漁船は従順にわれわれの退去命令に応じた。(2)、これら台湾漁船の比較的侵入する区域は、北小島と南小島の中間

に位する海峡及び魚釣島の北岸と南岸である。不法入域のおもな目的は、飲料水の補給、水浴、海鳥のタマゴ採取、休養等である。また殆どが台湾省宜蘭県蘇澳南方から約１週間の出境許可で出漁し、全部冷凍用氷を積みサバ漁を行っている。漁法としては、竹であんだ筏に１人が乗ってする一本釣である。」(「不法入域者の取締状況について」琉球政府法務局出入管理庁　1970.7/24)



左右とも台湾漁船警告板設置に撮影　　(比嘉健次、1970.7.)

B. 石垣市の行政標柱建立、琉球政府の警告板設置

1. 1968年９月、米国民政府から琉球政府に対し、不法入域防止策として、3ヶ国語で標記した警告板を、尖閣諸島 7 島に設置を提案。※1

2. 1969 年 5 月、石垣市は、尖閣諸島地番(石垣市字登野城番地)を標記した行政区画(領土)標柱を尖閣諸島 5 島に建立、戦時遭難者慰霊碑を魚釣島に建立。※2

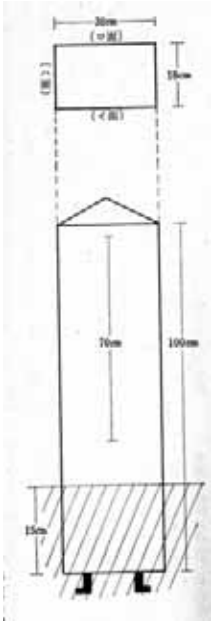
3. 1970年7月、琉球政府は、米高等弁務官命による不法入域警告板を、尖閣諸島 5 島に設置。※3

※1.「･･･今後この地域における不法入域をなくすために不定期に現場点検を行なう制度を確立すべきであると信ずる。そのために、本官は、軍の航空機が時々尖閣列島上空を飛ぶように手配中であります。貴政府警察当局が時々同列島を巡視するように手配すれば、なお有効だと信ずる。･･･なお、正確な航行ができないため、または同列島の領土上の地位を知らないために偶然同列島に立ち入る漁夫もあると思われる。･･･尖閣列島の各島、すなわち琉球列島の領土に上陸する者に対し、事前に琉球出入管理当局から入域許可を得ること。事前に手続をとらない場合には、琉球の法令に基き起訴され、罰せられることを警告する恒久的な掲示を上陸しそうな地域の各見やすい場所に立てるよう提案したい。この掲示は、英語、日本語および中国語の 3 カ国語で書いた方が有効だと思う･･」。(「米琉往復書簡、米国民政府民政官から琉球政府行政主席宛」(1968.9/.03)

※2.「石垣市長の命を受け尖閣群島に標柱を建て明示すると共に、昭和20年7月同群島付近で疎開中に遭難した遭難者の霊を供養する慰霊碑を目的で‥傭船して、1969年5月9日午後5時出港予定にて準備完了をした。‥‥同日午前7時、魚釣島の南側200メートル沖の海上に投錨致しました。‥‥魚釣島の標柱と戦争中遭難者の慰霊碑を第三住吉丸よりに小舟に積みかえ標柱と慰霊碑を建立致しました。‥‥同日午前 12 時南小島に向け出発‥小舟で島の海岸を一巡し陸上げする場所を選定して‥標柱を無事建立致しました。天候悪く雨のため‥作業が思う様に出来なかった。引き続き北小島の標柱を無事建立して、一行は協栄丸で久場島に向け出発した。島から200メートル沖合の海上に投錨協栄丸で1泊‥久場島の周囲を一巡して標柱を陸揚げする箇所を物色選定‥標柱を無事建立した。‥標柱の両端をくくり高さ5メートルの岩石の上に引き上げ同日午前 6 時頃無事大正島の標柱を建立した。‥‥」(「尖閣群島標柱建立報告書」石垣市1969.5/15)

上左:魚釣島での
遭難者慰霊碑建立
下左:魚釣島での
下右:久場島での行政標柱建立
(いずれも高嶺方治.1969.5)

魚釣島に建てた行政標柱



※各標柱の表面には各島の名称、
裏面には行政番地が彫られている。
島名と番地は以下の通り

八重山尖閣群島
　魚釣島 2392
　久場島 2393
　大正島 2394
　南小島 2390
　北小島 2391

（「尖閣群島標柱建立報告書」1969.5.15 添付図面より）

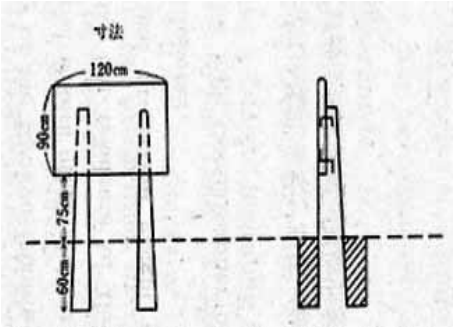
※3.「7 月 8 日、22:00、第三白洋丸に乗船・・・・・7 月 9 日、01:00、寒冷前線に突入し、強い突風とスコールに遭遇したため、船体が 25 度にローリング。その状態が約 3 時間続く。

07:00、魚釣島到着、同島北岸より約 500 メートル沖に投錨、(風波激しく、適当な投錨場所の逆走に 2 時間要する)。11:30、・・ボートで上陸して島を踏査し、設置場所を確定。12:30、人員、資材、器具（約 1 トン）の陸揚開始。（すべてエンジン付くり舟と伝馬舟を使用）。16:20、警告板設置工事完了。18:00、第 2 工事現場の北小島へ移動。船中泊。

7 月 10 日、・・11:15、警告板設置完了（北小島）。13:00、第 3 工事現場の南小島へ移動。16:20、工事完了（南小島） 17:00、第 4 工事現場の北小島へ移動（当初第 4 工事現場として沖南岩が計画されていたが、・・比較的台湾漁船が上陸する北小島に 2 ケ所設置することを協議のうえ決定） 19:：30、工事完了（北小島）、船中泊。

7 月 11 日、07:30・・沖北岩を現地調査したところ、前記沖南岩同様警告板設置には不適であることが判明した。08:00、第 5 工事現場の黄尾嶼（久場島）へ移動。・・14:00、工事完了。15:00、第 6 工事現場の魚釣島（沖北岩の代替地として）へ移動。・・19:30、工事完了。船中泊。7 月 12 日、06:00、第 7 工事現場の赤尾嶼（大正島）へ向け出発。・・16:00、工事完了。22:00、以上でもって警告板設置計画をすべて完了し、石垣向け赤尾嶼を出発。・・・」（「尖閣列島の警告板設置に関する復命書」 比嘉健次　琉球政府出入管理庁　1970.7/24）

魚釣島と北小島に各2基、南小島、久場島、大正島に各1基、計7基を設置
上掲写真はいずれも魚釣島で撮影（比嘉健次.1970.7.）



警告板は横 120 ㎝、縦 90 ㎝のコンクリート板

警　　告

此の島を含む琉球列島のいかなる島またはその領海に琉球列島住民以外の者が無害通航の場合を除き、入域すると告訴される。但し琉球列島米国高等弁務官により許可された場合はその限りではない。

琉球列島米国高等弁務官の命による

Erected by Government of the Ryukyu Islands

琉球政府建立す

琉球政府立

日本語・英語・中国語の 3 カ国語で警告

C. 漁場保全と領海侵犯に対する警備・取締り状況

1. 1968 年 9 月、米国民政府は尖閣諸島海域における領海侵犯取締り事項を提案、琉球政府警察局は「警察官、ボートによる巡視」防止対策事項を策定。※1、

2. 1969 年 6 月、沖縄唯一の救難艇として孤軍奮闘する「ちとせ」※2

3. 1970 年 10 月、日本政府援助で尖閣諸島海域を専任防衛する救難艇「おきなわ」を常置。※3

4. 1971 年 7 月、「台湾漁船、巡視にもなれっこ、尖閣周辺で堂々の操業」。※4

※1.「あて:久貝法務局長、首題:尖閣列島における台湾漁船の領海侵入について、9 月 3 日づけのカーペンター民政官から松岡主席あてに送られた書簡に関連して行政府の意向を早めに民政官へ報告する必要があると考えますので次のことについて貴局と関係局との協議調整の結果を局長会議で報告してもらうよう指示します。記、1、民政官からの提案された事項、(1)、軍用機による尖閣列島哨戒計画、(2)、警察官、ボートによる巡視、(3)、尖閣列島における不法入域に対する警告板の設置、2、その他行政府で適切とみられる措置、赤嶺副主席」。これに対し琉球警察局は、「尖閣列島における不法侵入防止対策、琉球政府警察局、対策、1、警察官、ボートによる巡視、警察本部保安課所属の救難艇『ちとせ』をもって毎月 1 回(往復を含め 5 日～6 日)尖閣列島および、その附近の海上警邏を実施して取締りする。取締りの方針は不法上陸者に対しては検挙、陸地から 3 カイリ以内にある漁船に対しては退去を命ずることを原則とする。2、その他行政府で適切とみられる措置、同島近海を航行する船舶が不法上陸者、又は領海不法侵入船舶を発見した場合は関係機関への通報方を指導し、協力せしめる。備考、(1)、八重山署警備艇は 27・42 屯の小型であり、しかも警邏区域は陸地から 20 哩以内(沿岸区域)であるため同島への警邏は困難である。(2)、『ちとせ』の 1 回(5 日間の予定)出動に要する諸経費はつぎのとおり(詳細添付)・・・・」(「尖閣列島における台湾漁船の領海侵入の取締」1968.9.19)を策定した。

※2.「・・全長 33・8㍍、130㌧、出力 700 馬力。『ちとせ』の任務は沖縄近海の海難事故での人命および船体の救助だ。・・その守備範囲は実に広い。北は沖永良部附近から南は遠く尖閣列島、西に東支那海、東に太平洋を控え、130 ㌧小さな船 1 隻では、それは果てしない広がりを意味する。・・本土でなら『ちとせ』サイズの船は内海専用だが、沖縄では唯一の救難艇だけに外海の荒海にいどまなくてはならない。『せめて 300 ㌧はほしいですがね』・・艇長は、スピード化と大型化を訴える。・・」(1969.06/22・琉球新報・「荒海もなんのその、孤軍奮闘する救難艇『ちとせ』」)。

唯一の救命艇で孤軍奮闘の「ちとせ」(130㌧)
(吉浜貞一提供)

1970 年 10 月、「ちとせ」は八重山署に配置されて、尖閣諸島及び先島近海を本格的に取り締まることになった。

※3.「【東京】尖閣列島問題は、あわただしい動きをみせているが、琉球政府は 10 月なかばから同列島周辺海域の警備に力を入れることになった。これは本土政府との協議で決まったもので、10 月 1 日に本土政府から琉球政府に引き渡される救難艇『おきなわ』=350㌧=を尖閣列島海域に常時配置、台湾漁船の不法侵入を取り締まる。建造費 2 億円・・350 ㌧で海上保安庁の使用し

ている巡視船と同型、同性能・・復帰後は新設される第十一管区海上保安本部の巡視船となる。・・」(1970.09.20・琉球新報・「尖閣列島海域を防衛。救難艇『おきなわ』を常置。来月中旬から出動」)。このように台湾漁船の取締りが大いに強化されるものと期待されていた。

ところが、2ケ月後には、「1970.12.13・琉球新報・「動きとれない“海の守り”救難艇『おきなわ』予算、人手不足で巡視、救難業務に支障。燃料もコト欠く状態」、と報じられ.財政脆弱な琉球政府にとつて、その分負担増になり、救命艇『「沖縄」を運用するのは厳しいことが明らかになった。

尖閣警備で期待された救命艇「おきなわ」(350トン)
(「沖縄県警察史 第3巻 2010」より)

※4.「【八重山】・・・『ちとせ』は6日午後5時すぎ、尖閣列島に到着したが、南小島に停泊中の台湾漁船1隻(約20トン)を発見、接船を命じ、船長ら3人を『ちとせ』に呼んで取り調べた。3人ともカタコト日本語で『尖閣に休けいに来た』・・『ここは沖縄ということを知っているか』『つぎからは漁船を没収するぞ』と警告すると、『ハイ、ハイ』とうなづいていた・・・今回の巡視で領海外撤去を命じた台湾漁船は 1 隻だけだったが、尖閣や与那国では春から夏にかけて、毎日のように操業しているという。尖閣列島の場合、台湾政府や新聞、テレビが台湾領土と主張しているためか、台湾漁夫たちも外国であるとの意識は全くないようだ。一方、八重山署では漁船を発見すると、領海外に撤去を命じるばかりで、漁夫の逮捕や漁船の没収などした例は全くない。台湾漁船仲間もそれを心得ていて、操業している気配がうかがえる。救難艇『ちとせ』が近づいても決して逃げないし、接舷を命じるとさっさと近づき、中には手をあげてあいそ笑いを浮かべるものもいた。」(1971.07.08・沖縄タイムス・「台湾漁船巡視にもなれっこ。尖閣周辺で堂々の操業」)

台湾漁船の不法操業を監視する救難艇「ちとせ」
(吉浜貞一提供)

不法操業の台湾漁船に乗り込み、臨検する。
(吉浜貞一提供)

□. 主な刊行物資料

○、『尖閣のアホウドリを探る』高良鉄夫（季刊「南と北」第 26 号、南方同胞援護会、1964.年 3 月） ＊尖閣諸島への不法入域状況

○、『尖閣列島の海鳥について』高良鉄夫（琉球大学農学部学術報告 第 16 号、1969 年.10 月）

○、『尖閣列島における不法入域台湾人の調査報告』（琉球政府法務局出入管理庁 八出管第 289 号、1968 年 8 月 15 日）

＊季刊「沖縄」 特集尖閣列島 第 56 号 p165～167 所収

○、『八重山石垣市尖閣列島南小島近辺において沈船の解体作業に従事する作業員及び船舶の琉球列島入域許可について』（琉球政府法務局出入管理庁、1968 年.8 月 30 日）

＊同上p167～168 所収

○、『尖閣列島における台湾漁船の領海侵入の取締』（琉球政府行政副主席から法務局長宛）1968.年 9 月 19 日） ＊同上 p168 所収

○、『尖閣列島における不法侵入事件防止対策』（琉球政府警察局） ＊同上 p168～170 所収

○、『外国漁船の琉球列島水域に於ける不法漁業について』（出入管理庁）

＊同上 p170～171 所収

○、『不法入域者の取締状況について』（琉球政府法務局出入管理庁 1970 年 7 月 2 日）

＊同上 p171～174 所収、なお「尖閣列島の警告板設置に関する復命書」添付の報告であり、領海侵犯台湾漁船現認状況は計7隻、乗員数 104 人旨報告。

○、『尖閣群島標柱建立報告書』 新垣仙永・高嶺方治（石垣市 1969 年 5 月 15 日）

標柱設計図、標柱建立日程表添付 ＊同上 p174～178 所収

○、『尖閣列島に対する警告板の設置に関する米琉往復書簡』

「琉球列島米国民政府民政官から琉球政府行政主席宛」1968.9/3、

「琉球政府行政主席から琉球列島米国民政府民政官宛」1968.10/21、

「琉球政府法務局出入管理庁から琉球列島米国民政府公安局長宛」1. 工事仕様書

2. 警告板設計図 3. 尖閣列島見取図 4. 民政官宛の文書の写 1969.3/28

＊同上 p132～134 所収

○、『尖閣列島の警告板設置について』 琉球政府法務局出入管理庁）

①資金②設置場所および設置数③ 警告板の材質大きさ④警告文⑤竣工⑥設置後の不法入域対策(1970.7/14) 復帰準備委員会、日本政府及び琉球政府へ通達す

＊同上 p135～136 所収

○、『尖閣列島の警告板設置に関する復命書』 比嘉健次（琉球政府法務局出入管理庁 1970 年 7 月 24 日） ＊同上p136～141 所収

○、『尖閣列島警護同行記』 平良繁治（尖閣研究 高良学術調査団資料集・下巻 尖閣諸島文献資料編纂会 2007 年 8 月 p349～354）

○、『『海鳥の卵はピータンの原料に驚愕』 伊良波幸勇 ＊同上 p371～372

○、『米海軍艦船は作戦下でしか動かせない』 新城鐵太郎　＊同上 p369～370
○、『警告板設置の思い出』(比嘉健次)　＊同上 p283～288
○、『尖閣諸島不法上陸防止「警告板設置」の全容』 比嘉健次 (季刊「沖縄世論」第 5 巻第 6 号 2008 年夏季号 閣文社)
○、『救難艇おきなわの運用計画について 』海上保安庁長 (海保第 19 号 1971 年 12 月 4 日)　＊琉球政府企画局長宛文書 救急出動状況(1970.12～1971.6)等記載

□. 主な新聞記事

1955.03/04・琉球新報・「尖閣列島付近で漁労中、第三清徳丸襲わる。中国旗を立てた怪船 2 隻に。2 名射殺行方不明 4 名、脱出者 3 名が救援依頼」
1955.03/04・琉球新報・「“ほんとでしょうか”悲報に驚愕する兄嫁」
1955.03/04・琉球新報・「当局鋭意捜索中、所属不明のジヤンク船を」
1955.03/04・琉球新報・「曳航を頼んで接近、悲惨時を語る金城さん」
1958.05/24・八重山毎日新聞・「与那国、台湾漁船が不法侵入。夜間は部落にも上陸」
1958.07/01・八重山毎日新聞・「与那国沿岸で漁労、抗議も効なし。増加する台湾漁船」
1958.07/05・八重山毎日新聞・「台湾漁船、西表近海にも出没。ハッパも携行。」
1959.05/30・八重山毎日新聞・「領海侵犯の台湾漁船、国府と折衝中。太田副主席、ギ民政官と諸問題討議」
1963.05/19・八重山毎日新聞・「調査団寄港、アホウドリは全滅。荒らされ放題の尖閣列島、演習や台湾漁船のたまり場」
1963.05/19～05/26・琉球新報・「無人島は生きている 1～7」(田積友吉郎・森口豁)
1963.05/19～05/26・沖縄タイムス・「アホウドリを求めて 1～5」(粟国安夫)
1963.05/20・沖縄タイムス・「荒らされる尖閣列島。領海侵犯で抗議も。海鳥、保護せねば滅亡の恐れ」
1964.06/12・八重山毎日新聞・「台湾漁船がワンサ、最近の与那国海域。八重山署、警本へ連絡」
1966.02/05・琉球新報・「国境警備問題を重視、政府関係機関、台湾～与那国、わずか 40 カイリ、台湾漁船、自由に出入、伝染病の侵入。検疫船なく、無防備」
1966.05/07・八重山毎日新聞・「与那国、取り締りを厳命、領海侵犯の台湾漁船横行」
1966.05/19・八重山毎日新聞・「日に日に増える台湾漁船、与那国の漁場奪う、わがもの顔で“マイト”も平気で使用、きょう『ちとせ』現場へ急行。地元代表が訴える」
1966.05/20・八重山毎日新聞・「与那国に自衛隊を(記者席)」

1966.05/22・八重山毎日新聞・「与那国、荒らされる漁場、台湾漁船わがもの顔」
1967.06/19・八重山毎日新聞・「台湾漁船、いぜん出没。与那国近海、八重山署近く警備へ」
1968.07/06・八重山毎日新聞・「台湾漁船、八重山漁師を脅迫。八重山漁師に脅迫、多良間島で巡査もおどす。“不安で漁もできない”八重山署へ訴える」
1968.07/11・琉球新報・「絶滅寸前の“海鳥”荒らされる尖閣諸島。台湾人が占拠、無残に散乱する鳥の羽や頭」
1968.07/11・八重山毎日新聞・「尖閣列島は台湾船が我が物顔でいる(パチリチクリ)」
1968.07/11・八重山毎日新聞・「第七艦隊は尖閣列島を巡視(記者席)」
1968.07/12・琉球新報・「荒らされた海鳥王国尖閣列島。(グラビア)」(松田写真部員)
1968.07/12・八重山毎日新聞・「尖閣列島。台湾漁船が 10 数隻。調査団に「卵を取りに来たのか」と聞く。八重山署の同行巡査語る」
1968.07/12・琉球新報・「台湾属領化の八重山諸島(話の卵)」
1968.07.12・琉球新報・「台湾の米大使館通じ処置。領海侵犯で民政官語る。」
1968.07/13・沖縄タイムス・「乱獲される尖閣列島の海鳥。早急に保護策を、高良教授が報告」
1968.08/14・琉球新報・「初の尖閣列島調査、中華民国との外交交渉資料収集か。米民政府、台湾漁夫に退去命令」
1968.08/14・八重山毎日新聞・「尖閣列島。民政府、警本が調査。数 10 人の台湾人で座礁船を解体」
1968.08/15・琉球新報・「尖閣列島を守ろう(声・投稿欄)」(那覇市首里、金城一康)
1968.09/10・琉球新報・「尖閣列島を飛行機でパトロール。民政府、台湾漁民の不法侵入で」
1969.01/16・琉球新報・「本土政府、尖閣;列島近海を巡視。救難艇の建造へ、領海侵犯取り締まる、建造費 2 億円を計上」
1969.04/13・琉球新報・「尖閣列島。行政区域を明確化。石垣市が近く標識、国際紛争の防止めざす」
1969.04/16・琉球新報・「尖閣列島の領土権保全(社説)」
1969.04/23・琉球新報・「行政区域を明確化、仲の御神島に竹富町の標識。石油資源の思惑も絡む」
1969.04/26・琉球新報・「石垣市。魚釣島に慰霊塔、戦争犠牲者 200 人祀る」
1969.04/29・沖縄タイムス・「尖閣列島。領土標識で警告、台湾漁船年々増える」
1969.05/09・八重山毎日新聞・「2 つの目的で尖閣列島へ、24 年ぶり遭難者供養。石垣市、初めて行政区域標示」

1969.05/13・琉球新報・「ここは日本の領土です。尖閣列島に行政標識、石垣市、5 つの島に明示」
1969.05/13・琉球新報・「疎開犠牲者の慰霊碑建立。米機の空襲で漂着、50 人が死亡。24 年目の供養」
1969.05/23・八重山毎日新聞・「台湾漁船に手を焼く漁民。長期取締要望、カジキの漁獲量がた落ち。与那国から八重山署へ」
1969.05/28・八重山毎日新聞・「台湾漁船。八重山署、警備艇『はやかぜ』を与那国へ派遣。長期警備態勢とる」
1969.06/05・琉球新報・「年中行事の不法入域、与那国近海、台湾漁船が再び出没」
1969.06/07～06/12・琉球新報・「現地ルポ尖閣諸島記 1～5」(八重山支局米城恵)
1969.06/13・琉球新報・「民政府、尖閣諸島の“門戸”開放。台湾漁民に入域許す。地元、不法行為に手を焼く」
1969.06/14・琉球新報・「尖閣列島への台湾労務者の出入り“自由な入域許さぬ”出入管理庁、さっそく実情調査へ」
1969.06/22・琉球新報・「荒海もなんのその、孤軍奮闘する救難艇『ちとせ』(日曜カラー)」(写真・金城吉男。文・早瀬勝)
1969.06/23・琉球新報・「八重山近海、台湾漁船の領海侵犯増える。昨年だけで 121 隻、八重山所調べ。わずか 4 件の検挙数」
1969.09/11・八重山毎日新聞・「台湾漁船。領海侵犯延べ 331 隻。警本から八重山署に連絡」
1969.09/26・八重山毎日新聞・「70 年度で八重山に『ちとせ』。水難救助と台湾船の監視、下地支部長が経過報告」
1970.04/29・沖縄タイムス・「尖閣列島。領土標識で警告、台湾漁船年々増える」
1970.06/06・沖縄タイムス・「不法上陸に“平然”台湾漁夫 6 人逮捕。宮古署」
1970.06/14・八重山毎日新聞・「台湾漁船、尖閣列島に不法上陸。海鳥のたまごなど乱獲。「ちとせ」11 隻に退去命令」
1970.06/16・琉球新報・「巡視艇“おきなわ”今秋完成。尖閣列島へにらみ。船長は海上保安庁から」
1970.07/07・八重山毎日新聞・「尖閣列島に立ち入り禁止。7 つの島に標柱建設。きょうから九日間、出入管理庁と建設局」
1970.07/07・八重山毎日新聞・「尖閣列島への立ち入り禁止の標識建設きょうから始まる、台湾漁船はそれできけばよいが(パチクリ・チクリ)」
1970.07/08・八重山毎日新聞・「近海の台湾漁船、『ちとせ』本格的取り締り、与那国常駐の出入

管理職員の報告で出動か、波照間、尖閣列島ふくめた広域」
1970.07/08・八重山毎日新聞・「『ちとせ』を八重山へ、今年 10 月ごろ配置予定」
1970.07/08・八重山毎日新聞・「『ちとせ』あすから台湾漁船の取り締り、与那国に常駐しない限り後絶えぬだろう。（パチクリ・チクリ）」
1970.07/09・琉球新報・「尖閣諸島に警告板、台湾漁民の侵入防止で」
1970.07/14・琉球新報・「不法入域防止めざす、尖閣諸島に警告板を設置」
1970.07/14・八重山毎日新聞・「尖閣列島。周囲は大小の台湾船の群。仮小屋を建て住む。海鳥と卵は減る一方。警告板を建て一行帰る」
1970.07/15・八重山毎日新聞・「尖閣列島。第 2 の『竹島』の恐れ。伊佐出入管理支所長の見方」
1970.09.05・沖縄タイムス・「尖閣諸島は国府に帰属。魏外相が議会証言。同諸島に晴天白日旗」
1970.09/13・琉球新報・「来月、“尖閣”視察へ、通産局長国府漁民の動き調べる。」
1970.09/16・八重山毎日新聞・「国府の国旗を撤去。尖閣列島の魚釣島から。琉球警察『ちとせ』で現場確認」
1970.09.16・琉球新報・「われわれの国旗がある、尖閣魚釣島。警本の退去命令に台湾漁夫が叫ぶ“魚はみんなのモノ”」
1970.09.16・沖縄タイムス・「魚釣島に落書き、尖閣列島現地ルポ。警告を全く無視。台湾漁船、ゆうゆう操業」
1970.09.16・沖縄タイムス・「尖閣列島、“ここは沖縄、すぐ出なさい”警本救難艇が現地調査、漁船に退去命令、総統万才のペンキも消す」
1970.09.16・沖縄タイムス・「“北風吹いたら帰るョ”動じない台湾漁夫」
1970.09/17・八重山毎日新聞・「撤去の国旗を那覇へ。取り扱いを米民政府と協議。『ちとせ』昨夜再び尖閣へ」
1970.09/18・八重山毎日新聞・「尖閣列島。おうへいな台湾漁夫。わが物顔で平然と操業。救難艇ちとせ、国旗を撤去、蒋総統万歳消す、（現地ルポ）」
1970.09/18・琉球新報・「いぜん台湾漁船が操業。八重山署、尖閣列島を調査」
1970.09.18・沖縄タイムス・「9 隻の台湾漁船、魚釣島周辺、『ちとせ』再び尖閣列島へ出動」
1970.09.20・琉球新報・「尖閣列島海域を防衛。救難艇『おきなわ』を常置。来月中旬から出動、不法侵入取り締まる」
1970.09/27・琉球新報・「“石油戦争”はこれから、台湾、いぜん操業、近く日台間の交渉開始」
1970.09/29・沖縄タイムス・「列島周辺の警備を強化、新たに救難艇配置」
1970.10/06・八重山毎日新聞・「『ちとせ』の配置決定、八重山署管轄、尖閣列島のパトロール」

1970.10/16・沖縄タイムス・「救難艇『おきなわ』、最新装備で那覇へ入港」
1970.12.13・琉球新報・「動きとれない“海の守り”救難艇『おきなわ』予算、人手不足で巡視、救難業務に支障。燃料もコト欠く状態」
1971.03.29・沖縄タイムス・「台湾漁船を取り締まる。尖閣列島を警戒パトロール」
1971.03/31・琉球新報・「近海に台湾の漁船？、琉大尖閣調査団、きょう魚釣島に上陸」
1971.07/08・琉球新報・「あと断たぬ台湾船。尖閣列島、『ちとせ』が退去させる」
1971.07.08・沖縄タイムス・「台湾漁船。巡視にもなれっこ。尖閣周辺で堂々の操業」

Ⅳ－2. 尖閣諸島海域の石油資源と台湾・中国の領有権主張関連

A. 国連エカフェの報告と尖閣諸島海域への石油鉱業権出願

1. 1968 年秋、国連エカフェ(アジア極東経済委員会)の黄海・東シナ海域沿岸海底鉱物資源共同調査によって豊富な石油・天然ガス資源の存在が有望視された。※1

2. 1968 年 7 月、総理府は沖縄経懇専門委員高岡大輔氏を沖縄に派遣、尖閣諸島鉱物資源予備調査団を組織して、尖閣諸島調査を行った。※2

3. 1969.年 2 月、尖閣諸島海域に次々に石油鉱業権が出願され、同海域は海底油田をめぐる石油鉱業権争奪戦の舞台と化した。※3

4. 1969 年 6 月、総理府は東海大学丸Ⅱ世号による第 1 次尖閣諸島周辺海底地質調査を実施、1970 年 6 月には第 2 次調査、1971 年 7 月には第 3 次調査を実施した。※4

※1.「・・調査は国連のアジア極東経済委員会(ECAFE)・・が、昨年黄海と東シナ海で広い範囲にわたりおこなったもので、・・K・O・エメリー博士、米海軍海洋調査部・・および日本、台湾、韓国から科学者が参加した。

・・海底面は 1.5 ﾊﾟｰｾﾝﾄの有機物を含み・・この有機物の集積は何億年も昔はもっと大きく、その結果、今日石油資源が埋蔵されているのはほぼはっきりしている。・・沈殿物と有機物のほとんどは黄河の河口を横断する福建・嶺南断層と大陸ダナの端を台湾から日本まで通る台湾・新地断層に食い止められている。・・大陸ダナには主に第三紀の沈殿物が約百万立方ｷﾛもあり、“世界で最も豊富な石油資源の 1 つ”になるかもしれない。・・人工地震法による調査では、大陸棚、黄海両地域の海底面下の沈殿層をさがし当てた。この層が石油およびガスを蔵しているとわれる。」(1969.06/07・沖縄タイムス・「世界有数の石油資源、米海軍が海洋調査。尖閣列島含む東シナ海に」)

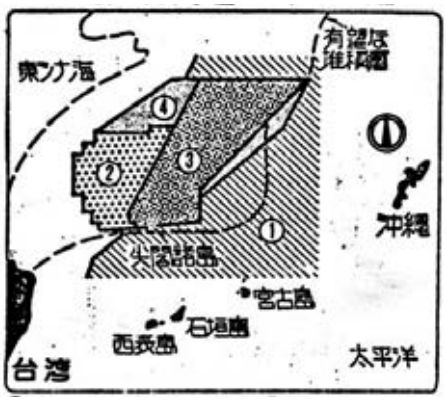
黄海及び東シナ海の第三紀層等層厚図
(「1968 年エカフェ調査報告書」より)

※2.「・・尖閣海域に大油田があるとの大朗報・・真っ先にこの重大さに気付いたのが・・高岡大輔氏だった。この大油田が開発されれば、沖縄の経済振興と日本全体の繁栄に大きく寄与できる。氏は日本政府は一日も早く、賦存状況を調査し、対策を講じなければならないと、政府部内の説得に奔走し、資源予備調査の了解を取り付けた。・・尖閣列島の視察を終えると、・・各界の最高責任者を集め、総理府で調査報告会を開いた。・・尖閣列島の重要性について・・気象観測所施設の設置、定期的な水産研究についての提言、無人灯台や緊急接岸港建設、海鳥など特別保護区の設定等々が議論・・所要施策が俎上に上がった。・・尻込みする政府関係者に対して、尖閣石油

資源開発の重要性を説き続け・・その結果、総理府による調査船東海大学丸Ⅱ世号（702 ﾄﾝ）を駆使した『尖閣列島周辺の海底地質調査』が始動することになる。・・」（「尖閣列島鉱物資源予備調査に参加して」大城盛俊　尖閣研究（下）2007.11　p343～348）

※3.「尖閣列島の石油資源を目当てにした鉱業権は・・大見謝氏・・日本石油開発公団・・こんどの新里氏の出願 500 件を含めると計 13､637 件となる。出願は、地図を付して 1 件につき 330 万平方ﾒｰﾄﾙ(100 万坪)の範囲の鉱業権が設定され・・3 社の出願でかなり広域にわたることになる。

ところで同列島の石油資源めぐる最近の動きは、かなり活発化し、日本だけでなくアメリカ、韓国、台湾などの国々も関心をよせているいといわれる。すでに日本の場合は、第 1 次調査に引き続いて第 2 次調査を計画、同列島の石油資源の開発が可能かどうか積極的に検討する構えをみせている。」(1969.10/17・琉球新報・「尖閣列島の石油資源、3 つどもえ戦の鉱業権争い。第 3 者(那覇の新里氏)名乗り出る」)



尖閣諸島海域の石油鉱業権出願鉱区
①帝国石油(新里氏？) ②石油資源(旧石油公団)③うるま石油開発(大見謝氏)
④芙蓉石油開発 (沖縄タイムス.1980.1.4)

※4.「【東京】さる 6 月 4 日から約 20 日間にわたって尖閣列島周辺の海底地質調査を行なった星野通平東海大学教授ら調査団は、17 日午後総理府に山中総務長官、山野沖縄・北方対策庁長官を訪ね、第 2 次調査結果を報告したあと記者会見し、①今回の調査で尖閣列島周辺の海に石油天然ガスが埋蔵されている可能性が一層強くなった②油田と密接な関係にある地質（新第三紀層）はほぼ九州の面積に匹敵するほど広大であることが明らかとなった③来年もう 1 度学術調査をしたあと72年ごろ精密な資料調査をすれば、73年にはボーリングすることも可能だ―と語った。

尖閣諸島周辺の海底地質調査した東海大学丸Ⅱ世号。
(「ウエブサイト」より)

地質調査は深度 3000mのｽﾊﾟｰｶｰを使って行われた。
(兼島清.1969.7)

星野団長らの報告を聞いた山中長官も、ぜひ来年第 3 次学術調査が実現できるよう予算措置したいーと述べていたという。」(1970.07/18・沖縄タイムス・「尖閣列島の石油天然ガス、埋蔵の可能性増す。九州の面積に匹敵、学術調査団が報告、73 年にもボーリング」)

B. 台湾の領有権主張と琉球政府の「領土権声明」と「尖閣を守る」運動

1. 1970 年 8 月、台湾政府がアメリカのガルフ社に鉱区権を認可、国府立法院は尖閣諸島の領有を可決。※1　これに対し琉球政府立法院は領土防衛要請決議し、9 月琉球政府は領土権を声明。※2

2. 1970 年 9 月、「尖閣を守る」運動が八重山石垣市を起点に、島ぐるみの運動に進展、40 余団体が網羅した全島組織の「尖閣資源開発促進協」が結成された。※3

3. 1970 年 9 月、琉球政府は、県益擁護の立場から、鉱業権(申請)者・政府・民間人を含めた「尖閣油田開発 KK」設立を計画、沖縄主体の開発構想を企図。※4、

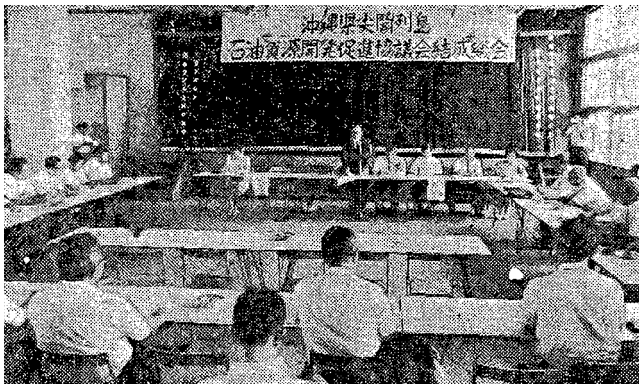
※1.「・・台湾の国営石油公社が、パシフィック・ガルフ社に尖閣列島海域を含む 5 万 5 千平方キロメートルにわたり石油鉱区権をあたえた・・この協約が国際的に効力を認められるとすれば・・台湾とガルフ社にひとり占めされ・・これまで尖閣列島にかけた期待はまぼろしに終わり・・沖縄の経済的利益が水の泡と消える・・これは、琉球政府や本土政府がモタついているのに乗じて、うまく先手をうたれたかっこうだ。・・」(1970.08/13・沖縄タイムス・「石油資源の確保と開発、一方的な鉱区権の設定(社説)」)、その3週間後に台湾試験船が魚釣島に晴天白日旗を立てたことが報じられた。「『基隆4日中央社＝共同』台湾水産試験場所属の海鷹丸は 2 日、尖閣諸島中最大の尖閣島に国府国旗の晴天白日旗を立てて、3 日夜帰港した。付近の海上で台湾漁船が操業しており、これを拍手と万歳の声で歓迎した。」(1970.09.05・沖縄タイムス・「同諸島に晴天白日旗」)

台湾側設定の石油開発鉱区図

※2.「尖閣列島の石油資源が最近とみに世界の注目をあび、県民がその開発に大きな期待をよせているやさき、中華民国政府がアメリカ合衆国のガルフ社に対し、鉱業権まで与え、さらに、尖閣列島の領有権まで主張しているとの報道に県民はおどろいている。元来尖閣列島は、八重山石垣市字登野城の行政区域に属しており、・・・同島の領土権について疑問の余地はない。よって琉球政府立法院は、中華民国の誤った主張を止めさせる措置を早急にとってもらうよう院議をもって要請する。右決議する。」(「尖閣列島の領土防衛に関する要請決議」(琉球政府立法院、1970 年

8 月 31 日決議)。さらに、琉球政府は領土権を声明した。「行政府は・・定例局長会議を開き、尖閣列島の海底油田をめぐる鉱区権問題について話し合った結果、『尖閣列島の領有権および大陸ダナ資源の開発権は琉球政府にある』との統一見解をまとめ、内外にアピールするとともに、これを具体的に裏付けるために鉱区権申請の処理を急ぎ、年内にも第 1 号の認可を与えることになった。」(1970.09/11・沖縄タイムス・「琉球政府、尖閣領有権をアピール。“琉球の主権明白”大陸ダナ開発権も留保」)。同アピール(尖閣列島の領有権および大陸ダナ資源の開発主権に関する主張)は、「尖閣列島の領土権について」(琉球政府声明 昭和 45 年 9 月 17 日)として、日米両政府あてに要請決議された。

※3. 地元八重山で「尖閣を守る会」(発起人桃原石垣市長ら)が設立準備された。「『沖縄尖閣列島を守る会』では・・次のようなアピールを発表した。・・△沖縄の資源の開発促進を訴えよう。△住民の鉱業権を死守し、尖閣油田開発を主体的に押し進めよう。△沖縄の完全な経済的自立と自給をかため、72 年復帰を実現しよう。△尖閣油田の県民による自主開発に琉球政府の協力と援助を要請しよう。1970 年 7 月、沖縄尖閣列島を守る会準備会」(「戦後の八重山歴史」尖閣諸島と油田問題、p492～533、桃原用永 昭和 61 年 5 月)。「守る会」の運動は沖縄本島に飛び火し、島ぐるみの運動に進展し、全琉組織の「尖閣開発促進協」が結成された。「沖縄県民の財産である尖閣列島の石油資源を守り、県民の主体的開発を積極的に推進するため、18 日午後 2 時から沖縄県市長会、市議会議長会、町村議長会、婦連、教職員会の呼びかけで 46 団体が婦連会館ホールに集まり『沖縄県尖閣列島石油資源等開発促進協議会』の結成会を開いた。・・『全県民の世論を結集、一致協力して沖縄の資源を擁護し自主的な開発を行うため奮闘しよう』との宣言と日本政府、衆参両院議長、米民政府、琉球政府に対する要請決議文を採択した。」・・当面の事業計画は政府、立法院その他の必要な機関への要請や世論の啓発をはかるため、講演、機関誌発行その他県や国内外の協力機関との連携、調査研究を行なう方針。・・」(1970.09/19・琉球新報・「尖閣列島石油開発協を結成、46 団体が参加、“主体的開発を積極推進」)



「沖縄県尖閣列島資源等開発促進協議会」結成会 1970.9.18
(琉球新報.1970.9.19)

※4.「日本、国府両国の国際問題に発展しつつある尖閣列島の領有権と同島周辺の海底油田の開発について行政府では権益擁護の立場から調査研究を進めていたが、砂川通産局長は・・①鉱業権者、政府、民間人を含めた尖閣油田資源開発 KK＝仮称＝を設立する②同開発 KK は、

鉱業権の管理と調査を行なうが、最終的には本土側の参加を求めて開発作業を行う③鉱業権の取得申請を早急に処理するため、本土から 5,6 人の専門官を招へいする－と発表、来月いっぱいに開発 KK 発起人会を開き、具体的な作業に着手する計画であると、のべた。」(1970.09/27・沖縄タイムス・「尖閣油田開発 KK を設立へ。開発、本土の参加で、政府、鉱業権者、民間が出資」)

C. 中国の領有権主張と「尖閣開発 KK」構想の頓挫

1. 1970 年 12 月、中華人民共和国は、三たび尖閣諸島の領有権主張。※1

2. 1971 年 2 月、琉球政府通産局は、「沖縄石油資源開発株式会社法案」を策定、「尖閣開発 KK」設立に向けて動き出す。※2

3. 1971 年 3 月、南方同胞援護会(大浜信泉会長)は、「尖閣列島」の行政・歴史解明を目的に、「尖閣列島研究会」を組織、研究成果を発表。※3

4. 1971 年 6 月、鉱業権申請者・石油資源開発（旧石油開発公団）は、大陸棚問題のもつれで、尖閣石油資源開発を見合わせ、消極策に転じる。※4

5. 1971 年 9 月、琉球政府の石油資源開発設立法案が宙に浮く、本土措置等が見通したたず、「尖閣開発 KK」設立構想は頓挫。※5

※1.「【RP＝共同】29 日朝の北京放送によると、中国共産党機関誌人民日報は「米日反動派がわが国(中国)の海底資源を略奪するのを決して許さない」と題する時事評論を掲載し、その中で琉球列島の尖閣諸島が中国の領土であることを重ねて主張した。中国はすでに新華社を通じてこれまで 3 たび(10 月 3,4 日、22 日)このような主張を行っている。」（1970.12/30・琉球新報・「中国領有三たび主張。人民日報が尖閣列島で」)

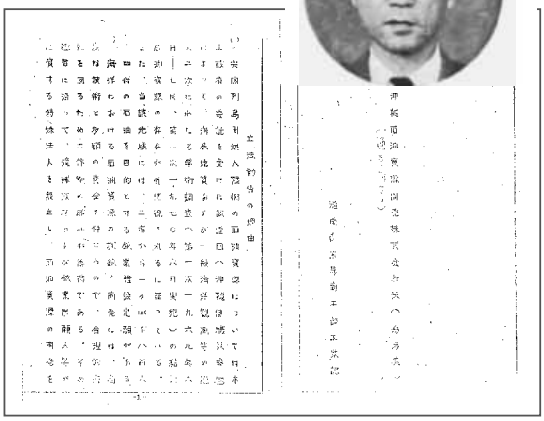
※2.「通産局は、尖閣列島の海底石油資源を県益第一主義の方向で開発して行くため、沖縄石油株式会社法案を 3 月 1 日に立法勧告する準備を進めている。・・すでに同会社法案を作成し、・・立法院に送付する予定にしている・・」(1971.02/05・琉球新報・「県益第一主義で開発―沖縄石油資源開発 KK 法案―。来月 1 日に立法勧告」)と、「尖閣開発KK」設立に強い意欲を示していた。

砂川恵勝局長は、『尖閣開発KK』への問題提起に対しては、以下の見解を述べている。

「1、会社の開発地域は、尖閣列島周辺に限られるか。それ以外の地域(沖縄の領域内)についてはどうなるか。答、開発地域は尖閣列島が主となると思うが、その他の地域(領域内)も含まれる。2、現在、同地域は国際的に微妙な関係にあるが、そのことについて、いかなる見解を持っているか。答、①米国民政府布告第 27 号(琉球列島の地理的境界)に基づく領域内出願は本土復帰前に許可する方針である。②領域外出願については、受理にとどめ、大陸棚条約の理念に基づき両沿岸国間の中間線までの鉱物資源の探索及び開発主権を主張し、隣接国との調整を促進し、調整後において許可する。3、この会社(立法)は、復帰後どのような取扱いを受けるか。 答、復帰後は『特殊法人として 3 ケ年間存続するものとする』特例措置を講ずるよう国に対して要請し、3 ケ年

経過後は一般法人にする。この会社に対する琉球政府出資(復帰以前)は、復帰後は沖縄県出資とする。4, この立法案に対する関係者(鉱業出願人、本土政府、民政府など)の意向はどうなっているか。答、特殊法人設立を目的とする本法案には基本的には賛成している。具体的なことについては、立法勧告準備と並行してつめていきたい。

海洋における石油資源の探鉱・開発には高度な技術と多額な資金を伴うが、その対策案はどうなっているか。答、琉球政府及び民間出資による特殊法人を設立し、開発体制を確立する。石油資源の探鉱・開発には国及び民間企業に協力を要請するが、その規模については、設立後決定する。・・以下略」(行政文書「企画局問題提起に対する見解」通産局工業課　1971.5.19)



「尖閣開発KK」設立に尽力した砂川恵勝通産局と「沖縄石油資源開発株式会社法」(参考案)

※3.「・・海底資源問題とようやく具体化した沖縄返還問題とがからみ、尖閣問題はエスカレートし国際舞台に躍り出たのである。

こうした情勢に対処するため、昭和45年4月から尖閣列島の行政、歴史に関する基本資料の収集に着手、さらに同年9月14日には第1回尖閣列島研究会を持つこととなった。同研究会は、大浜会長を座長に・・各学識経験者をはじめ、政府筋からは・・・沖縄北方対策庁・・外務省、通産省、琉球政府東京事務所の係官が参加して、尖閣列島の現状とその法的位置、実効支配と歴史的事実関係、領有権について関係資料を収集し、その解明を行うこととなった。回を重ねるごとに資料は充実し問題解明も進展、昭和46年3月、以上の研究成果は南方同胞援護会機関誌「季刊沖縄」で「尖閣列島」特集号として発表・・同研究会はその後も地道な調査研究を継続する一方、資料収集にも力を注ぎ待望の沖縄返還が実現した昭和47年の年末、南方同胞援護会最後の調査研究として「尖閣列島第二集」を出版したのである。」(「小さ

季刊「沖縄」「尖閣列島」特集号

同「尖閣列島第二集」

な闘いの日々―沖縄復帰うらばなし―『尖閣』解明を果たした研究会」吉田嗣延　昭和 51 年 7 月）

※4.「【東京】東シナ海の大陸ダナ資源開発が国際問題化していらい、本土政府は尖閣問題にきわめて慎重になっているが、琉球政府に尖閣列島周辺の鉱業権を申請中の石油資源開発（岡田秀男社長）も・・尖閣領有権問題が解決するまで資源開発を見合わせることになった。・・民間会社が国際紛争にまきこまれた場合、政府から補償してもらえるというアテはなく、事業としても危険―という考えに立っており、また外務、通産両省からも非公式に開発計画を保留するようにとの要請があったという。今後は外務省など政府の指示に従い、長期戦の構えでいくが、問題の性質上、解決までかなりの時間を要するとみている。」（1971.06/26・沖縄タイムス・「石油資源開発。尖閣開発を一時保留。大陸ダナ問題のもつれで」）

※5.「尖閣列島の石油資源開発を目的とした沖縄資源開発KK法案は、復帰後の本土政府による扱いが不明なため、立法勧告できず宙に浮いている。県益擁護の立場から尖閣油田の開発体制づくりを進めてきた通産局は、すでに立法勧告案を準備、局長会議に提出したが「復帰後の位置づけ」に問題があるとして保留、本土政府も中国との大陸棚問題のもつれを懸念して復帰後の処置に慎重を期しており、通産局は窮地に追い込まれている。・・沖縄資源開発KK法案は、琉球政府と鉱業権 3 者が共同出資（総額百万ﾄﾞﾙ）して尖閣列島の石油資源を開発していこうというもの。・・・・・ところが同法案は、立法勧告のタイム・リミットを控えながら鉱業権申請者(3 人)の調整はおろか、・・本土政府が復帰後同法案に関する経過措置をとらないかぎり、立法は形骸化してしまう。」(1971.07/04・沖縄タイムス・「宙に浮く立法案。尖閣開発KK。本土措置見通したたず」)。8 月 4 日の新聞は「尖閣資源開発KK構想は挫折」、「通産局　出願者の調整に失敗」と報じている。

1971年(昭和46年)8月7日　土曜日　8J(180)　(2)

尖閣資源開発KK構想は挫折

大見謝氏が不参加

通産局 出願者の調整に失敗

〝県益保護〟崩れる心配も

（沖縄タイムス 1971.08.07）

D. 返還協定と本土復帰、外務省の「尖閣諸島の領有権の見解」等

1. 1971 年 12 月、「返還区域」に入れるなと、中国「尖閣領有」で声明。※1
2. 1972 年 5 月、琉球列島の施政権は日本に返還、尖閣諸島も本土復帰を果たす。※2
3. 外務省の尖閣諸島の領有権についての見解。※3

※1.「【中国通信＝共同】北京 30 日発の新華社電によると・・中華人民共和国外務省は厳正に次のように声明する。釣魚島、黄尾島、赤尾島、南小島、北小島などの島々は台湾の属島である。これらの島々は台湾と同様に昔から中国領土の不可分の一部である。米日両国政府が沖縄返還協定の中でわが国のこれらの島々を『返還』入れたことは全く不法である。中国人民は必ず台湾を解放する。中国人民は釣魚島など台湾の属島を必ず解放する。」(1971.12 /31・琉球新報・「返還区域」に入れるな。中国、“尖閣領有”で声明)

※2.「・・復帰の際、沖縄に関する全権を委任された私だが、外交だけは除外されていたから返還交渉にはタッチしなかった。しかし担当大臣として返還条約には署名しなければならない。そこで条約の案文に目を通した・・ところが、日米双方が合意した案文には、緯度の後には「琉球諸島、南北大東諸島及びその他の諸島」とあるだけだった。気になった私が念のため「尖閣諸島は入っているのか」とただすと、米側は「国際紛争の渦中にある島は、アメリカ独自の判断で返還する意思はない」との返事だった。・・思いがけぬアメリカの返答に、私は反撃した。当時、米軍は黄尾嶼を実弾射撃の試射場にし・・年間 3 百 40 ドルの使用料を支払っていた。「日本の領土と認めないのに、なぜ持ち主に使用料を払っているのか。・・返還条約に尖閣諸島を書き込まないのは卑怯だ」・・担当大臣として署名するわけにはいかない、と突っぱねた。署名しなければ条約は効力を発揮しない。・・議論の末にアメリカが折れ、付則第 2 条には尖閣諸島を含む緯度経度が明記された。・・」(『顧みて悔いなし　私の履歴書』山中貞則　日本経済新聞社　2002.5　p232～234)

※3.『尖閣諸島について』(外務省パンフレット 1972)は、尖閣諸島がわが国の領土であることを以下の内容でわかりやすく明記している。「1, 急に起こった問題　2, わが国領土に編入されたいきさつ　(1)慎重な編入手続き(2)戦前におけるわが国の支配　(3)戦後における支配　3、わが国はこう考える　(1)先占による領土編入　(2)明確なサン・フランシスコ平和条約　(3)中国側の文書も認めている〔資料〕◇標杭建設ニ関スル件、○官有地拝借御願、他 12 件を掲載」。

なお、「3―(3)中国側の文書も認めている」の項では、1970 年台湾と 1958 年中国で発行された地図を掲載している。同北京で発行された「世界地図集」の日本図では、「魚釣島」「赤尾嶼」、「尖閣群島」というわが国の島嶼名を明記し、わが国の領土であることを認めている。

外務省広報パンフレット 1972

□. 主な刊行物資料

○、『エカフェ黄海・東シナ海域沿岸海底鉱物資源共同調査書』 英文
○、『尖閣列島周辺海底調査団顧問としての反省と提言』 高岡大輔 （南方同胞援護会 1969年)
○、『尖閣列島鉱物資源予備調査に参加して』 大城盛俊 （尖閣研究（下）2007.11 p343～348)
＊著者は元琉球政府通産局工業化鉱山係
○、『尖閣列島周辺の海底地質調査報告書』 東海大学、1969
○、『第 2 次尖閣列島周辺の海底地質調査報告』 東海大学、1970
○、『尖閣油田の開発とその真相―その 2 つの側面』大見謝恒寿 （パンフレット p20、 1970 年 5 月）＊著者は鉱業権出願者
○、『 尖閣列島の油田開発について』 新里景一（パンフレット p14 1970 年 9 月）
＊著者は鉱業権出願者
○、『尖閣列島“世界的大油田”めぐる日・韓・台・中・米』（週刊東洋経済 1970 年 9 月 5 日号）
○、『“世界最大の油田”尖閣列島めぐる先陣争い』(財界 1971 年 2 月 15 日号)
＊“沖縄石油資源開発KK構想”について言及
○、『尖閣列島の領土防衛に関する決議』（1970.8.31 琉球政府立法院決議第 12 号）
○、『尖閣諸島と油田問題』 桃原用永 （戦後の八重山歴史 昭和 61 年 5 月 p492～533）
＊著者は元石垣市長「尖閣を守る会」発起人
○、『沖縄石油資源開発株式会社法(参考案) p24』（琉球政府通商産業局商工部工業課）
○、『行政文書 企画局問題提起に対する見解 p4』（琉球政府通商産業局商工部工業課 1971 年 5 月 19 日）＊上記法案に対する見解
○、『「尖閣」解明を果たした研究会』 吉田嗣延 （小さな闘いの日々―復帰うらばなし― 昭和 57 年 7 月 p219～222)
＊著者は元南方同胞援護会専務理事・「尖閣諸島研究会」事務局長
○、『尖閣列島の海底資源と地元の権益』大浜信泉 （私の沖縄戦後史―返還秘史― 昭和 46 年 7 月、今週の日本 p132～135） ＊著者は元南方同胞援護会会長
○、『 季刊「沖縄」特集尖閣列島』（南方同胞援護会 第 56 号 昭和 46 年 3 月）
○、『季刊「沖縄」尖閣列島第二集』（南方同胞援護会 第 63 号 昭和 47 年 12 月）
○、『尖閣列島の領土権問題に関する要請決議』 1972.3.3 琉球政府立法院決議第 3 号
○、『尖閣諸島の島々』山中貞則 （「顧みて悔いなし 私の履歴書」 日本経済新聞社 p232～234） ＊著者は元沖縄開発庁長官 返還協定秘話
○、『尖閣諸島について』 外務省 （パンフレットp36 外務省情報局 1972 年）

□. 主な新聞記事

1968.07/03・琉球新報・「高岡大輔氏が来島。尖閣列島の地下資源などを調査」
1968.07/12・琉球新報・「尖閣列島に大油田？高岡沖懇専門委が語る」
1969.01/11・琉球新報・「地下資源に関心示す。尖閣列島、砂川通産局長語る」
1969.01/12・沖縄タイムス・「ねむれる宝庫尖閣列島にメス。本土政府、9 百万円の調査費計上。一帯に石油、天然ガス、学者側は早くから指摘」
1969.02/06・琉球新報・「“掘ると決めたらどこまでも”。尖閣列島は宝庫!?。大見謝さん“石油王”に執念、10 数万ドルかけ鉱業権申請」
1969.02/18・琉球新報・「尖閣列島の石油資源。試掘に 5 億円必要。池辺探鉱部長語る、下調べでは有望」
1969.02/21・琉球新報・「利権争いが“噴出”。脚光浴びる尖閣列島の油田。鉱業権めぐり対立。日石公団も進出の構え」
1969/03/15～03/19・琉球新報・「先島列島の石油調査報告(1)～(4) 先島地域鉱業権者・尖閣列島鉱業権出願者大見謝恒寿」
1969/04/03・沖縄タイムス・「石油開発公団・沖縄に開発会社設立検討。尖閣列島の本格開発で」
1969.04/28・琉球新報・「民族資源として確保。尖閣列島の石油開発、砂川通産局長語る」（立法院連合審）
1969.05/10・琉球新報・「国策会社で開発を。尖閣列島石油資源、高岡沖懇委員が強調」
1969.06/19・琉球新報・「必ず石油見つけたい。東海大学丸尖閣列島調査団が出発。沖縄出身学生も参加。“宝捜し”にはり切る。屋良主席が励ます」
1969.07/03・琉球新報・「背斜地層を確認。予想通りの成果。尖閣諸島海底調査団」
1969.07/09・琉球新報・「学術的には油田埋蔵を確認。尖閣列島調査団が記者会見。2 年の調査が必要。試掘や開発はまだ危険。魚釣島附近漁場としても有望」
1969.07/20・琉球新報・「大陸ダナの主権声明。国府、尖閣群島など石油開発で」
1969.09/11・琉球新報・「石油開発で大浜私案、尖閣列島。国策会社を設立、石垣市は歓迎、採掘料は地元へ」
1969.09/30・沖縄タイムス・「調査費 1 億円計上へ。本土政府、石油開発に本腰」
1969.10/17・琉球新報・「尖閣列島の石油資源、3 つどもえ戦の鉱業権争い。第 3 者(那覇の新里氏)名乗り出る」
1970.03/10・沖縄タイムス・「尖閣列島、世界有数の油田。米海洋学者グループが報告」
1970.04/12・沖縄タイムス・「本土政府、尖閣油田の開発、本格的に乗り出す。鉱業権乱立に対処、大陸棚資源開発促進法の制定急ぐ」

1970.04/12・沖縄タイムス・「台湾政府も動く、油田開発、領有権をめぐり」
1970.04/19・沖縄タイムス・「尖閣列島の鉱業権問題、“事業団”組織で開発、通産局長、申請、復帰前に受理」
1970.06/04・琉球新報・「尖閣列島石油資源、埋蔵の実態調べる。東海大調査団、今月中旬から2次調査」
1970.07/18・沖縄タイムス・「尖閣列島の石油天然ガス、埋蔵の可能性増す。九州の面積に匹敵、学術調査団が報告、73年にもボーリング」
1970.08/02・沖縄タイムス・「尖閣列島石油資源、日韓、日台間で争う。ガルフも鉱区権を獲得」
1970.08/08・八重山毎日新聞・「尖閣列島、きょう守る会結成。石油資源は沖縄県のもの」
1970.08/09・琉球新報・「尖閣列島、日台の外交問題に、領有権、油田からむ。台湾政府、ガルフに鉱区権認可」
1970.08/11・琉球新報・「教職員会、資源を守る会発足へ。各団体をもうら、石垣「石油を守る会」に呼応。財産横取りに対処」
1970.08/14・沖縄タイムス・「尖閣列島の周辺海域、油田開発に積極姿勢。“沖縄県に属する”政府の権限で鉱業権を処理」
1970.08/18・琉球新報・「尖閣列島問題、宙に浮く地元権益、台湾・本土・沖縄が3つ巴」
1970.08/19・沖縄タイムス・「“尖閣は沖縄の領域”政府、統一見解をアピール」
1970.08/19・沖縄タイムス・「石油開発区を確定、国府が尖閣含む4区域」
1970.08/19・八重山毎日新聞・「石油資源開発 KK の設立。近く政府の態度決定、屋良主席「尖閣列島」で記者会見」
1970.08/20・沖縄タイムス・「“尖閣は日本の領土”駐日国府大使館筋　日本の主張認める」
1970.08/20・八重山毎日新聞・「住民1人から1ｾﾝﾄ徴収。尖閣列島の資源を守る会役員会」
1970.08/22・沖縄タイムス・「国府立法院、尖閣領有を可決。石油利権くり返し強調」
1970.08/23・沖縄タイムス・「国府の領有認めず、外務省、尖閣で外交折衝」
1970.08/23・沖縄タイムス・「尖閣領有権を宣言、行政府、外交折衝の要請へ」
1970.08/26・沖縄タイムス・「尖閣列島問題、早く鉱業権確立したい。国際的にも沖縄領、砂川通産局長語る。外交折衝で要請へ」
1970.08/31・沖縄タイムス・「権益擁護に立ち上がる、尖閣列島の海底油田開発。民間団体が促進協を組織」
1970.09/01・沖縄タイムス・「返還措置23項目を要請決議、立法院・昨夜幕閉じる。尖閣列島“防衛”も、院代表を派遣、本土政府と折衝」
1970.09/02・八重山毎日新聞・「全琉市町村へ協力依頼。尖閣列島守る会から文書発送」

1970.09/03・琉球新報・「尖閣列島、「日本固有の領土」通産局長、見解まとめ本土へ要請」
1970.09/04・琉球新報・「台湾船が尖閣島に国旗」
1970.09/05・琉球新報・「尖閣列島問題、「石油開発促進協」発足へ、18 日に結成総会。全県民的な運動めざす」
1970.09.05・沖縄タイムス・「尖閣諸島は国府に帰属。魏外相が議会証言。同諸島に晴天白日旗」
1970.09/06・琉球新報・「“ムチャな国旗掲揚”尖閣列島を守る会、近く政府に解決要請」
1970.09/06・琉球新報・「尖閣列島は私のもの。昭和 7 年に所有、古賀さん、現在も税金払う。父が私に残した財産」
1970.09/09・琉球新報・「『尖閣』で開発推進協を発足、6 経済団体が決める。問題解決に努力、行政府、民政府に要請文」
1970.09/11・沖縄タイムス・「琉球政府、尖閣領有権をアピール。“琉球の主権明白”大陸ダナ開発権も留保」
1970.09/12・八重山毎日新聞・「尖閣列島の領有権は日本に、米国務省が見解表明。政治的意味はきわめて大きい」
1970.09/15・琉球新報・「『尖閣列島』を討議、外務省と沖縄・北方対策庁。第 1 回研究会開く」
1970.09.16・琉球新報・「われわれの国旗がある尖閣魚釣島。警本の退去命令に台湾漁夫が叫ぶ“魚はみんなのモノ”」
1970.09/19・琉球新報・「尖閣列島石油開発協を結成、46 団体が参加、“主体的開発を積極推進」
1970.09/19・琉球新報・「尖閣列島の石油資源に関する要請決議（要旨）」
1970.09/27・沖縄タイムス・「尖閣油田開発 KK を設立へ。開発、本土の参加で、政府、鉱業権者、民間が出資」
1970.10/10・沖縄タイムス・「尖閣開発会社を設置、石油資源開発。技術、資金面で協力、現地を主体に開発体制へ、琉球政府に申し入れ」
1970.11/03・沖縄タイムス・「尖閣列島石油資源、合弁で開発会社設立へ。沖縄側を主体に通産省も全面的に支持。構想ほぼまとまる」
1970.11/06・沖縄タイムス・「主導権争いで微妙。尖閣資源開発めぐり、新会社設立の動き、本土財界もからみ合い」
1970.11/26・沖縄タイムス・「“油田開発”準備急ぐ。砂川局長、尖閣折衝から帰任。鉱区・境界に問題が」
1970.11/29・沖縄タイムス・「日米台が共同開発の構え、尖閣油田。試掘準備すすめる、宙に浮く

石油県益構想」
1970.12/04・琉球新報・「“尖閣は中国の領土”北京政府が正式に主張」
1970.12/05・琉球新報・「『尖閣列島問題』急ぐ本土政府、中国の領有権主張に、沖縄海域の守り強化へ」
1970.12/07・沖縄タイムス・「尖閣油田開発、中国の領有権主張で国際問題化。日米台中からむ。大身謝氏の動向が注目。国際紛争の危険性も」
1970.12/11・沖縄タイムス・「三つどもえの尖閣列島、権益追う日中台の動向。舞台は中国中心に、米国石油も絡み微妙。中国が領有権主張、国際問題化に発展へ。大陸棚問題が焦点、二転三転する本土側。」
1970.12/30・琉球新報・「中国領有三たび主張。人民日報が尖閣列島で」
1971.01/30・沖縄タイムス・「尖閣油田鉱業権の取得申請処理、通産局、3 月完了に全力、100 万ﾄﾞﾙで開発会社設立へ」
1971.02/05・琉球新報・「県益第一主義で開発―沖縄石油資源開発 KK 法案―。来月 1 日に立法勧告」
1971.02/08・沖縄タイムス・「当分開発を保留。尖閣海底油田。台湾、中国からみ複雑、民間企業もソッポ向く」
1971.02/13・沖縄タイムス・「尖閣油田開発 KK 構想遅れる。鉱業権者との調整難航。通産局、復帰前に申請処理。通産局案に疑問、大見謝氏」
1971.02/14・琉球新報・「来月 1 日に立法勧告、「尖閣」開発の会社設立で。通産局長語る」
1971.02/23・琉球新報・「石油開発会社法案。立法勧告危ぶまれる。通産局案に不満、出願者の大見謝氏ら参加しぶる。県益空どう化のおそれ」
1971.02/25・沖縄タイムス・「尖閣列島。全開発権を保有。国府外相、主権を重ねて強調。国府、日本側に公式回答」
1971.03/10・沖縄タイムス・「計画通り作業推進。通産局長尖閣開発で表明」
1971.03/11・沖縄タイムス・「鉱区権申請を受理。通産局。大見謝氏の 5500 件。残りの申請も処理急ぐ。尖閣開発 KK も動き出す」
1971.03/19・沖縄タイムス・「尖閣油田開発。将来の“国益化”懸念。大身謝氏県民株の大幅募集主張」
1971.04/09・沖縄タイムス・「尖閣油田。開発態勢に遅れも。“関係法”“権益擁護”で難航。
1971.04/09・沖縄タイムス・「米、石油調査船引き揚げ。対中関係悪化恐れ。尖閣付近」
1971.04/10・琉球新報・「米、“尖閣紛争”に慎重。中国への影響考慮。中国、国府の対立。当事者間で解決を。石油開発の中止を。国務省が米企業に勧告」

1971.04/10・沖縄タイムス・「尖閣列島沖縄とともに返還。紛争解決、当時者で。米、各国の主張に論評さける。米中関係悪化恐れ慎重」
1971.04/29・沖縄タイムス・「政府出資年次計画で。石油資源開発KK通産局、関係法案まとめ」
1971.04/29・沖縄タイムス・「困難な資金確保。石油資源開発会社の出資金」
1971.05/08・沖縄タイムス・「尖閣列島。返還時に領有権を明示。愛知外相。協定や交換公文で」
1971.05/10・琉球新報・「尖閣列島。協定上島名の明記不必要。議事録で処理か。返還地域緯経度で表現。国際紛争発展の気配も」
1971.05/12・沖縄タイムス・「尖閣に。在沖米軍の射爆場。領有権にも有力な裏付け」
1971.06/21・琉球新報・「出発さらに遅れる。－沖縄対策庁の尖閣列島調査―。中国、台湾の領有権主張で慎重」
1971.06/25・沖縄タイムス・「沖縄資源開発のKK法案成る。きょう局長会議提出」
1971.06/26・沖縄タイムス・「石油資源開発。尖閣開発を一時保留。大陸ダナ問題のもつれで」
1971.07/04・沖縄タイムス・「宙に浮く立法案。尖閣開発KK。本土措置見通したたず」
1971.07/18・琉球新報・「尖閣の石油。テストボーリングが必要。第 3 次学術調査おわる」
1971.08/04・琉球新報・「石油資源開発KK。設立法案の立法勧告を保留。組織体系が不明確。尖閣の県益確保は困難」
1971.08/06・琉球新報・「石油資源開発法案送付へ。局長会議、主席の補佐機関」
1971.08/07・沖縄タイムス・「尖閣資源開発KK構想は挫折。大見謝氏が不参加。通産局出願者の調整に失敗。“県益保護”崩れる心配も」
1971.09/02・琉球新報・「開発会社法案を断念。通産省」
1971.10/31・八重山毎日新聞・「日米中の国際紛争に。尖閣列島問題で米国務省懸念」
1971.12 /31・琉球新報・「返還区域」に入れるな。中国、“尖閣領有”で声明」
1972.05/04・八重山毎日新聞・「沖縄返還で防空識別圏を追加、尖閣列島は含まれる。防衛庁、舟山列島付近の一部削除」
1972.05 /15・琉球新報・「いま　祖国に帰る　変わらぬ基地続く苦悩、沖縄県きびしい前途、なお残る『核』の不安、確約は完全に履行　核抜きで米国務長管が書簡」

あとがき

「尖閣諸島海域における漁業」のテーマで、①戦前・古賀辰氏開拓前後の漁業、②戦前・戦後の沖縄の漁業調査、③戦後・琉球政府期の漁業について、3 人で分担執筆し、どうにか書き終えたものの、あれやこれや反省や思いが出てきます。各担当に編集後記を一筆書いてもらいました。

戦前・尖閣諸島における漁業を担当しましたが、調査を始める前は漁業の事など何も知らず、いざ始まってからも収集した資料を読みながら、学んでいくといったペースで、結果的に昭和期や台湾側の動きについて消化不良のまま調査が終わってしまった感があり心残りです。今回の調査は関連文献をあたりながら、並行して当時の新聞記事を読み進む、といった形で取り組みました。結果漁業以外にも古賀辰四郎等の記事をかなりの量で把握できました。成果を新聞見出一覧として掲載できればと思ったのですが、量が多い為に逆にページ数の都合が付かなくなり、結局割愛したことが残念です。さて調査を進めていく中で現在沖縄県にある資料は戦後ゼロから集め直したものだと知りました。戦前にあった資料は沖縄戦で焼失したそうです。戦後再収集に努めた方々のお陰でこういう調査や報告ができるわけです。この場を借りて感謝申し上げます。(國吉まこも)

尖閣諸島海域は、従来政治、外交上複雑にして問題の多い海域であるため、編纂会から、漁業調査の執筆の依頼を受け逡巡したのは事実である。しかし乍ら編集の意図を伺ううちに、沖縄の漁業振興を図るため、水産試験場が実施した尖閣周辺海域を含む東シナ海における調査試験の活動実績を記録することは、水試OBの責務ではないかと感じた次第である。幸い、沖縄県水産試験場(現水産海洋研究センター)の図書室に事業報告書原本が、戦前から戦後まで各年次毎に保管され、関連資料も含めて再読、尖閣関連の漁場調査結果のとりまとめを試みた。昭和初期に台湾基隆を基地にした精力的なカツオ漁業試験があり、戦後は尖閣海域における深海一本釣の新漁場開拓等、厳しい状況下で、先輩研究員の方々及び調査船図南丸は実績をあげてきたことは、余り知られていない。改めて敬意を表したい。また事業報告書の閲覧便宜を図って頂いた沖縄県海洋研究センター所長島田和彦氏並びに研究員各位に謝意を表する次第である。(友利昭之助)

漁業は門外漢だけに苦労の連続、資料集めもままならず、充分に成果を得ることが出来ませんでした。この仕事をしてよかった体験もしました。尖閣で漁をした県内7漁協の海人に聞き取りをした時、大半が 80 代のお年寄でしたが、年の割りには、とても若く、元気で、明るく、気宇壮大、頭は冴えて記憶力も抜群！　40 数年前の漁の様子を鮮明に憶えているのに驚きました。長年、海人は、海や魚、自然を相手にしていると、こんな素敵な特性が身に付くものかと感心しました。今回の聞き取りの趣旨を話したら、開口一番、「もう、数年早く来ていたら、尖閣に詳しかった A も、B も元気だった。いろんな話が聞けたのに、今では遅過ぎる」と、言われました。72 年復帰の年から早 38 年が経ち、貴重な体験者は、高齢化し、年々亡くなりつつあります。往時の尖閣の海人に対する聞き取り調査は、緊喫の課題として、早期に取り組まねばならないことを痛感しました。(國吉真古)

尖　閣　研　究

尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告

－沖縄県における戦前～日本復帰（1972年）の動き－

２００９年

第１刷発行：２０１０年８月31日
第２刷発行：２０１６年１月14日

編集・発行：尖閣諸島文献資料編纂会
〒902-0066 沖縄県那覇市大道40番地
FAX（098）884－1958
印　　刷：株式会社　国際印刷